

例えばこんな刀使さん
達

ブロX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

刀使・綿貫和美は鍛える。刀使・相模雪那は鍛え続ける。復讐の為に。

今作は、とじみこに隻狼要素とか刃鳴散らす要素とか色々ごちゃ混ぜた本編再構成物の剣劇です。主人公は鎌府の綿貫さんと雪那さん。

前作『例えばこんな刀使さん <https://syosetu.org/novel/163390/>』の続きのような物です。原作でいう胎動編までの予定となっております。テーマは『復讐』そんな妄想話になっております。ご注意ください。

UA1000突破…、こんな駄文を読んで下さりありがとうございます。

目次

過去サイド：相模雪那

第七話	ゼロ	80
第六話	答えの中にはいつも罠	70
第五話	飢えたる者は常に問い 後編	60
第五話	飢えたる者は常に問い 前編	53
第四話	護剣の切っ先	36
第三話	同級生と先輩	27
第二話	刀使と武芸	11
第一話		1

第八話 Placidus 94

第九話 刃達の最終防衛ライン

109

第十話 IN MY SPIRIT,

WARRIORS 前編 122

第十話 IN MY SPIRIT,

WARRIORS 後編 146

第十一話（過去サイド最終話） 後悔

155

本編：綿貫和美

第1話 169

第2話 鎌府の刀使 179

第3話 当代折神家当主御前試合衛司

第8話	265	幕間	可奈美たちサイドその3	252
a		第7話	渴望	243
s		第6話	勝つ為の	
s		232	幕間	可奈美たちサイドその2
o		第5話	思惑	224
n		第4話	人の剣術	216
a		幕間	姫和サイド	208
s		200	幕間	可奈美たちサイドその1
				187

第16話	407	幕間	臯月夜見サイド	399
例え		第15話	貴女だけ	387
ば		幕間	沙耶香たちサイド	371
		第14話	壊す者と守る者	357
		第13話	Identity	340
		e, Demon blade		322
		第12話	Magical blade	
		309	第11話	例えばこんな彼女の復讐
			第10話	前夜
				300
			第9話	ブレイドアーツ 3
				287
			279	

第17話 風の宿りは誰か知る

422

第18話 ブレイドアーツ ゼロ

433

第19話 この天の下に双つと無い者

445

幕間 可奈美と美奈都

第20話 ラスト・ブレイドアーツ

463

最終話

476

過去サイド：相模雪那

第一話

一組の夫婦がテーブルを境にして、コーヒーどころか一杯のお茶すら置かれていない
雰囲気（ムード）の中。その始まりは絶縁状からであった。

「離婚届もセットではね。誰か良い人でも見つけたのかい？」
「違うわ」

笑い合えない冗談の中で、女は断じてと付け加えながら言った。

男の一方的な勘違いでなければ、二人は相思相愛をもつて夫婦となった。病める時も
健やかなる時もと自身の魂に懸けて誓ったし、相手の幸せと守護を額面通りだけでなく
心でも互いに言い合った仲だった。自他共に、二人は良い夫婦であった。

「・・・僕では君を幸せに出来ない。つまり見限られた。って意味で捉えていいのかな」
「違うわ」

強く切り出すのはいつも君の方からだったな。男は女を見つめながら思った。

「私では貴方を幸せに出来ないから、離縁するのよ。どうか幸せになって頂戴。私以外の誰かと」

「君以外の人と幸せになんてなれないよ」

「……」

男の真つ直ぐな視線を、女は気に入っていた。初めて会った時から変わらない、瞳の奥のその光が好きだった。

自身を受け止めてくれるこの眼差しが、心意気が好きで一緒になって今の今まで夫婦であった。

だからこそ、もう一緒にはいられなかった。

「私は」

「！」

男は息を呑んだ。もしくは、言い換えるのならば惚れ直した。

そこらの人間では浮かかべる事の出来ないだろうその表情。決意の表れ。女の鋭い視線とその奥で輝く瞳の光が、男は今も昔も好きなのだ。

「私はこれから無道を往きます。自分勝手ともいうけれど」

「人間なんて皆大なり小なり自分勝手だろう。今更そんなで僕は君を嫌いになんてなれない。昔も今もこれからも」

「もう決めたのです。別れて頂戴」

「どうしても嫌だと言ったら？」

「貴方を逮捕する」

「おっとつと。罪状は？」

「公務執行妨害」

「公務って？」

「刀使としての」

「君はもう刀使じゃないだろう」

「警察機関の人間です。昔も今もこれからも」

「なるほど。つまり僕は仕事の邪魔ってわけだ」

「……そう。邪魔よ」

「刀使として死に行くには。．．．かい？」

女は眼を逸らさず、だが沈黙した。どう言えばこの先この人を巻き込ませずにいられるか。ただそれだけを考えていた。

「敵は強大ってわけだ」

「ええ」

「僕どころかもしかしたらこの国全体をも危機に陥らせるかもしれないわけだ」

「ええ」

「——でもやるわけだ？」

「ええ」

「分かった」

男は深く頷いて、絶縁状と離婚届は預かるよと言った。

この場面を字面だけで眺めたなら、男は潔しと断じて構わないかもしれないが、実際は用紙を両手で手に取る様は少し震えていて、瞳は不安以上の絶大な感情によつて揺れていた。怖いとはこういう事なのだつた。

けれど男は女から視線を絶対に逸らさなかつた。

これが今生の別れ。そう思つて、男は最後に女の顔を見続けていた。女の瞳の中にはずっと、情けない自分の顔だけが映つていた。

「私はもう一度刀使としての責を果たします。さようなら、あなた」

「貴女が本懐を遂げられる事を祈っています。さようなら、雪那」

——全ては自身の独りよがり。別名を、それは復讐とも云うのだろう。

悲しいくらいに優しいこの声も好きだったなど、女は最後に思つて、そして忘れた。



記憶の中で、雪那は激怒した。

「どうして私が刀使になんてならなきゃいけないのよ」

「貴女は御刀に選ばれたの。それはとても名誉な事なのよ、雪那」

「刀なんて只の人斬り包丁じゃないのッ!!」

「神聖な御刀に対して何て言い様ですかッ!」

「神聖だろうと高尚だろうと何だろうと怖いものは怖いわよ!!」

刀使として生きようと決めた時分。記憶の中で、雪那は古のプレインズウオーカー・ウルザの如く激怒した。

相模家の長女として生まれ、ハレの日である10回目の誕生日に、母親からこれ(刀)握ってみろと言われてそうしてみたら光ってナニコレ? と思ったのも束の間、急に胴上げの嵐である。

頭の中を疑問符という名の快速ランナーが年始の箱根ですか? 往路復路を行ったり来たり。止めてと言って胴上げがやつと収まったと思いきや、今度は刀使になれと言われれば誰しもがこうもなろう。

——常時この日本刀を身に着ける。相模雪那にとってそれは、今日お前は少女から人殺しになれと言われたようなものだからだ。

「聞いて頂戴、雪那。貴女、荒魂は知ってるわね？」

「外国人以外で知らない人がいたら心底教えてほしいくらいには知ってる」

「その荒魂を斬り、祓える力を貴女は持っているの。人を護る術と力を、貴女は手に入れる事が出来るのよ」

「……それがこの刀？」

「そう。御刀よ」

「荒魂（化け物）を斬る事だけにこれが使われるって？」

「ええ」

「私は今日で十歳になったから訊きたいんだけど、これを振るう人間がそんな頭のいい生物だとお母さん本気で思ってる？」

「思ってる」

「悪い冗談よ」

本読んだ事ないの？雪那は吐き捨てた。

「何とでも。とにかく今日から貴女は道場で鍛錬を始めてもらいますからね。武を修め、誰かを護る。それが刀使。矛を止むのも、矛にて止むのも貴女次第です」

「……どつちでもイヤよ。道場つてお母さんが前に言つてた隣町のでしょ？ あそこの人達気持ち悪いくらいズツと変な座り方してるじゃない」

「そういう古流なの。力としなさい、門下生」

「嫌よ!!!」

——心底嫌だった。だつて怖いもの。誰かがその刃に触ればスパリと斬れる兇器（まがきもの）。人を殺す為に生まれた物。もし好きな奴がいたら手を挙げてほしい。通報するから。

顔にそう書いてある雪那に、彼女の母は溜め息もつかなかった。

「……分かつたわ。じゃあ今日一日だけ猶予をあげる。この御刀、妙法村正の手入れでもしてじっくり考えなさい。刀使になるかならないか」

「はああい」

臍抜けた返事をあえて雪那はした。手入れの仕方はこうこうと云つた説明を右から左へ耳の穴を貫通しながら聞いて、その夜彼女は反復を試みた。興味も欠片も無いくせに何でそんな事をと自分でも思うが、もう一生こんな物を触る日はない。

今夜でバイバイだ。幸か不幸か、その決心は雪那に行動力を与えていた。

「これが打ち粉と油つと。つてナニコレくさい」

刀身から目を背け、目釘を抜き、柄を外す。茎を握りながら、二枚ある切羽と鏢の表

裏を確認しながら外して、布の上に置く。すると手元に自然と目が行った。

黒々とした気味の悪い茎に開いている目釘穴。そうつと目線を上に滑らせると、意外と反りのある刀身が、裸身と言って差し支えない状態の日本刀が雪那の眼前にあった。

「……」

光景に言葉を失う。だって刀身以外何も見えない。——いや、違う。何かが彼女の脳内に映し出されている。刀が、彼女に何かを見せている。強く目を凝らす。それは一人の女の絶望している姿だった。

『あんなにも尽くして……、あんなにも愛したっ!! それなのになぜ——!!』

……は? 誰? このヒステリックなおばさん。

『姫!! 紫様!! 一体なぜなのですか——っ』

誰よ姫って。紫様って。

『捨てないで。私を、独りにしないで——』

大人の女だろう。雪那にとって見知らぬ女は、一見支離滅裂な事を言っている。……変なの、疲れてるのかしらと雪那は感じたが、その瞳と言葉と涙には無視できない何かがあった。

他人事とは思えない何か。それはまるでいずれ迎るだろう自分の姿のように。直感であるが。

——ああ、これ明日は我が身だなあと不意に思えるほどの素直な感慨と直感。このようにして人間は絶望して死ぬんだな。

刀使になれば自分はこうなるのだなと、未知の結末をこの相模雪那は知つたのだつた。

その光景が消える。瞬きをすると眼前には裝飾も拵えもない刀が一振り。他には何も無い。刃紋と平地が彼女の顔を鏡のように写し見せていて、ひどく険しい顔がそこにはあつた。

「……ならない」

だから刀を天井に掲げながら、雪那は告げる。

「私は。ああはならないわよ」

お前の未来はこうだと伝えた御刀へ。それは否と告げる。

「尽くすだの愛だの。そんなの、悔いてしまえば死んだも同然でしょ。それまででしょ。

——私は違うわ」

逆の工程でもって刀に拵えを着けてゆく。最後に鞘に刀身を入れ終わった所で、この場にて宣言する。

例えばそれは強迫観念にも似た何か。今ここで言わなければきつと駄目なのだと、或いは誓わなければならぬのだという絶対の信念（意地）を若さから生み出しながら彼

女は宣言する。

「何処かの世界の何処かの誰かさん？　ご愁傷様。アンタなんて見た事も聞いた事もないけれど、人生なんて悔いたらお終いよ。私はアンタみたいにはならないわ。傍で見えないさい、妙法村正」

カツンと鞘を軽く叩きながら。自身の未来と御刀に向けて、この相模雪那は誓ったのだった。

第二話 刀使と武芸

地元が好きか嫌いかでいえば、好きな部類だと彼女は答える。

空気は綺麗だし、スーパードラッグストアも探してみれば其処此処あるし、これから頑張ってみたいと密かに思っているお洒落に適したお店だってある。見渡してみれば、ここは良い所だ。

彼女は何でも知っている。人生はいつだって無知を何でも知っているに変わる為であり、世界というものはそれを全うする為に存在しているのだと。雪那にとって、地元とはそういうものの一つだった。

全うできる者など過去現在未来一人としていないとしても。その事を、まだほんの一片も理解していないとしても。今、雪那は無知を全知に変える為、隣町の道場に向かつて歩いていた。

——歩いて10分程度の場所。町と町の境同士といっても過言ではない互いの家屋配置が雪那に絶大な幸運をもたらしたのは、稽古後の事だった。

見た目とは裏腹に、その稽古は凄惨の一言であった。

「只の人間も刀使さんも、足が動かなくなったらどうなるでしょうか」

「……」

「頷いたね？その通り。敵（荒魂）に切られます。パツと振り下ろされて、バサツと。足が動いていれば躲せたかもしれないのにね」

「……」

……

「肝要なのは足なのです。雪那ちゃん。人間も刀使さんもこの足、細かく言うならフットとレッグですが、この足だけで体重を支えています。ほんの少しでもバランスを崩せばすぐにでも転ぶ腑抜けのくせに、この足は24時間毎日毎日我々の身体を支えています。」

つまり強くなる為に大大大大必要な事は一に足二に足三に足。そして人間も刀使さんも強さとは弱さを経ていなければ至れませんので——、」

「……」

雪那の師は笑いながら言った。

「今日は這って帰りなさい。家はすぐそこでしょう？楽なものですよ、雪那ちゃん？」

「……はっ」

——足がもう動かなかつた。比喩ではない。立つどころか身体を支える事も出来ないのが雪那の現状であり、かろうじて動く手と腕を使って這つて自宅へと帰るしか方法がなかつた。親を電話で呼ぶなんて事はプライドが許さなかつた。

「…ありえないわ。身体を痛めつけなければ弱さを自覚できないなんて、時代錯誤も甚だしいつたら…つ」

正座をしなさいと言われたのがまず最初だつた。

しばらく経つて、次はその状態から右足を前に踏み込んで、左足は膝と足指だけを地面につけると言われた。

その状態から今度は立ち上がりながら左足を右足よりも前に踏み込んで、右膝が地面に付くまでしゃがめと言われた。そして左足を右足まで引きつけて、その腰の高さのまま左足を後方にまっすぐ目一杯引けと言われたので言われるがまま続けていたら、この様である。

「……ただいま……」

「稽古（ご）苦労様。もう寝る？」

「……それしかできない」

何故こんな目に合わせるのか、あのクソ野郎。雪那は師の言葉を反芻しながらベッドに倒れ込んだ。

自分は五体無事だけれど、荒魂（敵）は無事にせず殺す。その為の稽古である。師はそう言った。これが身に付いた時、腰が手に入るよと。全てはそこからだと。

なお自主練はしないようにとも言われた。師範の眼の届かぬ所で行っているとすぐ膝を壊すから。

「……こんなんでも強くなれるのかしら」

雪那は微睡に落ちながら言った。



「お、今日も来たね。若い若い。さあ始めよつか」

「あの、膝と腰が特に痛いんですけど」

「生きてる証拠だよ？」

「今日も同じような事をするんですか？」

「うん」

「痛いんですけど」

「俺は痛くない。はい、スタート」

このクソ野郎。雪那は堪忍袋の緒が切れそうになりながら、言われるがまま稽古に没

頭した。無駄口は叩かない、叩いたら負けだから。そんな彼女のちっぽけで安いプライドが、諦めるという思考を思い起こさせなかったのだろう。そういつた面を彼女の師は気に入りはじめていた。

「他の門下生の方々はどうしたんですか？」

「皆他所に行っちゃってね」

「つまり、門下生は、私だけって事ですか？」

「こそ。マンツーマンってわけ」

「分かり、ました……」

「頑張つてー。あ、それ駄目。身体前傾したら駄目だよ、転ばせられるから。こんな風に」

「……ッ分かりました」

腕を引つ張られ転びながら、今度はそれを是正していく稽古の日々を重ねていくある日。今度は御刀を持ってきてねと師は言った。

「はい、今日もよろしくね雪那ちゃん。今回から御刀差してね御刀。帯これね」

「……帯？」

「帯の結び方知らない？ 現代っ子だねえ。え？ 駄目な剣道家みたい？ ハハッ！」

一言多いのが師範の駄目な所だろうが。

雪那は思ったが、この人がこんな失言を他所で言っている姿は何故か想像できなかつた。

「…どう結ぶんです？」

「こうやってね、こう。お腹の前で締める。そこでそのままグルつと背中に回す。慣れてきたら回さないで後ろ手でやってね。着崩れるしダサイから」

「着崩れですか」

「え？もしかして道着とか袴とか着たい？え？憧れ？憧れなの？」

君なら行燈も馬乗も似合いそうだなあ。師はおちやらけて言った。

「いいえ。師範」

「着たくないの？珍しいねえ」

「荒魂と戦う時は洋服の時の多い筈ですから」

「常在戦場。未来の刀使さんはそうこなくっちゃ」

ここの道場は初心者に最初に教えるべき、稽古着の着方というものを全く重視しなかつた。

聞く人が聞けばそれだけでここは駄目な道場で駄目な先生なのだが、今のここは荒魂を殺す術を教える場なので、人に対する礼儀作法着装はまだ眼中になくていい。人相手のそれを学ぶのはまだ先の話になると、雪那は教わっていた。

「……………あの…、師範」

「ん？疲れた？」

「……………立てません」

「そつかあ。じゃあその状態から人間はどうやって立たせるかなー？考えてごらん」

横から見たら歪んだ北斗七星のような脚の形のまま立ち上がれなくなつた雪那は、必要が発明を生むという事を頭と身体に叩き込まれる事となつていた。

「……………」

——膝が痛い。とても痛い。つまりこのままでいる事は上手くない。脚には力が入らない。だから思わず前傾姿勢になつてしまう。…身体が痛みを和らげる為に自然と取つてしまつているこの姿勢こそが、立ち上がる事を無理難題と定めている。

雪那は巻き結んでいる帯に左手をやつた。

硬い感触。差してある自身の御刀だ。そしてそこには荒く呼吸することにしぼんでは膨らみしぼんでは膨らむ部位があつた。腸骨ではない。もつと内側の筋肉か何かだろう。

そこに目一杯力を込める。すると、前傾の姿勢がやや後傾へと変化した。

「……………ッ……………ッ!!」

息を吐きながら、今だと。雪那は思った。

「おめでとう。初心者脱出への第一歩だね」

踵を踏みしめ身体の真ん中から立ち上がる様を見て、師は言った。しかし当の雪那は今自分が何をしたのかが分からなかった。

師範を見る。にこやかな顔がそこにはあって、もう一度やろうとして今度は横に転んだ。それはもう派手に。

——一度やれたからこれからは何度でもすぐ出来る等というそんな奇跡じみた物は無い。長く時間をかけて、重ねる事で身体操作とは培われてゆくものであり、筋肉も骨も負荷によつて鍛えてゆける以上断裂も損壊もありえる事は充分念頭に置くべき事である。

しかるべき時にしかるべき事が出来る。

技も形も稽古も修行もこれが内包してあるならば、基礎鍛錬・練習の継続という選択肢を人間は選ばざるをえない。

雪那はこの道場での修行の初期段階、身体の真ん中を使うという意識と発想を今回怪我無く運よく得る事が出来ていた。

「若い子は丈夫だねー。さあ目指せ！初心者脱出！雪那ちゃん！まあ、あと一万歩くらいだよ」

すぐだろう？笑う師範に、

このクソ野郎。雪那は黙りながら笑って返した。



年月が経ち、着装と作法と形稽古のやり方も教わってきたある日の事である。刀使になり、中学2年にもなった雪那がいつも通り道場に行くと、彼女の師範が珍妙な姿勢を取っているのを見た。

「は？」

「」

両脚を左右に大きく広げている。いや、広げすぎて腰が沈んでいる程に大きく広げている。その状態から元の自然体、直立の形に戻るには屈んで床に手をつけて身体を支えながら脚を閉じるか、足に力を込めて徐々に閉じていくしかないだろう。

「……」

雪那は直感で思った。これは稽古であると。すると師範はその状態のまま360。クルリと回転、何事も無かったかのように脚を閉じて直立した。それはワケの分からない光景だった。

「雪那ちゃん」

「はい」

「見た？」

「見ました」

「これが出来れば初心者脱出だよ？」

「有難うございます」

「いいよ、礼なんて。だってまだまだ」

「？」

「初心者を出出できても、次の段階が。それを脱出してもまた次の段階が、ずっとずっと。修行の完成には全然程遠い」

「稽古します。一歩一歩」

「そう、一歩一歩」

果てなる高みを目指して、一歩一歩進んでいく事は可能なのだ。負けてたまるかという思いと共に、今の雪那はそう信じている。



「雪那ちゃんももう高校生かあ。早いもんだなあ」

「鎌府高等学校に進学する事になりました」

「刀使としてだろうか？」

「勿論です」

「中学時代は優秀だったようで何よりだよ。じゃあ餞別だ、雪那ちゃん」

「はい」

手に一振りの刀を持って、師範は告げた。もしやそれをくれるのだろうか。雪那は途端に嬉しくなった。

思えば小学校中学年からここに通つては稽古の毎日だった。師の言葉と表情、姿勢から読み取れるありとあらゆるものを吸収し自分なりの力としてきた。このクソ野郎、いや、師範のお陰でこの先刀使としてやっていけると柄にもなく誇らしく思った時すらあった。

その彼が、いつも浮かべている笑みすら消して。真顔で彼女を見ている。

「君。もうこのの所属じゃなくしたから」

「——はい？」

「もうここから離れなさい。鎌府の刀使さん」

「え、…は？」

「君はもつと上に行ける。その為にはここに居ちや駄目なんだよ」

「私は師範の弟子です」

「もう違うって言うてんのさ」

卒業つてこと。師範は続けた。

「修行の完成はまだまだまだ先だと教えたのは師範じゃないですか」

「完成じゃなくて卒業。言葉は正しく使いなさいとも教えたよ？　ここではもう君の修

行の完成はできない」

「だとしてもそれを決めるのは私の筈です」

「んー、想定はしてたけどさあ、分つかないかなあ」

「分かりません」

雪那は身体の真ん中に力を込めて言った。

「——ね、折神家って知ってる？」

「御刀の管理を一切取り仕切る名門中の名門です。知らない刀使はいません」

「そう。だから刀使つてのはさ、折神から抜け出せないんだよ」

「……はあ」

「御刀を取り仕切るって事は、同時にそれを扱う刀使も取り仕切ってるって事。色んな理由で刀使を中学で辞める子は少なくない、そんな中で雪那ちゃんみたいに高校まで続けるとなると話は半分違ってくるのさ。——折神家は本腰を入れて取り仕切る。管理

する。あいつらに俺から剣を教わってるなんて知られちゃうと、君、上にいけない」

「私は構いません」

「あつちが構うんだよ。俺さあ、結構昔にあつちの先代当主に言われちゃつてさ。テメエは絶対に世に出させねえぞつて。」

嫌われてるなんてもんじゃ無く、人の恨みは恐いよ？雪那ちゃん。そしてそういうタイプは人の繋がりをしつかり調べてる。派閥が最も重要だと悟つてる。馬鹿みたいだけど、それは事実だ。縦横の繋がり無しに、刀使だろうと何だろうと人は上に行けない。

君は出世すべき人材だし、普通にしてるだけで出世できるタイプだ。折神の管理の中でもきつと頭角を現すだろう。師としてその邪魔は出来ない」

「……」

「その先代と今の当主が心変わりでもしない限り、俺の弟子は世に出れない。好きにやれない。小中学生の遊び程度ならギリギリだが、もう君は違う。」

高校卒業後も君は刀使として剣士として管理者として、いずれかでやっていくだろう。多分結婚しても家庭には入らない。その時になって俺の所から去つても遅いんだよ。何もかも」

「……」

師範の言葉は最もだった。結婚したとしても、自分はきつと刀使関連でもそれ以外で

も仕事を続けるだろう。続けていききたいと思うだろう。昔妙法村正が見せた、何処かの未来の自分のように。

「——なるほど。つまり師範はこう言いたいんですね。もうこれが今生の別れだと」

「刀使さんも人間もポツクリいつちやう時はすぐにいつちやうからねー。まあ、もうここには来るなつてこと」

「…では」

「そう。では——」

師範が頷こうとした、その時。

「では貴方を斬ります。このクソ野郎」

「……」

雪那は構えて、刀使としていつも持っている御刀の鯉口を切っていた。

「ええ？ そうなつちやうかあ。君が俺の事を今までどう思っていたかなんてどうでもいい事なんだけれど。——しあいするのかい。俺と」

「……」

それは眼前の師範も同じく。

「我が流派において、試合はない。形稽古はあれど、個人の力と技を見たいのならば死合以外に術はない。元より我らが剣は人外を滅すものなれば、活人とも殺人とも違う

劍。源の水の流れより分かれた、斬り捨てる為の劍法。昔、そう教えた上で。やるのか
い」

「……」

雪那は『写シ』を張った。それは問答無用の戦闘態勢という意味である。

「じゃあやろうか。」

もう俺とは何の関わりも、師弟の関係すらもない只の刀使さんよ。無事を祈ってはやれないが、君の劍の完成を誰よりも祈っている」

「……」

言葉は要らなかった。

互いに息を止めた今この時が、勝負の鏖際。戦いの渦中。二人の中には自身が勝つ為の理論が先にあり、それを実現させる為に身体を練磨し術と形を稽古してきた。そして形を技へと昇華させてきたのが、この二人の武芸者である。

技は勝てる機に勝てる行動をするマニュアル。どうすればそのように相手が動くか、動かないのならば自分はどう動くべきか。勝機を、先手を、後の先を、先の先を。いやもつと。

そう考えるに至った形武芸者たちの恐ろしさは、まだ形をなぞる段階の修行者たちと違い、一種の威圧感があった。

——先を獲る。勝機を、互いにそう思った。

利き手と逆の手が動くと同時に振るわれる二つの刀の軌跡は、電光と雷轟を久方ぶりに世に顕して、それが過ぎ去っても尚道場内に立っていた者は只一人の劍士のみ。

瞬間、眼が合つて。愚かにも口にする。

——嵌められちやつた。

——師範の劍、確かに。

倒れ伏して尚健在。斬られて尚五体無事。それが顛末。それが刀使。師の太刀を受けて生還するという次の段階への皆伝を以つて、相模雪那は鎌府高等学校へと進学したのだった。

第三話 同級生と先輩

「相模さん。聞いたわよ？この間の戦闘、相模さんのお陰で損害ゼロに抑えられたって」
「機動隊の人たちも感謝してたわ。流石ね」

「とんでもないです。刀使として、私は職務を果たしているだけですから」

高校生となった雪那は刀使として優秀であった。現場を息一つ乱さず駆けずり回り、逆に荒魂の方が疲労して（そんな訳もないが）動きが止まったと同僚の刀使達が声高に言うほどである。まさに天才だと、雪那は優秀さ故に可愛がられていた。

丁寧に一礼するそんな後輩を見て、先輩の刀使達はやはりと頷いた。

「そう言っついてもそつなくこなすんだから。——ね、次の折神家当主親衛隊の席、狙ってみない？」

「相模さんがその気なら——。推すよ？」

「……」

雪那はニツコリ笑ってお辞儀した。

「いえいえ、私はまだまだまだ一年坊。親衛隊の方々は雲の上の存在です。なので毎日日々は精進！狙う気なんてありませんよ」

「あらそう？残念ね」

「やる気が出たらいつでも言つてね？——私、相模さんと一緒に刀使が出来て良かったと思つてるから」

「ありがとうございます！先輩方！」

.....

「——つたく、師範の言う通りね。派閥作らなきゃ生きてけないのかしら。高校の刀使つて」

誰も。気配も全くなかった事を察して、雪那はぶつきらぼうに言つた。荒魂を斬つて祓う日々はそれなりに充実しているが、隙あらば先程のように部活動よろしく勧誘の嵐である。

「吹奏楽一緒にやりましょうとかだつたら入つてやるのに。∴やれ貴女は凄いだの貴女がいてくれればだの、貴女と組んで一緒にやりたいだの。口振りは煽てオンリーなくせして、その実は私利私欲の土台としか相手を見ていない。あんな混ざりもん共が刀刃を振るつてるだなんて、中学の頃には無かつたわよ」

中学生と高校生の刀使の違い。それは将来を見据えてきた年月である。

将来はこんな刀使になろうという純粹な思いが初志にはあつて、それがいつの間にか将来はこんな人間になろうという漠然とした物に置き換わつてしまつてゐる。本来ならそれは大人に近付いてゐる証拠なのだと言ふと拍手すべき事柄だが、今の雪那にとつては目障り以外の何物でもなかつた。

——刀使とは御刀に選ばれた人間。『写シ』を始め隱世（異界）から力を引き出せる人間。それが出来なくなれば刀使は御刀を返還し、一般人に戻る。多くの刀使はそれが高校卒業と同時に訪れる為、高校生となつた刀使はこれからこんな刀使になろうだとか今の時が全てだ等といった初心と思考が子供じみて見えてくるのだろう。

御刀を振るえなくなり、あの頃の自分は刀使として頑張つていたなと追憶に変わる時がすぐそこまで来ている。そういう風に自身を捉えれば、保身を考えて当然と言えば当然だ。

そう、刀使になつた人間の人生は何も刀使の間だけで終わるものではない。終わつた者もいるが、それは殉職者として個々人の心と公の墓碑に刻まれ続けている。そうならなかつた者にとつて、刀使以外の人生を考える時期が今というだけなのだろう。

メモントモリ（死を想え）は刀使として生きる上で重要な思想もしれないが、数多の死線に立ち、生と死の狭間を行き来してこちら側に歸つてこれた者ならば死を懇願した時にこそ勝敗は決まるという哲学を持ちやすくなる。生きる為に。だから今のうちに

派閥を作り、或いは加入して自身の今後・将来に活かそうとほとんどの刀使は躍起になるのだろう。それはある意味では賢い生き方だと、雪那は思った。

「こんな賢い刀使さん達を抱えてる折神家。キナ臭いとは思わない？ 柊さん」

「……………」

気配を感じたと同時に顔を後ろに向けると、そこには音無く歩く同級生が目礼だけを返していた。いつものように。

「クラスメイトに挨拶も無しだなんてホント柊さんってばクールねえ？ 誰からそれ教わったの？ 人の神経を逆撫でするやり方をもう体得してるだなんて、尊敬しちゃうわ凄いわねえ。貴女のような恥知らずになる方法を今度教えて下さらない？ 私、恥知らずになりたいわ？」

「……………」

「ツツコミなさいよ不愛想刀使」

鎌府高等学校1年。同級生・クラスメイト。柊篝（ひいらぎかがり）は雪那にとつて初対面の時から鼻につく女であった。いつもクールな眼差しでクールな佇まいで、授業が終わるといつつも何処かに独りで行くくせに、戦闘となると誰にも比肩できない熾烈な剣を繰り出すそのコントラスト。雪那は素直に、この同級生を怖いと思っていた。

「ね。貴女いつも何処かにフラッと行くわよね？ 何処に行ってるの？」

「……」

「今日は何でここにいるの？ 私達は今日待機命令じゃあないわよね？ え？ まさか私に用でもお有りかしら？ 柊さん」

「……」

「もしかして口きけないのアンタ？」

「きけるわよ」

不断の努力で驚きの表情を顔に出さなかつた雪那を、ここに第三者がいれば褒めちぎる所である。それだけ籌の声を聞いた回数も人間も少なかつた。

「あらそう？ じゃあ何してんのアンタ？」

「別に何も」

「へく、風の噂で貴女が次代の折神家当主様に側仕えしてると聞いてただけど。ねえ、どんな人なの？ その人」

「紫様は偉大なお方です」

「そ。紫様っていうの」

『姫!!紫様!! 一体なぜなのですか——っ』

ついにこの時が来たなど、雪那は思った。

◇

「佟さんが何処で何してようが私にはどうだっていいんですけどさ？その折神紫って人、」

「先輩を付けて。私達より1学年も上よ」

「ああはいはい。で、その折神紫（おりがみゆかり）先輩なんだけど、どんな人？」

「偉大な御方です」

「いつになく饒舌で嬉しいわ、佟さん。でももう一声ほしいから詳細に語ってくれない？」

「紫様は偉大な御方です」

「成る程。で、貴女は何故その偉大な御方の御側付きなのかしら？こっちならもつと詳しく話してくれるでしょ？」

「それが私の務めなので」

「で？」

「……」

「続きは？」

「……」

「え？終わり？」

もう？と更に訊くと、箒は一つ頷いて踵を返していった。

「これっぽっちも分からないわよ……ッ」

不愛想な刀使は本当によく分からない。なのでこれは自ら探りを入れなければと雪那は決心した。

「——おやおや？後輩が困ったちゃんになってる気配。どしたの？雪那」

「……美奈都先輩」

箒と入れ違いに快活な笑顔と共に現れた女性。それは今年も御前試合出場が決まっている先輩刀使・藤原美奈都であった。——強い人。雪那はそう思っている。

「箒と喧嘩でもしてた？」

「よく分からない人間と喧嘩するほど暇じゃありません」

「アハハ！よく分からないって」

「……ちよつと折神先輩について訊いただけなのに」

「ん？紫の事？」

「？ 美奈都先輩は折神先輩のこと知ってるんですか？」

「知ってるも何も友達だし——」

「そうなんですか？ 一体どんな人です？」

「うーん……そうだねえ」

私には及ばないけど。先輩はそう言うてから続けた。

「強いし、格好いいね。友人になれて良かったって心底思えるくらいには」

「……成る程。そこまでですか」

「しかも今年は私と紫で御前試合だし？ ま、護剣の切っ先鎌府刀使の力を見せつけてくるよ。優勝するのは、私だけだね！」

「……」

……どうせ今年も優勝だろうな。雪那は思ったが、それ位この人の剣は尋常ではないのだ。

立ち合った事は一度も無いが、仕事を共にした事はある。その時見た眼前の先輩の剣は正直よく分からない物だった。形に嵌ってるわけでも、融通無碍というわけでもない。流水というわけでも烈火というわけでもない。例えるなら輪のようなスポンジのような、でも決して千切れない。

世の中にはこんな刀使がいるのか。最終的に雪那が行き着いた結論がそれだった。

「ね。ちよつと立ち合つてよ雪那！」

「遠慮しておきます。体調が優れないので」

「二度くらい立ち合ってくれてもいいじゃ〜ん。箒と一緒に後輩が皆つ〜め〜た〜い〜
〜!」

「柊さんと立ち合いでも何でもよろしくやって下さい」
「雪那のいけず〜!」

天下無双とはこういう剣士の事を言うのだろうなど。雪那は今もこれからも思い続ける事となる。

第四話 護劍の切っ先

藤原美奈都と知り合ったのは雪那が中学3年生の時だった。

中学生と高校生との、珍しくもない合同任務。自分の五体全てを使う凄腕の先輩刀使は片手で刀を振るえばもう片方の手で荒魂を殴り（金剛身）、そのまま前蹴りを放ったかと思えばすぐさま両手で（八幡力）敵を一刀両断する。その攻め、その速さは誰にも真似できない。

美奈都は優れた刀使である。

『写シ』（自分の身体が隠世にいる自分に、エネルギー体が変わる）以外における刀使の基本的技能を——『迅移』（早く動ける）、『八幡力』（力持ちになる）、『金剛身』（身体が堅くなる）——全てバランスよく極限近くまで駆使できるのは刀使界広しと云えどもこの剣士だけだと雪那は思っている。

そんな（一見気さくで面倒見のいい）現在高校2年生である先輩が、再び雪那と一緒に任務に就く事になったよ！と言ってきた。ただしどうやらツーマンセルという訳で

はないようで。

「——え。折神先輩と一緒にの任務ですか？」

「うん！あとは籐と江麻と紗南、いろはさんと結月さんも一緒だよ。いやゝ楽しみだねえ！」

「はあ、まあ、…はい」

乗り気でない事があからさまなように、雪那は折神と名の付く人種を避けていた。

嫌いと言えるほど詳しくはない。ただ単純に師から教わった事を反芻すれば、彼女達折神家が碌な人間の集まりではないのは一人予想できた為だ。

「それで肝心の任務は何なんです？美奈都先輩」

「それは私から説明するわ」

「！」

凜とした声が嫌でも雪那の背筋を伸ばさせる。同時に顔を向けると、二人の刀使がそこに居た。

「お疲れ様です。…折神先輩」

「お疲れ様。貴女が相模雪那さんと合ってるかしら？」

「はい。そうです」

「良かった」

微笑む先輩と、眼を閉じてすまし顔の同輩（柊篝）。正直家に超帰りた。しかし仕事と割り切るしかない時が来たのだろう。何かと世話になっている先輩（美奈都）は心底楽しいと笑っている。

「あと今回任務が一緒なのは結月さんというはさん、江麻に紗南だよね？ちよつとコレ最強チームじゃない？このメンバーなら何が来たって負ける気しないよ紫！」

「そうね。誰かさんが独断専行とかしなければね」

「？誰の事？」

「胸に手を当てて考えてみて頂戴」

「同感ね」

「江麻！それに先輩達に紗南も！お疲れです」

「お疲れ様です先輩方。∴それでそろそろ教えてほしいんですが、任務内容は一体何なのですか？折神先輩」

「潜伏した荒魂の討伐任務よ」

「∴潜伏？荒魂がですか？」

雪那は疑問を呈した。——刀使の命である御刀、その精製の際に生まれるノロという変な物質が集まったのが荒魂であり、高密度に集まると知性を得る個体もいる事は授業で習ってはいたが、基本的に急に現れて荒ぶるのが荒魂である。その為潜伏などという

高い知性を持つとは、にわかには信じがたい。

「今回の敵は高い知性を持つていることが分かっているの。既に4人もの刀使が討伐に失敗している。だから私達で今度こそ祓い斬る。何か質問は？」

「ありません」

「人員配置は？紫ちゃん」

「いろは先輩と江麻が守備手、美奈都と篝が攻撃手、相模さんと紗南が遊撃手。これでいこうと考えてます。私と結月先輩はチーフを務めながら状況を鑑みて各手を補う形です」

「はいすみません紫センパイ。もしかして今回の任務つて長丁場を予定してます？」

「いいえ。そんな予定はないわよ、紗南」

「というと？」

「スピードが命。速攻で片を付けるわ」

「そこなくっちゃ！」

「……」

雪那は舌を巻いた。任務ならば遊撃型の方が良いと思っていた事を看破されたのもあるが、何より折神紫という刀使の眼光にやられていた。攻撃攻撃攻撃、そしてフォロ。彼女にあるのは任務を全員無傷かつ無事に全うする事のみ。火のような人だと

雪那は思った。けど不思議と火傷はしない温度。

「——出発しましょう」

「お？雪那やる気満々だね？」

「初めてチームを組む先輩達や後輩の前で不様な格好は見せたくありません」

「雪那ちゃんやっつけたっけ？よろしゅうね。吉野いろはいます」

「私は鏡島江麻。よろしくね」

「伏見結月だ」

「新見紗南ツス。センパイ方、よろしくお願いします」

「敵荒魂は地図でいうと鎌倉市西部、丁度この山の辺りに潜伏しているとの情報よ。早

速任務開始といきましょう」

「了解です」



「いや〜しかしまさかあの雪那センパイと組んで仕事出来るなんて光栄ですよ」

「そ?」

「荒魂よりも走りまくる刀使だって有名ですよ？　そうそうそれで一度訊いてみたかつ

たんですが、『迅移』も『八幡力』も使わないでどうしてそんなに走れるんです?」

「足が動けなくなったら死ぬだけだからよ。違う?」

「アタシらには『写シ』があるじゃないですか。肉体をエネルギー体に変える絶対防壁。最近の学者先生たちの研究だと、現世の自分を隣り合わせの異界である隠世の自分に写し変えるのが『写シ』だとか何とか。刀使が刀使たる所以ですよ」

「だから自分は大丈夫だなんて思考は失くすことね、後輩。それ、命取りになるわよ?」
「おお〜コワ! 肝に銘じときま〜す」

中学3年生で後輩刀使である紗南の軽めの口調に、雪那は不思議と腹が立たなかつた。その理由の半分は、自分もこんな風に何だかんだ生きてるなあと共感を得たからであり、そして何より紗南の抜け目のなさが気に入ったからだろう。

ヘラヘラしてやるように抜け目なく他者とコミュニケーションを取り、分析し、それについて常に周囲に目を光らせている。この子は分からないという感情が嫌いな性分なのだろうと雪那は踏んだ。それは好ましく、そして何より遊撃手(同僚)に相応しかった。「アンタみたいな後輩が鎌府中学にいるとは知らなかったわ。中々出来るじゃない、紗南」

「へ? ありがとうございます。でも言っておきますがそれ雪那センパイが一匹狼なだけですからね?」

「そう?」

無知って事か? それはまずかったかなと雪那は思った。

「そのスタイルはカッコいいですけど上手くないよなってアタシら後輩は思ってますよ。…あ、スイマセン生意気言いました」

「いいわよ別に。むしろ教えてくれて感謝感激」

「恐縮つす」

「——皆静かに。着いたわ、この辺りに荒魂がいるはずよ」

総員抜刀。紫と結月の鋭い声が、微笑みかけた雪那達の利き手を自身の御刀の柄へと迅速に走らせた。

「後は斬るだけ。なんて、簡単やとええね?」

「いろは」

「はいはい。油断なんてしてへんよ、結月」

「報告によると荒魂は複数ではなく一体のみとの事らしいが……」

「? 妙だね。みんな、これ見て」

「どうしたの? 美奈都」

「この辺り、一方的に四方八方斬られまくってる。木も地面も石も」

「敵はドでかい荒魂なんとちゃう?」

「いいえ、いろは先輩。そんなにも巨大な荒魂ならもうとつくに反応がある筈です。でも荒魂を二示す計器には何も無し」

「しかもこれは御刀による斬り口だ。荒魂のものではない」

「……、ここで何があつたんすかね？」

「……まさか待ち伏せ？」

「——先だつてここに派遣された刀使隊のリーダー・寺霧歩羽は待ち伏せを食うような奴じゃないわ」

「待ち伏せじゃないよ。紫」

「——？」

「荒魂の足跡一つないんだもん。こつちの理屈に合わない。敵は恐らくそういうタイプ」

「かき消すように姿を消せる荒魂つてわけですか……」

「待つて。じゃあまさか既に私達の近くに？」

「うん。多分ね」

「……それにしても楽しそうですね、美奈都先輩」

「え？そう見える？」

「見え見えです」

「あちやく困ったあ。どうしよ？紗南」

「美奈都センパイのお好きなようにすればいいと思います。マジで」

「とにかく哨戒しよう。総員陣形を崩さず5メートル間隔、音を立てるな」

「仇は取ってやる」



歴戦の刀使とは。一般的に中学3年生からだと言われている。

刀使としての能力や剣術の強さだけではなく、実績と経験が身についてくるのが丁度この頃だからだ。今雪那がいるこのチームは鎌府高校3年生から中学校3年生までの計8名。つまり彼女たちは歴戦も歴戦、強者の集団と言っても差し支えない。

——さあ出てきなさい。御刀が待ってるわよ。

雪那達には油断は無かった。緩みすらも。

「!?」

だから陰から飛来する何かを御刀で打ち落とす事が出来ていた。このように。

「いた！見つけた!!!」

「マジすかセンパイ!?いたぞ！いたぞおおおおお!!!」

まるで雷速。斬撃を振るう雪那の剣は、しかし現れた何かにかすりもしない。…何故？ もしや透明になれるのか？ 空気にもなれる化け物なのか？

雪那の数多の疑問が振るわれる斬撃の数を超えた頃、紫をはじめチーム全員が四方八方に御刀を振るい始めた。

「敵は何処だ!?!」

「透明になれるみたいです!!」

「斬れないって事すか!?!」

「そんなわけあるか! 御刀で斬れない荒魂なんていない! そんなモノがいたら刀使はとつくに絶滅してるツ!!」

「ということとは——、」

「当たってないだけって事ね。 美奈都! 箒!」

「了——解!」

箒の斬撃と刺突が、そして美奈都の滅茶苦茶な、或いは合理を突き詰めすぎて向こう側に行ってしまったのだろう斬撃が眼前の空間のありとあらゆる面積体積を制圧する。次第に辺りは刀使達の斬り口だけが眼に見え、敵は影も形も有りはしなかった。

「寺霧達はこれで疲弊した所をやられたってわけね。…どう? 二人とも」

「…手応えなしです」

「同じく!」

「センサーに反応は? 江麻ちゃん」

「何もありません。ゼロです。しかも御刀で斬った感触も痕跡も、何一つありません」

「…どういう事だ………」

「荒魂がステルス機能を持っている…、としか考えられません。にわかには信じられません」

「——まさか早く動いている。とか?」

「!」なるほど、元々時間流が異なっている敵の可能性か。ならば『迅移』を、

「結月先輩。私は『迅移』を使って斬りましたが影も形もありませんでしたし見えませんでした。…しかも最初に来た攻撃は只の石飛礫」

「なめられたもんっすね私ら」

「ねえ雪那ちゃん。つこたのは何段階の『迅移』やったの?」

「?」1から2までです。出し惜しみはしてません」

「ああ、そうやのうてね。…つまり敵さんは、少なくとも私らにとっての3段階以上の

『迅移』やないと視認すらできひんって事やないか?」

「!」

「…やってみる価値はありますね」

——敵は我々とは違う時間流の中を泳いでいる。肉眼で敵が見えないのもセンサーに反応がないのも我々があちら側の時間に足を踏み入れていないから。

1分は60秒という時空を生きているのが我々だが、彼らにとつて我々の1分が10秒であるという異時空があると仮定し、そして1分に1回行動出来るという共通項目があるとすれば、我々は1回しか行動出来ないが彼らは6回行動できるという出鱈目が成立する。

要はストップウォッチを2つ用意し、10秒ごとにスイッチを押せるのが荒魂で、60秒ごとにスイッチを押せるのが我々のようなもの。相手の方が早い。

勝つ為には我々も敵の時間流に入る必要がある。

「この中で3段階以上が出来る者は美奈都と紫、私と篝か。ならばフォーメーション変更だ。異論はあるか？紫」

「ありません。我々4人で攻撃手を務めましょう。いろはさんと江麻、雪那と紗南は援護を。敵は早い時間流にずっと入っているようだけれど、私達の『迅移』は瞬間的にしか発揮できない。あちら側に、ずっとは入れない。仕損じた場合はそこを突いてくる可能性があるわ」

「了解」

「そこが逆にチャンスってわけですね？　どんな存在でも攻撃の最中には防御力を失

う。援護と後の先、了解です」

「……了解」

「あ、……ごめんなさい相模さん。初対面の貴女を呼び捨てに……」

「いえ。——問題ありません」

申し訳なさそうにこちらを慮る紫に、雪那は身体の中心に力を入れながら答えた。素晴らしい心根を持つリーダーに、ましてや年長者に気を遣われるなど失礼どころか恥だと一人勝手に思ったからだ。

上手くやるというのは気遣いあってこそであり、だからこそ紫も雪那も何の間違いも犯していない。むしろこれがなければ禍根を残すのが人間関係である。

——だからこれは感情の問題。慚愧(ざんき)という、人間だけが持つ機能の真価。雪那は初めて折神家次期当主と眼を合わせながら答えていた。

「呼び捨てで構いません。私も、これからは紫お姉様と呼ばせて頂きます」

「……それは何だか気恥ずかしいのだけど」

「お姉様は尊敬に足る人物ですから」

後悔はしない。それが、今の雪那が出した結論だった。



「では『迅移』を。結月さん、美奈都、篝。斬って祓うわよ」

「了解」

「わくわくするね！（了解！）」

「…本音……。了解です、紫様」

——迅移。

4人の先輩がそう言った瞬間に、雪那というはと江麻と紗南は『迅移』を発動、第1を通り過ぎて第2段階まで到達した。敵は見えない。今はまだ。

先輩達は第3に到達しただろう。その領域でないと見えない景色に、恐らく敵はいらぬ。…勝負は一瞬。斬るか斬られるかそれだけだ。

「……」

もう『迅移』が解ける頃合いだと雪那は思った。しかしその時、かすかに、黒いモヤのようなものが瞳に映った。

「NOE6NQT」

「——？」

「2B4UBSQ」

…憐れまれた。雪那は直感で思った。

「TWV TU & J%F」

「……………何？」

「ツ仕損じた!!!」

「雪那センパイ後ろ——!!!」

——勝てるかな お前は。

迅移が解けた紫と紗南の叫び。同時に雪那の身体が脳を介さず後方に刀を振るう。その遙か手前に、雪那は胴を真つ二つにされていた。

「……………」

斬られた。このクソ野郎。

『写シ』が剥がれ、文字通り生身となった彼女に向けて荒魂は今こそ止めを。屈辱と怒りが斬り捨てられた写シの雪那を通じて今の雪那も抱いて、せめて一矢報いようと刀の切っ先を伸ばす。

——届け。

「雪那!!!」

先輩の叫びと雪那の切っ先をかわした荒魂は、笑みのようなものを浮かべながら手に持つ死を刃を眼前の刀使の顔面目掛けて——、

「『深移』」

——振るえなかった。

「……………、柊…さん？」

「危ない所、だったわね」

荒魂の顔面から突き出た切っ先。それは独特な両刃造（もろばづくり）の御刀の物。雪那の知り合いでそれを持つ刀使は一人しかいなかった。

「何、今の」

「私の奥の手、といった所。かしら」

「…何で…私を」

「チームの仲間を護るのに理由は必要ない。紫様なら、そう、言うわ…」

「柊さん！」

「箒!!大丈夫!？」

「昏倒しただけみたいやね…。外傷はなし脈はある」

「今のは迅移の一撃?でも早すぎる…」

「箒のとっておきでしょうね。とにかく江麻と紗南は残敵確認。結月さんは救護班を呼んで下さい。他の者は箒を中心に円陣防御」

「了解!」

「柊さんは何で私なんかを…」

失神した箒に駆け寄り、楽な姿勢を取らせる。雪那は別にこの不愛想刀使と仲がいいわけではなかった。刀使として互いに上手く任務を遂行出来ればいい。…それだけの存在だった。

「為すべき事を為す。それだけじゃないかしら」

「紫お姉様…」

「あの場面で私達には出来なくて、けど箒には出来る何かがあった。この子はそれを為した。打算も何も無しに。……本当、私には過ぎた側付きよ」

「……………」

朱音以外の折神の人間とは違って。紫はそう続けて、箒の背中を優しく撫でた。確かな絆がそこにはあった。憧れの表情と敬意も。

だからこそ、雪那は誓いを一つ増やす事にした。

「…借りは返すわ。必ずね」

コイツには絶対負けられない。箒の閉じた瞼を見つめて、雪那は決めたのだった。

第五話 飢えたる者は常に問い 前編

彼を知り己を知れば百戦殆うからず。

孫子に曰く、相手も己も知らない奴は戦いにおいて必ず負け、相手の事は知らないけど己の事だけは知ってる奴は一勝一敗するので、絶対に勝ちたいならどちらもちやんと熟知しましょうね。その上で碎け散るまで戦え（意訳）。

昔読んだ本の内容を、雪那は反芻しながら鎌府高校の廊下を歩いていた。

どうすればあの不愛想刀使、柊箒に勝れるか。その為には彼女と、その主を知る必要があつた。

「……………」

鎌府高等学校は折神家本家と隣接しており、この学校に通う事は折神の家の者の務めであるという。

過去何人かの例外はあつたにせよ、鎌府という場所はこの国の中枢近くに位置している要所であり、ここで切磋琢磨するという事は様々な側の人間たちへのアピールとなつ

ていた。

何かあれば折神家が駆けつけてくれる。指揮を執ってくれるという安心感と、何かあればすぐに折神が鎮圧するぞという脅し。

次期当主である折神紫はその例に漏れず、学校と実家という二つの場所を行ったり来たり。学生の時分から当主としてのいろはと帝王学を学び研鑽する立場にあった。

「あつ紫お姉様、この間の御前試合、格好良かったです〜！」

「それはありがとう、雪那」

——初めて出会って、取り組んだ任務から早数ヶ月。

雪那は自分なりに折神家と、その長女である紫の事を調べ、その結果を自身の頭の中に出していた。

この人がトップに立つ組織ならば信用に足ると。

「他校の刀使をバツタバツタと薙ぎ払う様は正に二刀流の鑑です〜！初めて一緒に任務に就いたあの頃を、今の私が見たらきつと卒倒しちゃいますよお」

「ありがとう。でもそんな褒め殺しは美奈都にも言つてあげて頂戴？優勝したのはあの子だから」

…普通の人であつたならと思つた事もあつただろう。折神ではなく他の家の人間であつたなら、女学生として人並みの青春をもつと謳歌できたのと思つた時であつただ

ろう。

高校2年生でありながら、しなやかなこの双肩に背負わされた重責は如何ほどだろうかと。初めて任務を共にしたあの日から、気付けば雪那は紫を慮り、慕うようになっていた。

——自分勝手だな、とは思う。

本当はそんな風に思つてなどいないのかもしれない。けれど確実に言えるのは、この人の人柄が雪那の心の琴線に触れたという事実。それだけは間違ひなかつた。

「美奈都先輩は美奈都先輩。紫お姉様は紫お姉様です。そして私が一番凄いと思つたのは他でもないお姉様ですから！」

「……ありがとう。雪那」

優しい眼差しで、紫は笑つた。

しかし彼女が美奈都に負けたのを内心悔しがっている事は、この場にいる全員が（紫以外）分かつていた。そしてそれを加味しても雪那にとつて一番凄ひのは紫であり、この想いは終生変わるわけにはいかないと今の彼女は思つている。

そう、たとえこの不愛想刀使がいつも眼の前の人物の隣りに居てもだ。

「——あらまあ居たの柊さんお疲れ様。いつもいつもいつもお姉様の後ろを金魚の糞よろしくご苦労ね。もう帰つていいわよ？」

「……………」

「その歳で存在だけでなく耳まで用済みになつてゐるなんてホントご愁傷様。知つてた？ 耳が聞こえなくなつたら人間ヤバいらしいわよ？ あ！ そうだ！ 紫お姉様あゝ、近くに美味しいお蕎麦屋さんが出来たんですう。これから一緒に行きませんか？ タヌキ蕎麦が本当おいしくて、もう天かすがバチバチなんですう。」

「ごめんね、雪那。…申し訳ないけれどこれから箒と一緒に折神の家に行かなくてはならないの。また今度ね」

「絶対ですよ？ 紫お姉様〜」

「……………」

「何よ」

「別に」

毎度お馴染み小さく会釈をする同級生。彼女はいつも通り涼し気な顔と態度で紫と共に去つて行つた。

——絶対に越えねばならない。アイツに勝る事で私はきつともつと強くなつて、紫お姉様を支えてゆける。後悔せずにと。

今に見てなさい。絶対に借りは返してみせるわよ。アンタに借りを作つたままなくて、私が私じゃなくなるわ。

「? あれ? お久しぶりですセンパイ。どうしたんですそんな怖い顔で」

「——ねえ紗南。やっぱアイツちよつと邪魔じゃない? 斬つてやつてよちよつと腕一本」

「いきなり何言つてんです雪那センパイ……」

「お久しぶりですう〜〜写シ張りしましたかあ〜? とか言つて斬つてやんなさいよ正面から。」

だつておかしいじゃない。お姉様には私が付いているのに、何であの女は相も変わらず毎日毎日毎日毎日すぐ傍にいるの? わけわかんない」

「……ええ? ていうか篝センパイの事だつたんですか……。そんな小細工であの人が斬れるわけないじゃないですか」

仕事（荒魂討伐）上がりなのだろう。額に汗を浮かばせて、後輩の紗南はこれから鎌府高校の先生にも報告書を上げないといけないのでスイマセンと断つてから雪那に言った。

「篝センパイは折神家と繋がりのある柊家の人ですからね。仕方ないんじゃないですか?」

「そんなのこつちは知つたこつちやないわよ……!」

お姉様の側に私がいればアイツは用済み。それ以外に何があるというのだ。雪那は

物騒にもそう考えていた。そう、知った事じゃないのだ。理屈じゃないのだ。

「まあまあ。…センパイ達同じクラスなんでしょう？ いっそ訊いてみたらどうです？ 何で紫様の傍を離れないんですかって」

「……………そんなの……………」

「え？」

「そんなのとつくの昔に訊いたわよ
!!!!!!」

「あ、ヤベ」

「なのにあの女は涼しげな眼を細めて、え？なに？と思つたらもう閉じて何も言わないし!!!しつこく問い詰めても、それが務めなので。とか何とかほざいて終わり終了!!!あんの不愛想刀使ホント叩っ斬ってやりたい!!!」

「大声で叫ばないで下さい私まで同類だと思われるじゃないですか」

「あ？何か言った？」

「いいえ、何も」

「はあくく。叫んだら少しすつきりした」

「蛮族ですね」

「あ？」

「?え？」

「……………まあいいわ。ありがと、紗南。愚痴聞いてくれて」

「どういたしまして。それより、やはりここはもっと知るべきじゃないですか？」

「? どういうこと?」

紗南は両手を可愛らしくわぎとらしく口元で組んでみせながら言った。

「篝センパイは家の務めの為だけに紫様の傍に付いているのか。はたまた違う何がしかの理由があるのか、その目的は何なのか。これらがネックですよね?ならその全部を徹底的に知る事が出来れば、」

「! これらを知る事が出来れば、私がお姉様の傍である女よりも上手く立ち回る事も可能!!流石は出来た後輩ね!よく言ったわ!!!」

「どういたしまして」

「早速ちよつとお隣りさんの折神さん家に行ってくる!!」

「いつてらっしや〜い」

行動力の化身かよ。いやきつと幻聴だな。仕事明けで頭が少しおかしくなっている事を自覚した紗南は、さつさとシャワーを浴びて今日はもう寝ようと決意した。

第五話 飢えたる者は常に問い 後編

所変わって鎌府のお隣り・折神家本邸。

折神の大門（正門）を早足で、けれどゆったりとした所作で歩き抜け、雪那は気配を殺しながら邸宅へと侵入もとい姉と慕っている先輩の家に遊びに来たのだった。

「？　ちよつと失礼その貴女。ただ今御当主は会談中ですよ？」

「私は伍箇伝鎌府高等学校1年、特別祭祀機動隊員相模雪那です。折神家当主ならびに紫様にご報告あつて参りました」

「え？　しかし——」

「ご心配なく。刀使の任務です」

「な、成る程……」

いけしやあしやあとぬかす雪那はキリリとした表情を維持していた。まるで嘘が本当であるかのように。そういう技である。

彼女の師曰く、剣士は迷ってはならない。迷いは他者に伝染する。人の剣術は迷いと

いう感情に敏感であり、周囲に一人でも欠片でもそれが存在すれば剣は鈍る。決めたのならば行動し、行動したいのなら顔に出せ。顔に出せたら疑うな。相手も君を疑わない。

——亜種・心の一方。

「ここが折神家当主執務室ね」

十中八九この中には紫と、あの不愛想刀使が居る筈。：果たして何を話しているのか。一言残さず盗み聞いてやる。雪那は鋭い眼差しで、背中を壁にもたれさせた。

「? あのか?」

「御当主様がここです。刀使の任務です」

「アツハイ」

——では母様。まずは私から質問をしても?

「……………っ」

来た。不動なる表情筋の下で、雪那の心は踊った。部屋の中から声が聴こえてくる。折神家とその側付きだけの会話。秘密がこの中には、確かにある。



折神家当主執務室の出入り口は莊嚴な装いである。

黒を基調とし、毎日綺麗に磨かれている扉の取っ手は金色の装いで常に美しく、もしも常世全てを塗りつぶせる色があるとしたらこんな色かもしれない。もし仮にこれ以外に、人は何も見る事は無いとしたらそれはとても気味が悪いだろう。

真つ直ぐに電灯を反射する金の取っ手を見ながら、閉める。くるりと振り返って、紫はこの部屋の主を真つ直ぐに見た。

「ただ今参りました。……母様」

「大儀。——なんてね？ やっぱり娘の顔を見ると安心するわ。朱音もだけど、最近は一層可愛くなってきたわね？ 我が娘たちは」

「…御用が無ければもう失礼しますが」

「ああつちよつと！ そんな塩対応を親にするんじゃありません！」

「……………」

「ほら御覧！ 篝なんて親不孝者を見るような眼で貴女を見てるわよ！ 恥ずかしくないの紫！」

「親馬鹿を見る眼だと思えます」

「滅相もありません、御当主。紫様」

「ああ言えはこう言う……」

「……」

はしやくフリをする母を、紫は油断のない瞳で見つめていた。目上の人間がこうやってみせると、表面上しか見ない他人及び大多数はこの人を軽く見る。するとうっかり口を滑らせて、情報を聞き出しやすい環境が出来上がる。当代折神家当主はそんな道化振りが殊更板につき、それ故に恐ろしかった。

「では母様。まずは私から質問をしても？」

「は……いよろしくどうぞ」

「ありがとうございます。——先日、この折神と鎌府の膝元相模湾に外国の特使が参られたとか。それは何用ですか？」

「サイトシーイング」

「成る程。ではその特使に我々刀使の任務である荒魂退治を見学させた理由もそれと同様でよろしいのですか？」

「うーん、まあねえ。あつち方の人達がどうしても言うからねえ……。荒魂なんて物騒なのがいてるのはこの国だけだし？ 珍しい物好きよね人間って何処も彼処も」

「そうですか。しかし滞在期間が今年の9月までというのは妙な話ですね？」

「え？ なんでなんで？」

母は心底楽しいモノを見る眼で促した。

「今年の9月。それは相模湾の港から一隻のタンカーが出港する月。——それも、今サイトシーイングとやらに勤しんでいる特使の国に送る御刀と、ノロが大量に詰められているタンカーが」

「……………」

「母様」

真意は。正気か。紫は表情で訊ねた。

「流石は私の娘、折神の長女。朱音も悪くはないけれど、次の当主を貴女にしたのは正解だったわね。ちゃあんと裏を取ってからここに来た。最初から私を詰問する為に。次代に相応しい胆力と腕だと思っしょ？ 綿貫」

「全くもって」

「母様。質問に答えていません。ノロと御刀は常に我々の管理下にあります。全て折神の名の下に。貴女がそう教えたのです。」

その管理を離れた地へ御刀を、ましてやノロを送るなど正気の沙汰ではありません。貴女もかつて刀使だったなら分かる筈。ノロは結合し荒魂に、そして荒魂は人を襲います」

「大丈夫よ。心配無いって」

「心配なんてものが無かったら刀使なんて最初からこの国にいませんよ。——母様」

「だから大丈夫なのよ？紫。 実は今進めてる外国との共同研究で、ノ口を結合させない装置が出来そうなの。全ては貴女の言う心配を取り除く為。この国に生きる全ての者の心配を」

「ノ口を結合させない？…つまりそれは荒魂を生ませない術という事ですか？」

「その通り。でもその実現にはこの国の設備では不十分だね。外国にある施設で最後の大詰めをする必要があるの。勿論警備も備えも万全よ」

——刀使も何人か詰めていると、紫の母は言った。私達折神の悲願、人々の安心がすぐそこまで来ていると。これを為せば、刀使以外での荒魂に対する特效薬が一つ生まれる。そして最前線に立つ刀使達の負担も減ると。

その上で、紫は母の眼を見て言った。

「全て真実ですか？」

「勿論よ。私は先代とは違うわ。貴女の祖母と、私は違うのよ」

「……」

「……」

……

「…分かりました。母様を信じます」

「貫禄が付いたわね、紫。お母さんドキドキしちゃった。今年の御前試合が貴女を変

えたのかしら?」

「…失礼します」

「ああちよつと待ちなさいな。まだ私の用が終わつてないわよ紫」

「?」

それはいつになく真面目な口調と表情で。だから紫はまたも居住まいを正し、待ちに待った本題が来たかと下腹部に力を込めた。

「最近調子はどう?もしかして彼氏とか出来た?御前試合で負けて傷心中に出来る男なんて碌な奴じゃないわよだから、」

「ツ——失礼します!!」

帰るわよ篝! 強く言う紫であった。

「私もこれにて失礼致します。結唯先輩、和絵先輩。当主親衛隊のお役目、どうか恙無く」

「フフ、ありがとう」

「篝もしつかりね?」

「はい。先輩方」

「ちよつと紫く、お母さん本気で心配してるんだけども」

「母様は今晚説教です!失礼します!」

年頃の娘のように怒りながら。紫は退出し、篝もそれに続いて一礼の後に部屋を出たのだった。



「私の娘冷たいわ。クロクロ、あれどう思う？」

「年頃であるだけで」

「綿貫は？」

「普通じゃないでしょうか。むしろ良い塩梅かと」

「もうちよつとあんな感じの年頃の娘らしさがあの子には欲しいわねえ。もつと可愛くなれるのに」

「紫様にも立場がおります。ご存じでしょうに」

「魂にまで刻まれてるけど親子なんだからもつと」

「オフの日に家族サービスでも何でもなさって下さい」

「でっもっも」

「折神のデーモン……」

「え？ 唄うデーモン？」

「え？溶鉄デーモン？」

「悪ふざけはよして下さい御当主。燕さんも。…それより、先程話されたノ口と御刀を外国に送るといふナンセンスな暴挙、本当に実行なさるおつもりですか？」

「しかたないじゃない。政治は難しいものよ？特に対外となるとね」

「刀使だけの秘密が海を飛び越えあちらの手に渡るうゝなんて素敵感激。——馬鹿なんですか？葵様」

「燕さん」

「いいのよ綿貫。——明治の時代から、歴代の折神家当主はノ口を一ヶ所に纏め管理するようになってきた。散逸して何処にあるのか分からなくするよりも、その方が何か有つた時人々は安全だと言って。表向きはね」

「軍事利用でしょう？裏の理由なんていつだって」

「少し違うわね。それはあちらのお国のお偉いさん達の理由」

「？」

「ごめんね。こればかりは秘密の中の秘密だから貴女たちにも言えないわ。今言える事は只の一つ。ノ口と御刀は今年の9月に、纏めて外国に向けて出発する」

「有事が起きれば何とします。万が一」

「だからよ」

「は？」

「——だからよ」

当代折神家当主・折神葵は笑いながら言った。

「先代（母）の時のようなヘマはしない。私は私の全てを賭して、この計画を成功させてみせるわ。紫と朱音と柊の一族が、平和に暮らしていけるように」

「分かりました。存分に本懐を遂げられる事を我々親衛隊二名は願っております。ところで葵様」

「うん？何？」

「斬ります？」

「駄目よ」

世間話をする雰囲気です。葵は泳がせておいた気配に向けて言った。

「入っておいでなさい。隠れていても、貴女のような刀使いは匂いで分かるわよ」

.....

「——失礼、致します。：御当主様」

「いらつしやうい。先輩と同級生想いな若き刀使さん？」

当代折神家当主親衛隊二名が執務室の出入り口を開けると、そこには青ざめた顔をした相模雪那がいた。

第六話 答えの中にはいつも罨

折神家当主は、刀使（正式名称を特別祭祀機動隊）が属している刀剣類管理局のトップにあたる。二天一流を御家流として、その歴代の当主は、皆強者の刀使であり剣士でもあった。

かの宮本武蔵以外には誰にも不可能とされる二天の真義。（以下諸説あり）

腕が二本あって刀も二本あるならば一本ずつ刀を持つて片手で攻防を使い分ければよいという単純明快であるがゆえに至難であるこの剣術を、折神家は今も探究し続けているという。

——腕力に任せて刀を振るうだけならばそれは棒振り芸であつて剣術ではない。

間合を見極め滑らかに、かつ迅速に物体を斬るといふ技、手の内、歩法、呼吸、体重移動といった諸々の術。

これらの実現に人生の全てを懸けたとしても実現できうるか分からないそれを、刀二本で以つて全うするという苦行にも似た修業。

腕力以前の問題として、劍士には刀を構える及び斬った刀を止める筋力と骨格が最低必要である。相手はこちらのしびれを切らす瞬間を待つているかもしれない。構えは、支えは長く保てれば保てた方が良い。

斬った刀を腕力で止めてしまうと次の動作に支障をきたす。腕に力を入れていながらだから次の動作をするには力を抜くという工程がいるからである。そのワンテンポが生死を、勝敗を分かつ。

数多の劍士達が刀一本だけでも終生四苦八苦しているのに、二刀でもってこれらを成すのが二刀流及び二刀使いの劍士となれば、絶対的に全ての力が足りない事は想像に難くないだろう。

——だから折神家は『八幡力』という能力に目を付けた。

刀使は常人よりも強い力を出せる。腕力ではない。力である。ただ力。ここぞという時十全に力を出せますという反則を刀使は持ち、その感覚を常に身体に覚えさせる事が出来れば御刀を持っていない状態でも身体は力に慣れていく。大きな力を発揮する自分に慣れてくる。

そう、たとえ刀を二本持つても十全に扱えると自覚する。

その上でそれらを操れる技術を持てれば理論上最強の劍士が出来上がる。息を吸う様に攻防一体、融通無碍。

無論のこと、夢物語だが。人間が空想する下らない幻想だが。果てなる高みを目指して、一歩一歩進んでいく事は可能なのだ。

——二天一流折神派・皆伝。

高みを目指す者たる証のその名称は折神家当主にのみ名乗る事が許された、いわば数多の剣士達の理想の体現者である剣豪の名であった。

「かけなさいな。遠慮は要らないから」

「……はい」

「クロクロも綿貫も手出しは無用よ。大した話なんて聞かれてないんだから」

「分かりました」

「……」

恐怖以外の何物でもない感情が雪那を襲っていた。

折神家の当主、キナ臭い組織のトップがまさかの入室許可である。何も無いなんて事はあり得ない。いつ斬られてもおかしくない心構えで以って雪那は用意された椅子を見て、すぐさま真つ直ぐに前を見た。

当代折神家当主・折神葵。

折神の歴史の中でも最も長く刀使を続けている、半ば妖怪のような人間はニツコリと

笑みを浮かべながら右の掌を雪那に見せて、どうぞ？と椅子を促した。

：しかもその両脇を固める当主親衛隊の二名もまた恐ろしい。

通常ならば高校3年で終わる筈の刀使を19歳まで続けていられるこの二人こそ当代・折神の刃鳴。

「盗み聞きなんて中々面白い事をやってたのは褒めてあげる。さつさと紫様たちと一緒に帰ってしまえば良かったのに」

「見過ごす事は少々困難ですよ？貴女、お名前は？」

「相模雪那です…」

「へえ！貴女が！」

ポンと可愛らしく両手を打ちながら。葵はわざとらしく言った。

「良いレッグとフット（足）を持ち、それを鼻にかけない刀使がいると聞いていたわ。たしか流派は——中條流だそうね？」

「はいそうです…」

「嘘も上手い。まーすます気に入ったわ」

刀使は自身の流派を用紙に書いて折神家（管理局）に提出する義務がある。：師の流派を書いてしまうとまずいといっているので父母の流派を書いて今まで提出していたのだが。

「良い師に教わったわね？雪那ちゃん」

「?何の事ですか?」

「二人とも外して頂戴な。ちよつと懐かしい話がしたいから」

「分かりました」

雪那は呆気にとられた。親衛隊二名があつさりと退出したからではない。

この場にいる全ての剣士が雪那の持つ御刀を没収しなかつた事、そして一瞥もくれなかつた事に。

やはりまずいと、脳は警鐘を鳴らし続けている。

「私は今年で45になるから、…かれこれ30年は会つてないわね。師匠とは」

「……………は?」

「私、二天一流折神派の皆伝だけれども15歳までは師匠の所で剣を学んでいたの。這つて帰らされたでしょう?このクソ野郎っていつも思つていたわ。あの頃の私は」

「……………」

——何だそりや。雪那はまるで自分を見ているような顔をして閉口した。

「荒魂をこの国から一匹残らず駆逐してやりたかつたのよお。若いつて本当に良いモノだつたわ。だつて二天一流は折神の、母の流派じゃない?だから嫌いだったのよ。役立たずなそんなモノよりも次元が違う確実な剣が欲しかつた。あの頃は」

「……………」

「あの人は、元気？」

後輩を見つめる瞳がそこにはあつて。雪那は観念しながらしかし理性で以つて口を開かざるをえなかつた。

「……。もう会つていません」

「あら、そう？」

「来るなど言われたので」

「変わらないわね。私と私の母の事、あまり良く言つてなかつたでしょ？」

「黙秘します」

「良い弟子。やっぱり貴女気に入つたわ」

.....

「貴女がこの部屋に入った時、その歩き方を見て私はかつての同門だと確信した。だから2人つきりにした。」

であればあとは人間性の確認。あの人の弟子は相変わらず有能か、武人か。経験上そのどちらかしかいないもの。でも貴女は珍しく両方だった。面白さと懐かしさに華を咲かせるのは老人の特権でね？私とのおしゃべりに、付き合つてもらおうわよ？」

「分かりました」

——つまりは私の側に付けという事だろうか。

雪那は古い先輩を見る真顔の表情を作りながら頷き、それを見て、葵は益々笑顔になつていた。



「実は私、母親が大嫌いだね？本当は折神なんて家に生まれたくなかったのよ」

「はあ、そう…なんですか？」

「ずっと剣を振つて生きていきたくかった。刀を腰に差して荒魂を斬つて祓つて、そしてある日死ぬ。そんな単純だけどソードマンな人生を歩んでいきたくかったの。あ、ソードウーマンだったわね」

——なのにこんな場所に居る。自伝でも書けばベストセラーね！と葵はケラケラ笑つて。常備しているのだろう机の上のポットの中身をカップに二つ注ぎ始めた。中身は紅茶のようだった。

飲んででも飲まなくてもいいわよ？ 葵は一口飲んでからそう言つて、紅茶を雪那に手渡した。彼女の歩く姿と背格好は、たしかにどこことなく師範に似ている。

「御当主様も師範に言われたのですか。もう来るなと」

「もう来ませんって言ったのよ。私が」

「そうなんですか？御当主様」

「葵でいいわよ？雪那ちゃん。」

…今から40年前、とある大荒魂が出現したの。当時は狭間の国のおとぎ話に肖つて、大古竜つて呼んでてね。世の中はてんやわんやだった。私の母親代わりだった女性が命と引き換えにヤツを討つて、全ては終わったけれど」

「40年も前にそんな事が」

「私はその人が大好きだった。実の母親よりも母親だと思つてた」

「……………」

…

「彼女は第5段階の迅移が出来て、しかも二本の御刀に選ばれた刀使だった。だからこれは自分には出来ないからやるんだって言つて、大荒魂と一緒に隠世の彼方に消えていっちゃった」

笑みを崩さず話す女を見て、雪那は寒気がした。

訳もなく本音だと悟る。この人は笑いながら屈辱も怒りも哀しみも言葉にする事が出来るのだと。黒いのだと解つたから。

「その光景を私は見た。……哀しかったわ。何でもう会えなくなっちゃうんだって理不尽に怒鳴り散らしたりして、母に食つて掛かった。——何が折神だ！人一人護れない只

の役立たずか！ っつてね。

それが柊の一族の定めだと母は言った。クソ食らえだつて私は言い返して家出して、師匠に出会つたの」

「——え？」

「知つての通りあの刀法は早さの中における速さに特化していた。だからこそ安易に人間に振るうのも見せるのも禁じた。もし仮に対人戦をやつたとしたら、同迅移内での立ち合いならほぼ誰にも対処できない殺害の剣だから。……つて、あら？ もしかして今は違うのかしら？」

「いえその通りですが。いえ、それどころではなく今柊と？」

「ええ、言つたわ。私と篝の母親は同い年の幼馴染でね。……40年前私達は互いに同時に、母親を失つたのよ。だから私はもう柊の人間を失うなんて事は起こさせない。相模湾の件はその第一歩。」

そしてここまで聞いた以上、貴女も私の計画に参加してもらおうわよ？ 元同門の雪那ちゃん？」

「ここまで聞いて引つ込む道理は無理でしょ？ つて事ですか。随分と小汚い事をしますね、御当主様」

「何で私がこの歳まで刀使が出来てると思う？ それは私が折神の歴史の中で最も老害で

老獪だからよ？」

——逃げ場は最初からなかったのだと。雪那は悟るしかなかった。

斬られなかったただけ有り難いと思うほかないが、まあ情報は収集できたから良しとしよう。

「相模湾の警備に折神家直属の刀使として参加して頂戴？あ！命令じゃないわよ？これはお・ね・が・い」

「…分かりました」

「良かった、飲んでくれて。でも結果的にwin—winでしょう？ 雪那ちゃんは家の事が知りたかつたんだから」

それは紅茶を飲んですぐの事だった。瞬時に訪れる恐怖にも似た感覚と味を顔に出さなかった事を、今、雪那は自分で自分を褒め称えてやりたかった。

「っ、それは本当に初耳ですね。後学の為に何故そう思うのか、お聞きしても？」

対して葵は表情に出さないのでなくその真逆、今を存分に表情に出しながら雪那にその答えを言った。

「だって貴女。私と同じ匂いがするもの」

復讐に囚われた人間がたしかに、この部屋には居たのだった。

第七話 ゼロ

刀使育成校の一つ、鎌府高校の稽古場は二つあった。

一つは一際大きな建物で、仮に中等部と高等部が合同で使用しても尚余りある板張りの修練場。

そしてもう一つは自身の剣法・刀法を同僚であつても他人に見せたくはないと考える刀使が使う、こぢんまりとした修練場である。

室内には衝立（ついたて）でスペースが確保してあり、ここで稽古する者には他人の稽古を覗き見てはならないという暗黙のルールがあつた。

「よろしくお願ひします」

入室の際に声を出す事は稽古をしている他者に自身の存在を伝える為であり、こつちを見るなよという意味表示の意味がある。

「……………」

正座。刀礼して雪那は御刀・妙法村正を鞘から抜き、足を大きく前後に広げたスタン

スで刀を振り下ろす。基本稽古である素振りは疲れるものではない。疲れるのだとすれば只の怠けである。

「……、……、……」

振りかぶつたら間髪を容れずに振り下ろす事。こう斬り下ろそうかな?とか、いや待てよ?とか迷ってはならない。

仮に迷うとすれば振り下ろし終わった時。力の配分、速度、刀の重さの把握が出来ているか?と考え迷って次はこう?と工夫し、次の瞬間にはそれら全てを消し去り素振りをし続ける。

覚えて忘れよ。又は、払い捨てる心。かくて次なる技も生れるべし。

「まあ、普通」

調子の確認と素振りを百本程で終わり、雪那は技の稽古に入ろうとした。

「よろしくお願ひします」

……。

この声は。

「——あら終さんじゃない。お疲れ様」

「……? 雪那」

それは珍しい光景だった。いつも紫と一緒にいる篝が、今は独り。ここに来るとい

事は修練をするという事だが、こんな強い女でもちゃんと稽古するのねと、雪那は何故か面白くなった。

「お疲れ様。珍しいのね」

「稽古ぐらいするわよ、刀使だもの」

「ここでという意味よ」

「お互い様でしょ。ていうか何？今日は紫お姉様は一緒じゃないの」

「二人の時間は必要でしょうと、紫様がおっしゃったので」

「それで稽古ってわけ？」

「そうよ」

二人はそれきり無言になった。別に仲が良いわけでもないのに、互いに互いのスペースの中で稽古に没頭する。

時より聞こえる踏み込みの音と刀刃の風斬り音が修練場を揺らし、…やっぱりコイツ出来るなと心の中でほんの少しだけ思った所で、御刀を納めた。

——収穫はあったかと、雪那は思う。しかし次の工夫は実際に斬らねば手応えが掴めないので荒魂を斬って練磨するでしょう。

刀礼し、修練場を出る。するとそこには何故か篝火が立っていた。

「何アンタ。もう稽古終わりの？」

「ええ」

「じゃあちよつと顔貸しなさいよ。嫌とは言わせないわ」

「不良みたいね」

「刀使よ。今もこれからも」

こじんまりとした修練場の傍には太陽を遮る木々が生い茂っていた。

暑い時期になると、入学したての中等部生はこの辺りの日陰が恋しくなるだろうなと雪那は歩きながら思つて、クルリと後ろを振り向いた。

ぼうつと突つ立つて、けれど膝と腰の落ち着きと据わり方が師範のそれに似ている刀使が、髪をかき上げる風を物ともせず真つ直ぐ、こちらを見ていた。

「——紫お姉様の事なただけれどさ。私、あの人護りたいと思つてるのよ」

「はあ、成る程」

箒は同意という意味で頷いた。

「柊さんは側付きだけれども、人一人刀使一人には限界があるでしょ？ 貴女だけでは太刀打ちできない状況は、私がなんとかするわ」

「……………どういふ心境の変化か訊いてもいい？」

「変化も何もいつも通りでしょ。私は紫お姉様を護る。だってあの人は私達刀使に、そしてこの国に必要な人なんだから」

「そうね」

「あとさ、これオフレコなんだけど、私相模湾の警備に出向することになったの。だからその間お姉様の事は任せたわよ、佟さん」

殊勝な何かを見つめる瞳をかき消した篝は、怪訝な目つきをし始め終には首を傾げていた。

「……? 出向? そんな通達は来てないけれど。……それは誰からの命令? 紫様……ではないわよね?」

「……」
.....

「御当主葵様からよ」

「! あの方に粗相でもしたの貴女」

「逆よ。気に入られたの。私のフットとレッグが良いんだって」

「嘘は止めなさい。あの方が只の刀使でない事は雪那にだって判るでしょう。一体何をしたの」

「……。貴女のお母さんの話をされた」

「………。は?」

「只の昔話を聞かされたのよ。40年前互いに母親を失ったんだってという昔話。だから

今後は私の側に付けてね」

「……部下を脅すだなんて……」

「勘違いしないで。脅されてなんてないわ。これは私の意思で、あちら側の刀使として出向するのよ」

「……………」

雪那は不可思議な自覚の中にいた。スラスラと言葉がコイツ相手に出てくる事ではない。——私はコイツに本音を喋っているのだなという驚きにも似た感情。そして理屈や感情では説明できない何か自身が自身を支配し始めているという奇妙な充足感。

昂ぶらず、荒ぶらず。それはきつとシンプルな。

きつと、それは始めから、この刀使を見た最初から抱いていたシンプルな——。

「だからちよつとき、もしかしたらもう貴女とこうやって会えなくなるかもしれないからさ。——ちよつと私と斬り合ってくれない？」

終さん。雪那がそう言うのと、眼前の不愛想刀使は一度瞬きをした。遠くの山を見詰めているような瞳を覆い隠すように。

「私達にそんな必要があるとは思えないけれど。本気なの？」

「見れば分かるでしょう？ 葵様の側になってしまった私とお姉様の側である貴女。私達は近い将来、気軽に会えなくなる。何より御当主様と紫お姉様は家族だけど向いている

方向が違う。道を違える事は必至よ」

…将来ね。箒は軽蔑に近い眼差しを雪那に向けた。

「紫様に仇為す者を私は許しません」

「でしようね」

「…でも貴女はあちら側に立つて、紫様を護ろうというのでしよう?」

「そうよ。全ては自業自得。私も焼きが回ったわ」

同い年のくせに。箒は呟いた。

「…私は紫様に剣と身命を預けてる。もし仮に違えたら、私の道は決まっているわ」
「でしよう? だから立ち合ってほしいのよ、今ここで。柊箒」

「——本気なのね」

「アンタに借りを作つたままだなんて。私が私で無くなるわ。だから教えてやるのよ、私は大丈夫だって。貴女よりも強いって。」

お互い御前試合予選、選抜戦には出なかった。私の剣は人外のみを滅するものだから。そして貴女は、

「私の剣は荒魂のみに向ける。未来永劫、柊の剣は」

——折神を護る為に。

「似た者同士かもね、私達」

だからこれは例外。彼女達の流儀と誓いの、その埒外という名の闘争心。雪那と篝は同時に、刀の柄へと利き手を飛ばした。



——雪那はスタンスを途轍もなく大きく取った。それはおよそ、どのような流派において、聞いた事も見た事もない奇怪な構だった。

ただ柄頭だけを篝の正中線に向け、腰を深く沈ませた納刀の状態でその場に居る。

和平の意思表示とは似ても似つかない雪那の刀法は、これこそが彼女の流派の真の戦闘態勢であるのだろう。

荒魂討伐任務であつてもこの構を他者に見せた事はない。自身の師を除いて。

ひりつく空気と圧（プレッシャー）が篝の眼球とほぞを瞬時に乾かせて、一度、弾指よりも速く瞬きをした篝は瞬時に勝つ為の方程式を完成させた。

「……………」

「……………」

御刀を抜き、篝は左肘を突き出し静止するように構えた。

その様はさながら弓を引き絞るようでいて、しかし水面下では常に身体は動き続けて

いるのだろう。

——こうきたら？こう。そうきたら？こう。考えるという事は組み立てるといふ事、組み立てるとは動くといふ事であり、動くといふ事は斬るといふ事。それが剣法。

それが武芸。

「ちなみにだけど」

笑いをこらえるように。こみ上げてくる何かを遮るように、雪那は世間話をする時の声色を喉から出した。

「禁を破るのは貴女で二人目よ。終さん」

「結構いるじゃない。笑ってほしいの？雪那」

「かもね」

『写シ』という名の絶対防壁を張った時が、勝負の時。

今、二人の剣士はそれを張った。

◇

——箒が摺り足で雪那の左側に移動する。

側面もしくはは後方に回り込んで攻撃するつもりだろう。剣士にとって左側は支え。そこを潰さんと相手は考えている。

左手で抜くかとも、雪那は思った。でもギリギリこちらにとつて足りない間合。つま

りは誘い。

箒はこちらの先手を待っている。

——させるものか。

では期待に応えてやろうと、雪那は右手で抜刀した。

腰を左に切りながら繰り出す横一文字の斬撃の初太刀を、対して箒は御刀をすぐさま振り下ろしていた。刀と刀をぶつける事で雪那の斬撃をとめ、しかも勢いそのままに相手の御刀を掬い上げるように振り上げて、無防備な雪那の左頸部を斬りに来る。

敵の攻撃を防いですかさず反撃。後の先の勝機である。

「……ッ！」

「!？」

しかしそれこそが雪那の誘いであった。

あらかじめ反撃を予想していた雪那は、足を一步踏み込み腰を地面へと落とすに落とし、まるで沈み込むように体重を下方に向かわせていた。

体重移動とは全身の力、エネルギーの移動。その力でもって鯉口を握る左手を勢いよく突き伸ばし、箒の左手、御刀を支える左手にブチ当てていた。

「……ッ!？」

一瞬、箒の剣が空中で完全に止まる。

雪那は無防備となった彼女の肺へ刃を突き入れようと力を込めた。後はそれだけで終わりであり、咄嗟に飛び退こうとしても無駄である。

すでに雪那は自身の鯉口から手を離し、箒の左手をしっかりと掴んでいる。身体を振じろうとも、この近間では刀刃の突きを避ける事は不可能。全ては終わる。雪那の勝利という形で。借りは返したという満足感で。

箒を真つ直ぐ見据えている雪那には見える筈だった。手を掴まれ行き場を失くし、空中に留まるしか出来ない無限の遠さにある箒の御刀が、

箒の御刀が、

刀は、

◆
———
何処だ？

終に抜かせるな。それは、古の刀使達の合言葉。

——頭を真つ向唐竹に斬られながら。雪那はそれを心底思い知る事となった。

工夫は刀使の特性・『写シ』である。

どのような攻撃であつても肩代わりし、自身には僅かな痛みしか与えないこれは、簞たち柀の劍士に天啓を与えていた。

——折神を守護し、いざとなれば大荒魂と刺し違える。それを為すには、守る為には我らは一度斬られた位で死んではならない。

攻撃は最大の防御なれば、絶対防壁たる『写シ』もまた最大の攻撃手段と心得よ。刀使は一度であれば殺されてもよい。それは自刃であつても同じ事である。

我が身を案じず攻撃を行う。

我らにとつて真の攻撃とはすなわち相手のみを害する事ではなく、こちらごと相手有害する事である。

自身の身体が刀の間合を、道筋を阻害するのなら、その身体ごと斬つて捨てる。簞は右手だけで刀を振り下ろし、自身の左手ごと雪那を唐竹に叩つ斬つていた。

『写シ』を行使する事が前提の刀使とはいえ、まさかそんな。こんな捨て身の方策を敢行するとは。……ありえない。雪那は驚愕の中で、そう思わざるを得なかつた。

いやしかし。だからこそなのか。

斬られて『写シ』が解けた雪那は、執念の塊のような剣を振るつた箒を見続ける。

『写シ』があるから大丈夫だなんて、刀使ならば誰しもが一度は口にするし思うだろう。だがそれを自分自身で失くす事など誰にか出来よう。

死中に活を求めるだの捨て身だの、そんな物この刀使の前では陳腐と映る。…為すべき事を必ず為す。それこそが柊が柊である故であり、今の雪那が負けた理由。

そう、彼女こそ折神紫の絶対防壁。柊の刀使は今までもこれからも、自身の意味と価値を刀に、折神に見出し続けるのだろう。きつとずっと、それが定めなのだろうと、雪那は悟った。

「……………気持ち悪いわ。貴女」

「何とでも。私の勝ちね」

歩き去る箒を尻目に、雪那は次こそはと息巻いたが、彼女と再戦する事は二度と無かった。箒自身が雪那との再戦を拒み続けたのもあるが、一番の理由は箒が刀使としての力を失ってしまったのが原因だった。

——鎌府に戻ったら、今度こそ勝つてやるんだから。

これから相模湾に向かう雪那の想いが果たされる事は二度と無く、その結末は別の形で表れる事となる。

そして暑い時期が訪れる。

9月、その化け物は相模湾岸より、突如として現れた。

第八話 placidus

巨大なタンカーを雪那は初めて目にしていた。

海路というものに今まで疎く、そして接点も体験も無い彼女のような人間にとって、船というものはとてつもなく巨大な鉄の塊である。

大小様々な荒魂を見てきた歴戦の刀使であっても、人類が作り上げた鉄塊はまるで大仏のようであり、言うなれば威厳とそれ相応の圧迫感があった。

——人間ってこんなもん作れるのねえ。

江ノ島ヨットハーバーから眺める雪那は、しかし気持ちを入れ替え綺麗にお辞儀する為に息を吸って、居住まいを正した。

「隊長。相模雪那です。現時刻をもつてこの083小隊に配属になりました。よろしく願います」

「へー、貴女相模さんっていうの。よろしく。そしてようこそ、我が小隊へ。これで人員は貴女を入れて6人になっちゃったわ」

「そう。幻のシックスマンってわけ」

「相模湾に相模さんが来るなんて。なんか面白くなってきたわね？」

「いえ別に。むしろ全然」

「ソークール！」

「そこは乗りなさいよ〜」

「あつはははははは！」

職権乱用。その言葉が雪那の頭の中を支配していた。

彼女を含め、ここにいる小隊6人は所属校も違ければ学年も違う。そう、折神の当主が権力でもって集めた私兵。そう断ずるに余りある。

「何考えてるか当ててあげましょうか」

「?はい?」

「こいつらはどんな粗相をして折神の当主様に命じられてここに来たんだらうな。そんなトコでしょ?」

「……まあ、はい」

雪那が頷くと、伍箇伝・綾小路の制服を着たチームメイトは薄く笑い始めた。

「まあ人生も人間も間違っても色々ってね。葵様は恐いお人よ? それが今言える範囲の精一杯」

「ま、今回だけのチームだろうけど。お互い上手くやりましょうね?」

「はい」

互いに自己紹介を終わらせると、小隊長が今回の任務の概要を説明し始めた。

「私達の今回の任務はあそこに見えるタンカーの監視任務よ。あの中には御刀とノロが山のように入ってる。

嚴重に分散して保管してあるらしいけど、いつ何時荒魂が現れてタンカーとその中身を襲つてグチャグチャにするか分からないわ。私達はそれを監視し、異常が起き次第殲滅、そして被害拡大を阻止する事。何か質問は?」

「何も起きなかつた場合は?」

「シャンパン（ノンアルコール）でお祝いよ」

「任務終了の目安は?」

「あのタンカーがこの国の領海を出るまで」

「りようかい」

「九月なんて真夏もいいところ。そして今夜は湿度がムシムシときてる! あ、湿度つてわかる? 空気のジメジメ度!! この任務、我々の肌にも健康にも悪いんでは?」

「仕事よ。冗談言つてないで割り切つて」

「はい」

「いつくらキツくても金になるからね。タダ働きはゴメンよ。貴女もご同様だと嬉しいわ、相模さん?」

「そうですね。私も同意見です」

雪那が努めて笑い、小隊5名が下卑に近い笑みを浮かべたその時である。

「……ん? 何これ」

「? どうしたの」

「今私がいた」

「ええ、そうね。私の眼の前にいる貴女が私を見つめてるわね。今ここで」

「違くてそうじゃなくて。デジユブよ」

「デジャブー?」

.....

「私が私を見つめてたのよ。錯覚かと思ったけど、もう一回みたら今度もまた」

「やばいじゃんそれドツペル? それ見たら死ぬやつじゃないのそれ?」

「落ち着きなよ、売れないホラーかっての」

「……………。どうやらそうみたいです」

「は?」

ふと横を雪那が見ると、そこには自分自身といって間違いないだろう人物が彼女を見

ていた。あちらの彼女もご同様なのか、こちらを見てはびつくりしている。

「あれ、私もだ……。私が私を見てる」

「何で？何で？」

「待った。これってもしかして私達の『写シ』じゃ、」

「龍だ！赤い龍だ！」

「ちよつと今度は何言ってるの!？」

デジャブを最初に見たチームメイトの一人が、今度は空中を凝視しながら叫ぶ。その迫真さはもしそれが演技だと言われたら問答無用でレッドカーペットを歩かせて、見事表彰ものであるだろう。それほど真に迫っていた。

「怪獣王VS古代悪魔の冒頭部分でしょそれ。アンタ細かすぎて伝わらないモノマネ選手権に出てみない？」

「首都防衛移動要塞呼んでこなくちゃダメじゃないの。それも三号機を」

「……………違います。恐らくはこれは『明眼』」

よく分からない軽口をスルーしながら雪那はそう言うのと、遠くのタンカーを見やりながら鯉口を切り『迅移』を発動。第一を通り越した。

「明眼？」

「普通じゃ見えないものが見える。刀使の能力よ。使える人初めて見たけど」

「てことはこの子にしか見えない何かがあるってこと？」
「そうらしいわね…」

「総員抜刀」

隊長がそう言う前に、雪那は第3段階の迅移を発動した。今までは第2までが限界であつた筈だが、今何が彼女に味方しているのか御刀である妙法村正が、一際キラリと光を放っている。そして雪那は、

——いや、雪那も見た。

「あれは!!」

それはおよそ、どのような物とも無機物とも似つかない異形だつた。

分かるのは二対四枚ある翼で身を覆い、二本の腕が胸前で生まれ、最たる異形の四つ首が天を仰いでいる事。

『明眼』のチームメイトの刀使と雪那は息を呑んだ。

文献にも伝聞にも見た事も聞いた事もない、眼前の怪物の姿に。巨大に過ぎるその凶体。

ゆつくりと。八つの眼玉を覆う目蓋が開かれ、こちらを睥睨するその眼光に。

『写シ』!!!

隊長の声が聞こえたと同時に。化け物は組まれていた筈の左手を空に掲げた。すると

雪那達の視界が瞬時に赤く光り、この世の全ての音が消えた。

雷を落としたのだと理解が及ぶ時には、彼女達の『写シ』の全てが剥がれていた。

斬撃でも打撃でもない。爆発という名のエネルギーの衝突、衝撃が彼女達の全身を粉々にしたのだ。

「&#####」

叫びにも似た滅びにも似た何かの喚声。それがやつと脳に届くと、雪那は眼をゆつくりと開け始める事が可能になった。

「…な、…何が…？」

理解と言う名の納得と対処を自身に行う為、雪那は眼前の光景を心の中で説明し始める。

それが一種の洗脳と自己暗示である事は戦士の中では珍しくない通例である。

翼を広げた巨大な竜が咆哮しながら空を飛んでいる。

…竜としか形容できる語彙がない自身に辟易とするが、それ以外ならば何と説明したものかとの頭の片隅で考える位には余裕が戻ってきている。

雪那は『写シ』を張り直し、小隊とタンカーの安否を確認した。

「——ちよつと。何よこれ…」

タンカーはものの見事に崩壊転覆し、周囲は赤い稲妻が地と空を駆けずり回るように

迸っていて、港は荒魂で溢れていた。小隊は隊長を含め5名が現在意識不明。『写シ』がなければ身体すら残らなかつただろう。

あのタイミングで命令が出来、そして即時に従ったチームメイトを雪那は言葉に出さずに称賛した。流石刀使だ。

「つて私も刀使よ」

『八幡力』を使ってチーム全員を担いで物陰に移動させる。この場で動ける刀使は自分しかない。今、この島の民間人を荒魂から守る事が出来るのは自分だけ。退けば老いるぞ臆せば死ぬぞアイツに勝つぞ。

手に持つ御刀を一瞬強く握りしめ、使命感と目的を再度胸に灯し、彼女は仲間と自分に言った。

「救援を呼んできます。それまでご無事で」

『迅移』を発動する。上を見上げる。

竜のような何かと眼と眼が合う前に、雪那は視線を真っ直ぐ前に向け刀を振るう。「生きて立ち合ってもらおうよ。もう一度」

時間という名の空を裂く妙法村正の刃が、彼女の相模湾岸大災厄の狼煙だった。



「相模湾岸に荒魂多数現出。かなりの数との報告」

「かなりじや分かりません。再度精密な報告を要請」

「了解」

「関東一円にも近年稀に見る数の荒魂が現出。相模湾に現れた大荒魂に呼応しての反応
と思われれます」

「再度精密な報告を要請。数とタイプ、規模を入念に。でなければ救援を出せません。
現場はそれを今待っています」

「了解」

「葵様。相模湾岸の被害は甚大です。加えて荒魂の発生規模。座視していればこの国全
体が荒魂に吞まれてしまいます」

「……………」

「相模湾岸にいる刀使及び民間人の救援と救助を大至急。美濃関と鎌府には既に援護要
請及び総出撃命令を出しています。」

加えてこれらの状況を鑑みるに、大荒魂を討滅しなければ荒魂の現出を抑える事は不

可能と愚考致します」

「私が出ます」

「駄目よ」

当代折神家当主親衛隊・燕結唯は言い放ちながら背中を向け、歩こうとした瞬間を葵に呼び止められていた。

——理解に苦しむな。結唯は思った。

「…現在大荒魂は藤沢市に上陸北上、侵攻を開始しています。現場は頑張っていますが、このままでは鵜沼はおろか藤沢駅すら壊滅の憂き目に合う可能性大。全て人口密集地です。」

現地の刀使達ではヤツを斬り祓う事は困難と判断。だから私が出ると申し上げているのですか？」

「貴女でも無理よ。防衛線を構築なさい。境川橋を第一、石上駅を第二防衛ラインとし、刀使部隊は鎌府を中心に形成。合わせて第3段階以上の迅移が出来る刀使のみを招集し、藤沢市役所に結集なさい。足りなければ平城と綾小路に救援要請。」

——私はこれより出撃し、藤沢駅で指揮を執ります。そこが最終防衛ラインよ」

「……………」

当主が現場に出るなんて正気の沙汰ではない。しかし結唯はその言葉を胸の内にし

まって、ゆっくりともう一人の親衛隊員を見た。了解と、いつも通り答える同僚がそこにはいた。

「ここを突破されれば大荒魂は国道一号線に到達。被害は更に拡大するわ。その前に何としてでも、ヤツを討つ」

「……………」

「それじゃあ不満？クロクロ」

結唯は細めている眼光を瞼を使って力づくで閉じ、刀使として最年長である自分の立場を自覚した。

「ないです。先程おっしゃられた作戦内容を、鎌府学長に助言として伝達します。その後我々は藤沢駅へ」

「葵様、行きましよう」

もう一人の親衛隊・綿貫和絵は鋭い視線と言葉で当主に先を促した。しかし当の葵は、何故か動かずに手で顔を覆っていた。

「……………葵様？」

「40年前のあの日。こんな風に母は動いていた」

「？」

「母は方々に連絡し、でも全ての防衛ラインは突破され、最後にあの人へ何かを伝えて

た。そして大荒魂は、…大古竜はあの人と共に何処かへ消えた」

独り言だ。和絵と結唯はあえて黙った。見覚えのあるこれは戦士の通例である。

「あの時は首都に大古竜の侵入を許した。我ら刀使の防護が破れた歴史上唯一の事例は、あの時だけにする。——すべきなのよ」

指の間から見える彼女の瞳の色と光は。

和絵の錯覚でなければそれは歓喜と昏い殺意と、そして復讐の色で塗りたくられていた。

「往くわよ結唯、和絵」

「了解」

——だからこそ。我々がこの人を護る。

刀使として最後となる戦場へと、この国で最も強い集団は進んでいった。



「やあ、貴女は刀使さんだね？」

「ええそうよ。民間人は手早く避難なさい」

「いやあ、それがね、避難先が無くなっちゃってね。どうしたもんかと」

「……。ご家族の方は？」

「ああ、勘違いしないで下さいよ？家族は厚木に住んでて、僕は独り今日観光でここに来たんだ。」

大学生になって初めての夏休みだから、江の島で軽く誰か引っかけようと思つたのに鳴かず飛ばず。それでこのザマってわけ。いやあ、世の中って予想以上にキツツイね」

「あつそ。じゃあグッドラックね」

「ああちよつと！おいてかないでくれ淋しいじゃないか！」

四つ首竜の荒魂は怪獣のように上陸し、北上し続けている。今頃は鵜沼辺りにいるだろう。

幸いにも江の島大橋は無事で、雪那は偶々そこを通る一台のバスを体を張って呼び止める事が出来ていた。それで何とか小隊の刀使と民間人を乗せてここから避難させる事は出来たが、大々的な救援はすぐには来ないだろう。海路も空路も荒魂がうじゃうじゃ居る為絶望的。バスや車を通る気配もない。

自分はまだ元気なので、生き残つた民間人を搜索しここから避難させる事が刀使としての急務である。

雪那は当面の食糧を調達しながら生存者を探していた。

「刀使さん程強くないけど僕だつて男だ。足も腕もまだ元気に動く。ヤバイ誰かを助けようと思つてここらを歩いていたんだけど・・・。どうやら誰もいなくてね」

「・・・そう」

「ちよつと鬱になつてきた所で刀使さんに会えるなんてさ。僕つてちよつと幸運と不運の差が激しすぎやしないかな？

せめて自分で出し入れをさせてくれよつて死んだら神様仏様に言うつもり」

若干ハイ気味に男はまくし立てた。無理もないが。

「とりあえずは落ち着いてこれでも食べてなさい。腹が減つてると何もかも上手くいかないわよ?」

「ありがとう!」

「ゆつくり、少しずつよ」

「・・・モグモグ。あ、これは言うとお腹が膨れてハッピーになる魔法の言葉ね。ところで君つて年下?ちなみに僕は19歳の大学生」

「女性に歳を訊くわけ?」

「ああ、ごめん失礼。撤回するよ。僕は高津つてんだ。名前なら訊いてもいいだろ?」

.....

「相模よ。鎌府刀使衆の、相模」

「相模湾の刀使の相模さんか！いや待ってホントに？あ、これってやっぱり運命じゃないかなあ!？」

「こんな運命別に要らないわね」

変な連れ合いが出来てしまった。

電光雷轟めまぐるしい地獄の雷のような世界の只中で、雪那は思ったのだった。

第九話 刃達の最終防衛ライン

総勢33名。歴戦の刀使たちが、ここでは陣を敷いていた。くの字を描いた鶴翼の陣形外側20名がフロントライン兼ディフェンスライン担当であり、10名がちよつと中側遊撃担当である。

そして真ん中中央、背に藤沢駅を背負い堅く守るのは、現特別祭祀機動隊最高戦力、折神家当主と2人の折神家当主親衛隊。

「兵站線の確保は？」

「問題ありません。近付く荒魂は一匹残らず討滅しているとの報告あり。ご指示通り紫様と篝、そして藤原さんを第一兵站線に配備しております」

「国道一号線を中心とした第一兵站線は十全に機能中。辻堂駅と大船駅の第二・第三兵站拠点と各ラインも問題なしとの報告が届いています。全防衛ラインへの衣食と医療の供給も問題なし。後は、」

「——アイツを斬るだけね」

ここまで届くほどの大きな音を鳴らしながら。地を踏みしめ家々を破壊する四つ首の大荒魂を見つめ、各戦線からの報告に折神葵は辟易としていた。

「葵様、燕様、綿貫様。第一防衛ラインから残存戦力の撤収が完了。第三兵站拠点まで後退します。」

加えて第二防衛ラインから残存戦力の撤収及び死傷者の回収完了。第一兵站線まで後退の後、伍箇伝へと護送致します」

「了解。後は任せよと伝えなさい」

死ぬ者と生きる者、刀を使う者と壊す者と守る者。

古来より刀使は荒魂という異形と戦う戦士であり、それは例えるなら生と死の境界線を行き来する事でもある。そして、それら全ての結果を受け止める事は自身の責務だと葵は思っている。

……ずっと見てきた。その経験が、彼女を折神に相応しい資質にしたのだとしても。今、彼女は折神の王だった。

「——ああ、それと」

「? はい」

「折神葵が感謝していたと。皆に伝えて」

「——了解」

この場に最後まで残っていた管制担当は、少し息を飲んでから頷いた。

「だから最初から私を行かせておけばよかったですよ」

「燕さん……」

「和絵も分かっているでしょ？この事態が」

氣を癩しながら。葵の左側の椅子に座っている刀使が前方を睨みつけていた。

「……………はい」

「第一・第二防衛ラインは双方壊滅。現段階で殉職した刀使の数は100を超えていません、葵様。

分かりますか？これではあの大荒魂を討伐できようと出来なかつたら、これから刀使の数は減る一方だという事です。御刀を返納する元刀使でこの国は溢れるでしょうし、刀使になろうと思う者すら減るでしょう。

刀使は一気に減ってはならないのです。1人2人の殉職ならば、氣を付けようかな？みたいな心構えで大抵の人間はすみますが、10人100人規模であればどんな馬鹿でも危機感を覚えます。私明日死ぬんじゃないか？という今更な危機感を。刀使を頑張ろうと考えている段階の者にとって、それは致命的ですよ。葵様」

「……………」

……………。

「私や和絵といったその段階を超えた刀使達のみを戦線に向かわせておけばよかったです。しかもあの藤原を兵站線に、後方に配置するなんて。部下の命を何だと思ってるんです？まさか葵様、最初から第一と第二は捨てるおつもりでしたか？」

「捨てる筈ないでしょう。ただ私は私の出来る最善を尽くしただけです。報告ご苦労様、下がっていいわよ？」

「・・・了解」

行き場のない管制担当官はこれから戦場になるこの地を後にする前に深くお辞儀と、最敬礼でもって応じた。

これが今生の別れになるのか。何故だ。とは今更思わないよう彼は努力し、ただこの戦場に集った戦士達を忘れないよう心に留めた。共に戦場に立てずとも、烏漕がましくとも、それが最期の礼儀だと思ったからだ。

事実、彼はこの戦いで死んだ刀使達（戦友）を忘れることはなかったし、それは後に彼の苗字が変わっても失する事は無かった。

「葵様、綿貫様、——燕様。御武運を」

「はいよろしくどうぞ」

「刀使以外避難完了。では葵様。皆に御下知を」

「ええ」

葵は静かに立ち上がり息を吸い、順番に32名の部下を見た。内心では不安な者、奮い立っている者、諦めてなるものかと殺意に溢れている者達がここにはいた。

「皆には詫びなければならぬわね。もう二度と大荒魂をこの国には発生させない。それが私の、：40年前の戦いを知る者にとつての願いであり誓いだつた。それを反故にした事、折神の当主として深く謝罪します」

深々と頭を下げる当代の王に、集う刀使達は不快感を抱かなかつた。これから戦うというのに、今更詫びて何になる。そう思つた者も一人としていなかった。親衛隊である結唯も含めて。何故ならば、

「——けれど」

後は斬り合うだけだからだ。

「今、私達はここにいる。貴女達をこの国最強の刀使集団だと信じて疑わない私と、名実ともに最強の刀使である貴女達。今夜、我々が負ける事はないと、敗因も皆無と、私は断言するわ」

.....。

「40年前、私はまだ5歳で、御刀はおろか刀使とは何かすら分かつていなかった。そんな私が、今もこうして刀を使っている事、すなわちここに集つてくれた貴女達と共に肩を並べて戦える事を誇りに思うわ。ありがとう、皆。ここに来てくれて」

.....

「昔人は言った。死を懇願した時、勝敗は決まる。

でも我々にとつての勝敗とは何？この身体が写シごと砕かれ只のタンパク質の塊になる事？荒魂を倒す事？

いいえ、違うわ。私達の後ろに敵を通すことよ。私達の後ろに、何も通さない事よ」
.....

「ここを護るわよ。皆。ここが最後。ここが最後の正念場。たとえこの御刀が砕けようとも、私達が時の最果てに辿り着いて誰も憶えてしまわなくなっても。私は、私達は忘れない。

刀使たちよ、抜刀。あの化け物にとことん思い知らせてやりましょう。ここが何処で、私達が一体何処の誰かってね！」

「応!!」

刀使達の咆哮と抜刀と同時に。今は肉眼ではつきりと見える大荒魂が翼を広げ、空へと飛んだ。偶々そうなったのだろうが、人間の眼から見てその行動は逃げを打った様に思え、堪忍袋の緒を斬りながらイの一番にその翼目掛けて一人の刀使が跳躍。空中で第3段階迅移へと移行し、八幡力を全開にして斬りつけた。

「逃がすなッ!!」

「燕さんが撃ち落とした!」

「はっや! まるで弾丸!!!」

「絶対包囲!! (キルゼムオール)」

「あの四つ首全部斬り落とせ!!!」

「応!!!」

刀使達の最終防衛ラインの火蓋が、ついに切られた瞬間であった。



「……始まったみたいね」

「何故私達が後方、兵站拠点の防衛なのでしょいか……。第3段階の迅移が出来る者は悉く防衛ラインに配置の筈。それが出来る者は、ここに3名もいます……」

「折神家当主の命令よ。準じなさい、箒」

「ですが!」

「あそこで戦っている刀使や各戦線は、私達を守る補給を待っている。刀使だろうと何だろうと人間は疲労するし、お腹も減るし喉も渇く。でもずっと戦えるのは、少し下があれば腹が膨れる御馳走がちゃんとあるからよ」

「そうそう。紫の言う通り」

「美奈都先輩まで……」

「兵站って、最後の晩餐になるかもしれない物を運び続ける仕事なんだよ、箒。だから私達も頑張ろ？ 紫もね」

「ええ勿論。ここは命に代えても絶対死守よ。……でもそういえば、雪那はどこに配属になったのかしら。どの兵站拠点にも配置されてないみたいよね？」

「？ そう言えばそうだね。鎌府の全刀使は緊急出撃命令が出て、当面の配置表も貰ったけど、雪那の名前は無かった」

「あそこです」

「え？」

「きつとまだ。江の島です」

後に彼女達が行く事となるその場所へ、箒は視線を投げていた。



「——うおおおおお?!?! 荒魂でいっぱいだよ相模さん俺どうしたらいい!?!」

「黙って頭も尻も隠して伏せてなさい!! 全部今ツ斬っておくからッ!」

「こりやあ凄い！いや凄いなんてモンじゃない素晴らしい！！ねえ、僕がもし官僚になったらさ！刀使さん達の給料と待遇を更に上げる事を約束するよ！」

「期待しないでおくわッ」

斬つた張つたの大立ち回りを江の島で繰り広げる雪那は、迫り来る荒魂を全て斬つていた。生存者を探す為に変な荷物（高津だよ！）と一緒にぐるりと島を回りながらの行動であつたが、途中幾人かの生存者を見つける事に雪那は成功。現在は大橋へと向かつていた。

「…食糧は現地調達しか出来なくて申し訳ありませんが、皆さんにお渡し出来る物はもうこれで全てです。一先ずはこのまま前進、未だ無事な大橋を渡つて、皆さんを片瀬江ノ島駅までお送りします」

「かたじけない。刀使さんは？」

「そうです、貴女は？」

「私は隊に合流。次の指示を仰ぎます」

「ありがとうございます、刀使さん」

「礼は要りません。刀使ですから」

雪那は生存者たちを真つ直ぐ見つめて言った。その瞳はほんの少し嬉しさが含まれていたが、まだこの江の島に生存者がいるのではないか気が気でなく、しかし自分一人

ではこれ以上の搜索は不可能だという冷徹な理性が、彼女に言葉を選ばせていた。

「では渡りましょう。私が先導します。出来る限り急ぎで」

「はい!!」

「……………」

「？」

「……………」

……………。

「……ちよつと何？私の顔に変な物でもついている？だとしたら拭いてる暇もないからほつ
といて頂戴」

「！ああごめん。ちよつとね」

「？」

男は雪那にだけ聞こえる位の小声で話した。

「なあ相模さん。君はこの後あの竜とやり合うのか？」

「命令があればそうするわ」

「それが刀使だから？」

「ええ、それが刀使だから」

「……………そっか」

.....。

「カツコいいんだね。刀使さんって」

「お金貰ってるからね。それなりにしないと、税金泥棒でしょ?」

「ハハ、——そうか」

おっと、と。雪那に見惚れていた男は気を引き締めた。

——落ち着け、映画だったらこれじゃあ次の瞬間化け物に襲われて死ぬ役目になってしまうぞ。古今東西、こんな時にこんな気持ちでいる奴は主人公やヒロインの為に命を捧げちまう可哀そうなキャラだって決まってるんだ。勿論ここは現実だけど、万が一があるからな。

そう思えた事は男にとってラッキーではあったが、それ故に不幸でもあった。

「?.....?」

男が首を傾げる。雪那は気付かない。前後左右と生存者達に視線と気を配っているから。

護る者ではなく護られる者だけが気付ける、微かな臭いと視線に。

「——?」

海面に眼をやる。小波が、水面が、異常なんて無い筈なのに何かの腕が見えてそこには、

第十話 IN MY SPIRIT, WARRIORS

前編

攻撃と防衛はどちら側が有利かという問いが、しばしば巷では繰り広げられるという。

守るという意志と攻め落とすという意志。通さぬという理想と、攻略するという智暴。

どちらも押し通すには心的な意味でも圧倒的な力が必要な事は言うまでもなく、力押しで双方片が付くのなら畢竟、戦う者の数が多い方が勝利できるという結論で話は終わる。

「おむすびです」

「ああ、ありがとう」

しかし歴史を振り返り紐解いてみても、数が多かったのに負けた戦いとは往々にして在り、数の上では33対1という数的優位である彼女達人間は、にもかかわらず劣勢只

中で歯を食いしばっていた。

「……。戦況は芳しくありませんか」

「うん、中々やるわアイツ。脱落はこつちボチボチ出てきてるけど、あの首一つも斬り落とせてない」

「味噌汁です」

「ありがと。うん、身体が生き返る。やっぱり戦いには塩とおにぎりよね！」

「——おむすびです」

「え。ア、ハイ」

藤沢駅北面出入口。ここは第一兵站ラインの終端。最前線に一番近い補給基地である。

「よし、行くか」

「武運長久を」

「うん！」

元氣を取り戻した刀使が戦場に向かう。

ここでは戦闘で疲労した人間達が休息を取っており、ボロボロになった衣服を着替える事、そして『写シ』を破られすぎた事による心的消耗を休ませている。

中でも最も英氣が養われるのは、手軽にすぐさま美味しい物を食べられるという事で

あった。

「お茶頂戴」

「パンないの？あんパン」

「ご無事で何より。各種あります」

「ありがとうございます！」

「ああ、生きてるなあ、私達」

「当たり前です。あまり不吉な事は止してください」

「ふふ、でもさ。さっきの見たらねえ？」

「うんうん」

「……？」

新たに訪れたボロボロの制服を着た刀使達が笑いながら、各々食べ物を手を取った。着替えはその後である。

「さっき親衛隊の綿貫さんがさ、今も叫んでるそのクソ大荒魂に右半身を喰われたんだけどね？その時咄嗟に御刀を左手に持ち替えてさ！いやあ流石だったわ」

「御刀ごと喰われたら全身の『写シ』が強制的に剥がされるから、それを阻止したわけよ。あとは何食わぬ顔で『写シ』を張りなおしてさ！ほら、私達（刀使）って御刀を媒介にして色々やってるわけじゃない？」

「ええ」

「つまり御刀を握り続けていられば、私達って大丈夫なのよ。ずっと戦い続けてられるのよ！」

興奮しながら言う彼女達だが、その眼光は些かも狂気に濡れてなどいなかった。それは使命感と、そしてこうして一安心しながら飯を食べられる事による余裕がそうさせている。ほんの一時でも。

「皆さん流石ですね。しかし、『写シ』を張れる回数には限度があります」

「私あと一回だわ」

「私はあと二回」

「やるう！　じゃあはいコレ」

「なにこれ？」

「私お気に入りのハンカチ。汚れるとあれだから、持つといて」

「はいよ」

「——皆さん、武運長久を」

「ありがとう！」

「サンキュ。……でもなあ、」

「？」

「うん。でもだよねえ……」

——心身の限界なのか。それを見極め後退させる事も、この場所に居る第一兵站ライオン担当美濃関刀使・皐月の仕事でもある。

なので彼女は少し身を乗り出した。

「如何なさいましたか？」

「ねえ皐月さん。ここでの戦いとか私達とした話、墓場まで持つてつてくれる自信ある？」

「……………」

頷く。眼を逸らさず強く。そして彼女達は、笑つて言った。

「私達さ、実はさ、」

「はい」

「——楽しいのよ」

「は——い?」

「ひたすらデカくて強くて凄く大荒魂と只戦い続ける。一般人や誰かが見ているわけでもない、遠慮も何も必要ない——っ!」

「行儀のいい振りしなくていい!!」

「私達皆、生きてるよね!!!」

「……………」

生の実感という名の喜びの感情がそこには詰まっていた。これをずっと待っていたんだと、心のどこかで。

…だってこんな経験誰が出来た？過去現在未来、我ら刀使は湧いて出る荒魂を刈って刈って、或いは死に或いは今日を生きる。そんなの作業のような毎日だ。それが刀使（私達）だった。

でも今日は違う。今日だけは違う。

刀使としてだけでなく強大なるモノに立ち向かう戦士として、我らは今生きている。それは昏くもなく明るくもない、——シンプルなやる気||闘争心なんだと、皐月は聞いたのだった。

「——てなわけで。これは生涯オフレコでよろしく」

「こんなイかれた刀使達なんて、私達だけでいいのよ金輪際」

「絶対にこの先の後輩達にはこんな想いは味わわせない。味わっちゃいけないの。だからアイツは絶対に討滅する」

「……………了解しました」

皐月は頷いた。そして心の奥底にここでの会話をしまい込み、それは後に生まれる彼女の娘にも話す事はなかった。

「この話は私達だけの口伝（スターダストメモリー）。この世の何処にも残らない記録と記憶。なのでどうかまたお聞かせを。きつと、老後の華となりますように」

「まっかせて!!」

どうか笑って話せるといいなと、希望と願望も。皐月は胸にしまい込んだ。



——怪物が吠える。戦場は、咆哮で埋め尽くされていた。

「堅いなあッ!!!」

『『八幡力』第5まで出来る奴ッ！私と斬り込め!!!左端の首に一点集中!!!』

「了解!!」

「&&&&&&&&&B&&&&」

四つ首の荒魂と人間が吠えに吠え、雄叫び、丁か半か。一秒先の命の結果をどちらに手繰り寄せれるか、力と運をせめぎ合う。

赤い雷が戦場所狭しと吹き荒れる鉄火場にずっと、刀使達はいた。

『『写シ』が張れなくなった奴は後退！後方で飯でも食ってこいッ!!!』

「申し訳ありません燕さん!!!」

声すら上げられないのか、化け物は無言で意のままにされていた。

「流石ですね燕さん。貴女の家伝の剣法、…何流でしたか？」

「名前なんてないわ。只の剣法それだけよ」

「そうでしたか」

「そして流石でも何でもないわ和絵。まだ全然極めてもないし、もつともつと先があるんだって分かってるけど、多分私はそこに至れないし」

ザクザクと刺され拘束され始めている敵に残心を示し、結唯は自身の不甲斐なさを語っていた。

「……それは、この剣は未完だと？」

「私にはね。何故だかそれが分かるのよ」

「……………」

……………。

「私には無理だろうけどさ、きつと私の娘が、もしくは孫が。きつとこの剣を極めてくれるわ。無敵に近付かせてくれると信じてる。…所詮は皮算用だけど」

「……………」

和絵は笑わなかった。

「私の娘は刀使になってさ、そして歴代最強の刀使にだってなってくれるのよ。いつか

「——皆無事？」

活力が漲ってきた劍士達の前に、右手左手に御刀を持った劍豪が声を掛けながら、倒れている大荒魂の眼前にまでやって来る。その手に握るは天下五劍。折神家伝家の宝刀である。

「大事ありません。しかし久方ぶりに見ますね葵様。貴女が大典太と鬼丸を持ち出す姿は」

「私の愛刀よ？『写シ』も張れるしまだまだ私も現役つてわけ。…ざつと見て来たけど被害は？」

「……先程5人やられました。現在は御刀と共に第一兵站拠点へと退避させています」

「——そう。分かった、じゃああとはコイツの首を全部叩つ斬つて——」

「！…葵様！」

その時、大荒魂の首が一つ、鎌首をもたげるように動いて葵達を見詰め始めた。その姿はまるで介錯を待つ人間のようだが、罨である事は百も承知だとこの場にいる刀使達は思つて、御刀を再度強く突き入れる。

「どう？刀使は強いでしょう？大荒魂」

「 F F F F F F F F」

「刀使として我々は貴様を祓う。神妙にしていなさい」

「 F F F F ~ L U B S & 」

くぐもった声が、戦場に木霊する。

「葵様、止めを。もう首はこれ一つしかありません」

「そう。ではさようならね、大荒魂」

葵は天下の二刀を振りかぶり、残った最後の首へと斬り付けた。すると断末魔が、い

や、断面から、

「 F F F F 」

「 # F F F 」

一際大きく、

「 は は は は 」

「 は は は は 」

「 あ は は は 」 「 あ は は は 」

聞こえて――、

「葵様!!!」

「!?」

それは山が震えるように。波が逆巻くように。空が軋むように響いた。

「人間が先を見るな」 「こうなるぞ？」

その場の刀使達が瞬きすらしていない刹那、葵は両腕を綺麗に噛み砕かれていた。

「総員——!!」

それを見て、和絵が叫ぶ。

「判断はわるくない」「よくもない」

「回避——!!」

「きさまらはさも当然のようにあちらの自分をこちらに呼ぶな？」「われにはそれが出来ない？」

御刀ごと奪われた葵の腕は当然『写シ』の身である。だから血が噴水のように吹き出す事も出血によるシヨックも当然彼女には起こりえないし、今もこうして最初からなにも無かったかのように二本の腕が身体から生えている。

そう、眼の前に信じがたい事が発生しようとも、『写シ』はそれら全てを無に帰す万能の絶対防壁。それは穩世の力であり、それを引き出す刀使だけの力だと。

「首が全部……………まさか最初からコイツ『写シ』を？」

彼女達は、思っていた。

「……………」

「葵様！お退きをッ!!」

この世に現れ出でた大荒魂はそれを当たり前のように行使して。只眼前に声と腕を

振るい、またも赤い雷を落とし始めていた。

「折神葵。刀使ども」「貴様らの無能さ」「才無き身を」「悔やむがいい」
元通りとなった四つの首から咆哮と声と火炎が噴き出され、最終防衛ラインは正に地獄の業火の真つ只中へと化した。

火は地面を焼き、咆哮は残った建物と耳を砕き、雷は刀使の御刀へと落下する。

「うわああああ!!」

『写シ』が剥がれた者は退避！他の者はカバーしろ!!」

「葵様、貴女もお早く！御刀が無くなった刀使に戦場は無理です！」

「……………」

「葵様ッ!!」

葵は呆然と、ただ一点を見詰めている。声掛けには反応がない。

——無理もない、と。和絵は目を伏せた。

長く刀と武に身を置いてきた者ほど、それらが發揮できなくなればショックが殊更大きい。…今まで鍛え続けてきた己との決別。それはもう戻れない、過去への追憶でもある。

また頑張ろうという時間は無い。余裕もない。——何故？そんな絶望が、この当代の当主である彼女にも。いや、彼女だからこそなのか。

「我を起こした責任を果たせ折神」「40年前のようにな」

刀使の中で最も長く現役でいられた彼女だからこそ――、

「黙れ」

その時。万力のようにぐしやりと。この場における最高齢の剣士は地面を指で握り潰していた。剛力を旨とする、折神の武である。

当代当主は口調と声をガラリと変えて、いや戻して、部下に言った。

「和絵。私の大典太と鬼丸は喰われた。そうだな?」

「は。……はいッ」

「刀使は御刀がなければ戦えない。無用の長物。そうだな?」

反射的速度でもう一度肯定する和絵が、葵の瞳を見る。ただ独りの猛き剣士がそこには居た。

「皐月!!!」

「こちらに」

……いつの間。和絵は耳だけで感知した。素早く恭しく二振りの御刀を、一人の刀使が葵に手渡すその様を。

「数珠丸。そして三日月宗近にございます」

「負傷者を率いる。退避行動をとれ」

「了解」

そうして漆黒色の声がゴミ、と。真っ直ぐに大荒魂目掛けて発された。

「お前らは不純物の集まりだ。しかも不純物の中の不純物（ノロ）。ソレが一端に、人の言語を吐くな。耳障りだ」

「ほう」「それは面映ゆい」「よく見た光景だ」「……………」

大荒魂は阿呆を見たように喋っている。それに対し、葵は独り呟いた。

「本当に、お前らはこちらの思惑を無視していく。あつちで起きていればよかつたものを。——（ここは通さん）」

「戦えますか？葵様？」

「無論だ。結唯、和絵、お前たちは手負いの刀使達を連れて第一兵站拠点まで後退しろ。

（ここは私と未だ無事な者達だけでいい）」

「いつから趣味が自殺になつたので？」

「コイツはもう『写シ』を張れない筈だ。だからもう一度首を全て斬れば、我々の勝利。そして私は元から多趣味だ。さっさと行け」

「『写シ』を張れないのは貴女も同じ筈。気付いていないとでも？」

「臯月さん。皆をよろしく」

長く続く疲労と攻撃により、『写シ』を張れなくなつた刀使達はしかし背中だけを負傷

者に向けていた。元より退く気などない。決意と意地がそこには浮かんでいる。

「……………」 葵様は、

「私に退く場所などとうにない。母が穩世に消えたあの時から」

葵は本心を言った。

「刹那主義的だな」「ヒトはいつも」「尽きることなく」「厭きもしない」

「——武運長久を」

「お前こそ」

まだ戦える者達が御刀を構える。減りも減ったり総勢8名。闘志と笑みを全身に張り付けて。

最期の戦場に臨む戦士達に、皐月達は丁寧にお辞儀した。



「挟みこめ!!」

「おお!!!」

「痛っ! 足千切れた!!」

「『写シ』張りなおせ!!! 出来るか!？」

「出来てるよ!!アハハハハハハ!!」

「大荒魂が消えた?!?!」

『『迅移』か『明眼』を使えッ!!』

「第3!?!」

「うわつと!いつて!!当たり前だろ!!」

「アツハハハハハハ!こんツツの!!ズルいなそれえ!!」

「見えたり消えたり失せたり出たり!本当荒魂つて非常識!!」

「かかって来いよオラア!!」

「首を捕らえました!!」

「ウらああああ!!!千切れろ!!!」

「よっしやもう一本行くぞオオオ!!!」

戦場に響きわたる鬨の声。誰に聞かれるわけもなく、誰を気にする事もない。そこには戦士がいて、戦士が活躍する場があって、そして何より感情と意志がある。

楽しいと、もういと、永遠にと、終われと。これが私の生きた道と。軌跡がそこには確かにあり、そして気付けば誰もが忘れて星屑のように消えて往く。

「どうだ大荒魂アあああ!!!」

「これが人間だあああ!!!」

生き死にの間を、劍戟のように行つては帰り行つては帰らず。誰の声だったかも知りえずに、でも確かにそこに居たんだと。それが彼女達の最も苛烈な記憶だと、誰にも知られずただ流れる。

大荒魂は息を吐いた。炎と共に。

「よく分からんな」「人間は」「今も昔も」「……………」

——付き合つてられん。

大荒魂は最後にそう言つて、冥途の土産にと一人の刀使を喰らう為大きく牙を剥き、口を開いた。

女はそれを待っていた。

「帯電放電流電雷電」

何言かを呟く、もう『写シ』を張れない一人の戦士。

葵は息を止め、瞬時に地を蹴り化け物の口と牙城へと二刀を振り下ろしていた。——絶対にここで斬り殺す。それしか頭にはなかった。

当主が腕ごと喰われたにも関わらず、周りの刀使達は攻撃を緩めも止めもしない。——物を考える段階を過ぎ去ったか蛮人が、と。噛みついた首の一つは思った。

「最期に何か言い残す事はあるか」「老人」

「来い」

そのままの姿勢で睨み、言う。まだだと。いざと。

冷徹な殺意に活き活きとした視線は真つ直ぐ敵を捉えて、禍々しい竜（荒魂）の眼差しから眼光逸らさず鋭く睨み合う。

「来い。まだ終わつてはいない」

——執念と怨念を、波濤のように。その思いだけが葵を生かし続けていた。

「では終われ」「砕け」「……いや待て」

「来い」

「どうした」「動かぬ」

「来い」

「死にぞこないの」「意地か」

「来い」

「ではその全身」「裂いてやろう」

如何なる原理だろう、大荒魂の首はピクリとも動かない。

葵は息を止めたまま『八幡力』を全開にし、全身の筋肉という筋肉を膨張硬直。竜の牙と顎を押さえ込んでいた。

ズブリズブリと緩やかに、しかし確実に切断という結果に進んでいる二本の御刀（折神の御佩刀）は、化け物の首から突き出ている。

——このままでは斬られるやも。そう思つて爪に雷を纏わせながら、大荒魂は葵を引
き裂こうとする。

「!?」

「来い」

「おオオオオオオ!!!」

その時、刀使の絶叫が。斬り下ろしと斬り上げ。一瞬二連の斬撃が、葵に噛みつく大
荒魂の首へと直撃した。

「刀使ども、が!」 「!?」

「フツツ!!!」

合わせて今度は別の刀使が、急速に飛来寄る鷹のような斬撃を繰り出した。結唯と和
絵の剣である。

大荒魂の首がズシンとした重みと共に地に落ちる。合計三つの斬撃が、ついに四つ首
の竜を三つ首のそれへと今度こそ変化させていた。

「頃合いか」「島に行くぞ、付き合つてられん」「……………」

「——来い」

失った首には目もくれず、三つ首の内の一つは葵を眺めた。

止めどなく流血する左右の手は握力すら無くなり刀を取り落としている。膝が抜け

たその姿は、まるで悪魔としか言いようがない風体であり、だからこそ人間なのだろう。そう思える程には壮烈な眼が女にはあった。

「奇」

くし。

それだけ言つて、大荒魂は南方へと飛び去つて行つた。顧みる事も地を睥睨する事も
ない。

その時刀使達に浮かんだ言葉と想いは勝利の二文字であつた。一人を除いて。

「葬様。……敵が退いていきます」

「来い」

「ヤツは恐らく相模湾、江の島まで後退していく模様です。我々は最終防衛ラインを死
守致しました」

「……来い」

来てもらわねば困る。そうでなければ40年前と同じ、また終の刀使が犠牲になる。
自身の母が犠牲になる。

だから葬は言い続ける。

「どうか今はお休み下さい。止血は只今」

「……………来い」

「貴女と共に最期まで戦えて光栄でした。親衛隊に選ばれた事、私も燕さんも誇りに思っております」

「……………来い」

「紫様はきつと、貴女を凌ぐ当主になつてくれましょう。朱音様もおります。そしてその時はきつと、私達以上の子達がきつとお傍に」

「……………」

葵は繰り返す。彼女は今も戦っているのだろう。

両腕に力がほんの少しも入らなくとも、たとえもう声が出なくとも、電池が切れる間際の人形のように、ゆっくりとした仕事でも。ずっと。

その瞳から力が失われる刹那に、葵はふと後ろを振り返った。その動きはとりわけ俊敏で、まるで息を吹き返したかのようだった。

——勝つたのだ。和絵達は思った。

「母様!!!」

「紫様、お早く!!」

「母様ツ!!」

——声が聞こえる。こんな所に居る筈のないあの人の声。

「諦めないで!!!」

遠い過去がそうであるように、もう忘れていた筈のその声はとても鮮明で。40年間
ずっと聞きたかったその声が懐かしくて。不意に、忘れていた声が葵の唇を震わせた。

「やったよ、お母ちゃん」

母親に褒めてほしい子供のようなあどけないその声と表情を、折神紫が忘れる事はな
かった。

だけ。

——畏を示す嬌声と共に。だがそれは実に化け物らしかった。

「G7FFFFFFFF」

ようやくとそれを頭で理解した雪那はこの時。時間に換算するならば一秒にも満たない僅かな間、息を止めた。

それは胸腹腔内圧の上昇、及び大静脈の圧迫等々諸々を彼女の身体に発生させ、血圧を一時的に急上昇、所謂火事場の馬鹿力を意図的に起こすもの。

彼女の流派において息を止める事は自然と行われる動作であり、剛力とも云える全身の力と筋骨と速さによる斬撃を為しえる為の秘伝。循環器系に疾患をもっていない人間であれば誰でも可能な筋力の底上げ。

ただしこの場合自身の後ろには護るべき者が大勢いて、敵がもうそこに落下してくると判断してから一秒にも満たない刹那にすぐさま身体が働く稽古と訓練を経た者のみが、この技術を体得できる。

彼女が教わった流派の特徴にして奥義。

一人の人間が息を止めるだけで千人力を出すという矛盾であろう結果と原理。相模雪那はそれを為す。

其れは本能のみで刃を振るい、只いたずらに己の力で敵を斬るのではなく。

理性で以つて敵に刃を振るう事を旨とした刀使いだけが、この技と力を現実のものとする。

「帯電放電流電雷電」

西洋ではこれを、ヴァルサルヴァ法と呼んでいる。

◇

「ふう、——残心つと」

「だ、大丈夫かい？ 荒魂がどう斬られたのか見えなかつただけど、ていうか凄い汗なんだけど……？」

「気にしないで。見ての通りよ、真つ二つでしょ？ 逆袈裟に斬り上げただけだから」

「……本当刀使さんつて。いや、相模さんつて本当に」

真つ二つのモノが雲散したのを確認し、雪那は構えを解いた。一時的に太くなつた血管がゆつくりと元に戻るように、静かに、彼女は人々に向けて言う。

「皆さん、お待たせしました行きましよう。駅はすぐそこです。もし今後何かございましたら、刀剣類管理局伍箇伝までどうぞ。出来れば鎌府を御鼻肩に」

そうして大橋を渡り、雪那は人々を無事に片瀬江ノ島駅まで送り届ける事に成功し

た。

駅は案の定刀使達が詰めており、緊迫の雰囲気にも包まれている。やはり事態は只ならぬ渦中にある事を雪那は悟った。

「江の島からの生存者、確かに保護致しました。これより第二兵站拠点までお送りします」

「第二？今何が起こっているのですか？」

「先だつて、刀剣類管理局局長・折神家御当主は特別祭祀機動隊令刀使等総出撃を発令されました。これにより鎌府、美濃関、折神家所属の出撃可能な刀使は現在総員出撃中。大荒魂討滅の為、第一から第三までの防衛ラインを構築していました」

「いました？……するとあの竜、四つ首の大荒魂は？」

雪那が尋ねると、鎌府の刀使は悲痛な表情を一瞬見せながら言った。

「……………。現在は最終防衛ライン・藤沢駅にて、御当主折神葵様率いる刀使達で防衛戦を展開中との事」

「——了解です。それでは私の今後の任務は？」

「別途指示があるまでここで待機との事です」

「江の島にはまだ生存者がいる可能性が大。救出部隊の編成を要請します」

「それは……………」

「それは却下だ。すまない、雪那」

「…結月先輩」

かつて共に任務をこなした先輩。伏見結月が歩きながら現れたその姿を見て、雪那は沸いた血が静まっていくのを感じた。

それ以上の感情の坩堝がこの先輩にある事、そしてそれを絶対零度の理性で抑えつけている事を察したからである。

「お疲れ様です。しかし失礼ですが、理由をお聞かせ下さい」

「本来ならば雪那、君を江の島から救出する為ここにいる刀使達は派遣された。私を含めてね。それが葵様のご命令だった」

「ならば好都合ではないですか。私はこの通り無事で、『写シ』だつて使えます。私を加えた刀使部隊で江の島を隅々まで搜索、取り残された市民の救出を再度願います」

「無傷であそこから生還した君の事は尊敬も信頼もしているが、雪那。——今はまだ無理なんだ」

それを聞いて、今度こそ雪那は激怒した。

「無理？無理と仰いましたか結月先輩？それって無茶の間違いでは？」

——そんなものは押し通すのが護剣の切っ先であると私は教わりました!!貴女方です!!!」

「確かに君を救出する事は刀使の数を増やす為だった。江の島搜索の戦力として。だが既に状況が変わった」

「……変わった？」

「たった今情報が入った。……折神家御当主は最終防衛ラインにて殉職、死傷者も多数出たそうだ。我ら刀使の防衛ラインは辛くも突破されなかったが大荒魂は健在。藤沢方面より現在南下中」

「南下？じゃあ今はどこに？」

「ここだ」

「——、はい？」

「大荒魂は鵜沼を通過、もう間もなくここに戻って来る。予測進路は発生元である相模湾江の島。さつきまで君が居た所だ」

「まさか……ッ」

「三つの防衛ラインでの戦いで敵は疲労、這う這うの体でとんぼ返り。と言いたい所だが、ヤツはまだまだ元気というわけだ。だから私はここにいる。——そして、君もここにいないといけない」

「結月さんの言う通りよ。雪那」

聞いていて嬉しくなる声と共に、二刀を携える女性が雪那の視界に入った。ご無事で

良かったと思つて体を向けると、戦意に満ちた剣士達が其処にはいた。

「紫お姉様!!」

そのままの表情で。無事で良かったと、紫は言った。雪那は嬉しいと感じるよりも先に、先輩である彼女の心中を察した。

「先例に倣つて、これより私が折神家の当主となるわ。同時に大荒魂討滅の為の特務隊を編成。メンバーは私、結月さん、江麻、紗南、そして、」

「鎌府高校3年・吉野いろは」

「同じく!2年!藤原美奈都!」

「同じく1年、…柊篝」

「柊さん達まで……………」

かつてのベストメンバーがここに集結していた。一体何が始まるのか、いや終わらせるのか。雪那は一際大きく息を吸った。

「江の島の生存者捜索は大荒魂を滅してからじゃないと不可能。そして私達にはあと一人、遊撃手が要るの。連戦で悪いけれど力を貸してくれる?」

「勿論です。さつきまで自分が居た場所ですし、道案内もそれなりに出来ます。やらせて下さい」

「ありがとう、雪那。貴女がいれば千人力よ」

「紫様、来ました。大荒魂です」

「でつかあい!——つてあれ?首3本しかないよ?」

「防衛ラインの刀使に斬られたんでしょね。…流石」

「ではこれより相模湾岸大災厄特務隊・総員8名をここに編成発足。———確実にあの化け物をこの世から滅ぼすわよ、皆」

「了解!!!」

これが彼女達の。各々の運命の始まりであつた事を、当時はまだ誰も知らなかつた。

第十一話（過去サイド最終話） 後悔

江の島大橋は奇妙な程無事で、ヒビや損壊は有れど、渡るに困る事が無いのは正に奇跡だ。

雪那は素直にそう思っ、前を見る。

隊長である紫を先頭に、十字を描いた陣形で彼女達は江の島へと進んでいた。

島の中央からは天へと首を伸ばす三つの首が強調されており、その周囲は小型の荒魂が蔓延っている。

「まるでラストダンジョンだね!!」

「こちらに飛びかかる無数の荒魂を眼にも映らない速度で斬り倒す主攻撃手はウキウキとしている。いつも通り。」

「紫。このまま私達は大荒魂の所まで進撃、全員で斬り祓うって事でいいのよね?」

同様に刃を真顔で振るう江麻が作戦の確認をする。

「そうね。…おおむね」

「おおむね？」

.....。

「要（かなめ）は篝よ。柊の刀使には、大荒魂を祓える業が継承されているの」

「え？ そうなの？ 篝？」

「.....。そうです」

「成る程！ じゃあ話は簡単だね！ こいつら全部ぶった斬って、皆でアイツの前まで行くッ！」

美奈都は笑顔を決やさず荒魂を斬っている。

江麻達も勿論斬っているが、笑顔を浮かべる事が出来るのはこの中で美奈都だけだった。

「ちよつと柊さん」

「何？」

「何じゃないわよ。貴女、いつになく神妙な顔じゃない？ 貴女なら大荒魂を確実に祓えるって話なのに、なんか変ね？」

「.....」

「？」

篝はいつもの不愛想な顔を変化させた。それはまるで宝物を見るような表情で。

……なに？それ。

雪那は不意に嫌な予感がした。

「雪那」

「何よ」

「貴女に逢えて良かったわ」

「そりやどうも。——何て言うと思った？ふざけた事抜かさないで。これが終わったら立ち合ってもらおうわよ。今度こそ私が勝つんだから」

「……………ふふ」

篝が笑う。でもそれは何故かちつとも可愛くなんて無かった。

「ちよつと貴女、！」

「雪那セーンプイ。足元がおろそかですよ？主遊撃手として、それって如何なものかと思っんですか？」

「つ、…失礼ね。全方位が私の間合よ、紗南」

「失礼しました。これでも相手の副遊撃手なもので」

その時、雪那は視線を感じた。まぎれもない。大荒魂だ。

「……………」

ジツと見ている。それが分かる。怖いのか？珍しいのか？いやきつと、そのどれでも

ないのだろう。

「……………。狙ってる?」

察知する。雪那が咄嗟に動くのと同時に、大荒魂の両手は赤く光り始めていた。狙いは

「柀さんッ!!」

落雷の形をした槍のようなものが箒を襲う。投槍は寸分変わらず飛来し、内一本はいろはと江麻が防いだがもう一本は、

「——ッッ!!」

——速い。いや、早い。時間流が違う。故に紗南と雪那は間に合わない。紫と結月は違う敵に手一杯。だから美奈都が御刀で防ぐ。

「構えて!!」

しかし美奈都は次を警戒していた。……………どういう事だ?まさか再攻撃?と、…雪那が逡巡した瞬間大荒魂はまるで刀を掴むように手で巨大な雷を構え直し、箒に向けて振るってきたのだった。

——しつこいヤツだ。

その雷剣目掛けて、雪那は跳んだ。

「!こんのおおおおおオオオ!!!」

御刀を振るう。雷と接触する。すると刃と茎を伝つて雪那の『写シ』が指先から削ぎ落ちていく。我慢しているの、痛くはない。しかし、

「どっか行けええええええええええ!!!」

箆には絶対に触れさせない。通さない。そんな剣士としての意地が、雪那に雷切を現実のものとしさせていた。

「雪那!」

「雪那ちゃん!…あかん、もう『写シ』が…ッ!」

「私は大丈夫ですつ。早く、大荒魂の元まで行きましょう…つ」

「雪那センパイ!動いたらマズいですつて…!!!」

もう『写シ』を張れない事に雪那は気付いた。しかし立ち止まるわけにはいかない。敬愛する紫の為に。

「いろはさん、結月さん、江麻、美奈都、紗南。今すぐ雪那を連れて撤退を。これは命令です」

そして何よりも――、

「そんなッ!私の不甲斐なさで撤退なんて嫌です!!それならいつそこで見殺しにでもして下さい!!!」

「雪那…」

「何よ、どうしたの？ 貴女にそんな顔をしてもらうほど、私は弱くないの…つ、待ってなさい柊さん、決着（ケリ）はまだ、ついてないんだから——！」

何よりも。コイツにだけは。

「いいえ雪那。ケリは今日つくのよ」

「？ 紫、お姉様…？」

「結月さん、撤退の指揮を頼みます。——行くわよ箒」

「……。はい」

「待ちなさいよ柊箒!!」

諦観と感謝が浮かぶ笑顔が殊更癪に障り、雪那は吼えた。

「さつき私は貴女を護った！ それは私が!! 貴女を護れるくらい強い証拠！ 私は貴女より弱くなんてないんだ!!」

「……………」

歩き去るその背中に、刀使の声が木霊する。

『写シ』が張れないなんて、私達刀使には脅しにもならないわ…ツ！ 人間は一度斬られたらお終いなんだからその通りになっただけじゃない!!

私はまだ戦える…、貴女とお姉様を護れるのよ!! だから——ツ」

——そんな顔を私に向けるな。まるで永のお別れみたいじゃないか。

一人の刀使は妙法村正を握り締めて叫び続けていた。

「はい落ち着いて。雪那」

その時、血が昇った雪那の頭を一人の刀使が撫でる。頼もしさに滲んだ掌の感触にふと目線を上げると、そこには美奈都が微笑んでいた。

「結月さん！私、あの二人を手伝ってきます！」

「…美奈都」

「美奈都…先輩？」

「絶対に、あの二人を護る。でしょ？雪那。任せて」

「信じて…いいんですか…？」

「先輩に任せなさい！」

疲労がその言葉によって我に返る。とつくにピークに達していた雪那は朦朧とする意識の中、結月達に連れられ撤退していった。

そして大橋を渡り戻った所で彼女は見た。大荒魂の首が全て切断され、ついに消えゆくその姿を。

「やった——」

特務隊全員が呟く。美奈都と篝と紫は見事大荒魂を斬り祓ったのだと。しかし橋を渡り帰ってきたのは、紫一人だけだった。

「やったわね紫。あれ？美奈都と篝は？」

「……………」

江麻が出迎えるも、紫はただ後ろを示すだけで何も言う事はなかった。敬愛する姉のそんな姿を、雪那は疑いもなく見ることにしかできない。

作戦は成功だと。紫は妙に怖い声で宣言した。相模湾岸大災厄はこれにて終了。雪那達は信じて、そう思っていた。



長い回想を打ち切り、私は車を運転しようとキーを取り出していった。

「？高津学長。どちらに？」

「野暮用だ」

部下に言い放ち、自家用車に乗り込み、ルームミラーへと手を伸ばす。軽く触れるだけの確認行為を終え、今度は少し身を乗りだして顔を見る。

そこには昔と変わらず殺気立つ、けど小綺麗な女がいた。

——あれから、19年の月日が流れた。篝も美奈都先輩も無事で、ほどなく皆家庭をもつようになった。

美奈都先輩は衛藤に、私は高津に、篝は十条という苗字になった。

変わらないのは紫お姉様だけで。私はそれが誇らしくも、どこか違和感を感じていた。

「お邪魔する。十条篝はいるか」

「……どうも」

怖い人を見るような顔で（まあ確かにそうなのだろうが）。篝の娘が私を奥へと案内する。

「母の具合はどうだ」

「芳しくありません。……最近は衰弱がひどくて」

「…そうか」

「？ それは？」

「チョコミントアイスだ。好物だろう？冷やしてとっておけ、姫和」

「ありがとうございます。いつもどうも」

「礼は要らん」

「……。あの、一つ尋ねてもいい…ですか？」

「何だ」

「——その袋の中身。何ですか？」

「答えが分かっているのに質問をするのは感心しないな。そんな腹芸は、お前にはまだ早いだろう」

「刀なんですね」

「……………」

私は下らない会話はしない主義に変えている。年月がそうさせていた。

「母はもう、刀使ではありませんよ」

「知っている」

「小鳥丸は私を選びました。だから、相手ならば私が」

「私の相手は最初からお前ではない」

箒の寝室は一枚の襖で閉じられている。いつものように。

それを遮って、姫和が私の前に勢いよく仁王立った。

「通すつもりは無いか。若き刀使」

……………。

「刀使とはそうこなくてはな。だが今日は何も斬り合いをしにきたわけではない。それ
にアイスが溶けるぞ。いいのか？好きだろうチョコミント」

「……………」

「ここに来て少し逡巡を見せる小娘が、私は嫌いではなかった。

「姫和?…お客様なの?」

「! 母さん寝てなくちゃ、」

「あら? あらあらこれはまた。いらつしやい、毎日毎日厭きずに。暇なの? 貴女」

「黙つて寝ている病人」

果たして襖を開けたのは。他でもない十条であり、古い名を柊箒といった。

「ふふ。冗談よ。ああ、姫和、奥でアイスでも食べてなさい」

「…大丈夫?…? 母さん」

「大丈夫よ。それにお母さん、この人に負けた事ないんだから」

……………

「横になつていろ。今はまだ」

「ふふ、布団に入つたままでご免なさいね。でもこういう時、人間変われば変わるものと

言うのかしら。雪那?」

「それはこつちの台詞だ。あの不愛想刀使が一丁前に、中学1年にもなる子供の母親と

はな

「それは確かにそうね」

箒は私の顔を何が可笑しいのか笑って見てばかりで、手元に置いた二振りの包みには目もくれなかった。

「——あの日の決着をつけにきた。 柀箒」

「あら。 そう」

包みを解く。それはまるで互いの境界線のように。私は大刀と小刀を床に置いた。

「——貴女は、私の事が大嫌いだからね」

病床に伏した女が目元だけを上に向けて口にして、弱々しい細腕を覗かせる。

……憎い女。それが昔からこの心に抱いている感想だった。

「今更言う事か。 そんな当たり前の事が」

「でも斬りたければこんな病人いつでも斬れた筈なのに。 何でまたここ最近来てくれるの？」

「……………」

「姫和に会いに？」

この女は忌々しい奴で、羨ましい奴。それは学生のみぎりからずっと。その筈だ。そうでなくてはならないのだ。

「ああ、死に顔でも拝みに来た？ それは貴女らしい」

「違う」

不意に出た言葉に、互いに目を丸くしながら。勢いの止まらない私の口は言葉を繋ぐ。

「私は貴様に勝っていない。私があのお御方の真の傍付きとなるには。…納得するには勝たねばならない。他ならぬ貴様にだけは」

「気が昂ると早口になる癖は相変わらずね。——美奈都先輩が亡くなった今、私達の中で、あの際のままなのは貴女だけ」

「何を言っている……? あのお御方こそが最も変わっていないだろう。寝言はいい、さつさと起きろ私と立ち合え。もう刀を振れないとは言わせん」

「——違うわ」

「何?」

女の瞳を見詰める。かつての同級生にして今も続く怨敵の瞳を。

あのお御方の信頼厚く、いつもいつも傍に居た目障りな女の瞳を。そして誰よりも果敢に剣を振るい続けた、その真っ直ぐにすぎる眼差しを。

「あのお御方はもう、——違うのよ」

「今度は世迷言の真似か。箒」

でも何故か。…今やそこには諦観しか浮かんでいなかった。

「聴いて、雪那。あのお御方、折神紫は大荒魂よ」

私はこの日、憎い女から19年前のあの日から続く真実を知った。

その内容は突拍子もなく信じられない物だったけれど、そんな冗談をこの女が言うわけでもない事は心で理解した。

「どうすればいい」

「分かっている筈」

——だからこれは私にとって、とても腹立たしい話の終わり。

「御刀で斬るしかない。あの御方を、祓うしかない。……だからお願い——私はもう御刀を振れない。だから、これを貴女に。後はどうか」

気持ち悪さと憎さを最期まで併せ持った女が、勝ち逃げた剣士が告げる一期の願い。

「何だこの脇差は。形見のつもりか恥を知れ、……柀箒！」

復讐の炎を燃やし始めた、人間たちの復讐劇。

本編：綿貫和美

第1話

相模湾岸大災厄が発生したのは、今から20年前の事だった。

その年は御前試合を5連覇した刀使が誕生したこともあり、世人も刀使も何たる前人未踏かと大盛り上がりを見せていた。

——9月の暑い時期だった。その化け物は、突如として現れた。

家屋と人を倒壊させながら相模湾岸より北上、進撃は留まる事を知らず、防衛側は最終防衛ラインにて総力をもつてこれを減衰。ついには江の島に封じ込められる事になった化け物。大荒魂による死者は三千人を超え、時の折神家当主はこれを史上最大規模の荒魂災害と認定。

その大荒魂を討滅・鎮圧し、帰還を果たした特務隊六名の刀使達は英雄と呼ばれる事となった。

『親友を返してもらおうよ。化け物』

20年前の江の島、相模湾岸大災厄最後の地。その舞台裏。

云わば正念場ともいうここで起きた一つの剣戟。それは神話の闘いの具象だった。

修羅が右に左に得物を振るい、天を叩き割りながら軋む戦場を駆けずり回って化け物を斬ろうとする。ときに防ぎ、ときに躲し、ときに刀を鞘に納める。——真剣勝負の死合い舞台の最中において、抜いた刀をわざわざ鞘に納めるなど愚の骨頂を通り越して暗愚の域だろうが、この修羅はそういった思考と知見の埒外にいた。

あえての納刀、あえての抜刀。その全てが勝つ為の方程式であり、常人には真似すら出来ないだろう間合の騙し合い。めくるめくそれらが刹那のように切り替わり連続し、勝機すらをも意のままに操る修羅道の化身。闘戦の権化。

その修羅の名を、剣聖と云った。

『貴様は我を倒せると本気で思っているのか?』

『思ってる』

しだいに一つの想いと剣戟だけがぐるりと廻る死闘、決戦の舞台。

斬撃が飛び、地が沈み、何もかもが過去の遺物と変わっていくその中で、変わらない

ものは只一つ。私はそう感じた。

『——我流』

『血が滾ってきおったわ！参れ、人間!!! 貴様の真を見せてみよ!!! 決着の時だ!!!』

【斬る】 その只一つの心が剣士を支配したその時。

刹那の先こそ我らの結末だと感じ入った正にその時。刃が化け物の頭蓋へと突き進んでいったその刹那。終わりは来た。

相模湾岸大災厄が鎮圧されたのは、今から20年前の事である。



「荒魂発見！距離30m！」

「なます斬りにしてやれ！」

「各員！『写シ』を張り忘れるな!!」

「糸見イ!!ヤれ!!」

「……………」

白雪の結晶のような少女が小さく頷いて、前に出る。

身に纏う学生服は只でさえ華奢な彼女をより一層強めて見せているが、右手に持つ長物はそうではなかった。

刀である。兇器（まがきもの）。銘など無用と一部の界限では言われているが、彼女のものには妙法村正と付いている。上段に振りかぶり、眼前に振り下ろすと、彼女たちが敵と認識している何かが真つ二つに割れていた。

「…次」

「いいえ。もう大丈夫ですよ」

歴史の教科書に曰く、人の命を奪いに来るこの敵の名称は荒魂。糸見という少女を害そうとし、彼女の同僚や無辜の人々をもその牙でもって無に帰さんと猛威を振るう化け物。

奴らは何処から生まれるのか？何故現れるのか？どうして荒ぶるのか？彼女たち人類の研究には余念も底も無いが、表向き現在分かっているのは荒魂を斬らなければこちらが死ぬという事であった。

——だから戦う。命を懸けて。斬り、祓う。それが貴女たち刀使の巫女。

「掃討完了。周囲警戒、残敵確認」

「残敵無し。被害及び損失無し。任務完了を左近衛大将に報告します」

「異議なし。よろしく願います」

「助かりました、綿貫さん」

そう言つて走り去る刀使の後ろ。黄昏色の陽光が貴女の顔と、貴女の刀を照らしている。綺麗な色だと思つて刃紋をそつと見てみると、隣りにいる彼女が少し眼を細めた。

「…眩しい」

「ああ、すみません。糸見」

詫びる貴女は同僚・糸見沙耶香を見ながら刀を鞘に納めた。その切っ先には汚れも隙も無く、残心にも淀みは有つてはならない。

引き締まった貴女の顔を見て、沙耶香がコクリと頷いた。

「荒魂討伐完了。…帰投する」

「おや？何か不満ですか？」

「……………ううん」

物足りないのだろうか？一太刀で終わったからな。そう思つて、貴女は小さく笑みを浮かべた。

「顔に出ていますよ？糸見」

「……………」

「明日は御前試合でしょう？貴女はもう休みなさい。既に交代の者達も来ていますし、

鎌府代表の一人として貴女には頑張ってもらわなくては」

「……………和美も」

「?はい?」

沙耶香が一つ瞬きをしながら、貴女を見つめて言った。

「和美も。警備の任に就くって聞いた」

「これでも最上級生ですからね。私は引き継ぎを行ってから帰ります。…物足りないのなら、この後少し稽古をしていきますか?」

「…うん」

元鎌府高等学校。現鎌府女学院高等部3年・綿貫和美と、同じく中等部1年・糸見沙耶香は刀使である。



鎌府女学院敷地内の別棟。刀使達の修練場はそこにあった。

ここを訪れる者が日々練磨するものは心技体。この3つである。しかしこれらの修養に必要な物は一体なんだろうか。刀であるか、身体であるか、精神・心といった物であるか?

そういった禅問答じみた問いかけを己に、或いは他者にする者の数は多いが、そんなものは時間の無駄だろうと笑う者は誰一人としていなかった。

「正面から叩き斬りなさい、糸見。先の荒魂にやったように」

「…うん」

何故なら問いかけを止めてしまえばその刀使はそこまでであり、逆を行く者は上にゆけるし生き残れると鎌府の刀使衆たちは理解しているからだ。嫌でも来る実戦の中で。

「それだけを一意としなさい。今はただ」

「うん」

ズドンと。瞬間、板張りの地面を踏みつける沙耶香の足踏みが修練場の端から端までを揺らした。それと同時に斬り下ろされる銀閃は沙耶香の御刀であり、刀使の命でもある。

「……………」

「——ッ」

制服姿の沙耶香が諸手右上段に近い構えで剣道の打ち込み稽古さながらに、貴女へと斬り込んでゆく。何もしなければ面を真つ二つにされるだろうが、貴女は硬く受け止めずしなやかに刀で受け流した。

刀と刀のぶつかり合いは沙耶香の充実した気合を示している。攻めの剛剣。これを

前にしては、相手は受けに回る事しか出来ない。しかしまばらにだがこの場にいる稽古者たちは、貴女の方にこそ恐ろしさを感じていた。

——防いだ。あれを？

——ていうか受け流した？

高速で接近してくる物体に対してひよいと何かをぶつけてその軌道を逸らす事、防ぐ事は簡単な事ではない。手の内や腕をガツチリと固めて受ければ防ぐ事だけは何とかなるかもしれないが、受けて流すとなると難易度は更に上がる。

それを涼しい顔でやってのける貴女の顔を見て、周囲の刀使達は納得した。そして幸運だと思った。今夜の見稽古は大収穫だと。それを尻目に、貴女は沙耶香が出来上がりつつある事を悟った。

「やめ。見事です、糸見。貴女なら優勝を手にする事が出来るかもしれませんね」

「……………」

「貴女が私の古流を学び、力としたいと言った時は何を馬鹿など驚きましたが、——もう貴女は付け焼き刃ではありません。一刀流・糸見沙耶香の剣は更に強く鋭くなりました

よ」

「……………」

沙耶香はジッと貴女を見つめている。そこには不可解と書いてあり、向上心とも書いて

てあった。左腰に身に付けている鞘（鯉口）が刀を納める為に横を向き、納め終わるのを待っていたかのように彼女は一つ瞬きをした。

「……………水を」

「？」

「水を。…斬つてるみたいだった」

「上出来です」

「和美は水で出来ているの？」

「そうであれば良かったと思う時はありますが。貴女と同じ人間ですよ？」

同じ刀使です。右手に持つ御刀を鞘に納めながら、貴女はそう続けた。

御刀を身に付け武を修め、何処からともなく現れる異形存在である荒魂から民衆を守る者。それが沙耶香であり、それが刀使である。

平たく言えば公務員。そして貴女はその最上級生なのだ。

「どうすれば…私も水になれる？」

「哲学的な問いです。ヒトが水になるには？とは」

「和美に打ち込み続けても、全然手応えがなかった。手応えを得るには、私も水になる必要がある。どうすれば」

「その問いかけは大事なものです。刀を抜いていない内は常に自他に問いかけなさい。

今日の稽古は以上とします」

「待って和美」

「明日の御前試合、頑張るように。応援していますよ?」

答えはいずれ訪れるという思いと共に。微笑む貴女は一礼し、修練場と沙耶香を後にした。

第2話 鎌府の刀使

暁風斬り裂く剣の素振りがまるで秒を寸断するように。

貴女の鋭く速い刀刃の運びは、日課である彼誰時の稽古を大詰めへと変化させていた。

「……………」

この時念頭に置くことは、呼吸を止めないという事。止めれば身体は力みを生む。身体の流れが留まる。

どうしても瞬間的なパワーとスピードを得たいなら呼吸を止めてもいいが、異形・荒魂との戦闘は人間のそれとは違い短時間で終わらない事が多い。その間ずっと永遠に呼吸を止め続けて生きる事が可能であるなら誰も止めはしないが、少なくとも貴女には出来なかった。

——想定する。仮定の敵が得物を構え、今か今かと振るわんとしている。ヒト型の敵だが、人間ではない。体力も呼吸も必要、いや存在しない。そんな眼前の敵を、狙って

いる勝機を全てを、この刀でもって縦一文字に斬る。斬りまくる。

防御ごと叩き斬る我が得物。それはこの一振り。斬るといふ工程に全てを傾けた、鋼の剣。

「……………」

只それだけを考える。一意のみを専心する。迷えば敗れる。その為の鍛錬法だった。

「和美。朝ご飯よ」

「はい、お母さん」

返事をする、貴女は御刀を鞘に納めた。

頭（かぶり）を振り、稽古の拙さを切り払う貴女の長い髪が麗しく舞い上がっては空を澄ます。

「——不出来。これでは」

「眉間にばかり熱が走ってるわね。今日は御前試合なんでしょう？ 警護の任、冷静に

頑張つて務めなさいね？」

「…元より承知の上です」

綿貫家の庭兼稽古場を後にして、白く湯気立つ茶碗達が鎮座している居間・テーブルの前に貴女は座り、自身の母を見た。

澄んだ色。娘に遺伝した縹色の長髪が真っ直ぐに下りて、うなじを隠している。相変

わらず綺麗だなと貴女は思った。

「呼吸も、流れる水も留まらない。どこまでも。——だから強い。忘れないでね？和美」
「……………。いただきます」

師の言葉に無言で頷き、手を合わせて白米を二口食べる。味噌汁を音無く啜って、今度はおかずに箸を伸ばす。すると湯呑茶碗がテーブルにコトリと置かれた。中身はほうじ茶のようだ。薫りも味も最高だった。

「しかし懐かしい事。お母さんが和美くらの頃は、一人の刀使さんがずっと御前試合で優勝していたわ。…とても強かった」

母が作る料理とお茶は絶品だ。心身が温まり、初心を思い出させてくれるこの味を貴女は大いに好んでいる。

「藤原さん、元気にしているかしら」

いつかこの味を再現し、そして超えてみせると心に想いを落としながら。微笑む貴女がちらりと時計の針を見た。

「ご馳走様でした。お母さん、行ってきます。お父さんにも伝えて下さい」

「気を付けてね」

「はい」

かつては刀使だった母が、娘と同じく微笑んだ。



朝。いやあまだ昼ではないよと云った頃合い。これはお城の正門ですかと訊かれんばかりの大きな門の前で、貴女は同僚たちと共に早速任務に就いていた。

「おはようございます皆さん。欠員は無いですね？」

「はい」

「おはようございます、綿貫さん」

「集合場所を鎌府と間違えた人がいなくて安心しました」

「流石にここ折神家本邸と学校を間違える人はいませんよー」

「……………」

それを聞いて、貴女は押し黙った。

「え？ 昔いたんですか？」

「つシ。静かに。…後で教えてあげるから今は黙ってて」

「そう、あれは私達高3勢がまだ中等部だった頃…」

「早速ですが本日の仕事の確認をします。よろしいですね？」

「あ、はい」

「すみません」

今日はハレの日である。沙耶香をはじめ刀使たちの中でも選りすぐりの強者と、彼女らを束ねる折神家という由緒ある御家の当主がここに集う日。だから恥ずかしい過去は秘めるだけで思い出さなくてよい。

御前試合の警備任務。今日貴女はその全警備班の司（トップ）として、任務を全うしなければならぬのだ。

「試合は全てここ折神家本邸内で行われます。予定開始時刻は今から三時間後。決勝戦のみ屋外特設会場で、その他は屋内武道場です。

試合会場の警備はA班とC班。D班とE班は本邸の外周一帯。F班とG班は観客の誘導・警戒をお願いします」

「了解。綿貫リーダー」

「：しかし例年通り、試合開始までが長い仕事ですよね」

「試合なんてあつという間に終わるもんね」

「私は好きよ？この時期、この桜が見頃なのよね」

「言えてるう。しかもチェリーブロッサムって言うたさいけど、桜って言うた侘び寂（さび）効いてる所も良いよね」

「は？何言ってるのいきなり。脳みそ腐ってるの？英語でいいじゃんカッコいい」

「あく……。あなた横文字聞くと脳がクラッシュするタイプの病の持ち主ですかあ」

「英語よりもこつちが好きなだけよ。黙ってなさいなタイニーども」

「は？」

「あ？」

貴女は微笑んだ。聞く人が聞けば下らないかもしれない彼女たちの会話は警備班の御愛嬌である。

「ミーティングを続けますよ？そしてどちらにも良さがあります」

「失礼しました」

「本邸正門であるここ折神の大門は私とB班が担当で、交代要員は各班二名ずつ。休憩・交代の回し順は各班自由に決めて下さい。それとB班はこれから屋外休憩所の設営をお願いします」

「え？ ということは綿貫さんが最初に立哨ですか？」

「ええ、そうです。嫌なら代わりますよ？」

「お言葉に甘えまーす」

「綿貫さん、持ってきたドリンクサーバーの中身はどうします？」

「いつも通りほうじ茶とスポーツドリンクにしましょう」

「了解です。パックと粉を浸しておきます」

「お願いします。……さて、今回会場には当主親衛隊のお歴々総勢四名が御出でになります。A班とC班はくれぐれも足を引つ張る事など無いように。試合までまだ時間があります。が我ら鎌府の刀使衆の力、示してやりましょう」

「了解」

「では解散。——幸運を」

別れ別れに持ち場に向かう警備の刀使達。御前試合という表舞台には立てずとも、裏側でそれを守護する役目を負った歴戦の刀使が貴女たちだ。

敵である荒魂は何時でも何処でも現れ荒ぶる。そのため刀使たちの緊張が解ける瞬間など皆無に近い。しかしこの御前試合だけは、そんな責務から解き放たれたただ純粹に心技体を競ってほしい。伝統ある御前試合は刀使同士のそんな心の機微から始まったのだという。

無論表向きは当代最強刀使の決定戦であり剣の学び合いの場であるが。

門前に立つ貴女は小さく息を吐き、流れる水をイメージした。四六時中かつ無意識でこれを行えなければ、修行の完成とは言えない。

母からの教え・綿貫の家に伝わる剣法の基礎鍛錬をいつも通り重ねていたその時、貴女の首筋に電流のような威圧感がピリと走った。

「綿貫さん」

まるで虫が知らせてくれたかのように。それに従って顔を横に走らせると、夜梟のよ
うな佇まいの刀使がそこにいた。

第3話 当代折神家当主御前試合衛司

「今日は待ちに待った御前試合の日ですわね。今年はこの校の刀使が優勝するか、楽しみですわ」

「会場の警備は万全なのですか？」

「和美に任せている。問題ないだろう。お陰で僕達は安心して紫様の護衛に専念できる」

「真希さん？私達近衛も会場の警備に当たる事、忘れてまして？」

「忘れるわけないさ、寿々花」

「ねえねえ私は？」

「夜見と共に紫様の侍衛を務めろ」

「頼みましたわよ？ 結芽、夜見さん」

「は～～い」

「分かりました。お任せを」

◆

「お疲れ様です。警備の首尾は如何ですか？」

「——これは臯月様」

立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花。という故事を貴女は唐突に思い出した。同時に素早く敬礼する。劍士然とした彼女から感じる圧が貴女にそうさせていた。

威圧感の正体、それは闘気である。

それは戦闘者のみを持つ独特の空気、或いは重さ。立ち居振る舞いよりも何よりも眼前の人物を教えてくれるこの圧力は、人だけが持つている威圧感だと云う。

人間の感覚器官は意外にも高性能。他人を見て、こいつ只者じゃあないなと思つたらその感覚は概ね正しい。現に貴女は背中を流れる一筋の冷や汗の感覚と、相対している劍士の強さと妙を肚（はら）で抑えていた。

当代折神家当主親衛隊・第三席刀使。小さく口を開く臯月夜見は、ただ自然体でそこにいたのだった。

「お疲れ様です。最低でも万全と言つて差し支えありません。不逞な輩は我々が誰一人通しません」

「頼もしいですね」

一見、吹けば飛ぶような印象を世人に持たせる可憐な風体と意志の弱そうな半眼の眼差し。彼女を見て、およそ剣士としては恵まれていない女性だと思ふ者は初見に限り多いだろう。そんな人の予想を彼女は裏切り続け、だが人の期待は今まで一度も裏切つた事はなかつた。

——この国で最も強い刀使集団、折神家当主親衛隊。

そこらの剣士刀使が束になつても触れる事すら出来ない四人の剣士。折神の刃鳴。名実ともに、彼女はその一人であつた。

「今回の御前試合、貴女が衛司で安心しています。綿貫さん」

「いえ。私如きなど」

「貴女がこの折神の王門に居るのなら、我々は安心して紫様を護衛できる。これは親衛隊第一席にして左近衛大将、獅童さんが言つた言葉です」

「真希様が……」

「はい。お互いに、為すべき事を為しましょう」

「了解。全霊にて」

真希とは親衛隊第一席・獅堂真希の事である。力強い貴女の返答を聞いた夜見は一つ頷くと、静かに、だが素早く身を翻した。

現場がどうなっているのか、警備体制はどうかという確認を、この夜見は怠らない。親衛隊の中で最も弱いと自覚している彼女は常に自身の責務を果たそうと努めている。それが強さであり刀使であると信じている。事実、そんな眼をしている。

糸見に似ているなど、貴女は思った。

鎌府女学院中等部1年の彼女。そして夜見もかつては同じく中等部生であったからだろうか。親衛隊入りを果たし、今や尊敬する上司となった彼女。在学中から強い剣士であった、かつての後輩。

「……………」 皐月様

「? はい」

「……………」

嬉しさのあまり息を止めていたのを思い出して、貴女は静かに呼吸を整えた。

「どうか御武運を」

「貴女も」

夜見は貴女に敬礼した。先輩を見つめる瞳が、そこには確かにあった。



一時間もすると、会場入りする刀使が増えてきた。方や各校の代表者、方や応援に来た刀使たちである。

「お疲れ様ですー！」

「お疲れ様です。貴女方は美濃関学院の代表者ですね？」

「はい、そうです」

「会場はあちらの屋内武道場になります。決勝戦のみ、前方に見えます特設会場での試合となっておりますので、是非ともご健闘を」

「はい！ありがとうございます！」

「ありがとうございます。行こっか、可奈美ちゃん」

「うん！」

ここに来たのが余程嬉しいのだろう。可奈美と呼ばれた刀使が満面の笑顔のまま、貴女を瞳に映す。穏やかな闘気がそこにはあった。行住坐臥の全てが己の剣であり己の道。早く立ち合いたい待ち遠しい。そう書いてあると貴女は悟る。

「……？」

「？ 可奈美ちゃん？」

「ううん、なんでもないよ舞衣ちゃん。さあっ行こー！」

……。

「楽しみにしていますよ？ 皆さん」

美濃関の刀使が、最後に貴女を顧みた。

◇

御前試合開始まで幾ばくもないというわけではないが余裕もない、といった頃合い。そろそろ最初の交代・休憩時間だなど頭の片隅で思った時である。貴女と同じ鎌府の制服を着た刀使が早歩きで王門まで進んで来た。それは珍しい光景だった。

「——おや？ 糸見ではないですか」

「…和美」

「もうこんな時間ですよ？ いつもの貴女らしくありませんね。イの一番に来ているものと思ってました」

鎌府代表の沙耶香がいつも通りの澄まし顔で、貴女に対し小さく口を開いた。

「街に荒魂が出てたから、斬ってきた。…遅くなった」

「お疲れ様です」

労うと、沙耶香は会釈をしてはジッと貴女の顔を見つめた。

アドバイスがほしいのかな？ そう思ったが、沙耶香の瞳には何の色も想いも宿ってい

ない。いつも通りだなど、貴女は思った。

——自分を過小評価も過信もしていない、似つかわしいその瞳。屈辱、生死、鍛錬、技術、願望、執念。そのどれもが映っていない彼女の瞳。人が人である為に、誰しもが持つ多岐にわたる理由の数々。自分が自分であるレゾンデートル。

何も無い小さな刀使。だがそれは悲しい事だけではなく無限という意味もある。これから何色にも染まれるし、何にでもなれる強さ。或いは弱さ。

「糸見。先の鎌府選抜戦で私達に勝った貴女なら、決勝にも進める筈。油断せず」

「うん」

「鎌府の刀使代表として武運を」

「うん。勝つのは任務だから」

いつかこの子も映すだろう。剣士ならば、人間ならば。それをいつか。



「綿貫さん、お疲れ様です。交代しますよ」

「お疲れ様です。では宜しくお願ひします」

交代要員の一人である同僚を労い、貴女は本日二度目の休憩に入ろうとした。時間は

進み、そろそろ御前試合は決勝戦の筈である。沙耶香達の戦績を知ろうとして、軽くなる足にこれは羽が生えたのだと気軽に思った貴女は歩を進めた。が、

「ああ、そうそう。折神家当主・折神紫様に御上覧頂ける決勝戦に進んだのは美濃関と平城の刀使だそうですよ？」

——次の瞬間砕け散った。

「…そう、ですか。…ありがとうございます。我ら鎌府は駄目でしたか」

「まあそうですね」

「? 貴女はあまり悔しくなさそうですね?」

対して同僚は薄ら笑いを浮かべながら言った。

「…はあ、まあ。自分が出たわけではないです。でも糸見が負けた所は見てみたかったですけどね。決勝に出る美濃関の子に負けたみたいです。あくあ、会場班が羨ましい」

「——」

沙耶香が他の鎌府刀使衆から煙たがられている事は、貴女も含め周知の事実である。

「彼女は鎌府の選抜戦に勝ち抜き、そして私達高等部生にとつて可愛い後輩です。不埒な言葉は慎むように」

「そうは言いますが。…だってあの糸見ですよ?あの子、何考えてるか全然解らないん

ですもん」

「……………。そうですか」

「ええ、それに付けても高津学長のお気に入りに入ります。鼻につかないほうが無理って話ですよ」

鎌府女学院の長、高津雪那は元刀使である。

今日は所用により欠席だが、刀使を辞めた今でも刀は手放さず、文武において折神家当主を守る事に専心している一人の剣士。その姿勢に、鎌府の若き刀使達は尊敬の念を抱いていた。

もしも彼女が刀を置いていたら一体どんな人物になっていただろう。貴女は少し考えて、想像できないので止めた。

「そろそろ決勝が始まる筈。油断せず」

「…………了解、リーダー」

歩きながらの流し目で貴女が下腹部に力を込め、表情筋も眉も動かさずに言う。その氣勢を見た同僚の刀使は何故か怖くなって、直立不動で門の前に立ち続けようと心に決めた。

「——あ、お疲れ様です。綿貫さん」

「お疲れ様です！綿貫さん、美濃関と平城の刀使たち!!とつても強かったですよ！今年

は会場班で良かったあ〜!!」

「鎌府が予選落ちしたのは悔しいけど、決勝の二人の剣を予選で直に見れたのは収穫だったね。流石は護剣の鎬と護剣の物打ち。美濃関も平城も、あれじゃあこの先安泰だよ」

「決勝が見れない事は残念ですけれど!」

「アンタにはまだ来年があるでしょう? 中等部。頑張つてね」

「頑張ります〜!!!」

「お疲れ様です。どうやら今年もつつがなく終わりそうですね」

聞こえてくる太鼓の音は、現・伍箇伝最強の刀使が生まれる決勝戦の合図だ。休憩の最中、貴女は鋭い眼光と頬を少しだけ緩ませていた。後は待つのみ。

「……………」

決勝ではどんな刀使がどんな剣を振るうのだろう。だって強い事は当たり前。どのような気構えで、どのような面構えでこれまで無敗の糸見を倒したのだろう。

——どう、果たして遣うのだろう。

楽し気に雑談し休憩している同僚達を尻目に、紙コップに入ったほうじ茶を片手に飲む貴女の髪を風が撫で、それに運ばれ宙を優しく舞う桜の花弁の美しさは、控えめに言って俗を離れていた。

「良い風です。しかし御当主様が上覧なさり、真希様もお目にかかる立ち合い。是非とも出たかったものですが——、？」

その時、異様なざわつきが貴女の心身を支配した。

何かが起こっている。何かが我が身に起ころうとしている。そんな絶対の予感が貴女を襲った。それは夜見の時とは異なり一層異質な、別次元の虫の知らせだった。

刀使とは命のやり取りを化け物たる荒魂とこなす者。その培った勘でもって、貴女は思いいいに休んでいる周囲の同僚に声を掛け刀を腰の左に帯びた。

「総員傾注、気を付け。申し訳ないですが直ちに持ち場へ急行して下さい」

「え？しかし——」

「どういう事です？ 綿貫さん」

「何も異常が無ければ休憩に戻って構いません。ただの確認作業ですよ。私は決勝会場の様子を見て来ます」

「？ ……了解」

同僚達を後方に貴女は御刀の鯉口を切って『迅移』（刀使の特殊技能の一つ。早く動く）を使用し、駆け、大門を飛び越えた。そして決勝の場が見えると、緊迫の雰囲気身に纏って、『迅移』を使用しながら抜き身の刀を手に持ちこちらへ走る走る二つの影が貴女の瞳に映った。

「——さあ行こう!!」

「……………」

「姫和ちゃん!!!」

見える。空を舞う貴女の瞳に、小さく頷く長髪の少女が。

快活に声をかけ、そして視線を真つ直ぐ前へと向ける少女の姿が、はつきりと見える。

——為すべき事を為す。

——為すべき事が未だ解らずとも。きつとこの先が自分の進む道だと信じている。

そんな眼をしている剣士が。『強い』と全身で表現している剣士達が、貴女の心に映った。

「当代折神家当主御前試合・衛司（まもりのつかさ）——衛門大将綿貫和美（わたぬきかずみ）」

課された職名と役割を己の内に宣言し、しかし果たしてそれは直感であったのか。会場内を守る刀使衆の焦る面持ちが、門を背に着地した今なお視界の端に見えるからか。或いは、抜き身の刀を持ってこちらにひた走って来るといふ一種の異常事態を、御前試合警備の長として看過できなかつたからか。

或いは。

「折神の王門、この綿貫が通しません」

——強い。

この想いが、どうにも止められなかったか。門の守護を担う剣士は静かに、だが間断なく腰の刀を抜いた。

幕間 可奈美たちサイドその1

折神家当主御前試合。

年に1度、桜が舞う時期に行われる刀使達の夢の舞台である。全国に5校しかない刀使育成学校から上位2名が選抜され、総勢10名で覇を競う。

それに優勝し、折神家当主の目に留まれば刀使達の憧れ親衛隊入りも可能だとか。

——折神家当主親衛隊。近年では20年前の相模湾岸大災厄大荒魂侵攻の折、時の当主と共に奮戦し敵の勢いを食い止め江の島まで撃退せしめたという。

当時を体験した元刀使達を含め関係者がこぞってその戦いについて口をつぐむ為、半ば伝説と化しているのが現状であるが、その役職は現役の若い刀使達にとつて憧れとなり、やる気となる。

それは正にこの刀一本だけで立身出世した古の剣士みたいだと、何かの本に書いてあったのを思い出したのだろう。

「う~~~~!!!!ワクワクしてきたよー!!!!」

一人の刀使の少女は両手を挙げて、満身の武者震いを示していた。

「可奈美ちゃん、他の人もいるんだから静かに…」

「可奈美らしいじゃん！美濃関の代表として私の分まで頑張つてよ？」

「まっかせてー!!!」

笑顔焔く美濃関学院の代表である衛藤可奈美。そして柳瀬舞衣は今回の御前試合出場メンバーの中でも上位に入るだろう。全国的に見ても、美濃関は伍箇伝（刀使育成校の総称）において手練が多い。それは現学長の教育方針の賜物かもなあと、美濃関学院代表補欠刀使・安桜美炎は思った。

「しかし悔しい……あの準決勝で集中が切れていなければ、柳瀬さんの隣りは私だったのにい…………っ！」

「うくん、美炎ちゃんもつと集中力を高める稽古をすべきじゃない？」

「え？たとえば？」

「レトロゲームとかどうか。妹が最近始めたんだけどね？スーパーマリオコレクション全制覇とかしてみたら、今より集中力も器用さもレベルアップすると思うの」

「なるほどゲームかあ……………、つてそれ暗に私が不器用だつて言ってる？ねえ柳瀬さん今日なんか毒舌じゃない？もしかしなくても緊張してる？もしかして私のこと嫌い

!?

「……………」

「柳瀬さアん!？」

「為せば成るっ!だよ!美炎ちゃん!!」

「私の決め台詞それ……………」

「ふふ。ごめんなさい、美炎ちゃん」

「柳瀬さアん……………」

頭を撫でられ、美炎は元氣と機嫌を取り戻した。

後に彼女は応援のため額に鉢巻き、美濃関の校旗を振り回そうと決め会場に向かうがそれは美しい長髪の刀使に門前で咎められる事となったとかならなかつたとか。まあそれは別の話。

「とにかく!頑張つてね、可奈美!柳瀬さん! なせば成るっ!だよ!」

◇

折神家本邸は鎌倉、鎌府女学院の隣りに位置している。正門である折神の大門の荘厳さと邸宅の景観は見る者にとっては眼の保養どころか一生に一度は見ておきたい類い

のもので、特にそれは遠方より来る者にとっては眼に焼き付けておくべきレベルの感動があった。

「は〜〜……すつごい」

「綺麗だね、可奈美ちゃん」

「来て良かったよ〜…舞衣ちゃん。あ！警備の刀使の人だ！」

「鎌府の方だね。——あれ？確かあの人、」

「お疲れ様でーす！」

「お疲れ様です。貴女方は美濃関学院の代表者ですね？」

「はい、そうです」

それは縹色の長髪が殊更美しく、加えて体格がスラリとした長身の刀使だった。モデルさんかな？と場違いにも一瞬舞衣は思ったが、微動だにしない彼女の腰と膝の備えと足のスタンスを見てとった後はゾクリとした闘気を感じた。

折神家現当主・折神紫がつい先日復活させた五官司。恐らく、この刀使はその中の一人の——。

「会場はあちらの屋内武道場になります。決勝戦のみ、前方に見えます特設会場での試合となっていますので、是非ともご健闘を」

「はい！ありがとうございます！」

「ありがとうございます。行こっか、可奈美ちゃん」

「うん！」

大門の刀使の佇まいに少し恐怖を抱いた舞衣が可奈美の眼を見ながら先を促す。しかし当の彼女は元気に返事をしたは良いものの、足は全く動かなかった。

「……」

「……？」

「？ 可奈美ちゃん？」

可奈美の眼は鎌府の制服を着た長髪の刀使にのみ注がれていた。——観察？ いや、間合を凶つてる？ また可奈美ちゃんの悪い癖が出たのかな。舞衣はそう思った。

それは的を射ていたが、可奈美の眼に奇妙な懐かしさがほんの少しだけ浮かんでいる事に彼女は気付けなかった。

「ううん、なんでもないよ舞衣ちゃん。さあっ行こー！」

可奈美と舞衣が共に歩く。そして一度だけ、可奈美だけは振り返る。——何流かなあ、あの人。

そんな嬉しさと、楽しさと共に。

◇

「おお！結構広いだねー、この試合会場って。警備大変そう」

「そうだね。でも流石の警備体制だよ。見て？左右近衛の大将、親衛隊の方々まであちらにいらつしやるから」

「あれ？親衛隊の刀使さん達って確か四人の筈だよな？最近制定し直したとか何とか、左右兵衛と左右近衛の」

「残りの方は多分外の決勝会場じゃないかな。決勝戦は例年通りだと、ご当主様が直々に御見えになるって」

「決勝戦!!一緒に戦えるといいね!」

「…………。そもいかないみたい」

「うええ?!」

会場に着いた可奈美が舞衣から対戦カード表を手渡され、その中身を見て頓狂な声を上げながらおったまげる。試合は2ブロックトーナメント式で行われる上、対戦カード表には同じブロック内に可奈美と舞衣の名前があったからだ。

「舞衣ちゃあん…………」

「決勝戦は無理みたいだね。でもお互いベストを尽くしましょう?可奈美ちゃん」

「…………!!」

私、負けないからね！ 可奈美が言う。全力で楽しむぞいつ！といったやる気と共に。絶対に楽しくなるという絶大なる自信を胸に。

「……………そうだね」

それを見た舞衣の両腕がだらんと下がる。いついつでも腰の御刀に、斬るという工程に全身が移行出来る姿勢と構えをあえて可奈美に示す為に。

一挙手一投足 〓 体幹の動き。舞衣のような刀使達にとって身体が動くとはそれだけでなく、武が全身に働く。意識的にか無意識的にかはあまり関係がない。重要なのはどのような場面か。出来るのか出来ないのか。

そんな全身の備えをこの歳（13）で出来る彼女だけの鍛錬と気組みを見て、可奈美は震えた。

「！」

「……………」

これは慇懃である。無礼ではなく。こと可奈美に対してはこれこそが正答だという事を舞衣は知っていた。

—— 貴女に追いつく。貴女と肩を並べて、刀使として共に戦い抜いて往く。そんな氣迫を込めて舞衣は微笑んだ。勝つのは私だと。

素直に、可奈美は怖いと思つた。

「楽しみだね。可奈美ちゃん」

「うん!!」

舞衣と可奈美が笑い合い、相見える。鏡合わせの様に。待ちかねていた様に。気付けば親友二人は同じように構えていた。

——必ず勝つ。

親友であり剣士同士である二人の心はこの時一つだった。

そんな刀使二人の熱い闘気を、伍箇伝綾小路武芸学舎代表の刀使と長船女学園代表の刀使は微笑ましく見守り。鎌府の刀使代表はそんな事よりいけ好かない相方の到着が遅い事に内心腹を立て、平城学館代表の刀使の一人は負けじと闘気を醸し出しながら隣りの相方を見た。

「皆すごい気迫だね、十条さん！」

「……」

その中で十条姫和だけは静かに。誰も瞳に映さず己の刃を心の奥底に隠し続けた。

幕間 姫和サイド

今までの人生において、敵と眼を合わせた事は無かった。

——敵といっても、真の意味で彼女の敵とは今も昔も只一人だけであり、今回剣を抜いて戦い、決勝に進んだのは只々目的成就の為だからだ。

「決勝戦——衛藤可奈美！」

「はいー！」

「同じく——十条姫和!!」

「……」

眼前に会釈だけをする。本当なら叫んでしまいたかった。この身の内に燃え続けている黒い炎のように。

——まだだ。

我慢する。声を出してしまえば何もかもをぶちまけてこの場を怨嗟で塗りつぶしてしまうから。だから、視線は向けない。

まだ向けない。まだ。敵には。折神紫には。

「双方構え！『写シ』！」

「……………」

何も映さない瞳で、機を待つ。勝機は先の先、その埒外。狙うは喉元。突くのは不意。視線は前。

まだ。

「……………」

息を止め、瞬きを止め、まだ足をとめ。彼女は待つ。

「……………」

「始め!!」

僅かに覗く名前も知らない知った事じやない対戦相手の困惑の表情。そして刹那、ついに彼女は初めて怨敵へ向けて、真っ直ぐに視線を移した。

積もりに積もったこの怨嗟の刃。復讐の切っ先。通れ、通れ、柄まで届け貫き通れと。母の仇——取らせてもらう。

我慢と忍耐と過去からの歩みをも止めて。今、十条姫和は全てを置き去りにした。

柊家秘伝・ひとつの太刀

——それは魔劍であつた。



『——確かに有るよ』

——眼にも留まらぬ速さというものが有る。

物体が光を反射し、その反射光を眼の網膜・神経がキャッチし、像を結んで映像として留めるとするのが我々人体の眼球であり脳であるならば。

この魔劍の第一段階は、それらを為しえない速さを得る＝神経系の速度を凌駕する必要がある。しかして人の反応速度限界0.1秒。

『有りえない? いや、有るね』

第一の実現に近付けば近付くほど、眼にも留まらぬ速さは現実として結実する。眼には映つたが五体は反応出来ず何も出来ない領域が。

——つまり。よって、だから我々は眼にも留まらぬ等という人の領域の先を目指すべきなのだ。他人の現実と想像の上を、往かねばならぬのだ。

『姫和ちゃんの強さの秘密?』

この魔劍の眞の第一段階とは、速さに拘ってはこの魔劍の実現は不可能だと悟る事。

必要なのは敵がヒトであろうとそれ以外であろうと絶対に斬れる間合、見斬れぬ『早さ』を得る事であると知る事。

速いなどと云うただかだか生物の脳みそ如きが考察できる範囲ではなくその埒外。森羅万象が包まれている『時間』の領域へと進入する事こそ肝要なり。

この魔劍の第二段階は、眼にも映らぬ早さを手に入れる事。

『まあ…幾つかあるけど、まず闘気がおそろしく静かな所だね。十代の頃ならまだしも、特に今の姫和ちゃんの剣気・闘気の流れから次の攻撃を読む事は誰にも出来ないよ。

気付いたら斬られてたあーなんて、知覚する遙か前に斬られてるだろうね』

——敵の眼に留まる映る事なく、全身を巡る神経・筋肉・血管・第六感すら気付く事なく敵を斬れる。そこまで達すれば、確実に無敵である。

『伊達に長く剣を振ってないわけだよ。精神的にはもう植物の域でしょ。……え？ 劍聖である貴女に勝ち越して存在ですし？』

アホ言わないでっ！ 私の方が勝ち数は上だよ!! ちよつと笑わないでよ舞衣ちゃんっ！ もう泣かされてないってば!!!』

何もさせない。いや、相手がこう来たらこうする等という思考と間合の埒外からの

『迅移』の一撃でもって斬り伏せる。突き殺す。それこそが『深移』。初動から第3ないし第4段階の迅移の発動。

ただ発動し、ただ殺害を行う一つの機構（システム）。

『……え？ ああそうそう、強さの秘密だったね』

それを己の現実のものとするれば敵は何も感じず、何も見えず、何も分からない。それは不意打ち（先の先）の勝機ですらない、超克の剣。故に魔剣。彼女の母方、柊の血のみが為せる剣。

『あとは……そうだね、戦闘の方で言えば——』

——故に秘伝・ひとつの太刀。

『……ふふ。これが最も、厄介だろうね』

彼女は只一つの刃となつて事を為す。

柊家直系の刀使はどのような想定どのような状況でも勝つ。…否、そのような状態になど『時』が移行する遙か前に彼女達は勝つべくして勝つ。

終に抜かせるな。それが、古の刀使達の合言葉。

つまり真相は。

「……——な、」

不可避の、速攻である。



敵の眼に留まる映る事なく、全身を巡る神経・筋肉・血管・第六感すら気付く事なく敵を斬れる。そこまで達すれば、確実に無敵である。

「——いい突きです」

「お見事」

無論、夢だが。

「……——な、」

「我らが王が上覧するこの瞬間、この間合。何かが何かを仕掛けて来るならばこの『時』を置いて他にありません。——ならば、それを見越すのみ」

無論、夢だが。矮小な人間が空想する下らない幻想だが。

「——果てなる高みを目指して、一步一步進んでいく事は可能なんだよ？ 私達にはね」

『迅移』。刀使が使うそれは他者よりも早い時間流に己を任せる技である。1分が60秒であるという常識下ではなく、我々の1分があちらにとっては30秒、いや10

秒であるという常識がもしも有ったならば、

「予備動作なしの3段階迅移による刺突。…たしかに早いですが」

「予め鯉口を隠し切っておいて、おねーさんよりも早く迅移を使って第3に行つてれば、二人掛りでなら何とか防ぐ事は出来るよ。こんな風に…ねッ!!」

——如何にして相手よりも先にそれをこちらに引き出すか。力とするか。間合とタイミングを図れるか。それこそが刀使同士の闘いにおいての備えであり、剣は復讐の為のみと捉えた姫和と、高みを目指し続ける為に剣と我はあると捉えた刀使いと。両者の間にあった純度の差が、糸屑程の、剣速の差となつて勝敗に顕れたのかもしれない。

万全の備えの彼女達こそ折神家当主親衛隊、左右兵衛（つわものどねり）の二大将。刃鳴の巫女の燕結芽と皐月夜見。

「……………!!!」

「よくやった夜見、結芽。お前たちを紫様の脇に控えさせたのは正解だったな」

「親衛隊としての責を果たしているだけです」

「もう早い迅移使えないの？真希おねーさんに斬られちゃうよ？」

「終わりだ。十条姫和」

折神家当主親衛隊の三名が姫和に迫る。

必殺の魔剣を使い、しかし防がれ斬られ体力気力が消耗している今の彼女は正しく死

に体。

もはや何も出来ず、何も見えず、ただ一振りの刃に身を任せるだけのこの少女こそ折神に刃向かった反逆者の末路。

『写シ』が剥がれた生身の姫和は、何も果たせなかつた復讐の剣士はこれからただの物言わぬ土塊へと変わって——

「駄目ツツ!!!」

「……!?!」

聞こえる声。弾かれる刃と刃。そして新鮮な、その瞳に映る世界。

「『迅移』!」

移り行く景色の中で、彼女は初めて自身の決勝の相手を見た。

「姫和（ひより）ちゃん!!」

綺麗な瞳の色だった。十条姫和はこの時初めて、終生の強敵（とも）になる刀使・衛藤可奈美を見たのだった。

「逃げるよ!——さあ行こう!!!」

第4話 人の剣術

当代折神家当主・折神紫が御前試合の直前に旧来の五官司を復活させ、かつその全てのトップに大将の位を与えたのは、それらを纏める自身の地位向上以外の何物でもないだろう。

何故ならその大将五名のうち、四名が子飼いの親衛隊刀使だからであり、その上にこの身が君臨しているとすれば全ては権力発揚、名声拡大、雷霆万鈞である。市井の間人ならば誰しもそう思ったし間違いはないとも思った。

しかし、日々修羅場を潜っている刀使たちは、それとは少し違う視点を持っていたらしい。

——権力だの何だのそんなの私達の知った事ではないけれど、彼女たち五人ならばその位を得ても異議見劣りは全く無い。左近衛大将・獅童真紀と右近衛大将・此花寿々花。そして右兵衛大将・皐月夜見と左兵衛大将・燕結芽ならばと。

刀使としての戦闘において、彼女たちほど頼り甲斐と力の有る刀使はいない。現に、

彼女らが出張った現場で殉職者は一人たりとも出ていない。奇跡的に。——いや、それこそが実績。

復活した五官司、すなわち五衛府のトップとは他の刀使達から絶大の信頼を置かれていっている事に他ならず、無論貴女もその例に漏れてなどいなかった。

——あの人が衛る門を、抜けるわけがない。

貴女の部下も上司も今この瞬間そう考えている。

五衛府最後の将である衛門大将。綿貫和美が、可奈美たちの退路に立ちはだかつていた。

「鎌府の刀使か……!!」

「私が相手をするから、早く行って!!」

「——美濃関の刀使。成る程、糸見に勝ったのはどうやら貴女のようなだ」

臨戦。姫和と可奈美が拔身の刀を貴女に振るう。

『写シ』はとつくに出来ている。当たり前前である。何故ならこれは刀使の迎撃ではなく出撃であるからだ。

「しかしそれは、御前試合の話。我ら護剣切つ先の鎌府衆——。その刃（やいば）を見るがいい、賊共ツ!!!」

「……………っ!？」

「安行ッ!!」

貴女の御刀・大和守安行（やまとのかみやすゆき）が、露わになった美しい刀身と鎧が、可奈美と姫和の振るう剣閃の全てを弾きそして受け流した。

更には敵の斬撃の運動エネルギー（力）を利用し、速度を上げた貴女の怒涛の反撃が賊に向かう。相手の攻撃を刀で防ぎ、そして態勢を整え攻撃するのではない。

攻撃を防ぐ⇨こちらの攻撃態勢。それを可能にする貴女の体捌きと刀の制御、刃筋の向きの正解（correct）でもって攻防一致という理想は現実となる。

「苛烈な剣っ……、——この人!!」

「——ッッ!!」

それはさながら激流の只中滝を下る鯉のようで、畢竟、並みの刀使ではない。…衛藤可奈美と綿貫和美。互いの声にならない声、紫電雷鳴の如き鋭い吐息が剣士二人の間を揺らしに揺らし、雌雄という名の絶対的な決を下さんと牙を剥く。

貴女の受け流し、斬撃は重く可奈美に疲労を蓄積させていくものであり、その全てを受けて流して弾いている彼女に数多の隙を生ませた。それを狙わない貴女ではない。貴女の攻撃の手段は無限と言わぬまでもそれに近い有限であるが故。

——しかし、

「……まだ立ちますか」

「…やあああああああ!!!!」

隙を帳消しにして余りある幾度も重なる刀と刀の打ち合わせ。

切っ先、物打ち、鎬、錨柄、茎、そして刃。御刀の全てがギシリと唸って打ち合わされる剣戟の嵐。

普通の刀であれば、どんなに上手く使用しても耐久が先に底を尽くだろう。しかし刀使だけが持つ武器は、どんな事があろうとも折れず曲がらず刃毀れせず壊れずの御刀。だからこそ出来る芸当である。

そして護剣の鎬と称される美濃関刀使であり、剣士・衛藤可奈美には即応学習という能力がある。相手と打ち合えば打ち合うほど、可奈美は相手の太刀筋から技に至るまでを学び取り、そっくりそのまま返す事が出来る。

正しく天才のそれと言うのは易いが、寝ても覚めても止めない修練稽古の果てに至っただろう事は想像に難くない。

それが分かって貰えて嬉しいのか。堪えきれない笑みを浮かべる可奈美だけの妙技を見て、貴女は瞬間素直に称賛した。

「見事。まさか私の剣を、」

「よく見る。よく聴く——よく感じ取る!!」

正念場の地を蹴り、振りかぶった両手を刀ごと振り下ろさんとする可奈美。対して貴

女は刀を鞘に納め、しかし柄頭で可奈美の正中線を攻めつつその場で静止した。

——抜刀術。この近い間合で？

疑問を浮かべる脳みそとは別に、柄頭からの圧を感じた可奈美の手足は留まらず動き、貴女の右手を片手で押さえつけた。貴女が柄に添えた右手を。

「——!?!」

いついつでも抜刀を為すための右手。それを封じ、可奈美は残った片方Ⅱ刀を握る手を間断なく振り下ろし、ながら見た。

押さえたこの手が時計回りにグルリと回り、拘束が外される相手の右手を。鞘ごと前進し、刹那こちらの目と目の間へ激しくぶつかる攻めてきた相手の柄頭を。

思わず、可奈美は攻撃を一拍留まらせた。

それは何故か。顔面への攻撃でさえも、『写シ』の上からでは僅かな痛みしか刀使には及ぼさない。しかし不意を突かれた事、勝機を間違えた事、そして行動全てを貴女に誘われた事を本能的に理解してしまった事が、可奈美の攻撃をほんの僅か留まらせた。

その結果は。その返礼は。

相対する剣士は、十文字の軌跡の抜刀でもって応えて来た。

同段階の『迅移』を使用した刀使同士の勝敗は人の剣術のみが勝敗を分ける。間合を捕捉したのはどちらか、捕捉させたのはどちらか。騙されたのは貴女か彼女か。勝機の

選択の良し悪しは。

二人だけの世界の中で。可奈美は腹を、貴女は右腕を斬り払われていた。

「今のうちに行こう！ 姫和ちゃん！」

「……………」

世界が数多の生物でひしめく貴女達の時間（現実）に戻る。頷いた姫和と可奈美は素早くこの場を後にした。貴女を瞳の内に宿して。

「——」

…利き腕ごと斬り飛ばされた御刀を貴女は見る。『迅移』と『写シ』は御刀を媒介にして刀使に与えられる力。それらが解け、五体満足の生身となった貴女は口中で呟いた。

流石と。

「他者の剣をあそこまで模倣するとは。しかしまだ、あの剣はまだ息苦しい」

とぼとぼと歩き、遠く転がった愛刀を手にする。

賊達が大門を飛び越え消え去った方角を眺めながら、まるで鳥のようだと貴女は思った。羽を広げた縦横無尽。自由な剣。それこそがきつとあの剣士のの。

「幼い鳥。きつと、今が貴女の本領なのでしょう」

試合だの荒魂だの何だの、いずれそれらは剣を曇らせ何も映せなくさせる。そういう風になる。

だからきつと自由自在こそ彼女の剣。羽ばたき、心の赴くままに振るう。己の真を世に顕し、憧憬を世人に抱かせ一歩一歩遙か彼方の高みを目指す。

それこそが彼女の剣術（ブレイドアーツ）。彼女だけの、剣の聖に至る道。

「もしもし」

『——— 負けたか』

「はい」

『予想外の出来事だな？』

「全て順調、予定通りです」

『ではどうだ？あの刀使は？』

「確かに、あなたの眼に狂いはありません。全てを飲み込み吸収し力としている。流石は剣聖の———」

『次の一手には沙耶香を用いる。お前はそれを監視しろ』

「了解」

『沙耶香が負ける程であれば、親衛隊は出張らざるをえなくなる。強大な刀使はその存在自体が危険だ。それが伍箇伝を離れた野良となればな』

「では当初の予定通りに。…糸見が優った場合は？」

『その程度の刀使に用は無い』

「承知しました。お気を付けて」

『誰に物を言っている』

「失礼します」

電話を切り、貴女は心待ちにしていた人を見つけたような顔で笑った。

「次に逢う時が楽しみですよ。ね？安行」

大和守安行の刀身が、嬉しそうに貴女の鞘へと納まった。

第5話 思惑



「負けたか」

言葉にはいつも畏が張り巡らされている。鎌を掛けるという風に、そしてどんな状況に転がっていたとしても、こちらの有利に運ぶように。

『はい』

「予想外の出来事だな？」

『全て順調。予定通りです』

電話口から聞こえる女の部下は期待通りの結果を出した何かに対して、どうやら嬉しがっているようだった。

「ではどうだ？ あの刀使は？」

『確かに、あなたの眼に狂いはありません。全てを飲み込み吸収し力としている。流石

は劍聖の——』

「次の一手には沙耶香を用いる。お前はそれを監視しろ」

『了解』

劍の事となると必要以上に饒舌になるのが部下の長所であり短所。それを遮る。

「沙耶香が負ける程であれば、親衛隊は出張らざるを得なくなる。強大な刀使はその存在自体が危険だ。それが伍箇伝を離れた野良となればな」

『では当初の予定通りに。…糸見が優った場合は？』

「その程度の刀使に用は無い」

『承知しました。お気を付けて』

「誰に物を言っている」

『失礼します』

電話を切つて、女は眉間に寄つたシワを怒りのそれへと変えていた。

「——顔立ちだけでなく、心も親に似ていたとはな」

忌々しい。そう呟いて女は自身を抑え殺すように強く拳を握る。復讐の為に、自身の心を写し変えるように。

決して、誰にも悟られぬように。

折神家当主執務室の出入り口は莊嚴な装いである。

黒を基調とし、毎日綺麗に磨かれている扉の取っ手は金色の装いで常に美しく、真つ直ぐ電灯を反射する様はこの部屋の主に相応しい色である。

「現在会場の刀使達には待機命令を出しております、紫様」
「分かった」

もしも常世全てを塗りつぶせる色があるとしたらこんな色だろう。これ以外に、人は何も見る事は無い。それはとても気味が良かった。

「加えて会場警備担当の刀使達には厳戒態勢を維持させています。…そして逆賊・衛藤可奈美と十条姫和の行方は未だ知れず…」

「ああ」
「報告は以上ですわ、紫様。…無礼を承知で申し上げますが、本当に追っ手を差し向けずについてよろしいのですか？」

「その通りです。追うなどの御命令とはいえ、何もせずというのは親衛隊としての責が」
「いい。追っ手は出すな、追う事も許さん。何故ならこれから二羽の雛は、この世を回る。見えない膿を掻き出しながら。」

だから今はそれよりも、美濃関学院と平城学館の学長をただちに召集しろ。折神家当主直々のお願いだとな」

「…取調べというわけですね？」

「事情聴取に決まっているだろう。私を何だと思っている」

「…失礼致しました」

「紫様っ!!!」

その金色はとても好みの色だとも折神家当主は思った。その出入り口が、勢いよくバアン！と開かれるまでは。

「——雪那。お前を呼んだ憶えは無いが？」

「知らせを聞き及び走って参りました!!」

「これは高津学長。一体何用ですの？」

御前試合警備責任者の貴女から話を聞こうとしていた折神家当主親衛隊の面々は、所用があつて県外に居た筈の鎌府女学院学長・高津雪那が突如現れた事に驚愕した。それは決して、面には出さなかつたが。

いやしかし、

「何用も無用もあるか親衛隊!!!私は折神の膝元鎌府の長であるならば、大事にあつて遅参など許されるか!!」

——いやでも走って来たって。でもそれ位やってのけそうなのがこの女傑だなと、左右近衛大将・獅童真希と此花寿々花は思った。

「綿貫ツツ!!! 貴様が居てこのザマは何だ!!!」

「…申し訳ない限りです。学長」

「紫様の御前です。鎌府学長」

止まるわけも無いが、皐月夜見が小さく諫めた。

「数多いる刀使の中で貴様を衛司に任命したのはツツ!! 刀使としての貴様の実績と立ち居振る舞いを鑑み! 世間が注目する御前試合において申し分ないと踏んだからだ衛門大將!!!」

そして我らが王たる紫様に、鎌府の体たらくを見せつける為ではないツツ!!!」

「——、面目次第も御座いませぬ。重ね重ね申し訳ない限りです」

「紫様!! 反逆者討伐には何とぞ我が鎌府を!!! 伍箇伝護剣の切っ先の面目躍如、今度こそご覧に入れましょう!!!」

「駄目だ」

「駄目——ですか?!!」

親衛隊第四席刀使・燕結芽はこらえきれず吹き出した。

「奴らはまだ泳がせておく。今はあえて手を出さず美濃関と平城の学長、及び会場に居

る刀使達に事情聴取を行う。お前はもうここで待機している」

「…まさか、裏で誰かが糸を引いていると?」

「可能性は潰す」

王の言葉は絶対。雪那を含め、この場に居る剣士達は皆綺麗に頭を下げた。そして地面だけが瞳を覗いているその中で、一人の剣士は口中でのみ、

——想定通り。

そう呟いた。



「高津学長。衛司としてのお役目全う出来ず、加えて折神の大門を逆賊に通らせるという失態。…重ねて謝罪致します。弁解の余地もありません」

「そうだろうな。そんなものなど刀使にはない。相手が自分より強いからといって勝てないからといって逃げていい理由も弁解なども、お前達には存在も許可もない」

貴女の謝罪に対し雪那は鋭く視線と共に咎めてきた。

先程まで居た当主執務室を出て、貴女は居ても立ってもいられず鎌府学長に頭を下げています。鎌府の刀使として最上級生であり衛門大将という立場が無視という名の恥知

らずを許さなかった。

「賊は御前試合決勝まで勝ち上がった相手。つまり、現伍箇伝刀使の中で最強の剣士達。だからといってお前が負けていい免罪符にはならん。分かるな？綿貫」

「……………」

「分かる——な？」

雪那の瞳の色を執務室の外廊下、ガラス窓から入る陽光がひどく濃くさせて貴女を領かせる。

目力と威厳あるその様は仰々しく言えば神の啓示にも似て、遠巻きに見ている人間、すれちがう人間は恐るべし鎌府学長と思わざるをえなかった。

次の行動という指針を秘密裏に授けようとしている場面にしては。

「ベストを尽くします」

「ベストか。では万が一あの逆賊どもが再度ここに、紫様に危害を加えんとすればお前は どうする」

「勝ちます」

「どのように」

「我が剣我が身の、全霊でもって」

貴女は嘘偽りない言葉で返した。

「……」

……。

「任務に戻れ綿貫。刀使として、今為すべき事をしろ」

「はい」

「お前は最上級生だ。後輩の面倒も恙無くな」

「はい」

目配せと雰囲気作りが終わって、貴女と雪那は別れ別れに歩き出す。その爪先の向きは正反対だが、行く先への道のりはひどく似ていた。

幕間 可奈美たちサイドその2

『続きまして、皆さんお待ちかね刀使さんのニュースです。刀剣類管理局より、本日も行われた折神家当主御前試合は滞りなく終了したとの情報が入ってきました。ただ、どの校のどの刀使さんが優勝したのか等は後日改めて公表するとの事で、どうやら年に一度の晴れ舞台は、当事者だけでなく関係者各位にとつても手に汗握る熱き試合であったものと思われまます』

——逃走のさなか。風に乗って聞こえるテレビの音を、一人の少女は耳をそばだてて聴いていた。彼女の刀使としての力はその気になれば聴覚にも及ぶ為、たとえ今は刀を抜いて戦えなくとも現状の分析・把握は出来るといふ事だろう。

道行く人と景色を鋭く睨む瞳を隠しながら。逃亡者・十条姫和は裏路地へと入っていった。

「……………まずいな」

「何が？」

「ここは人目につきすぎる。木を隠すには森の中と言うが、緑森の中に紅葉の木が一つだけあれば隠す意味がない。ここはもう離れて、高速道路に乗るトラックの荷台にでも便乗しよう。遠方であれば、宿も取りやすい」

「オツケー！」

御前試合決勝、すなわち折神紫暗殺未遂事件から数時間後、某所にて。姫和は何度目か知らない怪訝な瞳を彼女にくれていた。

「……いや、おい待て」

「え？」

「お前。いつまでついてくる気だ」

「うくん……と、気が済むまで。かな？」

「迷惑だ」

天下に名を轟かす折神家。その当主の暗殺未遂という誰がどう見ても反旗を翻す行為をした姫和と、彼女の逃走の手助けをしてしまった可奈美は静かに一旦身を隠し、休息を取っていた。

少しは体力が回復したのだろう。もうついてくるな邪魔だからと、姫和は可奈美に強く言い放っていた。

「だって姫和ちゃんの事放っておけないんだもん！」

「…私はずっと独りだ。その方が気楽でいい」

「そんなの駄目だよ！」

「お前は恐くないのか？ 天下の折神家当主に刃を向けた私が。自分のこれからの人生が。刀使として、もうまともな道は歩めないぞ」

「恐くない！…って言えば嘘になる、けど、それ以上に姫和ちゃんの事故っておけないもん！！あとちゃんと試合したいから！」

「…物好きめ。どうなっても知らないからな」

——妙な連れ合いが出来てしまった。観念しながらそう思って、可奈美の表情を窺う。そこに迷いは欠片も無かった。

………

「よし。運よく鎌倉を離れる事が出来たな。

まずはこの御刀と制服を隠せる服とケースを買って、その後はそのこのホテルで夜を明かす事にするぞ」

「ここって東京だよな？ ほら見てうわっはあ…！たっかいタワー！」

「……おい」

「え？あ、ごめんうるさかった？」

「それもあるが、今はそうじゃない。さつきから嫌でも目に付くから言っておいてやる

が。——いつまで擦っているつもりだ？」

「? 何が？」

「その横腹」

姫和が指差すと、可奈美は目を見開きながらその場所を凝視した。古傷も何もない無傷なままの身体と服が、そこにはあつた。

「……………もしかしてずっと擦ってた? 私」

「気付いてなかったのか?」

「いや……それが全然」

「あの鎌府の刀使に斬られた箇所だろう。あの間合で居合を使うなんて只の馬鹿かと思つたが、柄手を掴みに来ることを最初から想定していたのなら話は別だ」

——誘われたな。そう言うと、可奈美は大きく頷いた。

「強かつた!」

「写シを剥がされながらよく攻撃を止めなかつたな。一步間違えれば真つ二つになつていたぞ。お前は」

比喩ではない。あの十文字の斬撃は躊躇も容赦もなかつた。

『写シ』があろうとなかろうと、あの鎌府の刀使は本気で御刀を抜き、可奈美を斬殺しようとしてきた。

「全然憶えてない。無我夢中だったから」

「…変な奴だな。只の死にたがりなのか？」

「そんな事はないけど」

擦るのを止めて、深呼吸を一回。頭の中で闘いをシミュレートしながら、次はこうしてみようかなと可奈美は思った。それはまるで呼吸のように、血の流れのように。あくまで自然体であった。

「あの人何て流派かな？ 姫和ちゃん知ってる？」

「知るわけないだろ」

——こいつと話していると疲れがたまっていく一方だ。もう今日は寝て、体力の回復に努めよう。『深移』の行使は体力の大部分を消費する。…正直、もう眠たくて眠たくて敵わない。

「寝る」

「ええ?! もう? 夜ご飯は?! もっとお話ししたいよ私は?!」

「……………」

「姫和ちゃああん?!?!」

おどけてしゃべっていないながらも、この刀使が今抱いている本音は只一つ。姫和はそう確信する。

——次は私が必ず勝つ。

ずっとそんな眼をしている可奈美を遮って、姫和はさっさとホテルに入るやいなや眠りにつく為に布団を敷き始めた。

「……………」

自分も含め、真剣勝負において次などある筈もないが、心底そう思えるのならばそれは強さ。ならば私もこいつのように次を切望すべきだろうと、腑に落とそうとして頭（かぶり）を振る。

——そんな必要はない。亡き母の為に。

「…為すべき事を…為すんだ」

滅殺の誓いは今もここに。永久に、この復讐の念が潰える事はないのだと。姫和は自身にそう願いを掛け続ける。それが消えたら、もう何も無くなってしまふから。

「ねえ、飯は姫和ちやああん?!?」

…そしてやはりこの変な連れ合いは変な奴だなと、それだけは眠る前に腑に落ちた姫和なのだった。



『ではその子達を見つけて匿えばいいんですね?』

「ええ、貴女しか頼めないの。お願いできる?」

『勿論!任せて下さい!それに何だか奇妙な縁も感じてますから』

「……縁、ね」

名付けるとしたらウキウキという風な声を電話口から聞き、美濃関学院学長・羽島江麻は神妙な顔をして頷いていた。

ついに事態が動いてしまったという諦観にも似た、まるで断崖絶壁の上からの逆落としに。伸るか反るかこの計画を成功させ、彼女はかつての友の仇を取る為に行動していた。

『自分の学生の頃を思い出すような。そんな個人的な縁ですよ』

「成る程。モチベーションが高くて何よりだわ。頼むわね、累」

『了解です、江麻さん』

「——ただ、これから私は折神家に拘束されると思うから逐一連絡はやれないと思うの。紗南達は紗南達であつちが忙しいだろうし。…だから準備が出来次第、すぐにあつちへ二人を送ってね?」

『お任せ下さい。自分の身とその子達を護りつつ、任務を全うしますから』
「…ありがとう。じゃあ一旦切るわね？」

『とんでもないです。あ！すいませんちなみにもしもですけど、…東京方面以外に逃げちゃつてたらどうしましょう？』

『大丈夫よ。それは無いから』

『了解です。では後ほど』

………

「江麻ちゃん。鎌倉までご苦労さんやね」

「いろはさんこそ。お久しぶりです」

「ほんと、久しぶりやねえ。かつての仲間同士でお茶する為の紫ちゃんからのお誘いやつたら『迅移』つこても馳せ参じるのに。…詰問の為の緊急招集やなんて、嫌なこ
とやねえ」

「もう私達には迅移は使えませんよ、いろはさん。…口惜しくはありますが」

「ふふ、冗談や冗談。若い子らの頑張りを支えるんが今のウチらの役目やからね」

「……はい」

江麻はかつての先輩であり戦友である五條いろはに目礼した。

今や互いに伍箇伝の学び舎を預かる立場になったが、あの日の、20年前の戦いはい

つも彼女達の心の中に煙のように燻り続けている。

それは絆というのだろうか。それとも枷か。——それを決めるのは、

「平城学長、美濃関学長。ここまでのご足労、感謝致します」

「あら真希ちゃん。ご無沙汰やね、調子はどない？」

「それなりです。お二方はすぐさまこちらに。紫様がお呼びです」

「ええ。分かつてるわ」

「勿論や」

促され歩きながら、名前を変えたかつての母校（鎌府）が視界の端に見えて。いろはと江麻はもう会えない二人の友を思わず偲んだ。それは決して、たとえ心を読む化け物であっても判らないよう巧妙に隠していたが。

「久しいな。二人とも」

……それはこの人も同じであればよかったのにと。彼女達は切に願って止まなかった。

「御無沙汰しております。局長」

「お久しゅう。紫ちゃんはホントあの頃と変わらずで何よりです」

「…この度はうちの生徒がご迷惑をお掛けし、真に申し訳なく」

「定型の謝罪や世辞はいらん。だから単刀直入に訊く。衛藤可奈美と十条姫和、この二

人の今回の行動の裏には誰がいると考える」

「…。申し訳ありません、心当たりは何も」

「こちらと同じくです」

「そうか、知らないか。ではこれよりあの二人を確保するようこちらは動く。両学長はここに滞在し、この件に協力しろ」

「承知しました」

「しかし真に解せない事が一つある。——平城学長、貴様に預けておいた御刀・小烏丸は所有者もなく適合する者もいなかった筈だ。なのに、今回それを使っている刀使がいる。妙だな？あの御刀の適合者はここ20年現れていない。あの柊箒を除いてな」

それを聞いて、いろはは平身低頭に近い仕種で謝罪した。

「報告が遅れまして申し訳ありません。小烏丸があの子を選んだんです」

「？小烏丸、ですか？」

何故今その御刀が？ 江麻は初耳という風な顔と声で訊いた。

「逃亡者の一人である十条姫和の御刀だ。そして衛藤可奈美は千鳥の適合者。何とも奇妙な縁が感じられるな？美濃関学長」

「…事が事でなければ昔話に華を咲かせたかった所ですが。今は彼女達の動機と行方を調査する事が先決かと愚考致します」

「違くない。では中央作戦指令室に移動願おうか。鎌府学長は既に来ている」

「承知しました」

「そうですか、流石雪那ちゃんやね」

——呼んではいなかったのだから。

当代折神家当主は嫌そうに呟いたが、それ以外の者達はどこか嬉しそうに言ったのだった。

第6話 勝つ為の

——相手の防御を打ち上げてから、斬る。そう考えた瞬間だった。

予備動作として左脇をほんの少し上げた時、自身が認知してもいない僅かな隙間。思考の間隙。

相手の刃がそこにスルリと入り、そのまま上がる腕を斬り上げられて御刀を消失。『写シ』も消え、それでも刀使はまだ戦えるが、これは歴とした継戦能力の消失である。であるならば試合である以上敗北以外の何物でもない。あの状況を百人が百人見れば、皆同じ判断を下すだろう。あの状況を百人が百人見れば、皆同じ判断を下すだろう。

あれは糸見沙耶香の負けだと。

「……………」

すぐさま終わらせる。

試合の開始時、沙耶香はそう念頭に置き、必殺である縦一文字の斬撃を放っていた。文句なしの初太刀だったが、相手はその更に一枚上手であり受け流され、どのような攻

撃も軽くないなされてしまっていた。

そしてあの結末。終わってみれば終始相手のペースに吞まれていて、沙耶香は利き手が空を掴む手の内をジツと見詰め続けていた。

——彼女の剣は、あの美濃関の刀使に全く通用しなかったのだ。

「いい？確かに伝えたからね。学長も来てるから」

「……………」

自分を降した美濃関の刀使と、平城の刀使が御前試合会場にて折神家当主に狼藉を働きた逃亡した。

予選で敗れ、刀使の待機室で正座していた沙耶香は同僚に告げられたその情報を聞き、しつかりと頷いた。

しかし傍から見れば、それはいい加減に小さく頷いて、こちらの話を本当に理解しているのかと問い質して余りあるものだったが、いつもの事だと力づくで腑に落とした鎌府の同僚は素早く身を翻した。

——こいつの考えている事など分からない。同僚は視界だけでなく思考からも沙耶香を消失させていった。

「……………」

独りきりに戻った部屋で、沙耶香は正座を崩して立ち上がり、刀を正眼に構えて眼を

瞑る。想起するのは美濃関の刀使との剣戟。自分が負けた理由を探す為に。

「——分らない」

何度シミュレートしても、今度こそ自分が勝つ未来しか見えない。ああ来たら、こう来たら。文字通り返す刀で斬り伏せる事が、今度は出来ると。

再戦すれば必ず勝つのだと。……でも、

「——無い」

…自信が無い。それが果たして出来るのか？本当に果たせるか？相手は自分の思ってた通りに動くのか？

閉じた目蓋の裏側で、鎌府刀使・糸見沙耶香は暗中を模索していた。

「沙耶香」

ミシリとした重みのある声が目蓋を開かせ、その先にいる人物を沙耶香は捉えた。

「……、はい」

「こちらに来なさい」

鎌府学長。すなわち彼女の上司である高津雪那が視線と声で命令する。

「……無沙汰しています。学長」

「挨拶は後よ、沙耶香。稽古中悪いけれど、早速貴女には任務よ」

「はい」

「二日後、貴女は東京に立出。紫様に刃向かった逆賊どもを討ち取りなさい」

「…了解」

「聞いたそのような表情だけれど、二日後と言ったのは現在行われている刀使達を中心とした事情聴取、及び逆賊の現在地探査が終了するのが大体それ位だからよ。いい？我が王たる紫様に御刀を向けるなど、そしてそんな輩を野放しにするなどあつてはならない。これは我々が果たすべき重要な任務なの。何か質問は？」

「ありません」

暗中であつた沙耶香の脳内はまるで雲ひとつ無い快晴へと急速に移行していた。

任務は果たすべきもの。討てと言われた敵は倒すもの。敵は斬るもの。自身が刀使であるならば。それが彼女の今までであつたから。

「御前試合には敗れてしまったけれど、任務成功率100%の貴女なら難なくこなせる筈。一人で為し遂げなさい」

「了解」

彼女の上司は満足でも不満足でもない表情で頷いた。



「綿貫さん聞きましたか？ あの糸見が単独任務に就いたって。しかも学長直々のご指名で。やっぱりお気に入りには違いませんね」

「単独任務ですって？」

「ええ」

前代未聞、折神家当主襲撃から二日が経った頃である。

事情聴取を終えた御前試合の鎌府刀使衆（警備担当）達は母校に戻り、ある者は疲れを取る為に風呂場へ、ある者は自室のベッドへ、ある者は日課の稽古へと向かおうとしてしていた。

その例に漏れない貴女の元に、耳が早い同僚の刀使が素早く顔を寄せて、周囲の言う所のいけすかない後輩の事を告げていた。

「——妙ですね。我々の仕事は最低でもツーマンセルの筈。…どういうことですか？」

「さあ？ 糸見は学長一のお気に入りですから。知った事じゃありませんよ」

「……………」

「でかい失敗でもすればいいんですよ。あんな気味の悪い子なんて」

つまらない表情を表に出さないように、貴女は一目散にその気味の悪い子の元へと向かった。

「糸見!!」

鎌府女学院内の駐車場兼駐輪場。そこに糸見沙耶香はいた。

遠出の任務を担う刀使達は皆ここから任務に臨む為、ここに居ると考えた貴女の読みは当たっていた。鎌府は折神家本邸と隣り合っていて、それ故に刀使専用の設備や待遇は他の伍箇伝よりも優遇されているからだ。

すぐに来る専用車を待っているのだろう、手持ち無沙汰の彼女がこちらを向いて会釈した。

「探しましたよ糸見。どういう事です、単身で賊に立ち向かうなどと。しかも相手は御前試合で、貴女を降した刀使との事ではないですか！」

「……。誰から聞いたの？和美」

「巷はもう噂で持ちきりです。人の口に戸は立てられません」
「そう」

何も映さない彼女の瞳。しかしこちらを向く顔の表皮は迷いの色でやや濡れていて、だが自分に間違いなど無いと真皮はひどく乾いていた。

——だって仕事は為し遂げねばならない。それが仕事というもので、他は知らない。少なくとも自分はそう捉え、考え、そして修めてきた。命令されればそれを成す。それだけを思ってきた。他はどうあれ。完璧に、努めて、それが刀使。それが価値。

そんな沙耶香の瞳の無色が、貴女の瞳に反射した。

「和美。勝てるかな」

「……………」

洩らしそうになった声を、貴女は努めて噛み殺した。

「一度立ち合ったけど、あの人、強い。多分今までの誰よりも。試合でも実戦でも」

「…無想の貴女よりも。ですか？」

「うん」

無想とは沙耶香だけが行使できると噂されている、『迅移』の特殊形態の事である。

「勝てと言われたのですね？ 高津学長に」

「うん」

「たった一人で。それが任務だと言われたのですね？」

「うん」

「——勝ちたいのですね？」

「うん」

弱音と書いてある沙耶香の表情が、答えと同時に何かを宿し直して頷く。その様を見て、貴女は我慢した。

「成る程。では私も一緒に行きます」

「だめ」

一人でやれと言われたから。沙耶香は眼を逸らさずにそう続けた。

「話を聞きなさい糸見。ここに居るといふ事は、足は必要だといふ事でしょう？それを買つて出ます。これは必要経費ですよ」

「……。だめ」

「勝てるかと私に訊いた時点で、一人では勝てないと言っているようなものです。貴女が馬鹿でないのなら、一人で抱え込むものではありませんよ。暇な先輩の一人ぐらい頼りなさい」

「……」

明暗の色が貴女と沙耶香の瞳にうつる。しかしその発生源が何処なのか、沙耶香だけには分からなかった。

「……………。よろしく、お願いします」

小さく、しかししっかりと頭を下げる沙耶香を貴女は見つめる。馬鹿だなど、貴女は不意に思った。

——何を考えているか分からない？気味が悪い？この子が？

「可愛い後輩の為です。任せなさい」

こんな強さと意志に溢れた刀使。稀有以外の何があるというのだろうか。理解できずして何が剣士であるのだろうか。刃を、この眼を見れば全部分かるだろうに。

「しかしその前に、まずは一つ」

勝ちたいと。こんなにも発露しているのに。

「……？」

「稽古が要りますね」

勝つ為の。貴女はそう言つて、もう我慢せずに笑つた。

第7話 渴望

鎌府女学院の校庭を歩いて、沙耶香は少し憤りのような感情を声に出していた。

「和美。私は急いで東京に向かわないといけない。…稽古は大事だけど、今はそんな時間が、」

「『迅移』を使います。問題ありません」

対する貴女は何も問題はない事を伝える。もつとも案の定、100%信じてはくれなかったが。

「問題しかない。『迅移』は発動者の時間流を異にするけど、あくまで瞬間的な物。

…もしかして和美は今が永遠に続けばいいと思っっているタイプなの？個人が抱く思想や信条は自由だけど、押し付けるのは私、よくないと思う」

「まあまあ、聞きなさい。貴女と同じく、私もあのみ濃閑の刀使とは戦いました。あの者の天賦の才と努力の跡は眼を見張るものがある。現時点の貴女が勝つ事は容易ではありません。苛烈に打ち込んだとしても、転じて応じられて終わるでしょう。」

よつて必要な技と専心は、相手に触れさせず疾く斬ること。それを会得しなければなりません」

「……………負けたの？和美」

「あの段階では」

嘘でしょう？ 沙耶香はそんな表情をしながら貴女に尋ねた。

…勝つ為にはどうすればいいか。それを追究している貴女の事を、稽古を通じて理解している沙耶香だからこそその表情だった。

「さあ、着きましたね。早速始めましょう。よろしくお願いします」

「……………分からない。和美は私に何をさせたいの」

「勝たせたいのですよ。戦に」

「戦に……………？」

二人が辿り着いた場所は鎌府の古い施設だった。

その建物はこぢんまりとした修練場であり、室内は衝立（ついたて）でスペースが確保してあった。

「糸見、貴女も同じく掛け声を」

「…？ よろしく、お願いします」

こんな場所に来るのも施設を見たのも初めてなのだろう。沙耶香は恐る恐るお辞儀

した。

「ここでは他人の稽古を見てはならないという暗黙のルールがあります。声掛けはその誓約。」

かつては高津学長もここを利用し、20年前の相模湾岸大災厄を生き抜く力を得たという伝説が、あるとかないとか」

「こんな所初めて見た……」

「自分の剣を見られたくないと思う刀使は現代では減少傾向にありますからね。我々の仕事は連携とカバ―命。流派を隠す一匹狼はチームワークを乱します。それは致命ですよ、守るべき市民とチームの」

まあそれはさておき。貴女はそう言つて御刀を抜き、『写シ』。沙耶香に向けて大上段に構えた。

「糸見、貴女も御刀を構えて『無念無想』を」

「……………」

有無を言わせない貴女の声と構に、観念した沙耶香は言われるがまま『写シ』、『迅移・無念夢想』を行使した。

「私の打ち込みよりも疾く私を斬ってみなさい。出来ますか？」

「出来る」

それが刀使だから。沙耶香は言いきった。

「その意気です」

「……………」

貴女と沙耶香は同時に、縦一文字に斬り込んだ。

御刀同士が空中でぶつかる。切り落としを試みた沙耶香の斬撃は剛力と言って差し支えない威力だったが、しかし力負け押し切られ、貴女に面を斬られていた。

「もう一度です」

「……………」

頷く。『写シ』。しかし今度は斬撃を咄嗟に防いでしまい、自分の御刀の鏢を自分の額に強打して写シが剥がれた。

「防ぐのではありません。斬るのです。私よりも疾く」

沙耶香は迅移の段階を上げた。貴女もそれと同時に段階を上げる。

——迅移を行使しての刀使の斬撃は、それを行使していない人から見れば超高速と言つて差し支えない。しかも瞬間的にしか使用できない通常の『迅移』とは違い、沙耶香の『迅移・無念無想』は持続的に使用する事が出来る。

それは避けるのも受け止めるのも至難である超高速の鉄の塊が、絶え間なくこちらに襲撃してくるといふ事。通常ならば貴女はジリ貧、敗北は眼に見えている。しかし、

「——っ?!」

「どうしました?糸見。疲れましたか?」

迅移の最中、沙耶香は驚愕した。

自分と全く同じ時間流の中で、今も変わらず自分と会話をしている貴女の顔を見て。危うく無念無想を解きかけてしまう程、沙耶香は驚愕でもって貴女を再度凝視した。

「……。無念無想?」

「貴女だけが使えるものだど誰かに言われましたか?」

「…聞いてない」

「今まで誰にも訊かれた事がありませんからね」

瞳から滲み出る独特なピンクスピネル色の光は、この迅移特有のもの。

沙耶香は自身のこの能力を誇った事も強さの縁(よすが)とした事も無いが、他の刀使もこれが出るといふ事を今の今まで知らなかったという眼前の事実は、彼女をひどく狼狽えさせるには充分すぎた。

『無念無想』を使用する刀使が複数いる場合のみ、その刀使達の時間は留まります。誰かが無念無想を解かない限り、我々は言わば凍った時間の中で稽古を続けられる。さあ、やってみせなさい」

「——うん」

『迅移』とは異世界である隠世より湧き出す力の一端。

刀使とは異世界の力をこの世に持ち出せる唯一無二の存在。そんな彼女達が集まっ
て行う稽古が普通の筈が無いのだ。

互いの瞳に互いの姿を認めて。沙耶香は最早考えるのを止め、貴女にただ打ち込み続
けた。



「駄目ですね、次です」

——和美は先の勝機で斬ってくる。

「もう一度」

——つまり、こちらの攻撃のゼロ地点もしくは攻撃しようと思図した瞬間を間違える
事なく一文字に斬ってきてる。

後の先は通じない。先程から使用しているのに、防御ごと打ち砕いてきてるから。

「もう一度」

…迅移が同段階同士であれば、同じ時間流にいる以上相手より早く斬る事は不可能。
速く斬る事も力量によってそれも不可。それが現状。

先程からやっているように、和美は必ず一撃必倒の斬撃でこちらの刀ごと叩き斬ってくる。普通に斬り込んだのでは、こちらに触れさせない疾きは手に入らない。

——正面から砕く。叩き潰す。一方的に。

そんな剣が上段に振りかぶられ、それを骨の髄まで感じ取った沙耶香が一拍おいて同じく振りかぶり、やはり為す術なく斬られた。

「……っ」

「もう一度」

「……何で和美は疲れないの？」

「それを知るのも稽古の内です」

沙耶香が疲れて『迅移・無念無想』が解ければ凍った時間が通常のそれへと戻り、二人で休憩。少し経ったらまた稽古、その繰り返し。

体感時間では二日以上が経過しているが、現実の時間は一時間程度しか経っていない。かっつ。

そして、ついに稽古の連続が崇ってきたのだろう。

頭もぼうつとしてきている沙耶香はついに棒立ち、もはや貴女の剣を御刀の耐久に任せてガツチリと防ぐしか出来なくなっていた。

「まるで川の中の岩のようですね、糸見」

「……………」

「しかし岩が恐れますか？ 岩が考えますか？」

「……、？」

「岩はただ前からくる流れを、後ろに受け流すのみでは？」

——普通に斬り込んだのではこちらに触れさせない疾さは手に入らない。ならばいつその身体が岩ではなく、こちらに流れゆく水であつたなら。

そんな一意専心が、今、沙耶香の全身を覆い尽くした。

「……………」

「(名答)」

貴女の眼前に立つ剣士が、自身の刀を納めていた。

「誰も私を(名)丁寧に一刀両断しろとは言っていない。為すべき事は只一つ」

——相手の行動よりも技よりも疾く斬る事。沙耶香は心中に期し、鞘に納めた刀の柄頭を貴女の正中線に向けた。

同時では駄目。後手に回っては駄目。ならば先手を、先の先を獲る。

——抜刀術。その恐ろしさの片鱗はここにある。

刀を納めた剣士を目にした人間の多くは、相手はパツと横一文字に刀を抜き斬って、勝ちを納めると思い込むのであろう。

だから避けてしまえば、或いは柄手を封じれば勝てると考える。

間違いではない。相手は横に抜いてくると判っていて、その通りに相手が抜いてきたのであれば。

すなわち、相手が自分の思う通りに斬ってくるという前提条件の達成が、抜刀術を無力化できる要項である。

：もし相手が素早く距離を詰めて抜かずに柄でこちらを打ってきたら？横からではなく上から或いは下から抜き上げて抜刀してきたら？跳びながら抜いてきたら？飛翔したら？

見破られた策など無残なものである。

そして基本的に両手で斬る事になる剣士と、片手で斬る事になる居合抜刀。構造的速度差で劣るこの術は、相手にこちらの意図を読ませないという前提条件の下でのみ行使される。

すなわち先の先、騙し討ち（居合）の勝機。

——まこと汚い術である。仮に相手の敵意害意を事前に察知しているのであっても、こちらは貴方に何もありませんよと一見意思表示をしているように見える納刀状態で、何処から襲ってくるか分からない刃を恐ろしい速度と間合で振るうのだから。

しかしながら全ては勝つ為。戦いとは古今東西騙し合いである。

勝利とはそういう物で、だからこそ誰しにも価値と欲が生まれる。

沙耶香は目蓋を限界まで見開き、貴女と貴女の剣を見詰めた。この目蓋は決して閉ざさないと誓って。閉ざすのは勝った時。

「――」

敗れた時は。またもう一度、相手を斬るその時まで何度でも――。

沙耶香の抜刀の閃きが、貴女の瞳に焼き付いた。

◇

「――お見事です」

「……………、え？」

凍っていた筈の時間が元に戻っている。

沙耶香は自身を見つめた。『写シ』は剥がれていない。まだ。つまり、

「二連撃とは。流星は糸見沙耶香ですね」

「二連……撃？」

「憶えていないのですか？ 貴女は縦横十文字の二撃でもって私を斬り捨てた。留まら

ず、流れ続ける水のように」

「……………」

「それこそが疾さ。スピードともタイムとも違う、無心に、只ひたすら疾さのみを専心した抜刀術。まだ攻撃をしてこないと相手が意図した瞬間、その一刹那（スペース）を私は斬る。我が流派では、これを一つの奥義と呼んでいます」

腑に落ちましたか？ 貴女が言うと、沙耶香は頷いた。

「——うん」

今まで見えなかったものが見えた。自分の剣と、この流水の剣との組み合わせ。それは技術的なものだけではなく、必ず敵を斬るという専心と意地に他ならない。

迅移を解除した沙耶香が時間を確認すると、稽古開始から約二時間が経っていた。

「和美。ありがとう」

「礼には及びません。これを実戦で生かすも殺すも貴女次第なのですから」

「でもいいの？ 剣法の奥義は基本的に門外不出。これは和美だけの剣なんじゃ…」

「ああ、良いのですよ。この剣はそういった堅苦しい物ではないのです。誰が使おうとどれほど時が経とうと、研鑽され続けようと生涯未完であり、ただ戦いに勝つ為の剣。それだけですから」

「……………」
戦いに、勝つ」

「必要でしょうか？今の貴女には」

「——うん」

渴望に似た何かを宿して、沙耶香は答える。湧き出るそれは彼女が刀使だからなのか。或いは人だからなのか、剣士だからなのか。

勝つてみたいという想いは人に力を与えるのだろうか。貴女がそうであるように。

「さて、では参りましょう。行き先は何処でしたか？」

「東京」

頷いて、修練場を出た貴女は沙耶香に愛車のヘルメットを手渡した。

「……？バイクの？」

「学長には私から連絡をします。さあ、私の後ろにしっかり捕まって。飛ばしますよ」

これから東京までちよつとドライブ。風を切つて行きましょう。貴女がそう言うのと、何故か沙耶香はより一層困った顔をしはじめた。

「……。私知ってる」

「？ 何がです」

「和美の運転はワイルドだって」

「それは面白いジョークですね」

アクセルを吹かせ、二輪タイヤを切りつける黒いアスファルト。

二人を乗せるバイクはまるで前途を祝すように煙を上げて、鎌倉の街を走り抜けていった。

幕間 可奈美たちサイドその3

『ふーん、その子を助けることにしたんだ。可奈美』

まるでこの世ではない場所と時空で。その人物は言った。

『うん。決着がまだだし、何だか放っておけなかったから』

『放っておけない…か。さっすが私の一番弟子。似るもんだね』

『似る？』

『私にも居たよ。放っておけない大切な友達がさ』

『それって前に言ってた篝さんって人？』

『そうそう。よく憶えてるね？』

『師匠の言葉は全部頭に入れるようにしてるから。…起きてる私は、それを忘れてるみ

たいだけ』

『剣はバツチリ憶えてるんでしょ？それならいいって』

夢の中とでもいふべき世界で、可奈美とその人物は剣と言葉を交わし合う。その内容

は起きてしまえば忘れてしまうが、しかしこれまでの経験上、身体に刻まれたものは忘れる事はない。人の剣術、魂、技。そして学びは、決して消え失せたりはしないと。

『ね。その姫和ちゃんってどんな子なの?』

『為すべき事を為すんだ、って感じの真面目な子。すつごく良い子だよ』

『そうなの? まるで篤みたい。同じ刀使だし、案外親戚かもね〜!』

『そうかもね〜』

二人でそう言い合うと、可奈美の師はふと思いついたように言った。

『あ、そうそう。次はどう勝つ? あの剣に』

『転』

『面白い。でも出来る? 相手は別に居合だけの刀使いつてわけでもない。可奈美の話を聞いた私の予測が正しければ——、多分その相手の剣は天下無双』

『うん。だから勝つ』

『結構。じゃあ早速稽古する?』

『うん!』

可奈美の師は教え続ける。そして同時に待ち続ける。

『あ、でも、』

『? 何? 可奈美』

『ううん。なんでもない』

——師匠とあの人、どっちが強いだろう？

あの日の続きを。もう一度。



「おい起きろ。いつまで寝てるつもりだ」

「んう〜〜?もう朝あ?」

「もう昼だ。寝ぼけているのか?」

可奈美が起きると、覗き込むようにしてこちらを見ている姫和の顔があつた。……何だかまた夢を見ていたような気がする。可奈美はフルリフルリと顔を振って、いつもの目覚ましをした。

「顔ぐらい洗ったらどうだ?」

「すぐ洗う〜」

「……。ちよつと電話を掛けてくる」

「?電話?」

「公衆電話だ。携帯より探知される可能性は低い」

「何処に掛けるの??」

「……」

.....

「そのまま独り何処かに行くのは無しだよ?」

「……。私にも、何処に繋がるのかは分からないんだ」

「?え、それって?」

「万が一、本当に困った時。ここに掛けろと言われた」

「誰に?」

「母の知り合いだ」

それ以上は知らない。姫和はそう続けた。

ずっと独りだと言っていた彼女だけれど、少しぐらいは知り合いがいるらしい。

訳の分からない所に電話を掛ける。それは母に対する絶大な信頼と、そんな母の知り合いならばという事だろうか? それにしては表情が幾分、少なくとも可奈美が見た中では最も柔らかい表情で姫和は言った。

「私もついていくからね」

「……。勝手にしろ」

勝手にするという覚悟はとっくに出来ている。そんな可奈美なのだった。



「掛けるぞ。周囲の警戒を頼む」

「分かった」

「それとなくだぞ」

「分かってるよ」

「…もしもし」

『はいはい。お困り?』

「……」

きつかりワンコール。姫和の電話に出たその人物は女性のような声だった。

「……………。困っています」

『了解。今東京だよね?』

「はい」

『これから○×駅に来れる?迎えに行くよん』

「…行けます」

『じゃあ現地の東口階段集合で。気を付けてね』

ぶつりと音がする受話器を静かに戻し、姫和は内容を可奈美に伝えた。

「知り合い？感じはどうだった？」

「知らない声だ。でも明るい音量だったから多分女性だと思う」

「畏の予感はない？」

「当然ある。…けどあの人くれた伝手だ。こちらにとってプラスになる。…と思いたい」

「どんな人なの？その、姫和ちゃんのお母さんの知り合いの人って」

「怖い人だ」

姫和はその人物を真つすぐ思い出しながら言った。

「怖い？」

「いつも怖い目付きで母を見ていた。長患いの母だったが、でも何故かその人が見舞いに来るといつも笑っていた」

「へく、ちなみに姫和ちゃんには？怖い目付きだったの？」

「……いや。いつも気を遣ってくれていた」

「じゃあいい人なんだね？」

「それは無いかもな。あの眼はまるで仇を見つめる眼だった。そんな眼をしている人間は、碌な最期を迎えないだろう」

自分の事は棚に上げて姫和は言った。

何故最期まであの人を信頼していたのか、何故あの人はほぼ毎日見舞いに来てくれたのか。それらを訊こうと思つた矢先に母は亡くなつてしまつたので、真相は闇の中である。少なくとも今は。

「もう行くぞ。無駄話をしている余裕はない」

「あ、待つてよー!」

何が来ても邪魔する者は斬る。仇を見つめる瞳で、姫和は進んでいった。



『そうか分かつた。保護出来るか』

『はい。現在目視にて二人を確認、これから合流します』

『ご苦労。後は手筈通りだ。明日、二人をあの場合所に』

『分かりました。……あの、』

『何か問題か。グラディ』

『学長達は大丈夫なんですか?』

『大事な。計画に支障もない』

『分かりました。では明日、二人を舞草に』

『そうだ。為すべき事を為せ』



駅に着き、その日の夜の事。可奈美達とはある人物の家に匿われていた。

「いや、散らかっててごめんね？ 適当にくつろいどいていいから」

「あ、はーい！」

高層マンションの一室は広く、その人物にとつて二人を匿う事は何の苦でもない。むしろ懐かしい感情を思い起こさせてくれる事、募る嬉しさは有り余る程であった。

「あの、恩田さんって呼んだ方がいいですか？」

「んえ？ 何でもいいよ？ 恩田でも累でも」

「じゃあ累さんでっ！」

「いえーい！ どんとこーい！」

カンパーイ。一人で缶ビールのプルタブを動かす家主、恩田累は姫和達を見ながら缶を掲げた。

「おい可奈美」

「え？何？」

そんな人物を間近で見て。姫和は怪しさが募っていた。

「用心しろ。——あれが敵であるという可能性は充分、」

「えー？それは無いよ姫和ちゃん」

「確証だつて無いだろうがッ」

「あはは……聞こえてるんだけど。まあ、いきなり信用しろつてのも無理な話だよな。あ、お風呂沸いてるから先にどうぞ？」

「いいんですか？ お先しまーす！」

「おいッ!!」

ちゃんとした風呂に入れる事が嬉しいのか。或いは、郷愁を以て姫和を見つめる累の空気を讀んだのか。可奈美は素早く動いていた。

「可奈美ちゃんだっけ？ あの子面白いね〜」

「……。危機感が無いだけだ」

「そう言う貴女が十条姫和ちゃんだよね？……ふ〜ん」

ほろ酔いになった大人なんて見たくもない。姫和は勝手にそう断じた。

「——私の顔に。何か」

「ああ、ごめんごめん。似てるなあつて思つて」

「え？」

「君のお父さんに」

顔を向ける。

すると累は目を合わせながら、リンゴジュースの缶を姫和に差し出していった。

「――生前、父と面識が？」

「うん。同門だったからね。よく稽古を付けてもらってたよ。強かったな、十条さん」

「そうでしたか」

姫和の父は彼女が小学生の時に殉職している。

「そうっ！ 今の姫和ちゃんみたいに為すべき事を為すんだって顔でいつも鍛錬しててね。…やっぱり親子だね？」

「そんなに似てますか」

「うん似てる」

本当に。累は強く頷いて言った。

「……………」

対して、姫和は小さく俯いた。こんな所で父の話の話を聞いたのが嬉しいのだろうか。或いはそれは、これまで取っていた自身の態度に対する姫和なりの謝意の表れであったの

かもしれない。

昔話に華が咲く。この時だけは、互いに今を忘れる事が出来ていた。

「あつがりましたー！いい湯だったあ…！」

「姫和ちゃんどうぞ？」

「ではお先に頂きます」

「あれ？何だか素直？」

「うるさい」

その証拠に風呂場に向かう姫和の足取りは軽くなっていて、これは良い事があつただなと察する可奈美なのだった。



「そうだ累さん！訊いてもいいですか?!」

「え？なにになに？」

「累さんはどんな流派なんですか？教えてください!!」

「ここに来る途中でもそうだったけど、可奈美ちゃんはホントグイグイ系だねえ」

「あ、ご、ごめんなさい…」

自身の気持ちと興味にまつしぐら。それが彼女の良い所だが自制も要る。可奈美はこれも劍の為と思い頭を下げた。

「いいって事だよ。ええと私の流派はね、ちよつと特殊なやつで。こうしろあもしろっていう一般的な流派の堅苦しい決まり事だとか、精神修養だとかが一切ないのよ」

「へへ、そうなんですか。………へへ」

可奈美は顎に曲げた人差し指を当て、黙考した。

——精神修養が取り入れられておらず、流派としての約束事・決まりといったものすら無い。つまり、この流儀は只斬る為だけの物騒な物というコト。

「戦いに勝つ為だけの、——劍？」

「ご明察。可奈美ちゃんなら、いつか戦うと思うよ？ あ！私は駄目ね？もうずっと稽古らしい稽古してないからさあ」

「あははは」

——先手を獲られてしまった。どんな剣なのか身をもって知りたかったのに。しかし生まれた好奇心は留まる事を知らず、自制を己に課しながらも彼女を動かし続けた。

「特徴は何なんです？流派の名前は？」

「お、興味津々？」

「はい」

曇りなき瞳で可奈美は言った。

「水かなあ。しかも一ヶ所に留まらず、一生流れ続けるって感じ」

「流れ続ける……」

「斬って斬って斬りまくる為には、流水になる必要があったんだね。だってほら、何処かに留まってちゃそこで終わりだから」

「……………」

微笑む累を他所に、その時可奈美は身に覚えのあるイメージが湧きたち全身を震わせた。

数日前、折神家当主御前試合の日。そのような剣を使う刀使と戦った事があるという記憶の想起。流水のように留まらず、居付かず、かといって流れ続けて滝壺に落ちるだけでもない。

果ての無い、何か遠くを臨むような剣技と精神。何処までも遠くへと往く気概。戦いへの渴望を。

可奈美の脳裏に、美しい長髪の刀使が思い起こされた。

「——あれ？もしかしてもう戦った？」

「かもしれません。とても強かったですから」

可奈美は横腹を見ながら言った。あの時相打ち、否、斬られた箇所を。

「あつちやく…。まずいね」

「…え？」

「剣を交えたんでしよう？ ならもまた戦う時は、以前と同じと考えない方がいいよ」

「……………」

……………。

「ひたすら斬つて斬つて斬りまくる。つまりそれって、永遠に学び続ける剣つてことだから」

細められ、やがて閉じられる累の双眸。

——骨の髄まで思い知っている。己が扱ってきた剣法の怖さと、そして今まで何度も経験してきた鍛錬・稽古を思い起こしながら。

戦いに勝つ。この剣に込められた一意専心を。

眼を開けたそんな累に、可奈美は無言で問いを投げていた。

——その剣の名前は？

「葦名流」

その剣が今も未完成であるという事を、衛藤可奈美はまだ知らない。

第8話 a s s o o n a s

『——あら、小さい懐かしいお客さんだこと。なにに？お茶飲みに来たの？』

劍に生き、劍と共に生を歩む者。

最期までそれを貴ぶ者。全ての刀使の頂点、全ての劍士が目指し越えるべき大山。それが今そこに、相も変わらずそこにいた。

『久しいな、藤原美奈都』

『冗談。今は衛藤だよ？』

『…そうだったか』

『ほうじ茶でいい？』

『ああ』

劍聖・藤原美奈都。住居の和室に客を通した女は、かつて天下無双と称された人物だった。

『病はだいたいよくないと聞いていたが——』

『ん?そう?』

『——何だ、案外しつかりしてるではないか藤原美奈都。安心したぞ、天下無双』

『なあにそれ。天下無双なんて周りが勝手に言ってただけで、私は只の人間。知ってるでしょ?』

『……………』

……………。

『それに、この天の下に双つと無い者。そんなの皆が皆。同じだと私は思うよ?』

『……………』

テーブルの上に出されたほうじ茶に手を伸ばし、客は音無く啜った。初めて飲む琥珀色の、やけに美味しい水の水面に映る顔は、ジツと己を見続けていた。

『今も。お前か私のどちらかだと思っただがどうだ?』

『或いは。そのどちらでもないかも』

皆が同じなのであれば、否応真偽も何も無い。全部ただの言葉。天下無双はそう続けて。——そんな事より最近息子と娘が可愛くって可愛くって!

そう、衛藤美奈都は言葉を継ぎながら、

『……………なに?』

『……………』

茶を啜るような無音と早さで、刀の切っ先を喉元に突きつけられていた。

『どうだ』

『……』

『死んだぞ』

『うん』

いつの間に跳んだのか両者の間にあるテーブルの上に両足をぬたと着け、これまたいつの間にやら刀をサツと抜き、殺そうとする。

——達人の域。極まっている技の冴え。天下無双とはこういうものの事を言うのだと客は告げていた。

『闘えば私が勝つ。藤原美奈都、お前は私に斬られる』

『そうだね』

『先も無い劍聖よ、何か言い残す事は』

『そうだねえ。——貴女が』

『?』

『貴女がでつかい荒魂か何かであっても、そうだね』

天下無双の顔で、女は客を見て笑っていた。



セキュリティマンション等の建物が立ち並ぶ、いわゆる金持ちな人間が住んでいるエリア。光るネオン、タワー型商業施設、会社ビル、コンビニ。華の大都市その一角。将来はこんな所に住んでみるのも良い経験になるかもしれない。

「……和美？」

貴女は店で買ったファストフードバーガーとポテトを沙耶香と共に店内で食べながら。ジツと、夜窓の外を見ていた。

「ああ、すいません。何でしたか？」

「学長から連絡。もうじき、逆賊の潜伏場所が特定できるみたい」

「予測地点は？」

「おおよそこの辺り。車で移動したみたい」

「成る程。彼女達を手引きした者がいると」

「うん」

鎌府学長・高津雪那からの連絡によると、逆賊達の氏名は衛藤可奈美と十条姫和であるという。

大会参加者及び伍箇伝の各学長への事情聴取により、内通者がいた形跡は無し。――

よって両名を捕縛し、裏に誰がいるのか？そして協力者等の存在を聞き出し今後の民衆の平和と治安維持に貢献されたし。

沙耶香に下された任務の内容はそのような物だった。

「それ美味しいの？」

「まあまあですね。コーヒーは苦手ですか？糸見」

「…飲んだ事ない」

食後のコーヒーを飲んでいる最中。携帯のマナーモードバイブレーションが沙耶香に着信と発見の報告を知らせる。

——開始の合図。それは敵を斬って捕らえての戦いの合図であり、失敗不可ないつもの仕事のスタートだ。

「……了解。これより任務を開始します」

「何処です」

「元美濃関刀使、恩田累という人の住居。ここから西に3.5キロ。15階」

「了解」

勘定をすませ、外に出た二人がヘルメットを装着しバイクに跨る。

噴煙を上げ走るそれが夜闇の一部から輝く光の一筋となつて他を牛蒡抜き、光源である二人の刀使は御刀の鯉口を切りながら目的地に着くと、同時にヘルメットを脱いで

空へと跳んだ。

「——武運を」

「……………」

頷いて、沙耶香は窓からダイナミックに部屋に斬り込んでいた。

——何という胆力。知ってはいたが。

貴女は彼女の剣気に恐れ入ったが、そう思ったのも束の間。幾つかの戦音を発しながら逆賊の一人・十条姫和とそして沙耶香は窓から地へと落下していく。

自殺行為ではない。『写シ』を張りながら、『迅移』を行使する事が前提である刀使同士の戦闘である。

「待ってて姫和ちゃんっ!!!」

「……………」

貴女は打ち合わせ通り部屋の玄関方面へと回り込み、安行の鞘に左掌を静かに当てる。美濃関の制服を着た刀使（衛藤可奈美）を物陰に隠れてやり過ぎし、貴女は無人に見える玄関口に声をかけた。

「——貴女が恩田累ですな？」

「あちゃあく…もう一人いたかあ」

肯定の意を示す妙齢の女性、恩田累は両手を挙げながら現れて来た。

「抵抗は無意味ですよ？」

「はいはい！私は無抵抗な一般市民ですうー！あの子達の事は二人で濡れネズミになつて寒そう家出かなく？大人として放っておけないなうって思つて家に上げましたー！！本当です信じて下さーい！」

「成る程。では署までご同行願います」

「勿論ですー！」

「……」

「……」

貴女は指で輪っかを作つた。

「………。こんな感じ？」

「ええ。役者の才能がありますよ、累さん。署ではそのように」

「…計画は大丈夫？」

「あの方は命を賭しています。たとえ刺し違えてでも、為すべき事を為すでしょう」
「そつか。今更だけど、こんな時は刀使じゃない事が恨めしくなるよ。」

…あ、例の場所はあの子たちに教えたけど、大丈夫かな？ちらつと見えたけど和美ちゃんの連れの刀使、凄腕でしょう？！」

「分かりますか」

「こんなんでも元刀使だからねー。もしかして、教えてる？」

「ええ、少し」

へらと笑う顔を作る累は、元・美濃関学院の刀使である。

10年前に御刀を返納して刀使を辞めたが、現役当時は柔よく剛を制するという風な剣腕だった事を、同門の貴女は今も憶えている。

「十文字すら物にしました。現鎌府の主力の一人です」

「……成る程ね。じゃあ本当にもうすぐなんだ。その子が勝とうが負けようが？」

「はい」

「分かった。あの方にも伝えておくから。師範にもよろしく」

「はい、累さん」

累は静かに、貴女に両手を差しだした。

第9話 ブレイドアーツ 3

「貴様は——鎌府のツ!!」

時は少し戻り、沙耶香は累の部屋に窓から特攻（ぶっこみ）、反逆者にして御前試合決勝進出者・十条姫和を単身相手取っていた。

一人で成し遂げろ。それが命令だからだ。

二合打ち合い、互いの力量を看破し。三合四合打ち合い、最早何も感じず。あとは斬るのみ。

互いに屋内15階の部屋から広い屋外へ、即ちバトルフィールドを求めて地面に飛び降り向かいながら、更なる剣を繰り出し打つ。姫和は地面が恋しいと思った。人の剣術は地に足を付けている事が基本であり、空中で振るうには身体の回転による遠心力でしか撃剣の動力に充てられない。

そのエネルギー法則を根底から覆すには『迅移』という己とあちらの時間流の差異が要るが、瞬間的になし使用できない為、剣を振り続けるには地面を必要とするのが姫和

を含めた一般的な刀使達である。

しかし、だからこそ彼女は驚愕した。

「……まさか」

——こいつは持続的に迅移を行使して剣を振るっている。流派は恐らく小野派一流。厄介だが、……まだ私の方が。

そう考えたのだろう。

迅移の結果生じた急加速によって姫和は沙耶香の意表を突き、彼女を袈裟懸けに斬り捨てていた。

「……っ！」

はやさは力である。つまり勝機。

そんな感想をしかし彼女は脇へと追いやり、曇りなき心で油断なく眼前の剣士を見る。

——隙の無い姿勢、所作。氣勢は充分。剣先を天頂に向けて大きく上段に振りかぶり、『写シ』が剥がれた生身の剣士がこちらを見ていた。

『写シ』無しで。——やる気か」

「……………」

頷く必要のない沙耶香が、姫和に向けて大きく足を踏み込んだ。

「——ツツつ?!?!」

斬撃を刀で受け止める。間合もタイミングも完璧に強固に。

しかし姫和の脚は訳も解らず瞬時に『く』の字に折れ曲がり、そして驚愕という力でもって眼を見開いていた。

：しつかりと受け防ぎ、流した筈。

しかしその全てが叶わず、彼女の全身はまるで波濤に攫われるが如く態勢を崩し、為す術なく倒れゆこうとしていた。

「——な、」

何だその剣は、と言う前に。姫和の頭蓋には沙耶香の豪剣が縦一文字に迫ってきて、

「駄目ッ!!!」

「!?!」

そんな一撃必倒の剣を。『迅移』による一撃でもって横から逸らされた沙耶香が、クルリと刀を回して再度間合を図る。

現れたもう一人の反逆者・衛藤可奈美を視界に収めながら。

諸手右上段の構のように大きく振りかぶり再度、沙耶香は打つ。

受けられても、防がれてもそれごと敵を叩き斬る豪剣の彼女は今、まさに留まらぬ水と化していた。

「そんな魂の籠ってない剣じゃ！何も斬れないッ！！」

可奈美は手を伸ばす。そして掴む。全てはたった一合の打ち合い。

たったそれだけで、彼女には沙耶香の剣を量るには充分だったのか。無手で掴まれ投げ飛ばされる妙法村正を、持ち主はただ見つめる事しか出来なかった。



「そんな魂の籠ってない剣じゃ！何も斬れないッ！！」

敵に奪われる御刀を見て、思う。

ああ、これでは戦えない。私の任務を果たせない。せつかく和美が教えてくれたのに。この人には、少しも効かなかった。

…付け焼き刃だったか？そうかもしれない。でも何なのだろうこの気持ちは。……魂が、籠ってない？

一体何を、この人は言ってるの？

「私、衛藤可奈美！また試合してくれる？」

今度はきつと楽しい事になると感情を、瞳に描いて。この人は言う。

私は懸命に、毎日、これからも、今も、この剣を命と見立てて刀使を全うしているの
に。

なのに何で、こんな言葉をこんな人に言われなくちやいけないの？

「……………」

刀を納める眼前の剣士はまるで何事も無かったかのように笑顔で。…先程の剣戟な
んで、全部いつもの事だと言うようにありのまま。私だけを見ていて、でも何も映し
ていなかった。

「姫和ちゃん。累さん、大丈夫かな」

待って。

「あれでも元刀使だ。これくらい難なくかわせるだろう」

「そうかなあ…」

待って。

「とにかくだ、応援が来る前に速くこの場を離れよう。可奈美」

「うん」

「——待って」

二人の視線が向けられる。純粹な疑念と敵意、それが向けられる。飛ばされた御刀を
拾い握り直した、私目掛けて。

「…魂って、何？」

「貴様、まだやるか」

「待って姫和ちゃん！」

「教えてほしい。刀使の魂は、この刀の事の筈。私はちゃんと振るっている。…なのに何で、私には籠ってないなんて言えるの？」

紡ぐ言葉と同時に、何かがこの身体と心に生じてゆく。

——私は刀使。これ一刀のみを使う、ただ独りの刀使い。それは貴女も同じ筈。…だけれど、何故？

「私は一刀流・糸見沙耶香。護剣の切っ先（鎌府）」

だから教えて。

私は知りたい。たった独りでここまで強くなった剣士の心を。貴女の答えを、私は知りたい。

「貴女に勝つ」

だから私は。静かに、刀を鞘に納めていた。



沙耶香が御刀を納める。無論のこと和平の意思表示ではない。

だらんと右手を地面に向けて下げ、左手親指を鐔にそつと掛け、柄頭を可奈美の正中線に向けている事もまた同様。

——戦闘態勢。これこそが刀使いの、一つの極致の姿である。

「……おい」

「うん」

姫和が視線と両刃造の切っ先を外す事なく、可奈美に問う。どうすると。勝てるかと。斬れるかと。出来るかと。

「今の沙耶香ちゃんに、その剣は合ってないよ」

答えを言う。否と。姫和にとつては是と。

魔戦士じみた闘気を放ち続ける刀使いを眼の前にして、可奈美は言い放った。

「……」

——葦名流。居合わせ続ける今の沙耶香の姿勢は、その流派の奥義の一つである。動きは単純、二度斬り付けるだけというものだが、この技が奥義と呼ばれる所以は使い手の精神性、つまり無心にも似た一意専心に有るといふ。

戦国時代末期に興ったこの剣は、有象無象強者弱者老若男女の区別を問わずその全てを斬つたとある武人が、自身の剣術を周囲に分かりやすいよう編んだ物である。

こう来たたら、こうする。相手はこう来る可能性が高いので、こう動く、刀を手繰る。ではなく。

何も考えずにこう叩き斬れ。それがこの葦名流の初伝であり奥義。すると自然、使手は何も考えず疾く斬るようになるので、それを更に極めた結果、今、沙耶香が取っている構に行きついた。

奥義・葦名十文字。

相手にこちらの動きの予測も感知も許さない、刹那（スペース）を斬る恐ろしい疾さの抜刀術。無心の入り口。

「……………」

「……………」

可奈美は思った。これはあの人の剣だと。御前試合で斬られた、あの剣だと。

教えたのだろうか？それとも元々一刀流の技だったのか？そんな疑問はどうでもよくて。

柄頭から発する圧と、沙耶香の瞳が真っ直ぐにこちらを見詰めている事が、相も変わらず何よりも怖かった。

「お前に、こいつを斬る覚悟があるのか」

姫和が言う。

「斬らない」

手を打つような音と弾みで、可奈美が言う。それが、葦名十文字の口火だった。

◇

中段に剣を構えた可奈美に向かって、音も無く沙耶香が近付く。右手はまだ柄に掛かっている。まだ抜かないか、それとも左手で抜いてくるのか。可奈美は限界まで瞼を押し開け、剣士を見詰めた。

一歩近付く。

そのまた一歩、沙耶香が近付く。柄を取れと言うように。押さえてみろと言うように。可奈美はジツと、間合と沙耶香を見詰めた。

指呼の間が狭まる。それが次第に対話の間に。そしてついに対話の間が斟酌の——

今こそ。沙耶香は村正の柄にその右手を掛けた。

右か。左か。下か。上か。

それを認識した瞬間、可奈美は『迅移』を発動した。鞘引きが見えたと同時、沙耶香もまた同段階の『迅移』を発動。もはや柄頭しか見えなくなつた。

柄頭の向きを注視する。左右からの抜刀ならば横向き、上ならばそのまま、下ならば鍔を返すのがブレイドアーツ（人の剣術）であるとすれば、極論、居合とは鍔柄を見ていれば対処出来る技。

だったら最初から見えないよう柄頭を相手に向けずグルリと左腰に回して構えればいいじゃん。などと思いつ込んだ者は、居合術を過大評価したことに対して生命の対価を払わねばならなくなるであろう。敵に最も近づくこちらの肘腕、それが敵の刀の軌跡の好餌である事を若武者は知るまい。

——下！

可奈美は沙耶香が刀を鞘内半ばまで抜いた所で、柄頭を返したのを見た。

斬り上げ抜刀。そう見てとった可奈美は構えを中段から下段に移した。防いで勝つ、後の先の勝機である。

勝機を獲った。可奈美も姫和も沙耶香も、一様にそう思った。

「——ッ」

可奈美の御刀をすり抜けるように真横に抜刀される妙法村正を、貴女が見るまでは。

◇

勝負あつた。そう断じたのは貴女だった。

沙耶香は可奈美が構を変更した瞬間を狂いなく捉え『迅移』の段階を変更、第1から第2へと移行していた。

刀使としての本能以可奈美も同じく第2に移行したが、その瞬、僅かな時間流の狭間に沙耶香は鞘を下から横に、柄頭を横に今こそ切つ先三寸より抜刀。葦名十文字を放つていた。

「疾さのみを専心した刀法。これを破るならば同じくはやさを専心した刀法のみ」

貴女は言う。依然変わりなく。これこそ葦名の奥義の一だと過不足もないと。

「——しかし糸見。相手は最初から、貴女を斬ろうとしていないのですよ」
見誤つたなど物陰から。貴女は断じていた。



劍が空を舞う。まるで時が巻き戻つたかのように。

「何、で……？」

信じられない光景を、沙耶香は眼にしていた。

下からではなく横からの抜刀斬撃を、可奈美は刀を握る右手と左手の間、柄で受け止

めていた。無論の事『八幡力』を使用しての防御である。そしてそのまま村正の切っ先をまるで流水のように受け流し、止めを放つ為に振りかぶる沙耶香の御刀の柄を無手で取り、再度投げ飛ばしていた。

——同じ相手に同じ技。無刀取りの完遂。

それは完膚なきまでの敗北を沙耶香に与えるに等しい行為であり、彼女が膝から崩れ落ちるに値する光景であつた。

「最初から、勝機なんて考えてなかつたの……?」

「ううん、考えてたよ。ただ斬らないって、写シを張ってない人なんて絶対に斬らないって。決めてたから」

「決めてた? 何で……?」

情けだろうか。沙耶香は冷たく思った。

「だってまた試合したいもの!」

御刀を手放し、可奈美は右手を差し出し手を握る。暖かいなど、沙耶香は思った。

「憶えてる? 一回戦での沙耶香ちゃんとの試合、私すつごく! ドキドキしてたんだ!」

「……………」

「この胸の中のその奥も。」

「また試合しようね、沙耶香ちゃん!」

「追っ手だ。今は退くぞ可奈美」

眼を合わせ立ち合いの礼をして、走り去ろうとする反逆者。

追わなければならない。任務だから。でも、何でか脚が動かない。

——知りたい。

魂とは。剣とは。刀使とは。そしてこの胸の奥に生まれた、熱い何かの正体とは。私
が為すべき事とは。

「糸美。無事でしたか」

「……………、うん」

——でもそれは自分で考え知るべきだと、教えられた気がした。

第10話 前夜

沙耶香が可奈美に敗れた瞬間、貴女は電話を掛けていた。それは予定通りと言えば予定通りだったようで、その証拠に電話口から聞こえる声は全く平淡な物だった。

『敗れたか』

「——はい。やはり敗れました」

『そうか。では長居は無用だ、帰還しろ』

「了解。しかし土産は如何します？手ぶらというのも」

『未熟だが将来が楽しみな後輩。一つだけだ、帰還しろ』

「分かりました。では失礼します」

携帯電話の受話器ボタンを押し、通話を切る。

——任務の報告内容は逆賊達をあと一步のところまで追い詰めるも、危機を脱した逆賊達はまた何処かに雲隠れ。任務は失敗。

それが元々の筋書きであるが、しかし貴女には確認すべき事柄があった。

「糸見。無事でしたか」

「……………、うん」

……………。

「恩田累は重要参考人として所轄の交番まで送りました。しかしどうやら、こちらは駄目だったようですね？」

「……………。うん」

沙耶香は悔しいというよりは、分からないといった風な顔をしていた。

…何を聞かされたのか、眉根が少々真中に寄り唇は引き締められ、瞳孔はやや開き気味で一点を見つめている。

怒りの感情に近い何がしかの想いを見て取った貴女は、それはとても良い傾向だなと思つた。

「鎌府に帰りましょう。任務の報告をしなければなりません」

「……………うん」

心ここにあらず。まるで何かを見つけ出そうと。…いや、既に見つけたのだけど上手く腑に落とす事が出来ないといった雰囲気。

———こちらも順調のようですよ。

微笑む貴女が、沙耶香にバイクのヘルメットを手渡す。ヘルメットのサンバイザーが

沙耶香の眼を覆ったが、一筋の光芒、煌々と輝く流れ星のような彼女の瞳を遮る事は出来なかつた。



鎌府女学院学長室は、絶妙な角度・立地により日光が強く射さらない事で有名な部屋である。

ここに初めて入った瞬間、今日からこの部屋を学長室に変えると言つて、それが最初の学長命令となつた事は鎌府刀使衆の間で有名な話であつた。

その部屋の中に、これみよがしに置いてある一本分の空きがある刀架に、自身がいつちも携帯している大刀を置きながら、高津雪那は目を細めていた。

——己の刀はただ一刀。他に目移りすることも揺らぐことも無く只無心に。刀をここに置くのはそう言つて聞かせる為。

ただしそれは己ではなく。何よりこの部屋を訪れた者達に。

「沙耶香。逆賊をおめおめと討ち漏らすとはな」

「…申し訳ありません」

雪那が刀から眼を離すと、そこには刀を使う者が。いや、刀そのものである者がいた。

「——任務成功率100パーセント。それが貴女の価値。しかし完璧であるという事は、それが少しでも歪めば皆に用無しという烙印が押される。」

その意味がわかるかしら？」

「はい」

刀剣を観るのに適した明かりの中で。鎌府の長が一步、無手で、帯刀している沙耶香に近付いた。

「沙耶香。何故負けたの？」

「はい……？」

一步。

「貴女は強い。これまでの稽古、実績、過程と結果。私は総合的に判断して貴女に任務を与えた。でも敗れた」

「……………」

また一步。

「二人相手は厳しかったかしら？ 貴女には」

「いいえ」

「では強かったの？ あの逆賊二名は？」

「はい」

「貴女が手も足も出せない程？」

「…はい」

一步。糸見沙耶香の間合へ。吹けば前髪が揺れるだろう距離へ、雪那は確かめるように沙耶香の間合へと足を踏み入れた。

「どうすれば、次は勝てる？」

「稽古します」

「稽古しても。勝てないほど開いているのに？」

「勝ちます」

雪那は刀剣鑑賞の時のように、静かに沙耶香を見ていた。しかしすぐさまそれを正す。その理由は彼女の瞳と雰囲気の不一致が原因であり、そして両手に込める力である。

…悔しいと、見極めてみせると書いてある沙耶香の闘気。感嘆の溜め息を我慢して、もつと面白いものを見た時の表情で、雪那は眼前の人間を見た。

「——勝てるか」

「——勝ちます」

何とも僅かで、そして小さく。しかし自分だけの火と熱を確かに見出した誰かのよう。それはこうして妙法村正を手にしていて、在りし日の誰かのように。

「分かったわ、下がりにさい。後ほど貴女には力を授けてあげるわ」
「はい。失礼しました」

小さな火がお辞儀をして去ってゆく。見終えると、雪那は椅子に座って、デスクの引き出しの中身をチェックしながら眼を閉じた。

「いい剣士に育つてきたか。若さと特別さゆえに孤立していたが、いい傾向だ」

「高津学長。失礼します、親衛隊・臯月です」

「? 何用だ」

「紫様がお呼びです。ただちにこの事」

ノック、声がけ。入室の動作を淀みなく行つて夜見は言った。

「そうか分かった」

「…先程、糸見さんを見ました。これまで彼女の剣は薄いようでしたが、流石は鎌府の主力。圧を手に入れた様子で何よりです」

「分かるか」

「私も刀使ですので多少は。今の彼女を燕さんが見たら、立ち合いたいと眼を輝かせるかもしれない」

「後輩がそんなに気になるか? 夜見」

「気にならないといったら嘘になりますが。それと同じく、どうでもいい事でもありま

す

「……」

夜見は元鎌府女学院生であり、親衛隊として最も実直な刀使である。彼女を取り立て親衛隊に推した雪那はそれを身に沁みて知っていた。その裏に隠している、剣士としての矜持も。

「本当に強いようですね。反逆者の衛藤さんと十条さんは」

.....

「折神家当主の御命令により。親衛隊・獅童真希、此花寿々花、皐月夜見。これより逆賊討伐に出撃致します」

「成る程。残る結芽は紫様の近侍か」

「その為の親衛隊です」

笑みすら浮かべない静かな剣士は、その闘気だけを示しながら敬礼した。

◇

執務室の扉を開けると、そこには全ての刀使達の王がいた。

「雪那。待機命令を出しているお前をわざわざここに呼んだ意味が分かるか？」

「……は！紫様！」

「貴様の命令違反と越権行為。いくら穏やかさを信条としている私でも、些か語気が荒くなる。どう弁明するつもりだ？」

「弁明などありませんませぬ紫様!!。ただ私は許せないのです!!!我が王たる紫様に刃を向けた不届き者が!のうのうと世に出ている事が!!!」

「だから鎌府の主力である糸見沙耶香を向かわせたど?しかも単独で」

「そうですッ紫様!………確かに待機を命じられておきながら独断専行した事は、申し訳なく存じます。しかしながら!!私はッ貴女様の為にッ!」

「——もういい。鎌府は撤収しろ」

「!? い、今なんと……」

「聞こえなかったのか?この件から貴様を含む鎌府の刀使衆は即刻、家に帰れと言つたのだ。貴様らは己の職務のみを為せ。分かったな?鎌府学長高津雪那」

「は、——ははっ!」

素早くお辞儀をした雪那は折神家当主執務室を後にした。

折神家当主の信頼失墜という結果。それを受け止めた彼女の顔は、しかし悲しげという風ではなかった。

——自身の為すべき事を為すといった覚悟を秘めた面持ち。それが見えたのか見え

なかったのか。ずっと無言で当主執務室にいる第三者が、親衛隊・燕結芽が大きな声を上げる。

「紫様ー！夜見おねーさん達が出撃って、何で私はお留守番なのー!!??」

「そう駄々をこねるな。二羽の鳥には親衛隊の三名を送った。少々早かったが、もうその時期が来たというわけだ」

「だからって夜見おねーさんまで出張つちやったらすぐ終わるに決まってるじゃないですかー!! あゝあ、少しは楽しい事になりそうかもって思ったのにー!」

「そうとも限らんさ」

——お前が出たらそれこそすぐさま全て終わるだろうが。

折神家当主は油断なく結芽を見つめていた。

「え〜?おねーさん達が負けるとは思えないですけど〜…?」

「成長しているのだ。二羽の鳥は」

「そうですか〜?」

「じきに面白い事がおきる。その時までお前は備えている」

「は〜い」

第11話 例えばこんな彼女の復讐

力を授ける。∴しかし力とは一体何のことだろう。

沙耶香は学長の声を思い出し、没頭していた素振り稽古の手を止めた。

稽古をするしかない。——それが今の沙耶香の心情であり、それしかやる事はなかった。

美濃関の衛藤可奈美と再度立ち合う。そんな時が来るのかも分からないまま、けれどじつとしている事など出来ない。そんな想いが沙耶香の手と頭を動かし続けていたのだ。

「……少し休もう」

雑念が生まれ、それを雲散させようと考え歩く彼女が、鎌府の校庭に出る。4月の風が妙に冷たくて、まるで雪でも降るのかと息を吐いては吸つてを繰り返す。

ふと掌を見ると、小指の竹刀ダコの隆起が目に残った。幾つかの手相線周りにはそれと同じくらいの硬さのタコがあり、握つてみると掌全体がまるで鎧のようだった。

——これでも足りないのかな。

当たり前な事に気付きながらふと顔を上げると、そこには黒髪の剣士がいた。

「あの、…鎌府の。糸見沙耶香さん、ですよね？」

「……」

自身の野暮つたい髪よりも綺麗で、手入れが行き届いている長髪。左腰の御刀。最近見慣れた美濃関の制服。

スラリと、しかし若干膝を曲げた脚とスタンスはまさしく刀使のそれであり、しかし心配と書いてある緑の瞳は美しかった。

だからしばし見惚れて、沙耶香はやつと頷いた。

「やっぱり。……あ、私、柳瀬舞衣つて言います。可奈美ちゃんと会ったん…ですよね？元氣そうでしたか？」

「…うん」

「よかったあ…！」

「でも強かった」

沙耶香は素直に言った。

「…え？ やっぱり戦ったんですか!？」

「次は負けない。じゃあ、さよなら」

この人も強いけどあの剣士程ではない。

ぶつきらばうにそう思い、立ち去ろうと母指球を支えに爪先を上げる沙耶香が地面を滑るように歩いた。

「あ。ちよつと待って？」

しかし回り込まれてしまった。稽古に行くのに邪魔をしないでほしい。…この人は悪い人だ。

「ちよつと話をしませんか？クッキーもありますし」

「分かった」

即答する。何故なら甘い物に悪いものはない。そして甘い物をくれる人に悪い人もない。むしろ正義なのではないか？沙耶香はこっそり信仰している。…この人は良い人だ。

「甘いもの、好き？」

「うん」

「良かった！ちよつと作りすぎちゃつてて。お話しながら一緒に食べようよ、沙耶香ちゃん」

「うん」

一人稽古の前に糖分を補給することも大事。同上。

「ね、可奈美ちゃんの剣どうだった？不思議だったでしょう？」

「……うん。まるで雲の中を進んでる感じだった。ふわふわしてて、ゆるい。でも軽い」

「……………」

「何度も見てきたの？」

「え？」

「美濃関で」

同じ学校に居て一緒に稽古をしていれば感じる何か。

重さ、或いは圧。或いは闘気。それをずっと間近で体感していたならば。きっと、気付きは誰より多い筈。

沙耶香は舞衣の瞳の奥を見た。

「——うん。何度も見てきたし、味わってきたよ。だからまだ満足に勝てた事がないんだ。御前試合でも負けちゃった」

「あの試合、憶えてる。居合という選択肢は悪くなかった。でも速かった」

「見切られちゃってたよね」

——剣に真摯な人だ。

傍から見れば何にでも興味がある風に見えるがその実、可奈美に負けなくらいの探

求心が特にある。沙耶香はそう思った。

「あの剣士に勝つには勝機とか、呼吸とか、技量とかの領域だけじゃ多分難しいのかもしれない。技を操る心と身体力の力の多寡が、勝敗を分けると思う」

「……。どうすればいいかな？勝つには」

「稽古する」

自身の御刀の柄頭を触って、言い切る。それしか勝つ方法を知らない。それは舞衣も同様だった。

御馳走様を述べて小さくお辞儀する。——元気が出た。やっぱり、甘い物は正義だ。

沙耶香の信仰心は揺るぎなかった。

「沙耶香ちゃん。私も一緒に稽古していいかな？」

「……………」

「迷惑じゃなければだけど——」

「沙耶香ツツ!!!」

「! はい」

了承の声を出そうとしたその時。沙耶香の心身を覆いつくすような、途轍もない剣幕の声がこの場に響いた。

「美濃関の。邪魔よ」

「は、はい……」

「来なさい沙耶香。力を授けてあげるわ」

「——、はい」

「あ、…沙耶香ちゃん」

鎌府学長に半ばむりやり手を引かれて去ってゆく沙耶香の後ろ姿を、舞衣は心配な表情で見送った。



「高津学長？ お待ち下さい、糸見を連れて一体何処へ行かれるのですか」

「お前には関係ない。それより、折神の本邸にいる全鎌府の刀使に撤収命令を伝えろ。重ねて別命があるまで通常任務に戻れとな」

「……………」

貴女は苦虫を潰した顔を繕って、沙耶香を見つめた。

「——了解、致しました」

「沙耶香と私は所用がある。お前は自身の為すべき事を為せ」

それは計画発動の合図であった。

◆

「見てご覧なさい？沙耶香。これは私が紫様より直々に拝命された任務の一つ。その成果。これを身体に打てば、貴女は何も感じず何も考えず、ただ紫様に尽くす為だけの刀使になれる」

「……………」

……………。

「誰にも負けないし、誰にも手出しされない。そんな存在になれるの。今の貴女にはうってつけの物。分かるわね？」

「……………」

沙耶香はジッと、雪那の持つ注射器を見つめている。

「怖がることはないわ。——強くなりたいのでしょうか？ならばこれを受け入れなさい。それだけでいいのだから」

「……………」

首筋に近づくとそれが。打ち込まれるその前に、

「……………」

「……………」

沙耶香は雪那の腕を掴んでいた。

「？ 沙耶、香…………？」

「……………」

震える喉から漏れる空気が脳を通過する。それはハッキリと、沙耶香に言葉を出させた。

「…嫌、です」

「……………」

否定の言葉。

反して言葉を失った雪那は、手から注射器を取り落とす。カランと無機質な音を立てて転がるその中身は、眼前の少女とは違ってひどく濁っている。

「嫌です」

それだけ言って、沙耶香は自身の御刀をしっかりと握って走り去った。一人残された女はただ黙って、そのままの表情で電話を手を取った。

「成った」

『了解』

全ては順調であると伝える為に。

◆ 「結芽」

「はゝい？」

「鎌府に更に貸しを作る。今からこの場所に行け」

「え？ あ、それってつまり、面白い事って事ですか？」

「ああ、戦闘も許可する。糸見沙耶香を捕縛してこい」

「了解しました。でもそれじゃあこの警備が手薄になりますよ？」

「私が居る。それに勝る警備など無い」

「さつすが紫様。ささつと終わらせて帰って来まゝす」

——これで全てのお膳立ては整った。そう思つて折神家当主は、ゆつくりと扉を見つめて椅子に座った。

◆ 目的地までを繋ぐ長廊下には誰もいなかった。

それもその筈で、現在折神家当主親衛隊は総員出動。隣接する鎌府女学院の刀使も命令通り総員が退去している。

現折神家戦力は、当主折神紫ただ一人。

自室に戻った彼女は大刀なんぞ目もくれず、デスクの二番目の引き出しに仕舞っている脇差を取り出した。

鞘を払い、切っ先、物打ち、鎬、錨柄、茎。点検異常なし。

元の鞘に戻し、ちようど20年前に使用していたベルトを腰に巻き、脇差を左に佩く。

——無人の長廊下をひた歩き、目的の部屋へと向かう足取りは思いのほか軽い。何故なら今、想い出と信念だけが彼女に。今日この日の為だけに、彼女の足と心は動き続けてきたからだ。

『貴女のような恥知らずになる方法を今度教えて下さらない?』

その一步に出会いを。

『ツツコミなさいよ不愛想刀使』

その一步に憧憬を。

『危ない所、だったわね』

その一步に敬愛を。

『チームの仲間を護るのに理由は必要ない。紫様なら、そう、言うわ…』

その一步に闘志を。

『だからちよつとき、もしかしたらもう貴女とこうやって会えなくなるかもしれないからさ。——ちよつと私と斬り合ってくれない?』

その一步に敵愾を。

『アンタに借りを作つたままだなんて。私が私で無くなるわ』

その一步に嫉妬を。

『……………気持ち悪いわ。貴女』『何とでも。私の勝ちね』

そしてその一步に、悔恨を。

『——私はもう御刀を振れない。だから、これを貴女に。後はどうか』

万感を込めて、扉を叩く。計4回。

「入れ」

「……………」

ノブを回しながら、女は記憶を辿る。

『——これで良いんでしょう?』

『……………なに?』

『これでやつと。やつと貴女はあの方の傍付きになれる。私が邪魔だったんでしやう?』

ずつと』

『そうだ。ずっと邪魔だった。お前が』

『美奈都先輩とあの人が待っているから。——じゃあね』

『待て』

『…………?』

眼を瞑り、神経を尖らせる。筋骨、五臓、六腑に気を廻らせて。

『待て。——籌』

「お前か。あれだけ言ったにも拘らずここに来るとは、もしや獅童と此花がもう二羽の鳥に負けたか?それはそれは、」

「…………」

『私とお前。どちらがお姉様を護るに相応しいか、決着がついていない。だからまだこちらに居ろ』

『…………なあに?それ』

『19年だ。ずっとお前は私にとって眼の上のコブだった。学生の時から、お姉様の傍にはお前が居た』

『…………』

息を吐いて、10数えながら息を吸う。

『お前と私の苗字が変わっても。…お前はいつも私の前、お姉様の隣り。私はお前に引

導を渡さねば気が済まん。勝ち逃げは許さない』

『……………、ふいふ』

——か細い呼吸。それを自分の意志で止め、女は鯉口を切っていた脇差の柄に利き手を飛ばした。

『ごめんなさい。紫様を、あの御方をどうかお願い』

眼玉を開き、瞬きなどしないように。怨敵を瞳に宿して、

「予想通りだな？ 高津雪那」

復讐の幕が上がる。

「警察庁特別刀剣類管理局・相模湾岸大災厄特務隊主遊撃手の名に懸けて。——大荒

魂、折神紫。お前を斬る」

第12話 Magical blade, Demon blade

『——貴女は、私の事が大嫌いだからね』

1年前。病床に伏した女が目元だけを上に向けて口にして、弱々しい細腕を覗かせる。

……憎い女。それが昔から抱いている感想だった。

『今更言う事か。そんな当たり前の事が』

こいつは忌々しい奴で、羨ましい奴。それは学生のみぎりからずっと。

『ああ、死に顔でも拝みに来た？それは貴女らしい』

『違う。私は貴様に勝つていない。私がああ御方の真の傍付きとなるには。…納得するには勝たねばならない。他ならぬ貴様にだけは』

『気が昂ると早口になる癖は相変わらずね。——私達の中で、あの頃のままなのは貴女だけ』

化け物と人間との劍戟。

「天下五劍・大典太と鬼丸……!」

「やるではないか高津雪那。——しかし解せない、貴様はどうの昔に刀使を辞めた筈。現に貴様の御刀妙法村正は、今は糸見沙耶香の物だろう? その脇差の御刀は一体どこから見繕った?」

「…………ツ」

20年前に食った御刀、その二振り。化け物はそれを我が物顔で振るっている。

「成る程、貴様の部屋にこれみよがしに置いてあつた大刀はブラフか。だが今更出てきて、しかもたった一人で我をどうにか出来ると思つているのか? 年老いた元刀使よ。」

——お前はここまで来られたのが全部自分の力だと思つているかもしれないが、果たして本当かな? 親衛隊の者共を全員この折神本邸から出したのが、自分だけの力だと?」

「…………」

…………。

「貴様の企みなど最初から全てお見通しだ。貴様が私に従っている事が演技である事も、あの組織・舞草に加担している事も全て。だから二羽の鳥を世に放った」

「……………!」

劍戟という答え合わせは続く。

「あ奴らはこれから舞草の本部に向かうだろう。我が『龍眼』は全てを見通している。これで目障りな反乱分子どもは根こそぎ一掃できる。」

「だからお前を野放しにした。全てわざとだ」

「……」

「そして今。折神葵も燕結唯も綿貫和絵も、…藤原美奈都も折神紫も柊篝もいなくなつた今。20年前から剣士であるのはお前独り。」

「もし奇跡か何かが起こって、ここで我を斬り祓えたとしよう。しかしそれで折神紫を救えるか？」

「——20年だ、高津雪那。我は20年もの間この折神紫の心身と共にあつた。そして今や我こそが！折神紫と成つたのだ」

「……」

「紫の意識はいつも我に言っていたよ。美奈都に会いたい、篝に会いたい、母様に会いたい。」

「——手遅れだ。この日の為に目障りな伍箇伝のバカ共と協力し秘密裏に動いていたようだが、全てが無駄だ」

「……」

「貴様は我を斬れぬし、折神紫を取り戻す事もできない。たとえ20年前のあの日に戻

「? 何が可笑しい」

だから笑う。悉く。人間だけが出来る芸当を。

「ふ、ふふ、ふふふふ。20年前、貴様の言う人間に、ついで勝てなかった化け物風情が。私の剣では、斬れぬだと?」

それはこちらのセリフだ荒魂（化け物）如きが」

「——」

口を閉ざす化け物は。もう一度言ってみると眼で語っていた。

「美奈都先輩に勝てなかった化け物が。あの日辛酸を舐めた敗北者如きが。教えてやろう、お前があの人に負けた理由を」

.....

.....

「貴様が此方の存在ではない化け物——。人の剣術（ブレイドアーツ）を理解する事な

ど出来ぬ、只の化け物だからだ!!!」

「抜かしたな、——人間が!!!」

「——ッ!!」

斬られる肩口。裂かれる脇腹。生身の身体を人間を、化け物は止めを刺すべく白刃を

迫らせる。

剣士は崩れた足で地を踏みしめ、身体を守るように左手を突き出した。それはまるで生を懇願するように。許しを請うているように。

左掌が化け物の眼を遮ったと同時。

右手に握る刀の切っ先が、左手ごと折神紫を騙る化け物の顔面を貫いた。



「――」。

「ハア……っハア……！」

左手から心臓にかけて奔る激痛を殺意で凌駕し、刀を上には切り上げる。

人差し指と中指の間と、化け物の顔が大きく裂けて、ザツクリと静かに吹き出る鮮血が雪那の視界の罅を開けさせた。

「これが私の、――！」

―― 剣だ。と言う前に、

「只の人間が」

化け物は刀を素早く振るっていた。

「『写シ』を張っていれば何の意味もない。貴様の刃は届いたが、所詮はその程度」

「ッあ、つが——」

首から噴き出す真つ赤な血飛沫。振り終わった敵の刀の切っ先が、雪那には微かに見えた。

「——、あ」

「さらばだ、人間」

構えを解き、眼を細める大荒魂を最後に見て。雪那はゆつくりと眼を閉じた。

勝利の為に。

剣の発動の為に。

殺害を行う為に。

——それは魔剣であった。



——柊家秘伝・ひとつの太刀というものがある。

遠間から、見切れぬ早さで一瞬にして対象に近付き刺し殺すこの技は、然るべき時に言えば無敵に近い魔剣である。

だがもし、万が一敵にそれを察知され防がれてしまったら。

然るべき時ではなかったら。御前試合の決勝で十条姫和が、燕結芽と皐月夜見に防がれてしまった時のように。

その時は十中八九、我は敵から攻撃を受けているだろう。つまりこの剣は、君には向いていない。

ならばこの魔剣の発動条件は敵の刃を必ずこの身に受け、絶体絶命に立った時。

その時の君は頭を斬られるだろう、両腕を切断されるだろう、胴を真つ二つにされるだろう。喉に刀を突き入れられるだろう。もう、君の命はないだろう。

でもそれは、ここに居る君だろうか？

]

]

刺さった刀が見える。

血を流し、もはや動かぬ軀と変わるだろう化け物の目玉から生える脇差が。

]

刺し貫いているそれは、雪那が持つ御刀から繰り出され、怨嗟の声を出そうとも声など出せない。

敵が避けれない超至近距離からの刺突技。

それが彼女が見出した魔剣であり、すなわち敵の眼に留まる映る事なく、全身を巡る

神経・筋肉・血管・第六感すら気付く事なく敵を斬れる。そこまで達すれば、確実に無敵であろうと。

：思うにその剣を遣う者は。つまりは高津雪那だが、剣を遣うときは半ば死んでいるのだらう。

刀で斬られれば人は死ぬ。

刀使であれば『写シ』があるから意味のない攻撃も、只の人ならば死ぬしかない。そう、本当に只の人であつたなら。

——この魔剣の第一段階は、敵の一撃が我が身命を砕き、ついで敵の残心が消えた時その瞬間、いつもやっていたように『写シ』を展開できる事。穩世にいる自分と、この世にいる自分を入れ替える事にある。

それが『写シ』の構造であるならば、こちらが死に体でもあちら（穩世）の自分の体（エネルギー体）は生きている筈。動ける筈。

こちらを斬り殺し勝ち誇つたそいつに、一撃必殺を叩き込む。

君は『写シ』を張れぬ無防備な人間を装って、斬られて後は死ぬだけの自分を敵に見せつけてやるのだ。

——君は死ぬ。でもあちらの君は、敵を殺したい殺意に満ち満ちた穩世の君は、無傷の君は敵を刺し貫いてくれる。

——君は死ぬ。でも絶対に殺す。その為に君の今までがあつたのならば、為すべき事を為せ。その想いが死した君に御刀を手放す事を止めさせない。

これは江戸時代、海坂藩にて只一人の剣士が見出し、その蛮勇暴威を彼に許したものの必勝にして必死の魔剣。

眼の前の敵は君が躍るように跳びかかる姿を。しっかりと殺した筈の人間が刀で突いてくるその姿を、まるで捻じ曲がつた未来を見たかのように。

——君をそう見つめて果てるだろう。

我流魔剣 鬼目突



「……………籜。紫お姉様。これで、全て——」

終わった。そう言い残して、最後の『写シ』が解けた刀使は、血潮と脇差をボトボ

トと零し、今度こそ眼を閉じた。

—— 箒の死に顔。泣きわめく娘。悔いしか残らない我が身。その時、女は自身の将来を定めたのだった。

『勝ち逃げか。箒』

『私から勝ち星を。お姉様からの信を勝ち取り——。往くというのか柊箒』

全ては友の為。それが、この高津雪那が選んだ未来（さき）。

柊一文字。友が今際の際にくれた物、それがこの御刀の銘であった。

「やってやったわよ。……柊さん」



そうして全てが終わった後、むくりと起き上がる一つの体。

貴女はそれを無視して、倒れた剣士へと近付いた。いざとなれば助力しようと思つていたのだが、そんな事をするまでもなかった。

流石は鎌府の長。感じ入った貴女が、三回手の平を打つ。

「つぐ——ぬ。油断したか」

「お見事。高津学長、貴女は最期まで刀使でした。ここで死なせるのは忍びない」

まだ間に合う筈。注射器を高津雪那の首に打ち込み、中身を注入する。中身はノロ。

ポーズだけとはいえ、彼女が糸見沙耶香に打ち込もうとしたものと同種の物。これを打ち込まれた人間は冥加と呼ばれる存在になる。

「一先ずはこれで安心ですね。——それに比べて、」

翻つて侮蔑を込め、貴女は見つめる。

「何ともつまらない幕切れですね。」

死にぞこないが。何故まだお前は生きているのだ？」

「な——に？」

化け物は懐かしいモノを見るようにして、貴女を瞳に映した。

「貴様か、我が半身。奇魂よ」

「?」

.....。

「20年前、あの忌々しき藤原美奈都に斬られた我が首よ。こんな所で一体何をして
いる?」

「?」

貴女は心底わけの分からない話を耳にしている。そして、それに心底相應しい表情もしていた。

「?何の事を話している? 一体? もしや20年前、化け物が人間に敗れた話か? それとも今、またも化け物が人間に敗れた話か?」

「……………」

「私見を言うならば、なまじつか龍眼などがあるから、このような剣に対応できないと言わざるを得ない。

未来を捻じ曲げる事こそブレイドアーツ。藤原美奈都の我流の剣を、燕結芽の魔剣を見た貴様ならもしや。等とは露とも思っていないがやはりだったな。化け物」

「ほお、成る程。貴様、綿貫和絵の娘となっていたのか。人間の真似事というわけだ」

「貴女は息を吐く。溜まった膿を吹き出すように。」

「——やはりわからないか。利き手を安行の柄に掛けながら。」

「もういい。高津学長が起きる前に、私の務めを果たそう」

「斬るか。我を」

「これからお前の顔を縦に斬るから——、避けてみる」

『龍眼』。それは刀使の『明眼』と似て非なるもの。

未来を視るといふ、自身に起こりうる可能性を見通す力。大荒魂と呼ばれる化け物に備わっている異能である。

貴女はそれに加え、これから先の行動をも事前に知らせた。これで何とか出来なければ、やはりコイツは只の化け物だろう。

「その前に貴様を斬る私の姿しかこの眼には見えぬわ！」

「——」
貴女は見詰める。刀を抜き始める。柄頭が折神紫の形をした化け物の顔面に向かう道中、敵の瞳を見詰める。

——敵は遅いと、どうあつてもそれは悪手だと敵は思っていた。

貴女が振り下ろそうとしているその細い刃は虚しく宙にて留まり、我が一刀を受ける羽目になるだけだと。そう視えていると。

——そう、この敵にはわからない。

かつての我が半身のくせに、薄紙一枚分にすら劣る価値しなくなつてしまった氷の切片には、決してわからない。

その運命、この現実、己の生と死の終着が、見えていない。
でなければそんな表情はできない。

——貴女は嗤っていた。

「ああホント馬鹿みたい……っ私の斬撃が、ハハ、飛ぶわけがないと、思ったか？」

ああ、可笑しい。真つ二つになつてまあ。

「何でそう思った？ 視えないからか？ 視えるものしか信じないからか？」

どうした？ 化け物？ 人知を超えた、フフ、人の辿り着く領域を、ハハ、軽く凌駕していた筈の化け物よ。アツハハハハハハ！！！！

——あの日、こうやつて。藤原美奈都に負けただろうにその屈辱すら忘れたか本物の阿呆が！！！！」

軀を見下ろし、そこで貴女は。ふふ、いや、いやいや。……もういいだろう。

——行儀のいい振りは、もうやめにしましょうか。

「偉大なる戦士・折神葵様の娘。折神紫様、さあ起きて下さい」

私は紫様の身体に薬を打ち込む。高津学長に打ち込んだものと同じ、鎌府研究室にて私が手を加えた最新のノ口を。

「貴女の中の異物（化け物）を祓ってあげたのですから、今度は私の望みを叶えて頂きますよ？ もう意識は戻っている筈です。高津学長と同じく」

「……………、お、前……は……」

「今やお二人とも、真希様や此花様と同じく冥加刀使。当面はこれで我慢していて下さい。追い追い、皆様を元の刀使に戻して御覧に入れます。なのでそれまでは是非この綿

貫に協力の程を」

「お前の、……目的は？」

「復讐」

やつと。

私はそう言つて笑みを浮かべる。存分に本懐を遂げる為に。ついに来るだろう約束の時を夢想して、私は宿敵を想つた。

「さあ連れて来て下さい。衛藤可奈美さんを。いや、藤原美奈都を」
今度は——私が勝つただから。

第13話 Identity

物心がつく遙か前から、私はいつも同じ夢を見ていた。

人が刀を振り回し、化け物と言つて差し支えない異形と戦う夢。そしていつも、化け物が負けていた。

『——何故だ』

敗者が言う。断ち斬られた頭蓋が。これが私の人生最初の記憶。

『何故負ける。何故勝てぬ』

何が足りぬ。そう言い続けて彼女はその日、私を見て聞いてきた。

『どう思う？』

『わかんない』

率直な感想を私は言つた。

『人間が化け物に勝てるわけがない。そうは思わないか？』

『それって逆じゃないかな』

「逆?」

「化けものだから人間に勝てない」

「そう——か? そういう事か」

得心がいったソレは、夢の中でのみ出逢い話せた、私の秘密の友達なのだった。

◇

彼女と私の交流はこの夢の中だか異世界だかでのみ行えた。ぼんやりとした形で見えない存在ではあったが、私にとっては大事な友だった。

「剣を学ぶようになったのか。和美」

「うん。私のお母さん、とっても強い剣士さん?なんだって。だから私にも少しずつ教えるって」

「嫌ではないのか?」

「嫌…:てついうか、何だか怖い感じだった」

「ほう?」

「これは自分も相手も殺す物だってお母さんが言つてて。そのお顔が怖かった」

「なるほど。つまり恐怖を抱えて生きるのが人。というわけか?」

「よく分かんない。どうなんだろう…」

チラリと、私は彼女を見る。物知りだから。色んな事を教えてくれるから。彼女は頼りになる。信頼の構築はその程度でよかった。

「——やってみればいいだろう。わからないものが、分かるまで」
「うん。やってみる」

自分に言うように、いつも彼女は私にそう言った。



「ほう。それが和美の御刀か。大和守安行といった所だな？」

「うん、安行。お母さんとお父さんがプレゼントしてくれた」

「元は母の御刀だな？それは」

「うん」

「この世界にも連れてくる事が出来るとは。どれ、少し稽古していけばどうだ。相手になろう」

「いいの？やったあ！ あ、でも、起きてる私に影響とかあるのかな？ クシ」

クシとはこの友の名である。本来は奇魂というらしい。

「何事も経験。そうだろう？ 和美」

「うん！ じゃあ行くよ!!」

「来い」

いつの間にか出現するクシの手。私と同じ姿。そして私と同じ御刀・安行。クシはもう一人の私なんだ。

なんて、私は彼女を思い始めていた。そしてそれは真実であった。

◇

やることも他に無かったので、文字通り私は寝ても覚めても剣の稽古に没頭した。母の指導は厳しく優しく、そして夢の中でクシ相手に成果を確かめる日々。それらは充実の一言だった。

そうこうして我が家の流派を学び取ってきた私だが、ある日ついに新たな流派を。：いや、我が家最古の流儀を学ぶ日がやってきた。

「——葦名無心流か。和美が学んでいる葦名流、その祖が最初に始めたという剣の流儀と。随分と技が多いようだな？」

「ええ。ただ流儀流派というよりも、心得に近いようですね。より強さを、より高みを、

あらゆる流派を。他者であれ何であれ飲み込み続ける。綿貫家はそれを守り、記し続けているといひます。

しかし私に出来るかどうか。……特に『竜閃』など魔剣と言った方が正しいでしょう」
「魔剣?」

「母から伝書と共に現存する無心流の剣を聞かせてもらいましたが、いや、あれは他に何と言つていいのか」

「どんなものだ?」

「斬撃が飛ぶのです」

「——ほう?」

「ただひたすら敵を斬つて斬つて斬りまくる。如何に斬るべきか、如何に斬ろうか。そう突き詰めるうち、気付けば刃は飛ぶようになる。母は冗談を好みませんので、真実なのでしよう」

私は笑つた。それしか出来なかつたから。でも彼女は違つていた。

「——飛ぶというのか」

「?何ですその顔は。まさかクシは見た事が?」

「ある」

私と同じ顔の友は眼をギラリと光らせた。炎にかざした刀のように。

「奴は我流と言っていた。無心流ではない筈だが畢竟、劍とは極めるとそんな事が出来るのだろうか」

「成る程。：口伝によれば無心流の祖と二代目もそれが出来たと聞いています。伝説は真実だったのでしょうか」

「和美。お前も出来るようになりたくはないか？」

「なりたくないとは言いませんが、：果たしてそれだけの時間が私にあるかどうか」

現代は荒魂という明確な敵が存在しているとはいえ、昔と今は違う。斬って斬って斬りまくれるほど、眼に見える敵も斬っていい敵もいないのだ。

「可能だ。ここで稽古を行えばいい」

「……」

「刀使には『迅移』という力があるだろうか？無限にある『隠世』の階層、異なる各々の時間流を引き出す力だ。それを使う」

「迅移は瞬間的にしか使えませんよ」

「問題ない」

すると、クシは瞳からピンクスピネル色の光を放つ。それは『迅移』にしてはおかしな様相だった。

「現世ではこれを『無念無想』と言うそうだが、これは隠世のとある階層の時間流を引き

出しているだけだ。そして複数人がこれを使うと、対象者の時間は停止する。持続的な迅移同士による相乗効果だ」

「まさかそんな事が……」

「隠世に不可能はない。——無論、それでも足りぬかもしれない。稽古をしていても、和美。お前の刀使としての寿命が先に尽きてしまうかもしれない。

だがこれで私と立ち合い続けられれば、お前も奴と同じ事が出来るようになるかもしれない。あの藤原美奈都と」

「……………」

あの修羅と。

「どうする」

渴望の色。切望の眼差し。それを私は拒絶する事が出来なかつた。他ならぬ友を、剣への期待を、何処までやれるのか私を。

「やりましょう。私達で」

「そこなくてはな。和美」



「出来たな」

「ええ、出来ました。これが秘伝——『竜閃』」

「和美。頼みがある」

「何でしょうか？」

「お前の体を私に貸してくれ。起きている、云わば表のお前の」

「答える前に教えて下さい。それは何の為に」

「復讐の為に。勝つ為に」

「やっと同じ土俵に立てた悦び。この時のクシにはそれがあつた。」

「藤原美奈都に、ですか」

「そうだ」

「その人が何処にいるのか分かるのですか？」

「探し当てた筈。お前ならば」

「正解です。いいでしょう」

この時期、私は起きていてもある種の勘（第六感）が働くようになっていた。例えばコレをしておこうとか、あれを調べてみようとか。だから先の災厄の英雄・藤原美奈都の居所を突き止める事が出来ていた。

そしてついに夢の中で、私は確信する。

全ては友の為だったのだと。彼女の本懐を遂げさせてあげたいと。御刀の切っ先を腹にあてて、私は思った。

「よいのか。真に」

「私は刀使になる身です。これくらい出来なくては」

「気付いていたのか、我が荒魂だと」

「そして。私の友だと」

「…すまない、和美」

「水くさい。何年の付き合いだと思っているのです」



「久しいな、藤原美奈都」

「冗談。今は衛藤だよ？」



何の感触も痛みもない、腹に突き立てた刀。その光景の次に私が見たものは。

表の体でもって復讐という名の本懐を遂げた筈の友の、なんとも悲嘆にくれた姿だった。

だから尋ねる。だから怒る。だから負ける。

「何故です」

「勝てぬと分かった」

「同じステージに立てた筈」

「違う。違うのだ、和美。…お前の体を借りても、所詮我は化け物。人には勝てない。ブレイドアーツを、真に理解することなど出来ぬ」

「……………」

……………。

「対峙して、初めて理解した。奴は本当に別次元だと。…………心底恨めしい。我はどこまでいっても化け物で、奴はどこまでいっても人間だということが」

「……………」

「ああ、この身が初めから人間であつたならば。人間として、人間の奴と正真正銘の一騎打ちが出来たものを。」

——こんな事なら。我はあの日、奴に斬られたまま消え失せておけばよかった」

薄く笑う、ひどく似合わない下卑た笑顔。互いに刀を握りしめ、けれど私は一歩近付

いた。

「待ちなさい」

「？」

「——クシが人間となる。いや、正真正銘、私となればいいのですね？」

「？何を言っている？」

「腹を斬りなさい。今度はあなたが」

「我が？」

「あなたは私の魂の一部。例えるなら前世の私。表では私、ここでは私とあなた。

ならばその表裏を一つとするまで」

「正気か？それは——、化け物である私と完全に融合するという事だぞ和美」

「それは違います。元は一つであった人間の魂が元通りになる。ただそれだけの事」

「だとしても——。いや、果たしてどうなるのか分からぬ。こちら側の存在がこちら側に行くのではなく、あちらとこちらの存在が一つとなるなど——」

「出来ませぬ。必ず」

「何故（なにゆえ）」

「私達がそう思い、願っているから」

.....

「私達なら出来る。……………そう言うのか、和美」

「クシ。あなたは本当に私の半身で、親友でした。あなたの本懐、そして私の本懐を遂げましょう。共に、藤原美奈都に一太刀を。一矢を」

「……………感謝する」

ありがとうと。前世の己である我が友はそう言って刃を腹に突き立てた。そして瞬間、崩れゆく意識の中、私は全てを知った。

勝ちたいという渴望を。あの日の復讐を。人間の真価を。自分を。

——奴の強さを上回る。それは産まれた時からずっと、私にあった原初の思いだったのだと。



「もうじきです」

もう夢はみない。

「藤原美奈都は案の定、衛藤さんの中にいた。一目見て分かりました。あちらは気付かなかったようですが」

友に逢う事は二度とない。いや、逢うまでもない。

「後は奴がこちら側に来るよう上手く誘導するまで。一つ一つ確実に、工程を踏んでいくとしましょう。なので次です、高津学長。この御刀を貴女に」

「はい」

「今から舞草の刀使達と拠点を潰してきて下さい。場所は口伝でのみ伝えられました。ここです」

紫様を奥の部屋のベッドに寝かせ、そして私は地図に指を差す。今の彼女、鎌府学長は記憶が少々曖昧だ。舞草の本拠地は思い出せないだろう。

「その為に私は舞草に入ったのですから。貴女という力の襲撃があれば、この場所に居る朱音様と衛藤さん達は必ず撤退する。そして、彼女達はここに来る筈です。そこを叩きます」

「はい」

「ではよしなに。よろしく願いますよ?」

「はい。お姉様」



冥加という存在になるとは。それは『隠世』を通して、対象者が持つ全時間における

全盛の精神・思考速度・筋力を一時与えるという事に他ならない。

屈辱と歓喜と叛旗の塊である幼年期。それらを乗り越え万能感と更なる屈辱と怒りで満たされる青年期。成熟し、余裕と諦観と理解の範囲が広まる壮年朱夏老年期。

彼女の全盛は今から20年前のそれであり、云わば今の雪那は過去の自分という『写シ』を張っているようなものだった。

「親衛隊が三人も揃って何だこの失態は」

「申し訳ありません高津学長。まことに不甲斐なく」

「夜見、貴様も敗れるとはな。少々意外だ」

「……………は」

「報告によれば、あの反逆者たちは米軍の潜水艦に乗って逃げたと。それは間違いないなっ」

「はい」

「山狩りは失敗。奴らは何処に行ったか分からず仕舞いと。そうだな？獅童、此花」

「その通りです」

「あんなものがバックに付いているとは。やはり彼女達は反折神家・舞草の一味と見て間違いないですわね」

「———そうだ。紫お姉様を脅かし、今まで拠点すら分からなかった秘密組織だ」

「？ お姉様？」

「しかし、それも終わる。もはや奴らのアジトは、こちらに知れたのだからな」

「……………高津学長？」

「申し訳ありません、よく聞こえませんでしたわ。学長？今なんと？まさか舞草の居所が分かったというのですか？」

「ああそうだ」

「いつの間に……………」

「紫様がそうおっしゃったのだ。従え」

雪那はピシヤリと言い切る。そして左腰の御刀に手をやって、位置を正す。それは違和感の欠片もない仕草だった。まるで現役の刀使のように。

「……………なるほど。しかしその紫様の御姿が見えないようですが？」

「奥の社にて御勤めである。妨ぐな」

「了解」

「そして紫様は舞草の壊滅を望んでおられる。今すぐに」

「では私が参りますわ。折神に仇なすもの悉く討つ事こそ親衛隊の責務。この右近衛の将が直ちに」

「駄目だ。左右近衛大将は待機との命令である。従え」

「……では夜見か結芽が？」

ふるりと首を振る。そして告げられる彼女の言葉は衝撃的なものだった。

「私が征く」

「——は？」

「——はい？」

「何だ」

一応この人間は目上である。という敬意の目ではなく、何言っただこいつはという奇異の目が雪那に向けられる。

この場にはいない第四席と、眼を伏せている第三席を除いた全ての人間の眼差しを一身に受けて、雪那は歩き出した。

「失礼、まさか鎌府学長が冗談を嗜むとは思いませんでした。左兵衛大将を向かわせませぬ。結芽はどこに？」

「私は冗談が嫌いだ。その私が征くと宣言した」

「いつから趣味が自殺になったんですの？学長。貴女が凄腕の刀使だったのは20年も昔のこと。『写シ』を張れない元刀使に用はありませんわ」

「———これの事？」

「……なんと」

それは彼女たち現役の刀使がよく見る景色だった。身体をエネルギー体に変える『写シ』。身体から発するその独特な燐光は彼女達のみに見えるモノ。

体内のノロが馴染んできたのかついに口調すら変わり、いや呼び戻した彼女は列強の如き剣気を携えて、ここに来た。

「まさか学長。……貴女も?」

つまり今、真正正銘の『写シ』を張った時のみ彼女は。

かつて江の島から生存者を連れて無傷で帰還し、そして特務隊主遊撃手でもあつた歴戦の鎌府刀使。護剣の切っ先・相模雪那が、ここに再臨したのである。

「アンタたちはここを守ってなさい。私は出撃するから」

「お一人で本当によろしいのですか?……高津学長」

「……高津?……高津、ああ、そうだったわね。問題ないわ。後はよろしく」

「……——了解。御武運を」

夜見達は頭を下げる。何だかよく分からない感情がそうさせる。

それは恐怖か、或いは怒気か。各々万感を去来させ、しかし剣士達の檜舞台はついに日の目を見る。狂うこと無くギアは廻り、定めを巡る。砕け散るまで。

戦いが、彼女達を待っている。

第14話 壊す者と守る者

アイツさ、怪獣と戦った事があるんだよ。と聞けば、それは誇大妄想の類の言葉だと思うだろう。炎を吐いたり空を飛んだり。三つ首の化け物と死闘を繰り広げたのだと言えば、そんなもの信じられるか！と一笑に付して終わるに違いない。

「あ……貴女は」

しかし彼女はその例外。

「どけ」

ウオーキングをするような風体で、彼女は舞草（もくさ）の刀使達の前に現れた。ベルトに吊るした大小二本の御刀の刀身はしっかりと鞘に納まっている。

小刀の銘を柸一文字、大刀の銘を退雷・伊賀守金道と云う。

両手は柄にも鞘にも掛けてはいない。自然体。一見、それは和平の意思表示のようにも見えた。

「貴女でしたか、同志。高津学長」

それこそが戦闘態勢であると見切れた者が果たして何人いただろう。事実、この場にいる大多数はその不可思議な光景に目を奪われていた。こんな所で大立回りをするわけがない。だってこんなにも、穏やかで自然体だ。

「こんな時刻に何用ですか？ 朱音様も紗南学長も只今不在です。接見ならば——」

「接見ではない」

「へ？」

「はい？ 今何と？」

「これは出撃である」

それを聞いて。やっと事態を理解した舞草の本拠地入り口担当の刀使達は刀を抜いて『写シ』を張った。

「御刀をお納め下さい」

「？ 納めているが」

「…構えをお解き下さい。狂気の沙汰ですぞ、これから貴女が為そうとしておられる事は」

「紗南は今いないのだろうか？ ならば護剣の鐔柄——、」

話を通じない。しかし雪那は元より話し合いに来たわけではないので、おかしい所は何も無い。それ故に、折神紫（大荒魂）に反する勢力である舞草の剣士達は、相手が尋

常ならざる精神状態にある事を悟った。

「敵に絆されましたか、鎌府学長！」

「——降服はムダだ。抵抗しろ」

「!?!」

それは束の間の出来事であった。剣劇は、一瞬二斬が始まりである。



「いやー、一時はどうなる事かと思いましタ」

「やっと一息ついたつてところだな」

舞草本拠地の隠れ里。間接的に何処から探しても見つからないそこに、糸見沙耶香を退けた可奈美と姫和は居た。

折神紫、すなわち大荒魂に反対する秘密武装勢力・舞草。

累からの伝手でその刀使達と接触した可奈美達は、現在大荒魂包囲網を構築中の一大勢力がある事を知ったのである。

「エレンちゃんも薫ちゃんも、その舞草？なんだよね？」

「まあな」

「舞草の側の人間は、思った以上に大勢いるようだ。長船の刀使達」

「ええ、モチロン。先程ひよよん達が話した私のグランパに、長船女学園の真庭紗南学長、かなみんの所の学長に、ひよよんのママ！あとは私達長船の刀使を中心に、他の伍箇伝にもぼちぼち。そして鎌府の学長もデスネー」

「まるで包囲網だな」

「まるでじゃない。その通りだ。オレ達は準備を着々と進めて折神紫、…いや、大荒魂を白日の下に晒そうとしている。鎌府の学長も、それには秘密裏に協力してくれていたんだ」

「そんな中、まさかひよよんが真正面から折神紫にカチコミかけるとは思いませんでしたケドね」

「私は私の為すべき事をしたまでだ」

姫和は眼を瞑る。

——亡き母はそんな事を水面下で進めていたのか。とすると、頻繁に来ていたあの人も舞草の一員だったのだろう。姫和は納得と、少しの疎外感を感じていた。

話してくれてもよかつたのに。しかし、あの優しい母ならばと。

「母の仇を、娘の私が取らずに誰が取る」

「まあこれまでの経緯はどうあれ、確たる証拠も手に入れた。そうだな？エレン」

「ええソウデース！これを見て下サーイ！」

長船女学園の刀使・益子薫が言うと、同じく刀使・古波蔵エレンは試験管を袖から一つ取り出した。

「それは？」

「ノロデスね。折神紫（大荒魂）が製造に携わっていたものデス」

「どこでこれを？」

「親衛隊の人達がひよん達をとつ捕まえようと山狩りをしていた頃、ちよつとネー。思わぬ協力者が出てくれたもので」

「協力者……？」

「あつちも一枚岩ではないということデース。僥倖ともいいますネ」

「これからどうする」

「勿論！世間にこのノロと我々舞草の集めた証拠の全てを公表し、人間のフリした大荒魂を告発しマース！」

「上手くいいか？」

「やるなら上手くいかなければならない。それが我々デース！」

「まあ、今はのんびりしておこう。お前らの友達も今こつちに来ている頃だ。合流して、ウチの学長とあの人が来てくれればこつちは準備万端」

「なのデース!!」

——友達?あの人?

可奈美と姫和には色んな?が浮かび上がっていた。



「もう間もなくですね」

「ええ。これでやつと、私も篝センパイと美奈都センパイに顔向けができます。朱音様」
車内には二人の女性が居た。同年代、同級生、同組織、すなわち舞草の中心メンバー。
長船女学園学長、真庭紗南と折神紫の妹・折神朱音。20年前の大災厄当時は現場は違
えど、共に戦っていた者同士だ。

「十条姫和さんと衛藤可奈美さんはもう着いているのですね?」

「そのようです。今頃はフリードマン博士と、エレン達から説明を受けています」

「……………もう20年ですか」

早いものですね、と。朱音は呟くように言った。

「……………ええ。あの日の事は昨日の事のように思い出せます。あの三つ首、あの雷、そう
簡単には忘れられません」

「……………」

本来あの荒魂は四つ首で、紗南が戦う前には一つ斬り落とされていた。それを為したのが自身の亡き母であり、そして防衛ラインの刀使達である事を、朱音は片時も忘れてなどいない。

あの場にもし自分が居て、そして姉のように強く刀使を全うできていたなら。…その後悔が、彼女が舞草を結成した理由の一つでもある。

「きつと、事態を明らかにして、今度こそ私は母達の墓前に言う事が出来ます。あの日の戦いが…やつと終わったと」

「協力は惜しまないよ、あかねちゃん」

「ありがとう、なーちゃん」

昔馴染みである二人の元刀使が、間もなく舞草の本拠・隠れ里に着こうとしたその時である。

「——ん？」

「あれは…？」

果たしてそこに居るのは、紗南にとってはひどく見覚えのある、一人の剣士の姿だった。

「雪那センパイ…？」

「高津学長ですね。こんな所で一体何を？」

「正門担当の城兵の仕事でも引き受けたんですかね。あの人ジョーク苦手の筈ですが」
片手が上げる。ニコリともせず。その仕草は間違いなく高津雪那だった。

「ここでお待ちを。」

——センパイ、御無沙汰してます。しかしここで何を？」

「待つていたのだ。ここで」

「……。どういう事です？待つていた？」

「大荒魂がこちらの動きに気付いた素振りあり。こう言えば分かるな？」

「!? まさか……」

「私はヤツの眼を盗んでここに来た。こうなった以上、最早あらゆる連絡手段は意味をなさない事は明白。間違っているか？紗南」

「いえ、間違つてはいませんが……」

紗南は訝しんだ。たしかに互いの連絡方法は舞草の者を使った伝言か、こうして直接会う事ではある。そういう取り決めだ。

だが仮にも我々は鎌府の長と長船の長。互いに会う事はリスクが高い。だから極力避けようという事も事前に話し合っていた筈。

…妙だ。そして何よりも、何故この場には彼女以外誰もいない。

「そういえば雪那センパイ。ここに常駐している長船の刀使達、ここを離れるなど命令してあったんですが、見ましたか？」

「ああ。今は向こうで休んでいる。いい刀使に育てたな？」

「それは恐縮です。ちなみにいつから休んでます？」

「たしか…30分前だな」

「貴女がここに着いたのは？」

「…30分前だな」

「もひとつ質問いいですか。——ウチの刀使達に、何やった？」

「アンタのような勘のいい後輩は嫌いよ。紗南」

『写シ』。そう見て取った瞬間、紗南はドアも閉めずに急ハンドルを切りながら車のア

クセルを踏んだ。

急激に地面を切り裂く四輪タイヤが悲鳴を上げて、しかしそれに交じって聞こえる僅かな鞞鳴りの音。

元刀使として、それは聞き間違える事はなかった。抜刀術の音だ。

「朱音ちゃんツ!!無事!?!シートベルト!!」

「それはちよつと言うのが遅いんじゃないのなーちゃん!?!」

まるで最初からそう設計されているように、車が縦に真つ二つに割れる。それはまる

で20年前の再来だ。この人はいつもこうして、敵を一刀のもとに斬り裂いていた。

「やはり御刀……!」

「瑞々しいのは相変わらずね、紗南? きつと、アンタはどんな時代でも若いままなんでしょうね」

高津雪那の姿形をした何かが言う。

「荒魂か?とも思つたが、どうやらそうではないらしい。根拠は元刀使としての、そしてかつての相方(遊撃手)としての女の勘だ。

「そういう貴女は一体全体どうしちゃったんです?まるで相模に戻つたみたいじゃないですか。冗談は苦手の筈ですよね?タチの悪いジョークは止してくださいよ笑えない……!」

「モチロン刀使の任務よ」

「アタシらが刀使だったのは約20年も前の事ですよ……ッ」

「瞬時に朱音を見る。半分になった車から互いに脱出を果たし、五体無事だ。気絶もしていない。つまり今やるべきは時間稼ぎ。」

「あら知らないの?先代折神家当主は45まで現役だった。私だつてまだ現役でもおかしくないですよ……」

「成る程。つまり本当におかしくなっちゃつたつてわけですか雪那センパイ——!」

仁王立つ。朱音の前に。この人だけはやらせるわけにはいかない。

「アンタの部下、まあまあだったけど対人を想定していないのは如何なものかしら。鎌府にこんな腑抜けはいないし、いなかったわよ?」

「…生きていますね?」

「あつたり前じゃない。『写シ』を一回潰しただけよ。情けないくらいにそれだけでグロッキーだったけど」

「紗南先生!大丈夫ですか!」

「(こ)は!」

「私達が!!」

異常をついに察知したのだろう長船の刀使達が、雪那を取り囲まんと陣形を展開する。

対荒魂戦のプロ、多人数での殲滅戦に特化した護剣の鏢柄・長船女学園の刀使衆。長の紗南は荒魂を殲滅する事を念頭に彼女達を鍛え上げていた。だから、

「やめろ!!今は!!」

雪那が笑みを深める。腰を落とす。納刀したまま。

——観念したのではない。頭(こうべ)を垂れる為でも、勿論ない。

勝つ為に。人外のみを滅する筈の彼女の剣が、抜刀術が、同じ人へ向けて放つ為に。

「逃げろ!!!」



「敵襲！敵襲だ!!皆急いで逃げる準備をしてくれ!!」

「フリードマンさん!?!」

「グランパ何事デス?!」

「現在この隠れ里は機動隊に包囲されつつある!どうやら先んじて罠に嵌められたようだ」

「敵の数は?」

「・・・機動隊は50を超える数だが、実質の敵は一人。鎌府女学院学長・高津雪那!」

「おいやべえだろそれ色々」

「まさか鎌府のトップが……?」

「でもでも!鎌府の学長さんも同じ舞草の筈ですよね!?!」

「ああ、そうだよ。大荒魂を討つという共通の目的があったからね。・・・しかし、」

「その学長が自らここに侵攻してきた。…つまりオレ達に接触してきたのは最初から騙す為だったと見ていいな」

薫が断言する。エレンは考える。自身の祖父と同じ仕草で。

「俄かには信じられないがね……。あの人の言葉と瞳に嘘はなかった。騙す為だったというより、何らかの方法で操られているというのが正しい気がする。その証拠に彼女は『写シ』を張っているとの報告だ」

「一体どうやって……………」

「理由はどうあれ、ここは三十六計逃げるにしかずだろう。今は撤退だ」

「待て、敵は一人なんだろう？ここには私達もいる。返り討ちにしてやれば、」

「それは駄目だ」

「何故」

「ここに真庭学長が居ても同じ事を言うだろう。あの人には勝てない。舞草総員は武装を解除する。その際に君達は逃げるんだ」

『写シ』が張れても相手は過去の人物だろう」

——まだ諦めたくはない。姫和と薫が食い下がった。

「だからだ。あの人は相模湾岸大災厄特務隊八人の中の一人、主遊撃手。そして、あの地獄の江の島で荒魂を無傷で屠りながら取り残された私の仲間をも助けてくれた剣士。

仮にもしあの人は何らかの方法で刀使に、……高津から相模に戻ったとなればここはもう終わりなんだ。それだけ当時の特務隊隊員は傑物揃いだった」

「紗南先生は大丈夫でしょうかグランパ……」

「……まだ連絡がつかない。あの方と共に、ここに向かって来ている筈だったが」

「そこを見計らって鎌府学長はここを襲ったのかもな。——おいエレン、ここは行くしかないだろ」

「そうデスね。ヤツテやりましょう」

「君たち……！」

「ウチの学長の傍にはあの人もある。逃げるのは、安全を確保してからでも遅くないだろ」

「——征くか」

「うん！ 姫和ちゃん！」

「レスキュー部隊結成！ グランパは里の皆を頼みマース！」

幕間 沙耶香たちサイド

「分からない……」

大荒魂が討滅されるほんの少し前、糸見沙耶香は暗闇の中を突き進んでいた。

「何で……あの時……、」

『——嫌です』

払いのけた右手を見る。学長が持っていた注射器から嫌な予感がして、それを拒絶した右手を。

「強くなれる。多分、そう。でも何だか違う。アレは、違う」

勘である。それは刀使としての賜物。経験はまだまだ歴戦とは言えないにしても、彼女は立派な刀使であり剣士である。

変だと感じたものには近付かない。近付かせない。それが沙耶香の第六感であり、結果的にそれは正解でもあった。

たとえ払いのける事が、鎌府学長に予期されていたのだとしても。

「……………こういう時、和美なら」

携帯電話を取り出す。自身が信頼する先輩に掛けたが、電源が入っていないようだ。
「……………お腹すいた」

木陰に隠れ、眩きながら。沙耶香は甘い物と一人の刀使の顔を思い出していた。



『あ、沙耶香ちゃん？どうしたの？』

「……………」

『眠れないの？』

優しい声が沙耶香の鼓膜を通して、彼女独特の暖かさを心で感じる。電話の相手は沙耶香にとって掛け替えのない存在となりつつあった。少し前に一度話して、連絡先を交換しただけであったが、こういう時こそそういう相手が要るのかもしれない。

沙耶香はもう一度、携帯電話のディスプレイに映る文字を。通話相手・柳瀬舞衣の名前を見た。

「あ、……………」

『ん？なあに？』

「私。…私、一体どうすれば」

『…………え?…沙耶香ちゃ、』

通話を切る。手前勝手に。それは弱音を吐く事に慣れていないからだろうか。或いは、こんな弱い自分を、誰かに見せたくなかったからだろうか。弱さを経てない強さなんてない。そんな普通な事を、今この時忘却してしまったからだろうか。

——或いは。

「——誰?」

「見いつけたあ」

敵に発見されたからか。

「結構探したよ?まずは久しぶりだね、沙耶香ちゃん」

「…………。えつと、」

「あれ?忘れちゃった?ひどいなあ、私を忘れちゃうだなんて」

「ううん、ごめん。忘れてはいない。ただ名前が分からなくて」

沙耶香は油断なく、しかし本当に分からない事を正直に相手に言った。

「え?あつ、そう?何だお名前を知らなかったのかあ。そういえば自己紹介なんてしてなかったねあの時は!」

笑う一人の刀使。その服装はどの伍箇伝の物とも異なる物。それは彼女が護剣では

なく折神の刃である証拠であり、そして纏い始める剣気にやつと沙耶香は思い出した。

……油断できない人。

「折神家当主親衛隊第四席・燕結芽だよ。改めてよろしくね、糸見沙耶香ちゃん？」

◇

燕結芽という人間は当代の折神の王が四番目に見出した者であり、そして親衛隊の中で最も強いとされる剣士である。

20年前、藤沢駅防衛戦を戦い抜いた燕結唯の娘という事を抜きにしても、その実力は親衛隊の誰もが認める本物。そして単身生身で荒魂を斬り殺した事もある生粋の剣士だとも。

「紫様からの命令だね。沙耶香ちゃんを連れ戻しに行けっさ。場合によっては斬り合ってもいいって」

「……………」

「でも今の沙耶香ちゃんとは斬り合っても無駄かな。だって迷ってるもの」

「……………迷う……」

「答えはとづくに出てるのに、それを認めたくない。だから無理して他の答えを探して

る。みたいな顔してるよ〜？」

「……………」

燕はつまらないモノを見るといふよりは、もつと面白いものを見せてほしいなという期待の眼差しを沙耶香に向けていた。

「それが楽しいのなら、それをしたからなら良いけどさ〜。もしも楽しくないのなら、」

「…ないのなら？」

「私どころか、他の誰にも勝てないよ？」

「……………勝て…ない？」

「だってそうでしょ？ 自分はこうだ！なんて自信満々が真実良いわけじゃないかもだけど、これが今の私！って言えるくらいには楽しまなきや損じゃないかな？ 何より剣が鈍るし、純度も足りなくなるよ」

「……………純度」

「私達は刀使。刀を使う者。誰よりも、刀を上手く扱える者の筈。選んだ者の筈。今の沙耶香ちゃんじゃあ、才なく心なく刀刃を弄ぶ事になる。そんなんでいいの？」

「……………、それは、嫌」

ひねり出した言葉。答えに、燕はやつと嬉しい顔をした。

「ふっふーん！ならやつぱり答えはもう出てるよね！」

「私は……………」

沙耶香は発する。必要な事は何か、今何をするべきなのか、答えは何処か、留まるべきは此処か。

腰の御刀の柄に利き手を飛ばし、間断も悔いもなく抜刀し、同じく剣気漲る刀使を眼に宿す。

「これが楽しい。これがいい。双方心に炎を灯して、勝利を叫ぶ。」

「さあ、貴女のお名前なんですか？」

「一刀流・我流、糸見沙耶香」

それが彼女だけの。天下無双の答えだった。



「——沙耶香ちゃん！」

声のした方に眼だけをやる。するとそこには先程電話で話した柳瀬舞衣がいた。

美濃関の制服、御刀、立派な刀使の装いで。こんな夜に、ただ一度だけ会っただけの沙耶香の為に、彼女は奔走してくれていたのだった。

「大丈夫？怪我はない？」

「何、で……？」

「電話の時、私まだ鎌倉にいたの。沙耶香ちゃんが何かトラブルに巻き込まれたのかも
と思つたら、居ても立ってもいられなくなつて」

「だからといつてこんなにも早くこの場所を、自分がいる場所を特定出来るか？
いや、刀使ならば可能。納得する沙耶香であつた。」

「——まさか、貴女が？燕さん」

「ちよつとちよつと〜！またいきなり犯人扱いは止めてよね〜！！ まあ、当たらずとも
遠からずだけど？」

「——ッ！」

「これから沙耶香ちゃんと斬り合うんだからさ〜。邪魔しないでよね、美濃関のおね〜
さん？」

「させません。たとえ相手が貴女でも」

「ん？あれれ？おねーさんは私の事ご存じなの？」

鯉口を切り居合腰のまま、舞衣は右手を柄に掛けた。

「当代折神家当主親衛隊・燕結芽さん。綾小路出身の刀使。有名ですよ、刀使になる前に
荒魂を斬つた天才つて」

「あれお母さんが勝手に言いふらしてるだけだから鵜呑みにしないでね？ 何だか照れるけど〜」

真実とも嘘ともどちらにも取れる声と表情で燕は言った。

そして観察する。舞衣の構えを、居合を、勝機を。

「うーん、沙耶香ちゃんに比べておねーさんはまあ普通っぽいけど〜、何だかやる気満々みたいだし〜。うん！ よし！ 決めた！ 斬ろう！」

抜刀する。互いに『写シ』を、しかし舞衣だけは『明眼』も発動。そんな彼女に燕は平に構えた刀で突こうとする。

それを見切り、舞衣は居合抜刀で刀を叩き落とした。そして返す刀で反撃するが、燕はそれを後方に跳ぶ事で躲した。

「親衛隊に刃を向ける事は…えっと、何だっけ、……あ！ 折神家当主に刃を向ける事と同義！ その上でこの身と斬り結ぶというのか！」

「——先に抜いてきたのはそちらです。つまりこれは正当防衛です」
「そっかそっか。そうだよね、じゃあ、やろっか。おねーさん」

建前と本音を笑顔で述べ、燕は構を変化させた。

剣先をやや天頂、右肩担ぎに。左足を前、右足を引く。まるで幕末維新の時代を震撼させたあの剣のように。

「?……ジゲン流?」

舞衣が呟く。沙耶香が戦慄する。燕が、二人に答える。

「刈流（かるのりゆう）・燕結芽」

そして舞衣が斬ろうと考えたその刹那。まるで壁がそのままスライドしたかのように、燕の全身と刀が前に出た。

振り下ろされる御刀・ニツカリ青江を肉眼では追えない。——神速。正に世に現れたそれを舞衣は『明眼』でもって捕捉、後の先を獲る為に一步後退した。

それは不足なき回答であり、もし刀で迎え撃つように打ち合っていた場合、舞衣は自身の御刀で自身の『写シ』を破らせていただろう。

超高速の運体により繰り出される斬撃はエネルギーの塊であり、それに劣るエネルギーである何かをぶつけても、弾かれるか押し潰されるだけである。

——だから躲す。

攻撃の最中であるが故に無防備となった燕に刀を振り下ろす。舞衣は後の先の勝機を獲っていた。

しかしそれ（後の先）に対して先を獲る技がある事を失念していたのは、彼女のミスであった。

「小波」

呟く言葉は果たして自身に言い聞かせる為か。答えの為か。それを聞いた舞衣の両腕は斬り飛び、同時に『写シ』が剥がれた。

燕は自身の斬り下ろしが失敗した瞬間瞬時に左足を踏み込み、御刀を斬り上げていたのだった。

「……！」

「舞衣！！」

「……とろくさくさく」

沙耶香が舞衣に駆け寄る。しかし燕は、何だつてこの剣はこんなにも遅いんだろうかとニツカリ青江を見つけていた。

「お母さんのようにはいかないなあ……。なんであんなにも速く振れるんだろ。」

私の小波（さざなみ）は竜の首だつて斬り落としたのよ！だつて。腰をもつと回転させた方がいいのかなあ……。でも回転はなあ〜」

「今のは、——燕返し?」

「巖流の剣なわけないよ。私は刈流。ウチの家伝の剣法。……つてあれ? 何だかイイ顔になつてないかな? 沙耶香ちゃん?」

「……………」

——看破する。今のは後の先に対して先を獲る勝機の剣。

しかし左足を踏み込む事と、斬り上げる為の急激な両腕の捻りが最速の斬撃の邪魔をしている。完成すれば、より無敵に近くなるかもしれないが。

「もしかして師匠が何人もいるのかな？それとも何でもかんでも吸収するようになって教わっているのかな？」

「……………」

沙耶香は御刀を鞘に納めた。より疾く燕を斬る為に。

「沙耶香ちゃん……ッ、ダメ！それは」

「そうこなくっちゃー！」

対する彼女も刀を納める。抜刀が来る、と沙耶香と舞衣が思った瞬間、しかし距離を取った。きっかり十メートル。

それはまるで月に住むと言われていたウサギのようにピョンと嬉しそうに飛んで飛んで飛び跳ねて。

燕が、地を蹴った。

◇

——速い。そして早い。それを見て取った時、待つ沙耶香は敵の間合の捕捉を第一

とした。

まるで猫のように静から動への移転。消失、とさえ見紛う異様の瞬発。燕は歩速と歩幅も迅移も一定にせず、しかし一貫して疾走。この妙法村正を抜刀して、確実に斬れる間合を掴み取れるか。

それが出来れば勝てる。それが出来なければ負ける。

真剣勝負とは畢竟、ただそれだけの物。運も実力も力も何もかも、勝敗の二文字にのみ全て含まれている。

高速にも関わらず、最初、コンクリートを蹴る足音は沙耶香の耳に聞こえなかった。やがて、それが聞こえてくる。衣擦れ？ いや、鉄板上の油に火をかけた音。足音の急激な拡大は、反比例して激減する相対距離を物語る。

——突進抜刀。距離感を狂わせ、かつ尋常でない速度でもって斬る攻撃一辺倒な抜刀術。しかしそれは沙耶香にも言えた。

居合・葦名十文字。一瞬二斬の斬撃を確実に叩き込む。

敵はまだ右手を柄にかけていない。左手は鞘を握り、居合腰のまま迫って来ている。月が放つ銀光にも似た眼光が煌々と沙耶香を見定めて、無表情に。殺意と闘志と剣気がそこにはあった。

間合が詰まる。表裏二つの切羽が鐔を押しさえるように、正しく向かい合うように、燕

と沙耶香は、互いの瞳の中に己の姿を視認した。

「——ツツ!!!」

咆哮たる息吹を吐き、沙耶香は抜刀した。左斜め下から抜き上げ、右斜め上からの斬り下ろし。一步で。敵が攻撃をしようと企図した瞬間、手を柄にかけようと意図した刹那（スペース）をしかと捉えて。

たとえ後方に回避しようと横に移動しようと体当たりをしてこようと、その遙か前に妙法村正は燕を斬る。沙耶香にはその約束された至近の勝利が見えていた。

——だから、そんな事は有り得ないのだ。

「……………え、」

消えた。

「……………迅…移?」

否、早さも速さも関係ない。ただ消えた。

舞衣を見る。刹那にあつては僅か瞳孔を横に向けただけであつたけれども。果たして答えは、何だそれ?と上空を見詰める彼女の瞳にあつた。

燕は、そこにいた。

「……………うそ」

曲芸か? 絡繰りか? 幻惑か? 飛翔である。

勝機は掴んだ筈であった。どのような動きを見せても確実に斬れる間合を沙耶香は掴んでいた。しかし相手はその遥か上を行っていた。

今こそ右手は刀の柄へ。まるでシステムを実行するかの如く沙耶香をひたと捉える瞳は永遠の暗黒。はためく彼女の長い髪は翼のように。

燕結芽は沙耶香の頭上空中で前屈宙転し、抜刀していた。

それは三千世界の剣士達刀使達が無意識にイデアと捉えているブレイドアーツの究極。その一つが今、此の世に現れた瞬間であった。

『敵の眼に留まる映る事なく、全身を巡る神経・筋肉・血管・第六感すら気付く事なく敵を斬れる。あらゆる状況を想定してそれに打ち勝つ技を用意する。』

そこまで達すれば、確実に無敵である。

無論、夢だが。矮小な人間が空想する下らない幻想だが。果てなる高みを目指して、一步一歩進んでいく事は可能なのだ』

———
我流魔剣 昼の月



燕結芽は翼を生やし、その果てに指先を掛けていた。

そしてそれを沙耶香が理解した時、彼女は自身に必要な剣が何なのか、心と頭に芽吹き始めていた。

「楽しかった。沙耶香ちゃん」

背中を斬られた事で写シが剥がれ、しかし捕縛する素振りを見せない燕が踵を返すその姿に。…何故?と言葉を返す。

「ちよつと残念だけど、今は私と斬り合い続けてる時じゃないよね。おねーさんと一緒に行つたらいいんじゃない?高津のおばちゃんと紫様にはテキトーに言っておくから
ゃ」

「敵なの?味方なの?…貴女は」

「敵の敵は味方かもだし、そのまんま敵かもね」

だからバイバイと、燕は手を振る。舞衣が沙耶香に駆け寄り、そしてまた誰かが近寄ってくる。

美濃関の学長だ。どうやら色々皆裏で動いているらしい。

「ま、いつか。次はもっと面白い事になるかな〜」

帰路につく剣士は求め続ける。この先に前人未踏の更に先が、絶対にあるのだと。月は夜を輝き照らし、その下の彼女をまるで白昼のように映し出していた。

第15話 貴女だけ

雪那は上体を屈めた。腰を落とし、脚を前後に広げ膝を曲げ、ただ納めた御刀の柄頭のみを前方に向けて。

奇怪な構えである。長船の刀使達は刹那、介者の流儀か？と訝しみ間合を広く取った。

あの姿勢では急な方向転換は不可能。『迅移』でもって前後左右の敵に、つまり我々四名に対して抜刀斬撃をしてくる筈。

刀使達は雪那を包囲した。不規則な距離と間合で。

あんなにも沈み込んでいるのだからやるとすれば飛び上がるくらいか。つまりは――、読めた。この低い姿勢は下方からの跳び上がり抜刀。

なんとも攻撃一辺倒な近間の弓（居合）だ。

「……………ッ！」

ぴくりとも動かない姿勢の雪那目掛けて。刀使達は気を吹き、自身の得物を振りか

ぶった。上から横から、そして袈裟懸けの斬撃と仕舞いに刺突。敵一人に対しての十全な念の入りようは、流石は長船刀使衆の連携である。

そう。雪那がその場で360。回転しながら、彼女達の脚目掛けて抜刀していなければ確かに勝利であった。

「……………え……………」

「あ……………?」

踏ん張りがきかずに崩れる身体の原因を見ようと視線を下げると、鰐元ではなくいつの間にか柄頭を片手で握って抜刀、薙ぎ払う雪那が見えて。自身の足は、滑稽なほどしっかりと地面を踏みしめていた。主である筈のこちらに挨拶をするように。

「もっと低い姿勢でも私は出来るわよ?」

「……………」

「でもこれ以上身体を沈めると、バレちゃうからね。こいつは脚を狙ってくるって。勝負の鞘の内。中身の想定が甘かったわね」

歴戦である先輩の声。同時に『写シ』が剥がれ、長船の刀使衆はそれが脳に届いてから気絶した。

「さて紗南? 貴女もやるかしら?」

「まさか。——なんて言うても?」

紗南は倒れた生徒の御刀を拾い、朱音を護るように構えた。…この人は舞草の頭。そして何より唯一無二の友だからだ。

「流石ね後輩（副遊撃手）。でも紫お姉様が私と、私の成果を待ってるのよ。バイバイ」

「…今の折神紫は荒魂ですよ。目を覚まして下さい」

「先輩を付けなさい？不敬よ紗南」

「他ならぬ朱音様が目撃したのです。荒魂化したあの人を。篝センパイだって——」

「あら、そうなの。で？それが何か問題？」

「……………ツツあく?!」

「生身の人間を斬る趣味はないのよ。眠ってなさい」

「なーちゃん…ツ!!」

水月への一撃が紗南の意識を刈り取る。

『八幡力』による一般人への攻撃が内臓破裂までに至らなかつたのは、雪那の絶妙な力加減によるものである。

その力量からしてやはり今の彼女は高津ではなく相模雪那なのだろう。朱音は震える膝の裏、臍（ひかがみ）に力を込めた。

「貴女は逃げて構いませんよ？朱音様。私の任務はここ（舞草）の壊滅ですから」

「……………」

「さっさと逃げて、復讐しに来て下さい」

しかし笑って目的を言う雪那が、朱音に背を向けたその時である。

「……嫌です」

「？」

殺気。否、鬨気が揺らめいて雪那の耳を撫でる。…素早く振り向くと、そこには刀を持った剣士が居た。

「私は折神です。友を、仲間を見捨てる事など出来ません。何より亡き母に、姉に、そして数多の刀使達に顔向け出来ません。そのような私では」

「成る程。葵様とは似ても似つかない……。いえ？そつくりなのかも？」

「貴女をこの御刀で祓います。相模という名の、貴女の荒き御魂を」

「やれるものならどうぞ？初撃は譲ってあげますよ。その矜持に免じて」

抜刀。朱音は昔取った杵柄よろしく剣士然として刀を上段に振りかぶった。今の彼女は御刀で祓わねばならない。それが今の己の責務なのだ。元刀使として。

それを、雪那は両手を広げて迎え入れた。

「……ツツ!!!」

刀の刃が雪那の首に接触する。力を入れる。切断という名の結果を出す為に手の内を締める。手と刃を手前に引く。すると物打ちから切っ先に至るまで刀は滑らかに己

の職務を全うする。朱音は袈裟懸けに物を断つ感触を20年ぶりに味わう事となり――

「――興ざめね」

むんずと。しかし奔る刃は雪那に掴まれた。

「刀使の『金剛身』を一般人が破れるとでも？ ああ、違いましたね。元刀使さん」

ブラックアイスバーンの上を滑るように。刀はしゅるりと雪那の硬い皮膚を通過しているのみだった。

「ではさようなら。貴女も眠っていて下さい」

絶体絶命。硬化した雪那は拳を握り、さながら迫るボーリング球のように朱音を殴ろうとする。気絶か、痛みか、はたまた死か。どの結果もそれを運ぶ過程にも眼を逸らさず、朱音は見つめ続けた。

――姉の仇、母の仇、己の無力、友の安否。その全てを押し殺して。

「だめ」

「――？」

「そんな事、してはいけない。高津学長」

「朱音様！大丈夫ですか？」

「貴女達は…、？」

鎌府の制服と美濃関の制服を着た誰かが立ちふさがる。

雪那の拳を全力で止めながら、彼女達はこちらに注意を引き付けるようにして名乗った。

「柳瀬舞衣です」

「糸見沙耶香」

それはまるで物語のヒーローか主人公。なんとまあ格好のいい事と思いつながらだから自身は悪役のように。雪那は切っ先を向けて言うのだった。

「邪魔よ。アンタら」



『ここから先は歩いて行つてね。真つ直ぐ、『迅移』を使った方が早いから』

『ありがとうございます。羽島学長』

『…ありがとうございます』

『紗南とは連絡がつかないし、機動隊が周囲を進んでるから気を付けて。…この分だと舞草の里は押収される。完全にそうなる前に、朱音様をお願い』

『分かりました』

◆
ふつて湧いた出た援軍に、雪那は笑った。

「あつはは！しかし任務つてのはこうでなくちやあね。どんな邪魔であろうとも突破してこそ、お姉様に役立つと言うものよ」

「…舞衣」

「うん。…この人は高津学長だけど、何だか少し、」

「美濃関に鎌府の刀使。どいつもこいつも折神に刃向かう叛逆者共。ああ、愚かな野心の火に焼かれたってわけね？ 消してやるわ、この相模雪那が」

殺気が溢れる。沙耶香と舞衣が『写シ』の上から感じるそれは、まさしく荒魂のような雰囲気醸し出して、…この人は高津雪那とは別人なのだと察するに余りあった。

そして同時に看破する。この刀使には勝てないと。

二人だけでは容易く負けてしまうだろうと。直感でそれが分かる。

でもそれでも、ここで退いたら刀使でも剣士でもないという矜持が二人をこの場に踏み留まらせ、

「降服はムダよ。抵抗しなさい」

殺意が、二人を包み込む。

「そうはさせませーん!! 横ヤリ!!!」

「ダイナミーツク」

「——今度はなに? アンタ達は」

「私は紗南先生の仇、そして皆の仇を取る女! 名乗る程の者ではありませんーん!」

「オレは益子薫。こいつは古波蔵エレンだ」

「んモウ! カオルはワビサビが分かってませーんっ!!」

「時と場合を考えろ。今はそんなもんいらねえ」

構える薫は状況を看破。そして同じくエレンも雪那の注意をこちらに引き付ける為
に会話を続けていた。

「へえ…? なるほど、たった四人で私を邪魔しに来たってわけかしら?」

「ああ。邪魔しに来た」

「出来るの? 若造」

「OH! ——それが出来るから、ここに居るワケですが?」

「——そして邪魔者はオレ達だけじゃない」

「可奈美!」

「OK!」

雪那の前方から薫とエレン。そして左右から迫る振りかざす刃持つ二人の刀使・可奈美と姫和が現れる。

『迅移』を行使しての完璧な奇襲。これでは一見、逃げを打つとすれば後方のみであるが雪那は一步も動かずに全員の刃を受け止めていた。

「ああ、やっと逢えたわね、ヒイラギさん」

「!?」

「弾かれた!……ううん、滑った?!」

「第五段階の金剛身か……ッ」

「ナルホド。グランパの言っていた20年前無傷だったっていう話。それはこの人、相模雪那は『金剛身』の発動タイミングと強度が絶対的にウマイ。ってことデスね」

「それだけじゃねえ、間合の管理もだ。少しずつ少しずつ『迅移』を使つて遠ざかってやがった。だからオレの初太刀も浅かった」

刀使としての蓄積、経験の多寡。つまり雪那に勝つにはそれ以上の何かを行使して戦うしかない。可奈美はそう思い、間合を図った。

「アンタがここにいるなんてビックリよ? ヒイラギさん。なんでまたここに?」

「?……柊さん?」

可奈美が姫和に問う。初めて聞く筈の名前を。しかし姫和にとっては馴染みのある

名前を。

「母の旧姓だ。……私は終ではありません」

「アンタがジョークを言うだなんてね。知ってる？不愛想刀使がそういう真面目な事言うともっと不愛想になるのよ？そういうった面では笑えるけどね」

「……母は。柎箒は死にました」

「その小烏丸。その太刀筋。私が見間違えるわけじゃないじゃない。だから今度こそ私は、アンタに勝つ」

構える。互いに。刀を担ぐように。

……この人は正気を失っている、姫和は思った。病床の母へ見舞いに来ていたこの人が鎌府の学長とは驚きだったが、しかし姫和を柎箒と認識している事がどうしても腑に落ちなかったからだ。

「——と言いたいけれど。今はその時じゃあないわね。ほら、この折神朱音を助けに来たんでしょ？さっさと連れて行きなさいな」

「……それは。最初からその手筈だったって事ですか？」

「当たり前じゃない。今の私の任務はここ舞草の壊滅だからね。アンタへの復讐はすぐ近い内に、ね？」

「……………」

…巽か。姫和は構えを解かずに見つめ続けた。

「HEYひよよん、この人中八九ノ口を打ち込まれてマス。だから今は自分の都合のいい現実しか見えてないし聞こえてないノかもです」

「……。どうすればいい」

「研究施設に運んで体内のノ口を除去するしかありませんネ」

「愉しみよ？ヒイラギさん。——あの日、私を斬ってくれた気持ち悪いアンタの剣を全否定してやりたかった。ずっと、ずっとずっとそう思ってた。江の島での闘いなんてその為の前座でしかない。私の敵は、今もずっとヒイラギガガリ。貴女だけ」

「……成る程。分かりました」

「姫和ちゃん……！まさか斬る気じゃ、」

「貴女を斬ります。雪那さん」

「さん付けだなんて気持ちワル。でも、それでこそよね」

雪那が完全に納刀する。『写シ』が解ける。同時に大勢の機動隊員が舞草の里を包囲進撃せんと駆け始めた。

「全員逮捕だ。我らが王たる折神の勅命である」

「了解！」

「……。ここは逃げまシヨウ！」

「朱音様はここに！」

無事に朱音を奪還。いや、あえて無事に奪還させてもらった事実。その結果と思いを胸に、六人の刀使達は撤退していった。

幕間 皐月夜見サイド

闇の中を、ただ征く。

表に出れば敵は七人、いやもつと。それがそこかしこに湧いては出て、潰してはまた湧き出でる。

雪那はその闇の中で、先程光を見ていた。

相変わらずの顔（かんばせ）。憎らしい表情。見事な太刀筋。勝たねばならない怨敵、優らねばならない剣士、越えねばならない刀使、ヒイラギカガリ。

「任務は完了です。舞草の里は私と機動隊の手により壊滅、押収。刀使達も捕縛致しました」

『ご苦労様です。逆賊達はどうなりましたか？』

「取り逃がしました。無論のこと、あえて」

『流石です。では帰還してください。気を付けて』

「はい、お姉様」

望みは叶うと。雪那は笑った。



鎌府学長の完全勝利。それも戦略戦術共に。その報告に、折神家本邸は喧騒に包まれていた。

「高津学長が帰還なさいますわ」

「一人で舞草の拠点を壊滅か。あちらの刀使は手練れも多いだろうと思っていたが……」

「流石は二十年前の英雄。その一人ですわね」

「……………」

折神家当主親衛隊は拍手すら起こせぬ感嘆を言葉で以って世に表していた。

「しかしあの時の表情。まさか学長はボク達と同じくノ口を？」

「かもしれないわね。あの方ならば」

「……………」

「夜見。紫様を見たか？」

「見ていません」

夜見は無表情かつ簡潔に答えた。

「御勤めでしてよ、真希さん」

「…。ああ、そうだったね」

「そういえば皆さん。食事は取りましたか?」

真希が眼を丸くし、寿々花が年相応な表情を浮かべる。…そういえば彼女は気を遣う事に長けていたなど、二人は思い出した。

「? そういえば何も食べてないな。寿々花は?」

「私でもすわ」

「はいはい! 私もー! お腹すいたー!!」

「腹ごしらえは大事と存じます。なにか拵えて持つてきますのでお待ちを。皆さん」

「え!? 夜見おねーさんの手作り?!」

「もしや夜見さん手製のおにぎりですか?」

「— おむすびです」

「ア、ハイ」

「おむすび…! それに加えて今はお蕎麦が食べたい気分…!」

「我慢しろ結芽。まだ油断できない状況だ」

「では失礼します」

夜見は綺麗にお辞儀した。しかしその前に彼女が一度携帯電話の画面を見ていた事

を、この場の誰も分からなかった。

それは大荒魂がここにいればバレていただろう事。しかしもう、そんな事はありません。いいのだった。



「もしもし。私です」

『ハローです。そちらの状況は？』

「依然厳戒態勢です。そちらは？」

『鎌府の学長その人に襲われて現在逃走真つ只中デース。あの人、正気じゃありませんでした』

「……では高津学長は、やはり」

『イエス。ノ口を打ち込まれてマス』

「……誰の差し金だと思えますか？」

『十中八九アナタ方のボスでしょうネ。山狩りの時、アナタが我々に協力を申し出てくれたのは嬉しかったです。少々遅かったかもしれませんが。』

「……申し訳ないです。こうなる前に、カタをつけようとしたのですが」

「あの方を助ける方法は」

『方法は一つ、工程は二つ。彼女の写シを御刀で斬る、そして研究施設に入院させて体内のノロを除去する。これ以外に方法があればむしろ教えてほしいデース』

「出来るのですね？ 確実に」

『イエス。長船の名に懸けて』

「分かりました。加えて、あなた方が勝つ方法と工程も」

『ワオ、今の私達は拠点も戦力も失ったアウトローです。その上で。どうすればいいと？』

「ここに来るしかありません。今度はあなた方全員で」

『敵の本拠に討ち入りしろってわけですか？ アハハ、冗談きついデース。私達四十七士じゃありませんし、勝機もありませんしハラキリもしたくありません。』

そして何より、貴女と斬り合いたくも毛頭』

「これから二十四時間、ここ（折神本邸）の警備は我々親衛隊のみになります。加えて紫様は奥の祭壇で御勤め中。恐らくまだまだ表には出てきません」

『アナタ方四人というこの国最高戦力がそこに居る事実が私の脳内に不可能という結論を出させているんですが？』

「そちらの大規模戦力と拠点が無くなった以上、あなた方の選択肢は今すぐ逃げるか今

すぐ戦うかのどちらかしかありません。そしてあの方を助けるには後者しかない。ならば私はそちらに合力します。

——第一第二、第四はこちらで食い止めておきます。最悪、第四だけでも必ず」

『!OH, MY。できるのですか?』

「勝つ事は無理でしょう。しかし足止めならば可能です」

『サスガ。それならば後はこちらの残存、いえ、最大戦力でもってカチコミ!やってみる価値はありそうデース!ありがとうございます!』

「今から言う時間にやって来て下さい。その時間ならば、本邸にいる人員が最も少ないです。全ては紫様と、あの方の御為に」

『了解です!』



「出来上がりました。おむすびです」

「美味しそー!!!」

「頂きますわ、夜見さん」

「頂きます。——うん、美味い。流石は夜見だね」

「恐れ入ります。緑茶です」

「でもさー。もぐもぐ、紫様に刃向かったあの叛逆者たち？ 目的は一体何だったのかなー？」

「はしたないですよ、結芽」

「さてね。どんな時代も、為政者に逆らおうと蛮勇を抱く人くらゐるさ」

「…頂きます」

「塩加減が最高ー！ 流石夜見おねーさん！

もぐもぐ、でも紫様を倒して、もぐ、何をしたかったのかなー？ もしかして自分が一番強いんだっ！ て言いたかったとか？」

「かもしれませんわね。御刀を使う者としては、そんな刀使この国に必要ないと思ひますけれど」

「ええ？ そうかなあ？」

「強さを求める事を否定はしません。しかし、それならば暗殺まがいのことをせずに尋常な立ち合いをすべきです。燕さん」

「そう？ まあ、そうだね！ 尋常で二対一（サシ）の決闘の方が、楽しいし気分も晴れるかもだね。きつと」

「ええ。きつと」

「あら？ 夜見さんが笑う所、久しぶりに見ましたわね」

「たまには笑ってみせたらどうだ？夜見」

「……。真希おねーさんがそれ言う？」

「左に同じ」

「??」

彼女は忠を尽くす。どんな時でも。裏切り者だところの後罵られようとも。これが、この彼女の選んだ道。

「善処します。獅童さん」

第16話 例えば

相模雪那の襲撃により、可奈美達は潜水艦に逃げ込んでいた。

米軍所属の艦ならば折神家は探知も捜査もできない。エレンの祖父のフリードマンと朱音の判断は正しかった。今のところは。

「——20年前、大荒魂が江の島に出現しました。世に言う、相模湾岸大災厄の発生です。死者は三千人を超え、その中には私の母もいました」

「……………」

……………。

「江の島から藤沢駅に至るまで三つの防衛ラインを母は敷き、闘い、大荒魂は後退。しかし滅する事までは叶わず、臨時の当主となった姉の紫は特務隊五名を率いて江の島へと向かいました。」

——それが表向き、誰もが知っている当時の真実です」

「真実…、ですか？」

朱音の昔話に舞衣が尋ねる。真実とはそれを語る者に尋ね続ける事で現実味を帯びるからだ。

「本当の特務隊は総勢八名いたのです。紫、現伍箇伝の学長、そして可奈美さんの母、美奈都さん。姫和さんの母、篝さん」

「お母さんが……？」

「知らなかったのか？可奈美」

「……うん。刀使だった頃の話はあまり話さない人だったから」

「美奈都さんは本当に強い人でした。当時の紫よりも、この国のどの剣士よりも。しかしそんな彼女達特務隊も、あの大荒魂を滅する事は難しかった。だから篝さんは柊家に伝わる秘技を使わざるを得なかったのです」

折神家に伝わる古文書と、生前篝より聞いた話。それらを纏めた朱音の言葉の内容は、まさに生贄としか言えない物であった。

それを。既に姫和は重く受け止めた承していた。

「柊の刀使のみに受け継がれている力。それは第5段階の『迅移』でした。大荒魂を突き刺し隠世の果てまで共に往く。二度とは帰ってこれない場所への片道切符。それが唯一無二の勝機だと、20年前紫と篝さんは決断した」

「そんな……」

「…マジかよ」

人一人を犠牲にする事で化け物を封じる。

聞く人が聞けばそれはよくある話で。60年前も、20年前も時の折神の王は同じ決断をして、結果も同じになる筈だった。

「あれ？でもお母さんは——、」

「はい。美奈都さんはそれを良しとはせず、第5段階迅移中である篝さんに追いつき引つ張り、救出。三つある大荒魂の首を全て単身斬り捨て撃退に成功。ここに、相模湾岸大災厄は鎮圧されました」

「やべえなそれ」

「かなみんのママスゴイです」

「そうだったんだあ……。そっか、お母さんは」

友を犠牲にする事は出来なかった。そして事実、何とかした。故人に対する誇らしい気持ちだが可奈美には生まれていなかった。

「しかし大荒魂は消滅などしていなかった。紫に憑りつき、機会を伺っていたのです。それを何とかする為に私は舞草を結成し、伍箇伝の学長達に助力を願い、家族を。…姉を救出したかった」

「…朱音様」

20年前の藤沢駅。そこで姉と共に母の最期を看取った時、もう朱音は家族を失いたくないと思った。

折神としてこの国の為に生きる。彼女にとってそれは当然であるが、それと同じぐらい朱音は家族が大切であった。

そんな彼女をフリードマンは慮り、共に舞草を結成したのだという。

「しかしまさかあの雪那さんが敵の手中に落ちるとは。・・・作戦は失敗とみていいでしょうね、朱音様」

「…ええ」

「作戦ですか？」

「雪那さんは元特務隊の中で唯一あと一度、『写シ』を張れる刀使だったのです。だから最悪の場合私は私が斬ると私達に言っていて…」

「一人で大荒魂と戦うと？それは無茶デース…!」

「私達の誰もがそう言いました。しかし必勝の策があるから平気だと。私が斬らずして誰が斬ると。折神紫を救うのだと…」

あの時の彼女の気迫は、それ以上何も言えませんでした」

「作戦は失敗。そして現在我々は戦力も拠点も失った、と。正しくステイルメイト。打つ手なしだね」

「……………」

その通りだった。頷く朱音の理性は、今はまず時期を待つべきだと判断している。もう一度力を蓄え、次こそ勝つ。それが先決であり最優先だと。

たとえ彼女の感情とこの場に居る刀使達が、それは絶対に嫌だと感じていても。

「いつそ、国外にでも逃げようか？」

「いいえグランパ」

聞こえる言葉、出た言葉にだからこそ驚愕した刀使達はエレンに顔を向けた。

「一つだけ。打つ手がありマース」

「聞こうか」

「その為にまず海面に上がって下サーイ。少々メールと、電話をする必要がありマース」
携帯電話をフリフリと見せつけ、エレンは立ち上がった。

◇

「ミナサン、討ち入りしましよー」

「は？」

「何言ってるんだ？」

「ふっふっふー！有力な情報を手に入れました。これから私達六人で折神家にレッツ
ゴー！空を飛んでカチコミデース！」

「！そうか、ストームアーマーのコンテナか！たしかにそれなら・・・！」

「敵の本拠地の警備は万全だろう。オレ達に勝ち目はあるのか？」

「協力者からの連絡により、あちらの戦力は大荒魂、そして鎌府学長のみとなりました。
後は征くのみデース」

「どのスジの情報だ？」

「もちろん！折神家当主親衛隊からネー」

「まさか……」

「思わぬ協力者とは。そういう事か」

「待って下さい！それでも敵は危険な相手です！貴女方の实力は理解していますが、そ
れでも……」

「行きます」

「可奈美さん……」

「なんて言えばいいのか分からないんですけど、行かないやならないって思うんです。
心がそう感じてるっていうか、そうする事で本当に全てが解決するって予感がするって
いうか……！」

「私も同意見だ。何故かは…私も分からないが…、でもそれでも、私も行かなければならないと、そう思う。それにあの人を、雪那さんを放つてはおけない」

「姫和さんも…!」

「エレン。その親衛隊が大嘘ついてるって線はどうだ?」

「全て私達を誘い込んで一網打尽する為って? 勿論あるカモです。けれどそれ以上に、もう座視出来ない状況でもありません」

「分の悪い賭けだな、ハイリスクハイリターン。それも罨つて名前の付いた火中の栗を拾う。——でも乗った」

「カオルウ! だから大好きデース!」

「乗ったとは言ったが引つ付けとは言つてねえ」

「可奈美ちゃん。私もついて行くよっ」

「…私も」

「君たち刀使にしか分からない感覚があるということか。そして何より、止めても無駄と。…本当に、刀使というのは」

「行かせて下さいフリードマンさん。——今やらないと後悔する。そう、私達は思うんです」

真摯の表情。それは20年前相模湾で大荒魂を直視したフリードマンにとって、とて

も苦々しく感じる表情だった。

自分もこんな風に只信じて、瞳を輝かせて、ノロの研究をと希っていた。そして行動し、だがその結果があれだ。米国に向かうタンカー内でノロは結合し、自身の目の前で大荒魂になった。

あの時ああしていたら、そしてしていなければ。

後悔だけが彼をこの20年間生かしてきた。彼らの眠りを妨げるべきではなかったと。

人ではどうあがいても無理なのだ。だからここは否定すべき所であつて。何故なら荒魂に、ノロに、大荒魂に人間が立ち向かうなど――。

「私が公に姿を見せます。その際に皆さんはあそこに、折神紫の元に」

「朱音様まで・・・!!」

「希望を託す事しか出来ない私達を、どうか許さないで下さい皆さん。――武運を祈ります」

「はい!!」

空元気とは決して違う裂帛なる気迫が聞こえて。フリードマンは只閉口し、握り締めていた利き手を自身の胸に当てた。・・・それしか出来なかつた。だから今度はその手を力づくでこじ開けて、

「——了解だ。君達の刀と未来に、私も命を懸ける」
彼は真摯に。そう言ったのだった。



「では皆さん、一先ずは休んでいて下さい」

「お先に失礼します。右兵衛大将」

「お疲れさまでした、皐月さん」

「では」

今宵この時、折神家本邸は静かなものであった。

連日の厳戒態勢によって職員達は不眠とは言わぬまでも不休。目に見える程に疲れは溜まってきている。

だからこそそこを見計らって、夜見は一旦休みを取らせるべきだと真希達に進言し、それは受理された。

背中をさすり、時に深呼吸しながら帰宅していく職員達を見送り。夜見は感覚を尖らせ、その時を待つ。

「今戻った」

「おかえりなさいませ。…高津学長」

そんな中こちらにやって来る一人の女性。——いや、刀使が油断なく歩いて来た。

「紫お姉様は？」

「奥の祭壇で御勤め中です」

「分かった。少々報告をしてくる」

「了解」

「？ いやに人が少ないな？夜見」

「皆疲れが溜まっていているようでしたので。休息及び一時帰宅を促しております。高津学長が舞草を壊滅させた以上、危機はすぐにはやって来ないでしょうから」

「ほう？珍しいな」

「——はい？」

「折神家当主親衛隊第三席、皐月夜見。名うてのお前がそんな楽観的観測をするなど。らしくないな？」

「失礼ながらそれはこちらの台詞でもあります。一度ご自身の御顔を鏡で見ても如何でしょう。高津学長、貴女のそれはひどくらしくありません」

「ふん。何を言っているのやら貴様は、」

「警告！皐月様つ、未確認飛行物体が横須賀港より現出！現在上昇中!!」

「重ねて報告！飛行物体はストームアーマーコンテナ！総数六機！それらが飛来して
います！」

「……………なんと」

「何？落下予測地点は?!？」

「——ここです!!予測地点はここ、折神家本邸内！」

叫ぶ当直管制担当職員達に対して。来た、と。夜見は静かに思った。

「出撃致します。高津学長は紫様のお傍に」

「悪い予感が当たったか。分かった」

「——いたか、夜見。行くぞ」

「結芽？出撃ですわよ？」

「は〜い！」

獅童真希が言う。此花寿々花が促す。燕結芽が笑う。

「了解。……………楽しそうですね？燕さん」

「だってお空を飛んで来て襲来？襲撃だよ〜？このタイミングで、ここに来るナニカ
なんて。たった一つしかないも〜ん！」

——そして皐月夜見が頷く。

「誰であれ何であれ返り討ちだ。折神家当主親衛隊の名に懸けて。ボク達全員でお相手

し、無作法者にはお帰り願おう」

「ええ。真希さん」

「了解」

「やっぱり！面白くなってきたあ！！！」

「——来ます！着弾まで20sec！」

「来たな叛逆者」



『そっか。闘う事にしたんだ、皆』

『うん。でも何だか作為的なものも感じてて。…これってなんだろう？』

『当然、その通り作為だよ可奈美。雪那が相模になって紗南達を襲撃した事も、可奈美たちを駆り立てたのも。誰かがお膳立てをしたから』

『……誰かって？』

『分からない？』

『そこまでは分からないよー…』

『分からない事はあえて単純化して考えるんだよ可奈美。さあ、襲撃したら何が起こる？』

『んつと、私達が行けば当然立ち合いが始まる』

『そう。そしてそれが順調にいけばどうなる？』

『敵と対面する。私達っていう邪魔な刀使と、御当主様に憑りついてる大荒魂と』

『その通り。つまり可奈美の敵はそれが狙い。——でもそこにもし、大荒魂なんていなかったら？』

『え？…えつと、御当主様が……いるだけ？』

『もしくは一人の。貴女達と戦ってみたいだけの誰かが』

『——そこにいる。待ってる？』

『可奈美達をね』

『でも』

夢の世界で可奈美は師に返す。いや、促す。言葉を。

『待っているのは。師匠かもしれないよ？』

『…へ？私？いやそれは無いでしょ。私は可奈美の中で可奈美を鍛えているだけの存在だよ？流石にそれはないかなー。』

だってもしそれが本当ならその誰かは表の可奈美すら知らない私を知覚してて、その私をどんな手を使ってでも表に出させて、闘いたい奴って事だよ??そんな剣士いる?』

『…そっか。…そうだね、じゃあこれはもしもの話って事で』

『?..うん?』

.....

『例えばこんな、藤原美奈都と立ち合いたい刀使さんが、柊箒と立ち合いたい刀使さん達がいるとしたら?』

どうする? と。可奈美は眼を輝かせている師に尋ねた。

『なるほど。そっか例えば、かあ。そっかそうだねえ、もしも。もしも仮にそうだとしたら——』

そう、もしも本当にそうなら。もしも本当にただ自身と闘いたい立ち合いたいだけの誰かがいて、可奈美が逢って、この千鳥を抜いて、いやお前じゃ駄目だ奴を出せと。藤原美奈都を出せよと誰かがそう言ってくれているのなら。

——心底。無心に。あの日の続きを。今度は私が勝つんだと誰かがこの身を渴望してくれているのなら。

『身に余る、光栄だね』

例えばこんな刀使さん達

第17話 風の宿りは誰か知る

「これはまた。よくもまあこんなにもノ口を掻き集めたものです」

折神家・祭壇の地下に私が赴くと、そこには国中から集められたノ口が文字通り所狭しと貯蔵されていた。

気持ち悪いにも程がある。これだけの量は、恐らく20年前の時以上だろう。

もう一度大災厄を起こすには相応しい。

なので私は安行を抜き、思い切りそれらの中心に切っ先を突き入れた。

「勝負の邪魔です。消え失せて下さい」

口に出す。邪魔だと。言霊をしつかりと。

するとノ口は急速に形を成し、竜のような化け物へと変生していった。

消えたくないのだろう。まだこちら側に居たいのだろう。御刀の精製に伴い産まれ落ちた物がノ口。人の業によって生まれたモノは、生殺与奪の権を人間に委ねたくはないと意思を持っているのかも。

古い大樹のように巨大な竜の形を成したノ口は牙を剥き、殺意と共にそれを私に向けて来た。

「——だから言っているでしょう。邪魔ですと」

「御刀を一閃。跳びながら横に振るう。勢いそのままに回転し、生じる遠心力はまるで舞いの様な斬撃を生じさせ続け、気付けば竜は。いや、化け物は影も形もなくなっていた。」

葦名無心流秘伝・桜舞い。

「雑魚も化け物もこの場には必要ありません。だから早く来てください衛藤さん。待っていますよ?」



折神家本邸・折神の王門は不気味なほど静かで、開門している事を除けば非常事態だとは誰も思わないだろう。

何故なら今、ここにはあの四人がいる。

「またここにやって来るとは。流石と言うか何と言うか、——乾坤一擲と言った所のようですわね」

「また逢ったね〜！おねーさん達！」

「……………」

近衛兵衛の左右大将。当代折神家当主親衛隊四名総出のその意味は。

「ボク達こそ折神の刃。紫様を護る劍。——来い、叛逆者。生殺与奪の権はとづくに、ボク達にある」

「今度こそ確実に倒して御覧に入れますわ」

「……………」

臨戦態勢。

可奈美たちは親衛隊の構えを見て取って、身体の震えが止まらなかつた。S装備を装着した事で実力が底上げされている身でも、それで尚及ぶかどうか。

剛の者だと見て分かる。見て分からない者などここにはいない。……………この四名を降し、大荒魂の元へは行けないかもしれない。心はそう理解し始めている。

だから震える。心身を奮い立たせる為に。

——そんな時、

「ところで獅童さん、此花さん。燕さん」

「何だ。夜見」

「作戦に変更はありませんわよ？ここで斬るか斬られるか」

「いえ、一つ言い忘れた事がありました」

「？ 夜見おねーさん？」

夜見はゆつくりと親衛隊と可奈美たち六名の前方、『写シ』を張った彼我の間に進み出た。刀を抜き、燕達を見つめながら。

「裏切り。御免」

宣言、見える切っ先。

寿々花と真希は一瞬我を忘れた。ポカンとした表情を夜見にだけ見せて、しかしその彼女が斬りかかって来ると、身体は即座に反応して大きく間合を取る為に後退した。

またなのか。二人は思った。

「夜見。——何故!!」

対する夜見は口を開かず前進。近衛大将らを相手取る。

その渦中で、背中を示す。行けと。可奈美たちに。

「…やるしかない。寿々花!」

「——了解ですわ」

道を示す中、対する真希と寿々花は瞳を赤く光らせた。ノ口の発動。それは冥加の

証。彼女達の全盛が今ここに訪れていた。

「なるほどお。そう来たんだね〜」

剣戟が重なる。片や冥加、片や一般。

静かだが内に秘める熾烈な心と剣は、流星は皐月夜見だと断ずるに余りある。

燕は一步も動かない。静観するのは斬り合いにあつても尚十全にこちらの間合を捉えている夜見が恐ろしいからか。

「つく！流星は夜見だな…ッ」

「――」

親衛隊二人をもつてしても上手く事が及ばない（勝れない）事実。

この皐月夜見はここまで強いものだったのかと、真希と寿々花は齒噛みをして、

「夜見おねえーさん？」

「――」

「結芽?!」

何故か目蓋を限界まで開きながら後退する夜見を、只々見詰めていた。

「真希おねーさん、寿々花おねーさん。ここは私に任せて先に行つて。叛逆者の人達が紫様の所まで辿り着いちゃう」

「いいのか？結芽」

「また頼んで宜しいんですの?」

「今回は違うかもだけど、この夜見おねーさんは強いから。だから行って」

「…分かった」

「気を付けて、結芽。……夜見さんも」

「」

『迅移』を使って走り去る二人を、夜見は瞳に映せずにいた。そんな暇(いとま)は一片たりとも最早ない。

視ろ。観ろ。相手を見ろ。

醸し出す滲み出るその雰囲気、その闘気。待つてましたと言わんばかりにその気色を味わい笑う魔戦士(ブラッド・スター)を。いや魔剣士を。

ずっと、刀を抜かずに此方の間合を窺うこの劍豪を。この刀使を。

彼女こそ当代折神家当主親衛隊第四席にして最強の華。折神の刃鳴。

S装備を身に着けた可奈美たち六名を、全て彼女一人で片付くかもしれないという予測をも。だからこそもう一人の刃鳴、皐月夜見は燕を見る。ここで食い止め足止めをする為に。

——いや、勝つ為に。

「?」

ふと、思う。——勝つ？

誰に？ この人に。

何で？ だって。

それは不可思議な自覚だった。

今この時、夜見の心は只一つの事柄以外何も感じていない。己を認め、輩出してくれ
た恩ある高津学長への想いは遙か。しかし、今この時だけは。

昂らず、荒ぶらず。静かで、より強い何かに押し退けられている。いや、内包され始
めている。其れはシンプルな、闘争心だった。

——負けっぱなしは性に合わない。でしょ？

「……燕さん。ノ口を打ち込まれていない貴女も薄々気付いている筈。私達が王と慕っ
ているあの御方は、大荒魂です」

「なのかもね」

「折神家当主親衛隊として、刀使として、我々は大荒魂を祓う義務がある。違いますか」
「違わないよ〜もちろん。でもそんな事より、今の私にはやるべき事があるからさ〜。

また立ち合おうよ、おねーさん」

——歩く。間合を図る。距離、メートルにして7か、8か。彼女の戦闘態勢を確実に。

殺害を行う為に。勝つ為に。魔剣は今、確かにここに。花散らす、風の宿りは誰か知る。

「アナタは今宵も私に敗れる。あの夜と同じように。見上げた空の下で、月を見上げて倒れていけば？」

口にする安すぎる挑発は期待の裏返しであり武者震いの証左。

故に燕は凄絶に笑い、しかし、何故か夜見も同じく笑った。合わせ鏡の様に。

夜見が刀を右肩担ぎに構える。それはやった事も稽古もした事のない構え。…ジゲン流蜻蛉。いや、刈流・指（サシ）に似た構。

その理由は。

「いざ尋常に——」

きつと。

「勝負!!!!!!」

勝敗も。この心と刀が知っている。



「行こう！皆!!」

「応よ」

「イエース！ヨミヨミが親衛隊を足止めしている間にレッツ&ゴー！大荒魂を倒せば私達の勝利です！」

「…でもその前に、高津学長がいる」

「今度はオレ達全員で相手をする。相手はノロを打ち込んで舞い戻ってきた英雄だ。卑怯とは言わないだろう」

「——勝とう。可奈美ちゃん」

「うん！」

走る可奈美は答えて、そういえばあの人がいなかったなあと独り訝しんでいた。縹色の長い髪が、思えば可奈美にはずっと心に引っかかっていた。

「!? 可奈美ちゃん！後ろ！」

「え……っ?」

「逃さないぞ。叛逆者」

「これより先には行かせませんわ」

赤い四つの瞳が暗闇の中を縦横無尽に全速で駆けずり回っているその景色は、可奈美にとつて恐るべきものであった。

「あつちやーです。…ヨミヨミは負けましたか」

「うん、違う。…多分燕結芽を相手取つてると思う」

「じゃあプランBだな。おいエレン、プランBは何だ？」

「ンなもん無いデース！——と言いたい所ですが、ここは私とカオルとマイマイ、そしてサーヤに任せて先に行つて下さーい！ひよよんにかなみん！」

「任せていいのか？エレン」

「ALL RIGHT!!ぱぱと終わらせてそっちに加勢しマース！」

「オレ達が行くまで倒れるんじゃねーぞ、二人共」

「…任せて」

「舞衣ちゃんツ！」

三人が答える中、舞衣だけは背中と眼でもつて可奈美に答えを返していた。

「すまない、恩に着る。行くぞ可奈美」

「うん!!」

刀剣の戟音は響き合う合戦の合図。それを背にして、可奈美と姫和は進み征く。

為すべき事を為す為に。勝つ為に。迷わずに。

二人は折神家本邸の奥にある、大きな樗の木が鎮座している場所に辿り着き、そこで足を止めた。

恐れ。迷い。殺気。闘気。

生气。執着。慄き。怖気。

そのどれでも無い感情が、その場を支配していたから。

「——待っていたわよ？ヒイラギさん」

第18話 ブレイドアーツ ゼロ

戦う意義を自問した事はない。彼女は常々そう思っている。

傍から見れば狂人・異常者の類いと思われようと、彼女にとって『戦い』とは復讐以外の何物でもないから。

「待っていたわよ？ヒイラギさん」

「……………雪那さん」

戦う意義も、理由も。自問するという境地になど立つてはいない。彼女達は今この時も、そう思っていた。

「綺麗じゃない？」

木と夜気を見上げて、ほつと息を吐く。

「あの日もこんな夜だったわね。こんな夜に大災厄は終わって、でもアンタが刀使としての力を失ったと聞いた時は、正直絶望した。もう二度とアンタとは戦えないんじゃないかって。」

——でも違った。違かったのよ。だってそうじゃない？今こうして、アナタとワタシはここに居るのだから」

「……………はい」

巨木を風がさやかに揺らし、ささらな葉はあちらとこちらその境界。ゆつくりと。舞い落ちるか舞い上がるか。勝つか、負けるか。

「大事な事は只一つ。ヒイラギの剣だのアンタの使命だの、知った事じゃないわ。そんな心底下卑で下らないものよりも、もっと大事な事は只一つ。

ここに来たアンタなら、それを理解してくれていると嬉しいわ？ヒイラギさん」

「……………」

「姫和ちゃん」

御刀を構えて可奈美が呼ぶ。一対一はダメだと。

それは真実で、サシで勝てる相手でも無ければ状況でもない。20年前の相模湾岸大災厄特務隊・主遊撃手の肩書そのままに出張って来ている眼前の刀使は、現代における歴戦の刀使集団であっても一蹴する程の剛の者。

終箒がここに居るならまだしも。十条姫和が彼女を倒せる理由も必要も、ここにはないのだと。それは姫和自身もそう思っている筈で。

「見ていてくれ」

「——え？」

「そこで。見ていてくれ」

姫和の眼が可奈美を捉える。そして伝える。可奈美はひどく喜び納刀して、決戦の舞台の後ろに下がっていった。

見届けるよと。一言口にして。

「十条姫和」

名乗る。刀を抜いて。斬り、祓わねばならない相手を、瞳に宿して。

「相模雪那」

名乗る。ヒイラギカガリと名乗った敵に対して。

そして嗤う。煙のように沸き立つ血潮と闘気は不易。千古における時間すら彼女の執念の前では吹いて消える青息。

——だから嗤う。邪魔するモノは誰もいない。

佩いた二刀の内の一つ、大刀を抜刀し、切っ先と眼光を携える。鋭く、勝利の二文字と復讐完遂の計六文字と只一つの想いを込めた彼女の、雪那の、

「アンタを斬るわ」

最期の立ち合いが始まった。

◆ 『迅移』を使う刀使同士の剣戟・打ち合いは相手より一層早い者が勝つのが道理である。

二人が消える。消えたように移動する。見える。

姫和の迅移、すなわち剣術は既に第3にまで至っており、そこまで達する者は刀使界広しと言えどまずいと云うのが通例である。

しかし両者はその例外と云って差し支えなく、現在二人は同段階、第3の迅移を行使しつつ激突、交叉し、時に離れては互角に立ち合っていた。

——止まぬ剣戟はあの日のように。

交わる視線はあの日の続き。敗北の記憶が雪那の脳裏には思い出され続けていた。

自分の手を斬つても為すべき事を為す。それがこの女の剣。羅刹の剣。まるで人外の何かのような剣士をあの日、雪那は見て、

『……………気持ち悪いわ。貴女』

『何とでも。私の勝ちね』

…そして思い知っていた。

——抜かすな。

無愛想に澄ました顔でその実、勝つ事を第一に考えているのが 안타だろう。お前だろう。

あの日私が敗北したのは勝敗にかける純度の差。その差が僅かに、しかし明確に彼我の狭間を映し出しただけ。

——今は、違う。

「——ツツ!!!」

刃を振るう! 息を吐く。稲妻のような速度で。

それは姫和を僅かに上回っている早さ。段階でいうならば今の雪那の迅移は第3の半歩、先に行く。3・5段階とでもいうべき時間流（早さ）。

すぐさま姫和はその段階まで『迅移』を上げた。第4すら行使出来る彼女だからこそ
の芸当である。

——その流れの中では過去が見える。自身が負けた記憶が。

だからコイツに勝つには早さではなく速さであるべきだと、雪那の勝機を隠して。

同段階（時間流）における刀使同士の立ち合いは速さでもって勝つのが常道。だからこそ雪那は未だ一度も敵に対して居合抜刀を使っていなかった。

何故ならそれが彼女の王道であり、まずもってそういった技とはタイミングである。

この間合、この瞬間に使えば絶対に勝てるから畏怖と敬意をもってそれは『技』と呼ば

れ、故に奇跡とも伝わる。

——交叉する間合と劍戟がぶつかり、光を放つ。閃光めいた火花は彩豊かに二人の顔と劍を照らす。

絶対に勝つ。

絶対に斬る。

：それは何とも言い難い難い感覚だった。今この時、雪那は相手と同じになったような。桃源に訪れたような、そんな気持ちになった。相手の考えている事が分かるではなく。相手と同じになる。それは武芸がもたらす、一つの自覚だった。

貴女を斬る。祓う。

それが。娘である私の——

「——亜ツツツツ!!!」

劍と共に雑念を振り払う。

ワタシが希いそして今立ち合っているのはヒイラギカガリその人なのだから、今はそれ以外いらない。

その証拠に見る感じろこの劍を。こんな熾烈な劍を、綺麗な劍を、見事な劍を繰り出せるのが奴以外に誰がいる。

私にとって最強なのは柎箒。それはこれから、そして今までも変わらないのだから

「帯電」

剣速を上げる。

「——放電」

足と脚の筋骨を動かし刀を振るう。

「流電、」

息を止める事をやめず、全身の筋骨と血管を早く速く動かす。すると相手がゆつくりに見えてくる。

——見えてきた。

「雷電」

納刀の速度は抜刀の速さと同じ。

今。鞘内の刀の柄頭が敵の正中線をしかと捉え、雪那は抜刀していた。簞が御刀を振るわんと意図したその刹那。絶対なる勝機と殺意と共に。

「帯電放電流電雷電」



迅雷風烈なる居合抜刀は、姫和にとって心を引き締めるに足るものであった。……どれほどの修練と執念があればこれを現実のものとするか。そんな事を脳みそが悠長に考えている程に。生を諦めていられる程に。

「、」

速い。人類が遥か未来で光よりも速い何かを造り出さねばこれには追いつけない。それほどに。三千世界のあらゆる全ての中で最も速い一刀が今、姫和に迫って来ていた。

——これは魔剣。放てば必ず敵を殺す。ただ殺害を行う為の剣。これこそ正にそれに違いない。對抗するには同等の魔剣以外に方策はなく、だからこそ姫和は。

「——ツツツ!!!」

「——」

一步。前に踏み出て居合を身体で受け止めていた。



——そう来ると思った。

悟る。こいつは必ず身体でもって何かをしようと。刀を止めたりだつてするだろうと。

雪那は知っている。

それは『写シ』があるからこそその芸当。しかし普通の刀使では絶対無理な事をいとも平然と。

だからこそコイツと。

——振り下ろされる一刀。『写シ』が剥がれても手放さない切っ先両刃造の御刀・小烏丸が頭上に迫る。

だから雪那は鯉口を握る左手を開き、左に切った腰を元に戻し、第5段階の金剛身を全開にして小烏丸の平地と物打ちを力強く握り締めた。右腕の肘を畳み、構える切っ先は今こそ無防備な敵の肺へ。

この近間、この早さ。この速度でもって雪那は勝利の二文字を己の物へと、今こそ現実のものとし——、

「……………」

「……………は」

貫く。貫かれる、懐かしい何かを味わっていた。



一目見て気付いていた。己の勝機を。

先の先（不意打ち）も、後の先（カウンター）も意味をなさない。勝機は先（敵の攻撃のゼロ地点）。

それしかないと考えた。刀がそう言っていた。そう、あの脇差が。

「――」

「……………」

見る。相手の瞳を。ずっと、きつと己を映していないだろう相手の眼を。…果たしてそこには。

「――気持ち悪いな。心底、お前は」

「何とでも。私の勝ちです」

郷愁と後悔に濡れた雪那の瞳が、彼女を見ていた。

◇

「最初からか」

「はい」

「最初から、この小刀で私を斬ると。そう狙っていたか」

「…はい」

接近する間合は彼我の距離。

雪那は二刀を佩いて決戦に挑み、一刀のみを使って。対する姫和は一刀を差して、しかし二刀でもって決戦に挑み。

柀家の脇差・柀一文字は確かに今、姫和の手に舞い戻っていた。

「その刀は小烏丸と同じく柀の家に伝わる一振り。母はそれを終生抜く事はありませんでしたが、ある日私に話してくれました。これは守り刀だと」

「守り、刀……」

「敵と相対する持ち主をこれは守ると。現役の頃の母は、そんな物必要ないと誓っていたようです」

「………そう、か」

「母が貴女にそれを託した意味。そして、私がここに居る意味。その全ては柀一文字、その刀が教えてくれていたんです。雪那さん」

「———そうか」

見下ろす。親譲りな娘の瞳を。そっくりなその容姿を。その左手に握られた小刀を。

雪那の腰の柀一文字は姫和によって素早く抜かれており、攻撃しようとした瞬間を余さず逃さず突かれ、腹を裂かれていた。

接近する間合は彼我の距離。それは納まっている刀の柄もまた。

——剥がれる『写シ』が、相模雪那が、刀使・高津雪那が最期に姫和を。そして柊
篝という名の過去を見て、こう言った。

「お前に謝りたかった」

『アンタを死なせたくなかった』

「普通の人として、もっと生きていつてほしかった」

『不愛想じゃないアンタを、もっと見たかった』

「…置いていかないでくれ」

『…柊さん』

「……どうか。弱い私を」

『…許してください』

——お母さん、この人に負けた事ないんだから。

さめざめと泣き崩れる雪那を姫和はしっかりと抱きしめ続けた。きっと、母ならそう
すると信じて。

第19話 この天の下に双つと無い者

「行こう。可奈美」

「……………。いいの?」

「ああ」

気絶した鎌府学長を櫛の木の下に寝かせた姫和に、可奈美が訊く。

「雪那さんの為にも私の為にも。今は進み、私達だけで大荒魂を討とう。一刻も早く」

「…………それは…そうだけど」

親衛隊と戦っている沙耶香達は未だ来ない。だから今はとにかく先に進むべき。姫和はそう考えている。

しかし可奈美には彼女の迷いが見えていた。

「…………」

——涙の跡すら乾いていない雪那をこんな所に独りにしていいのか。そのまま果たしてこの先、迷いなく剣を振れるか。

姫和は鋼の理性で己を律して言葉と決意を口にしてはいるが、それでも一欠片。ノ口を打ち込まれている雪那の安否が気になっている。それは可奈美も同様だが、サシで戦った者同士にしか分からない強い感情は確実にあるのだ。

「? そこ、誰ですか?」

「…む?」

殺気? いやいや、そんな大層な物ではない人の気配がした方向へ可奈美が声を掛けた。

「いやーごめんごめん。驚かす積もりはなかったんだ」

すると。現れたのは中肉中背の男性。背広を着て、今から決戦ですか? ゆるい言葉に反して気合に満ち満ちた出で立ちの誰かだった。

「貴方は……」

「あれ? 確かこの人」

「折神家に今日用があつて来てたんだけどね、急に空からS装備のコンテナが降つてくるだろう? びっくりして腰抜かしちゃつて。」

隠れて様子を伺っていたんだけど、どうやら君達は刀使さんで、為すべき事があつて、でもこの女性が気がかりなようだ。

だったら僕が彼女を安全な所に連れて行くから、君達は存分に本懐を遂げるといい

「よ」

「……」

「…えつと、」

怪しい。可奈美は思った。

しかしこの男性の苗字を思い出して、もしかしたらと瞬きをしては見つめ直した。――雪那に注がれる男性の視線。それは可奈美の母が存命していた頃、父が向ける眼差しそのものであった。

「その前に一つ。貴方は、折神紫の側の人間ですか」

「朱音様の側で、舞草の支援者の一人だよ。雪那と一緒に」

「成る程。そうですか」

「だから家内の事は任せてくれ。だって僕、隠れるのは昔から得意だからさ」

「分かりました。：雪那さんを頼みます」

「よろしくお願いします！高津さん！」

「頑張つてね。応援してるよ、公私共に」

「可奈美」

「うん。行くう!!」

二人の刀使が走り行く。眩しさと懐かしさを瞳に滲ませた視線を切つて、高津は膝を

折つて再度妻の顔を覗きこんだ。かけがえのない宝が、そこにはあつた。

「……起きているんだろう？もう」

「……。余計な真似を」

目蓋だけを開けて、雪那は男を見上げて言った。

「いやあ、何だか今日は胸騒ぎがしてね。折神家に来て良かったよ。やっぱり、僕は20年前から運がいいみたいだ」

「……。朱音様が、連絡しましたか」

「あれ。もうバレちゃった」

「少し考えれば分かります」

援助と根回しを要請したのだろう。この男は舞草と特別祭祀機動隊を全面的に支援している者達、特に政治家の中での筆頭である。

「しかし何故ここに？私とはもう赤の他人の筈。∴内閣官房のご政務を放つて、こんな所で何をしておいでですか？高津先生」

「先生はよしてくれ。特に君にそう呼ばれるのはこう、何かこう、精神が掘削機で思いつきり削られてる」

「鋼の精神が専売特許でしように」

雪那が顔を逸らす。かつては夫であつたこの男の顔は、今は見たくなかつた。

「とにかくだ。今は、君を安全な所に連れていく。身体に障るとは思うがこの風、この肌触り、ここは戦場だろう？我慢してほしい」

「流石は相模湾岸大災厄の経験者。あの江の島に居た人は言う事が違いますね。でも放っておいて下さい」

この人に担がれてまでこの場を離れたくはない。：何より合わせる顔がない。雪那はぶつきらぼうに言いきった。

「え？それ無理」

「は……？」

「僕が君を放っておくわけがないだろう？現に20年前、君は僕を放っておかなかつた。助けてくれた。だからこれで御相こ。」

——なんて、規模が違うか」

「ちよつと」

「よし！決まり！さあ僕らの家に帰ろう！今すぐに！」

「ちよつと。ちよつと、いいから!!もう離婚したでしょう私達は!!」

「え？何だつて？」

高津はとぼけて、というよりは心底ワケのわからないう風な顔をして、上着の懐に手を入れた。顔は雪那からほんの少しも逸らさずに。

「絶縁状と離婚届はきちんと貴方に渡しました。——なのでもう構わないで下さい！」
「ああ、そうそうそれそれ。君から預かったこの離婚届と絶縁状なだけどね？」

取り出す紙を見た雪那は眼を見開いた。

……何故ここにそれがある。ワケが分からなかった。

「これさあ、僕すっかり見てもいないし判も押してないし何ならこの場でこうやって、破り捨てるからさ。」

——どうかまた僕と一緒に歩んでくれませんか？雪那さん」

「……………は？」

心底。呆けたのは雪那の方だった。

男の真剣な眼差しと言葉が、昔受けたプロポーズのそれと同じだったから。

「君が離婚を言い出したあの日、僕はあの時、これは預かるとだけ言っただけなんだ。受理するだの君以外の人と幸せになるだの、そんな事は言ってもいないし思っただ事も思う事もこの先一度もない。」

だからもう一度言うよ？今度は僕が貴女を助ける。支え続ける。僕と一緒に、どうかこの先の人生を歩んでくれませんか。雪那さん」

「……………」

こうして本当の意味で。刀使・相模雪那は高津雪那に戻ったのであった。



折神家本邸最奥・祭壇の場は厳かな雰囲気であり、それでいて戦うには狭すぎた。だからわざわざとらしく地下への入り口を開け放し、二人の刀使はここに来て、正に今私に話しかけてきていた。

「——答えろ。折神紫は何処だ。鎌府の刀使」

堪える。まだ。

そんな私に、十条さんが戸惑いながら言葉を放つ。まあ無理もない。ここには目的のものが何一つ無いのだから。

「紫様なら医務室でお休みになられてますよ？十条姫和さん」

「何？では大荒魂はそつちか。向かうぞ可奈——」

「いえいえ。貴女が奥義を放つて大荒魂を討つとか何とかそんな事をする必要は、もう無いのです。」

紫様に憑り付いていた化け物もこの場に有ったノ口も、皆悉く消しましたので」

「——やっぱり」

笑みを浮かべて私は言う。変わらぬ疑問を浮かべる十条さんと、妙な納得感を醸し出してゐる衛藤さんに向けて。薄く薄く、喜色を隠すように。

「貴女方も刀使ならば分かるでしょう。先程までここには大量のノ口がありました。しかしそんなモノも大荒魂もここにはない。

もしもここに私ではなく大荒魂がいたら、それら全てと融合した化け物が貴女方の目の前に現れていたでしょう」

「……………」

「……………」

御刀を構え直す二人。無言で、けれどしつかりと。確実に、相對する私の隙を見逃さぬように。

「ああ、心配には及びません。無論のこと私は貴女方と同じ刀使。その私が大荒魂を斬り、祓いました。紫様の心身は無事で、これからノ口の除去作業を行い世はなべて事も無し。

——でも、その前に、」

安行の柄に利き手を掛ける。嬉しそうに、白刃がゆつくりと抜き出される。

「私の目的を。果たさせて頂く」

まだ、まだまだ。闘気が漏れ出るのを防ぐ。

耐える。私の相手はこの若き剣士達ではない。それは最初から変わってなどいないのだから。私が、この天の下に生まれ出でたその時から。

「——葦名無心流・綿貫和美、参る」

◇

『迅移』。早足で近付き、私はS装備を装着している彼女達の目の前でクルリと一回転した。刀と右手は左肩上。そのまま跳ぶ。遠心力を損なう事なく。

「——な、」

「……桜……」

舞いのような斬撃を空中から叩き込む。計3回。双方防いだ、ように見えるが手元はブルブルと震えている。

着地。意表を突いた私は一気に畳み掛ける為もう一度跳んだ。

「——ツツこのっ！また連撃か!!」

「…スゴイ！雲みたいっ！」

「ふふ。お褒めに預かりどうも、衛藤さん。『渦雲渡り』と云います」

「私達と戦う事がお前の目的か……ッ？ 鎌府の綿貫！」

「いえいえまさか。でもそうですね、強いて言えばこれは準備ですよ」

「準備？」

「はい。何故なら私の相手は——」

「——ッフ！」

十条さんの『迅移』が変化した。段階（ギア）を1から2、そして3へ。彼女の御刀・小烏丸が私を突いてくる。

その刃を思いつきり、左足で踏む。

「！ な、」

「私に突きは通用しません。見切っています。そして貴女には用事がないので、そこで見ていて下さい」

「！ ぐあ……！ っ」

『桜舞い』、『渦雲渡り』を無理やり防ぐ事は身体に負荷がかかる。ここで言う負荷とは眼に見える裂傷的なダメージではない。

インナーマッスル。そして体幹と云われる部位へのダメージ。それはこの『写シ』を張った刀使であっても防ぐ事は出来ない。

御刀を握る者、その根本への威力だからだ。

そして突きを踏み防がれた事により完全に態勢が崩れた十条さんの首筋を安行で薙ぐ。——すると『写シ』は剥がれ、生身の彼女はその場で蹲った。

「さて衛藤さん。実は貴女に折り入って頼みたい事がありましたね」

「……………」

観察している。洞察している。今まで戦ったどの剣士とも違う私を。流石と言いたいが、今じゃない。

「藤原美奈都を呼んできて下さい。今すぐ、さっさと、この場に」

「？ ふじ？」

「今の貴女に言っても分からないでしょうが、割腹すればあちらの存在が此方に出てこれます。其れは古い名を開門と言うそうですが。まあよしなに。」

何故なら私はその為にここに居て、貴女もまたここに居るのですから」

「えっ……………と？——それってつまり？」

まだ分からない。そう顔に書いてある。

まあ当然なので、私は用の無い彼女に最後通牒を伝える為に御刀を構え直した。だつて邪魔だから。

「そう、つまり。私は貴女に勝つ積もりも斬り合う積もりも最初から更々無い。つて事ですよ衛藤さん」

そう言つて、私は切つ先で狙う。これから突いてくる、と相手に思わせて。

先んじた彼女は加速し安行の切つ先を弾いたが、元より突こうなどと考えていなかった私はその場で高く飛翔した。彼女の意識を刈り取る為に。

——葦名無心流秘伝・仙峯脚。

脳天に直撃させる。第5段階の『金剛身』を掛けて行かうこの当て身技は、ダイヤモンドのような硬さの蹴りが人体に突き刺さる事と同意。その証拠に衛藤さんは『写シ』が剥がれ気絶し、前のめりに倒れてゆく。

あの女がそうであつたように、刀使とは全身が武器であり武芸なのだから。

「可奈……っ美……」

「——」

見る。見詰め続ける。

気絶し、もう起き上がつてはこれないだろう衛藤さんを。起き上がつてきて欲しい彼女を。

だつてもし、きつともし起き上がつてこれるのならば。その時彼女は、

「……………」

——

きつと。

——

きつと。

「——ッ!!!」

我慢を止める。切っ先を指し向ける。

ゆったりと脚に力を込め、立ち上がり沸き昇る闘気が彼女の髪留めを自然に解けさせ、ハラリと流れる気流に沿って柵引く毛先が空中にゆつくりと漂って髪留めを地面に落ちる前にそつと素早くその手が取って。

俯いた『彼女』の顔面目掛けて私は、弓を引き絞るように全身全霊を込めて突きを放っていた。

——葦名無心流秘伝・大忍び落とし。

「……ッ!？」

「——」

「可奈……美……?」

踏まれる。思いつ切り。これは一朝一夕で身に付けられる武芸ではない。如何に彼女でも。——見切られている、見切っている。それを『奴』は。

——劍に生き、劍と共に生を歩む者。最期までそれを貴ぶ者。

全ての刀使達の頂点であり、全ての劍士達が目指し越えるべき大山。それが今そこに、相も変わらずそこには在った。

ああ、やっど。

「——ようやく会えたな。天下無双」

「久しぶり、天下無双！」

私の復讐の機会が、訪れたのだった。

幕間 可奈美と美奈都

『負けちゃった』

『あっちゃだね、可奈美』

悔しさともう一つの感情を込めて、可奈美は笑って言った。

『初めて戦った時と全然違う。あれが本来の流派…、ううん違う。全てを取り込んで力にしてきた。あれがあの人、草名流。その大元、源の剣なんだね』

『草名…?』

それを聞いて、美奈都は少し考える素振りをした。

『知ってるの? 師匠』

『うちのご先祖様がその剣の使い手だったんだって話を聞いた事がある』

『へ〜不思議だね〜』

『そうだね不思議だね〜』

和やかに話が進む。こうやって自分は負けたんだよと。貴女ならどうしたかと、どう

やったら上手くやれたかなと表面上は。

そして可奈美は本題を切り出した。

『とうわけで師匠。——いいえ、藤原美奈都さん。是非あの人と戦ってみて下さい』

『…ええ?』

戦えるわけがないだろう。世迷言を一笑に付して美奈都は弟子に言った。

『聴いて、師匠。あの人は多分誰に負けても勝つても嬉しくないし、悔しくもないし何も想わない。只一人、お母さんを除いて』

『お母さんは止めて?可奈美』

『そんなの剣士じゃないよ。ましてや刀使でもない。只の復讐の鬼だよそれ』

『……………』

……………。

『お母さんとあの人に何があったのかは分からない。けど!心底もう一度戦いたいって思えるような何かが有った事は分かる!』

そしてそれはお母さんも同じ。…でしよ?』

『……………』

歳若い母は瞬きをせずに耳を貸す。

可奈美には知りようがない。かつての大荒魂との死闘を。親友であり後輩である柊

簞を救う為に、命を投げうち『迅移』の第5段階を使った一人の刀使の半生を。

——もうこの先、強者と戦う事は無い諦観を。

もしもあの江の島に最初から両者だけが居て、サシの一騎打ちが出来たら勝ったのはどちらだろうかと。ありもしない想像も。

だからこそ。

『あの人は待ってる』

『……………』

『あの人はこの日の為に、色んな人を巻き込んだ。全部、藤原美奈都さん。貴女とまた戦いたいから』

『……………ふーん』

『炎を消してあげて、師匠。あの人の黒く燻る炎を。野心でも怨嗟でも何でもない、只の純粋な闘争心を。』

きつとそれが消えなきや、あの人はこれから生きてても死んでもいられなくなる。お母さん』

——そう言つて、可奈美は御刀・千鳥を自身の腹の前に持つてきた。刀身の半ばを軽く握り、切っ先を真っ直ぐへソに向けて。

『何する気?……………なんて、一つだけか。それで私があちちに行けるって?』

『そう言われたの。呼んできてくれたって』

『私、何にも出来ないかもよ?』

『お母さんじゃないと何にもならないんだよ。始まらないんだよ。悔しいけど多分これは、劍者として刀使として』

可奈美は拳に力を込めて言った。師に、母に、先達に。今を生きる人として。

…同時に羨ましくも思った。生涯唯一人の誰かの為に鍛えて頑張つて、その誰かがこれ以上ない時と場面でやって来る。斬り合える。

——だからこそ。

『分かった。やれるだけやってみる』

『後でお話聞かせてね? いつもは私ばかりだったから。そしてどうか、どうか貴女達の本懐を』

突き刺す。意識が消えるその前に見えたのは、我慢を止めた最強の刀使。

衛藤美奈都の全盛期、可奈美の憧憬。劍聖・藤原美奈都が炎を瞳に宿していた。



「久しぶり、天下無双!」

第20話 ラスト・ブレイドアーツ

——死闘の前段、或いは前置き。一人の刀使が敵を降していた。

「…見事、ですわね」

「……………」

「真希さんすら完封。私も力及ばずとは。流石は、ここに攻め込んでくる程の剛の者ですわね」

「……………」

横になっている寿々花達に対し、立つ沙耶香は黙って首を横に振った。

…自分はそんな大した存在ではない。一緒に戦った舞衣や薫、エレンのお陰だからだ。

自分一人では勝てない。可奈美と違って。

それが心底分かる位には、沙耶香は自身を理解していた。

「貴女達は何を望みますの？」

「……」

「我ら親衛隊を突破し、このまま紫様へと至る。よもや当代最強の刀使・折神紫を討ち取り名を上げるのが目的と？…時代錯誤ですわね」

「違う。少なくとも、多分、私のこれは我が儘」

「我が、儘…？」

「可奈美達と一緒に戦いたい。もつと先を、剣を、もつと見てみたい」

だから進む。親衛隊二名を降し、奥の社へと辿り着き更に先へと。地下へと下り、闘いの芳香がする場所へと沙耶香達は進んだ。

肌がひりつく。そこは逃げ出したくなるような闘気の坩堝と歓喜の渦中。そこで彼女は、終生忘れられない光景を見た。

「……」

——それは神話の闘いの具象だった。

修羅が右に左に得物を振るい、天を叩き割りながら軋む戦場を駆けずり回って同じく修羅を斬ろうとする。ときに防ぎ、ときに躲し、ときに刀を鞘に納める。——真剣勝負の死合い舞台の最中において、抜いた刀をわざわざ鞘に納めるなど愚の骨頂を通り越して暗愚の域だろうが、この修羅はそういった思考と知見の埒外にいた。

あえての納刀、あえての抜刀。その全てが勝つ為の方程式であり、常人には真似すら

出来ないだろう間合の騙し合い。めくるめくそれらが刹那のように切り替わり連続し、勝機すらをも意のままに操る修羅道の化身。闘戦の権化。

その修羅の名を、劍聖と云った。



「君が姫和ちゃんだね？ うんうん、篝そっくり！」

刀を納めて、私は敵を見続けていた。無論の事和平の意思表示などではない。

——戦鬪態勢。『奴』を眼の前にして、もはや言葉は要らず、有るのは只この刀だけでいいからだ。

「可奈美をよろしくね。君みたいな子が傍に居るのなら、あの子は独りぼっちにはならない筈だから。ふふ、護れて良かった」

「……………」

まるで母親を見るような瞳で。親友を、篝さんを取り返せて良かったと心底嬉しそうな表情で。しかしそう言っただけは改めて私を。

……いや、最初から視界と間合に捉えている私を、奴は再度見つめ直したのだった。
「来なよ」

「」
笑みを浮かべる。お互い、無言で歩く。間合を狭める為に。斬る為に。勝つ為に。今度こそ殺しきる為に。

刀は互いに左腰、左手鯉口既に切り、雌雄決する真つ向勝負の始まりは居合が全ての口火で巢口。

「セイ!!!」

「オオ!!!」

拔刀! 顔面・体幹を狙う柄頭が右手によつて驀進し、しかし同じ狙いだつた為に互いのそれは空中で激突した。

彼我の狭間にて、押して押して押しまくる私の柄頭はゴリゴリと『八幡力』を発動しながら、しかし互いのそれらは微動だにせず。張り詰めた糸のような眼光と眼光とが只々互いを、ひたすらぶつ叩くように重なっていた。

勢力伯仲。しかしそう思つた瞬間、奴は獐猛に笑つた。及第点と言うように。

「——ツツツツフー!」

「オオオオツ!!!」

同時。性懲りも無く。

鞘を握る左手が鞘を離れて握り拳の形をしながら邁進する。敵のツラ目掛けて。衝突する。互いの拳は互いの敵のツラに、柄頭は柄頭に。

空中で火花散らす攻撃は『金剛身』を掛けて行つた物ゆえに私達は合わせ鏡のように微動だにしなかつたが、只地面だけが重さと強さに耐えきれずに深く陥没した。

…時間が停まる。錯覚？いや、それは『迅移』の発動或いは変化。互いにそれを知覚し、私は出かかつた刀を納めながら跳躍した。

「——セイアアアアツツ!!!」

—— 葦名無心流秘伝!・仙峯寺菩薩脚。

蹴りを藤原美奈都の全身に連続でぶち込み、しかし硬い。

つまり『八幡力』を全開にしての私の蹴撃は、奴の『金剛身』を貫く事も破る事も出来なかつたという事。

いや、むしろ。

「——、オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ
!!!」

私の脚に奴が拳を叩き込んでくる。

互いに納刀した御刀の鍔を親指で僅かに押し上げたままで、片や足で片や腕で打ち合う。

その全てがまるで刀を振るっているかのような運体。重心の操作法。達人のそれ。奴は刀を抜いていてもいなくてもそれが出来るし、出来て当たり前なのだ。

——私の『八幡力』が破られる。押し負ける。

特筆すべきは、奴はまだ一度も『八幡力』を使っていないという事。『金剛身』が強すぎて、硬いという事が唯一無二の『武力』と化している。

流石と言う他ないが、ならば打ち砕くまで攻めるのみ。しかし私の眼前にはヤツの背中が、靠撃が迫って来ていた。

「オオオオオオオオオオア!!!」

気合を叫びながら互いの背中が激突し合う。衝撃の余波は更に地面を沈み込ませ、私はヤツの眼光を逸らさず見て勝機を練った。

楽しい。そこにはそう書いてあった。

「血が滾ってきた!!!」

——利き手を柄に飛ばす。

「行くぞ、美奈都おっ!!」

ウズつく鬨気は抜刀を促し、私も奴もそれを止めず。

振るわれる白刃はその場で斬撃を生じさせ、敵に向かって飛んでいった。

「ツツツ!!!」

「!!!」

藤原美奈都の斬撃と同じく等しく私の『竜閃』が常人では有り得ない奇跡と軌跡を現実のものとする。

あの時はここで負けた。だから今度は勝つ。今度はもつと長く楽しむ。私はあの日の、江の島の続きを体感していた。きつとそれは、奴も同じだと笑顔を信じて。

「ズエア!」

「セイ!!」

誘うように刀を納めた藤原美奈都はグルリと柄頭を左腰に回した。すると右手で掌底打ちを繰り返してくる。

硬すぎるそれを私が御刀で斬り防ぐと同時、左腰に差した刀を左手順手で奴は抜刀し腰を切り、私を真つ向から叩つ斬った。それは居合抜き等という大道芸ではない。敵を殺す武芸である。

——両利きであるこの刀使にとって刀をどつちで持つて斬ろうか、抜こうか等という思考はない。右が良いなら右、左が良いなら左。

利き腕が斬り落とされたらもう何も出来ない等という常識の埒外にいるのが奴だ。剣聖だ、修羅だ。

人間の底すらない進化。底をも凌ぎ超える藤原美奈都の執念と闘志が、歴史に名を連

ねる剣豪と名を連ねる事を良しとしなかった剣の鬼をも奴の後塵と言う名を拝している。

瞬時に『写シ』を張り直し、御刀を振るう。敵は左手で振るってくる。

そんな敵を私は斬る。無論浅い、軽い、すなわち罨。

奴は瞬時に『写シ』を張り直し、何事も無かったかのように今度は右手で刀を持ち直して振るってきた。

：何の為に？ 私を斬って捨てる為に。

刀の柄尻を指三本だけで挟みこんでの斬撃はさながら長刀長巻。それに対する間合を奴は私に強制的に生まれ、距離感を幻惑させていた。

しかも片手のみで扱うという異常さ。それは刀を持つ・振るうのコントロールを上手くやらねば敵に容易く強く弾かれ武器を失うというリスキーな所業。それを奴は平気で何処吹く風で刀をまるで槍のように振るってきた。

「——ツツツ!!」

「——」

斬撃が飛ぶ。奴の攻撃一閃一閃に付随するそれらを弾き、防ぎ、時に私は反撃する。

すると消える。奴が、瞬時になんてもんじやないとんでもない早さで私の眼の前に現れた。

『深移』!!?」

「アツハハハ!!!」

更に私は勘違いを正した。だってここまでくれば間合の把握もクソもない。『迅移』の段階をすつ飛ばす事すら可能にした劍聖は銃弾のようにこちらの間合に侵入し、こつやつて斬ってくる。しかしそれは柊家直系の刀使だけが使える力の筈。

「どこで学んだ!」

「練習!!!」

出来るか。そんなもの練習で、この女以外に。

刀使という存在そのものであるかの如き劍士。それがこの藤原美奈都なのだから納得する以外に方策はない。

「——ツハ!!!」

「ズエイ!!!」

…そんなコイツを斬るには。勝機は。

「オオオオオオ!!!」

「アツハハハハハ!!!」

単に斬るだけでは駄目だ。そんなものは『写シ』を一回剥がすだけで終わってしまう。

……奴を負かす。それはつまり心を挫くしかない。折るしかない。

今の奴は恐らく何十回も『写シ』が張れる筈。それぐらい出来る筈。

腕、足、心臓、肺臓、それら一つを斬つても奴は絶対に参らない。気概が違う。笑みが違う。迷えば敗れる。

迷うな。だって私は勝つ為に此処に居る。

「——!! ツスツウエエエアアアアアアア!!」

「ズウウエアアアアアアアアアア!!」

片手で振るう御刀から繰り出さぬ飛ぶ斬撃たちが更なる亀裂をこの戦場に生ませる。恥も外聞もない。互いの雄叫びは反響し、蹴撃攻撃斬撃は天地を揺らし砕き、眼光は鋭く前だけを見る。敵だけを見る。

——あの日の江の島で戦った時と同じ。

化け物の首をこうして奴は全て斬り、しかしその前に篝さんが『ひとつの太刀』を使っていた為に、藤原美奈都は彼女を救うため第5段階の『迅移』を使って私達の戦いは完全な終わりとはならなかった。

…今思い出しても虫唾が走る。

心底、あの生き汚い化け物は余計な事しかなかった。

「あれ? あれあれ? 疲れた?」

「そんなわけがないだろう…!」

「やつり〜！ でもそれじゃどうしたの？ もしかして攻めあぐねってる？ 負け認める？
今度こそ参ったする？」

「それをするのはお前だ、藤原美奈都!!!」

右腕を斬られる。咄嗟に御刀（安行）を左手に移していたので致命傷は『写シ』を張りなおして無かった事にする。

……勝機。勝機は、速さか早さか疾さか否か。

私は刀を鞘に納めた。

「へえ？ 居合？」

藤原美奈都が動きを止める。恐れからではない。それは洞察の為であり相も変わらず斬る為の行為。

「……………」

「葦名十文字、だっけ？ 柔剣って名前しか伝わってない古い古い剣士が、最も得意としたって
いう葦名流の抜刀術」

——不意を突く。先を獲る。といったそれら諸々を、考えるのを止める。

「じゃあ私もやろっかな!!」

「……………」

「私の剣は見知っての通り我流！ 最初は新陰流だったけど、今は只の我流。名前なんて

無い。でも『八幡力』を使ったこの居合には、不知火つて名前を付けてみた！」

「……」

——いつかきつと何処かで誰かが辿り着くって信じてる。ていうか可奈美が将来振るってくれる！

そう言つて、藤原美奈都もまた鞘に刀を納めた。

「惜しいけど、これが最期の勝負だよ。刀使さん」

……

そういえば。

「綿貫和美だ。私の名前は」

「そう。和美ね、憶えておくよ」

——そういえばお互い名乗っていなかったなど、私は思つて、

「人類最速の居合。見せてやろう」

啖呵を切つて。斬り込んだ。

◇

氷るような時の中で、私は安行の鉤（ハバキ）を真つ直ぐに抜き出した。同時に、奴

もまた刀を抜きだす。

勝負は一瞬。悟られたら終わり。死即生、必死即ち生くる也。その他諸々、心に映すは無心の氷面。

——互いの心の中を覗く。

そこには楽しいと、この期に及んで一色の喜びが有った。互いに、柄頭が迫る。

如何に斬ろうか、如何に斬るべきか。そう突き詰めるうち、気付けば刃は飛んでいた。奴の切っ先三寸が鞘から放たれ風と鬨気が収斂し結集し、斬撃が藤原美奈都の剣から発せられるその前に——。

私は、奴の顎に安行を命中させ、復讐を成し遂げていた。

最終話

勝機は不意打ち（先の先）。それは初めから決めていた。

「ねえ」

「何だ」

誰にも明かす事も悟らせる事もなく、スピードでもタイムでもスペースでもない勝ち筋こそが私の勝機と定めていた。

——それ以外は、どうでもよかった。

膝を付き、ついに横たわる宿敵。剣聖が瞳だけに闘志を込めて、私を見上げる。

「それ、居合？」

「居合だ」

「抜いてないじゃん」

「抜いただろう」

「途中まではね！」

横一文字に安行を振りぬいた私はその姿勢のまま、瞳だけを見下ろして答えた。その切っ先五寸からは、未だ鞘が繋がっている。まるで蛇が絡むように。

「どう抜いてくるのか分からない、どう斬ってくるのか分からない、どう動くのか分からない。それが居合。速さが売りなわけじゃない。知っているだろう」

「え〜……………う〜ん……………」

納得がいかない表情。それが次第に、理解と共感に包まれて笑みを作る。

「御刀は折れず曲がらず、壊れず。そんな御刀を覆う鞘が脆いわけがない！」

貴女は抜刀が終わる手前で左手を鞘から離し、私に向かって鞘ごと刀を振った。何てコントロール、何て力加減何て間合。間合騙しの居合術！正に人類最速！……………いやあ、分かんなかったよ」

「誰にも知られてはならない技だからな。当然だ」

歓喜が生まれる、その前に。

「——でも楽しかった」

心底笑顔で、藤原美奈都は口にした。

「もう剣は捨てるの？和美」

「ああ」

「高校3年生だよな？ ……そっか、もう刀使は終わりなんだ」

「ああ」

それが分かると、私は続けた。

「可奈美と立ち合つてよ。きつともつと、あの子は強くなる。私よりもきつと」

「…ああ」

「適当な返事。やる気なしと見た。私に勝つ事だけが剣の全てだつて顔してる。

でもちよつと待つてよ。江の島では私の勝ち、今度は貴女の勝ち。一勝一敗。ケリはまだ付いてないよ」

もつと、もつと。藤原美奈都（敗者）は口にする。

「一度でもお前に勝てればそれでいい。この身体が砕けようが二度と刀を振るえなくなるが、後はどうでもいい。そう望み、この戦場に臨んで来た。

だからもういいんだ、藤原美奈都」

——私の勝ちだ。そう言つて、私はやつと笑つた。

「そつか。…そつか。そつか」

まどろみに落ちるように。かつての敵が一度二度、瞬きをする。私はそれを最後まで見続けていた。

これで終わり。私の復讐は終わった。私の剣も、刀使としての人生も。そして、これからの生きる目的も何もかも。

「終わらないよ」

「——?」

敵意。…いや、戦意に満ちた足音がする。その時。

「終わらない。終わってなんかやらない。だって私達は、」

「? 何か用ですか…?」

踵を返す。後ろを確認する。私は音の出所を、発した者を見ようと——

「刀使だもの」

そう言つて眼を閉じる彼女を尻目に、別れと同時に。

一人の剣士がそこに居た。

「糸美」

「和美」

最終話 『一心』

——そこに立っていたのは紛う事なき剣士だった。

鞘から離れている刀身は銀色と鈍色が合わさり鋼の残光を私に示し、見詰める瞳は余す事なく私を宿す。

葦名の剣を教えた弟子。偶さか、或いは利用する為必然教えた後輩・糸美沙耶香が、自身の間合に私を入れてそこにいた。

「全部、この為。和美はこの人に勝つ為に、全部が全部仕組んできた。私に剣を教えた事も」

「そうです」

「刀使としての責務も志も、全部全部」

「ええ。全部が全部、あいつに勝つ為」

答えを言う。彼女に応える。私の目的は最初から一つだと。

鎌府だの衛門だの護剣の切っ先だの他人だの、全て私の復讐成就の為。それを伝える。

糸美は頷いて御刀を、妙法村正を天頂に掲げるように構えて言った。

「——分かった。じゃあやろう」

「……はい？」

「戦いたくなかった」

「…えっ、と？」

「今から貴女を。斬る」

分かりやすいように噛み砕いて言った言葉はこれ以上無いほどに私の脳に響いた。

そして何故?と疑問が湧く。

…糸美沙耶香はこういう、所謂戦闘狂タイプではない。固い理性で己を律し、斬るべき相手そして戦うべき敵をしつかと見定め剣を振るう。それが鎌府の、可愛い後輩・糸美沙耶香の全ての筈だ。断じてこんな魔戦士などではない。

「——迷えば、敗れる」

その誰かが口にする。

「和美に。勝つ」

教えが私に帰って来る。殺気と闘気がこの場を包む。包み始める。

自然と、安行を握る私の手が臨戦態勢を取って刀を鞘に納め始めた。

——? 私は何をしている?

「和美」

「何でしょうか」

固い声に反して、私は宿敵を見詰めるように柔らかく糸美を眺めた。

斬るのか、勝つのか、降すのか。もう剣の意味も、復讐も成し遂げ全て消え失せた私と安行が、斬る為の行動を起こし。柄頭は依然として、敵の中心を攻めている。

「教えて」

「何をです」

これは些事、ただの戯れ。…などと言うには軽すぎて弱すぎて。

「和美の剣を」

「何故」

「……………」

黙り込む。

…いや、これは気恥ずかしいという感情がそうさせているだけの事。その証拠に糸美は諸手右上段に近い構えで、やはり力強く口にした。

「私も。和美達みたいになりたい」

「——」

燃える。炎に向かう蛾のように。冴え渡る月のように。

焼き付ける陽のように、眼が光って。縦一文字に刀を構える剣士が私の前に、今か今かと闘志を急かして。

「成る程その眼。——飢えた狼でしたか」

それは闘戦の化身者だけが放ち得るもの。

武を奉じ、戦を生とし、刀を己の意味とする者、特有の芳香。純正の闘気。心を震わす猛毒を浴びせあい、しかし私が怯え竦むことはない。

敵がこれから後の刀使界を征覇する畏怖すべき魔戦士であろうとも、私こそはその戦

場の常軌を逸した剣聖を斬り倒した葦名無心流に他ならぬ。

優劣勝敗は世人ではなく武の神のみが知る処。

彼女は駆けだす。私は待ち受ける。

「いざ尋常こ——」

「勝負!!!」

接触はほんの、刹那のさき。

今この時だけ全てを忘れて、師弟である私（刀使）達は最後の戦いを始めたのだった。



一太刀で勝つ。

狼の疾駆を真つ向から見据え、私は心中に期した。二の太刀は無論ある。

一撃のみでは仕留められないのが刀使の『写シ』であり、確実に仕留めるには最低二つの太刀筋が必要。

実現するには間合を掴まねばならない。糸見の疾駆を捕捉しなければならぬ。だがそれこそが容易かった。

「……………」

糸見の疾駆は歩速を、歩幅を迅移を一定にし、つまり一貫して疾走。この御刀を抜刀して確実に斬り殺せる間合を掴み取れるか？ 等という思考よりも私は何故そんな只の疾走なのだと糸見の考えを読もうとして、無駄なので止めた。

これがかもしも逆で間合の捕捉が困難だったならば燕結芽の魔剣の入り口であったもしれぬものの。

——そう。刀を上段に構え走る糸見は最後の一步を跳ぶに等しい大股の踏み込み、或いは本当に飛翔して上空から叩つ斬る腹なのだとの疑いもなく私は理解した。

勝つ為の思考を放棄したのではない。勝たなくていいと思つたわけでも、勿論無い。360。何処から見ても思つてもそれしか相手は考えていないのだ。

……水のようになりたいたいと思えた筈なのに。流れ続ける水のように、無心の入り口に立てる器であつたのに。何の変哲もない夜の月に飢えた狼が、私には野良犬のように見えてきた。

「……………」

「…………ツ！」

互いの瞳の中に互いが映る間合で。案の定、糸見が跳ぶ。

跳躍、飛翔。空中から刀を振り下ろす。私の抜刀は既に終わっている。

奥義・葦名十文字。疾さを専心した二連続斬りは、間断も油断もなく糸見の腰と腹を

斜めに斬り捨てていた。

『写シ』を張り直そうとしても無駄である。その遙か前に、私の返す刀が彼女を斬り刻む。このように。

——だから私には糸見の刀が見えた。

唯闇雲に敵を斬り下ろそうとする妙法村正が。——斜め十文字に身体を裂かれても尚、こちらに進む往く近付く糸見の刀が、

糸見の刀が、糸見の刀が、刀は——

「——は？」

ここだ。割られる頭蓋が、明瞭に過ぎる答えを私に示していた。

◇

その剣は上段から重い一撃で叩き斬る。無骨に、正面から叩き斬る。ただ、それだけを一意に専心した技であると。そして続けて伝書に曰く。

その専心ゆえに、葦名流は強い。

糸見沙耶香は上半身のみになりながらもそれを全うし、私を見下ろしていた。

………果たして勝敗を分けた物は何か。恐らくも何もそれは、技の優劣ではない。天

運でもないだろう。

それは剣を握り、あらゆる流派を技を無心に飲み込み続けながら剣の聖を超えると決めた私と。心に芽生えた一心と剣を握り、勝敗はその結果とのみ捉えた糸見と。

——我らの間にあつた純度の差が、糸屑程の、剣速の差となつて顕れたのかもしれない。

コインを放れば表と裏のどちらかを上に向けて落ちて落ちるように。結果が出たその先で、私は己の敗北を感じながら勝者の瞳を見上げていた。

「……『写シ』は剥がれてなど。解かれてなど、いなかったのでですか」

「……うん」

「解く積もりも。……なかったのですか？」

「うん」

空中から振り下ろされる葦名の一文字。それを止める術など無い。少なくともあの時の私には何も出来ず、こうして斬り倒され土が付いていた。

「お見事です。糸見沙耶香」

「ううん、今度は……和美が勝つ」

「真剣勝負に次などありませんよ」

「ある。だって私達は刀使だから」

「……………」

「……………」

「和美は、だから、あの刀使に勝てたんでしょう？」

「——」

震える安行は私のせいか。若しくは自然か。

何度斬られても諦めない。それがお前（刀使）だろうと刀が応えて。これを振るってきた母を含めた全ての剣士が、糸見が、私の手を覆う。

「また試合しよう、和美」

熱い温度が私を促す。

「たくさん、一緒に戦おう。たくさんまた稽古しよう。それがきつと、私が刀使になった意味だと思うから」

—— 答えを見出した者の言葉と手の平を見つめ。私は笑って応えたのだった。



『先代折神家当主折神朱音が、ある時旧来の六官司を復活させ、その全てのトップに大将の位を与えたのは、護るべき国民の安心と治安維持以外の何物でもないだろう』

——当時の新聞には、このように書いてあった。

『何故ならその大将六名のうち四名が自慢の親衛隊刀使であり、その上に当主が山の如し動かずとなれば全ては安心立命、安寧秩序、無憂無風である。』

市井の人間ならば誰しもそう思ったし間違いはないとも思ったが、しかし当時の刀使達はそれとは少し違う視点を持っていた』

——権力だの何だのそんなの私達の知った事じゃないけど、沙耶香ちゃん達六人ならその位を得ても異議見劣りは全く無い！

…可奈美さんがそう言っていたのを思い出す。

『刀使としての戦闘において、彼女達ほど頼り甲斐と力の有る刀使はいない。現に、彼女らが出張った現場で殉職者は一人たりとも出ていない。奇跡的に。——いや、それこそが実績。』

復活した六官司、すなわち六衛府のトップとは他の刀使達から絶大の信頼を置かれていてという事に他ならず、そしてそれはこれからも、ずっと続いていくだろう』

そんな昔があつた事を、今日私は彼女達に語っていた。

「お母さん達、強かつたんだね」

「専・心ツ!!」

「急に叫ぶのは止めなさい、美絵。まあぼちぼちでしたが」

「和美との戦績は五分と五分」

娘の頭を撫でながら、沙耶香が言う。

「…お母さん、子供扱い。私、もう中学生」

「? 八重は私の娘だけど」

「そういう意味じゃない」

「くあわいい! 私も撫でヤエヤエー!」

「キミーうるさい」

刀片手に駆け寄る私の娘の頭を、沙耶香の娘が腕で軽く押さえる。…ごめんなさいね、八重。

「ぬう! 腕を上げたな幼馴染ッこんな細腕のくせに!」

「こつちの台詞」

「まあまあ。それに私達よりも、可奈美さんと姫和さんの方が強かったですよ。強い刀使さん達は今も昔もたくさん居ます」

そう言う私に向かって、若き刀使達は綺麗に一礼した。

先程までの戯れは何だったのか、沙耶香にも同様に、御刀をしつかりと鞘に納めて。

「でも私はお母さん達の葦名流が好きで、最強だと思う」

「これからも無心で頑張る！稽古、有り難うございました！また明日もお願いします！」

嘘偽りない宣言が向けられ、沙耶香と私は期待と懐かしさで胸が熱くなった。

だから激励する。あの日のように、もしかしたらと。一つ心に想いを宿して。

「今日の御前試合警護の任。冷静に頑張つて務めなさいね？左衛門大将」

「呼吸も、流れる水も留まらない。どこまでも。——だから強い。忘れないでね？右衛門大将」

「はい!!」

——今と昔。続いていく鎌府の刀使達は、朗らかに微笑み合うのだった。